

連 合 総 研

JAPANESE TRADE UNION CONFEDERATION
RESEARCH INSTITUTE FOR
ADVANCEMENT OF LIVING STANDARDS

—「次代につなぐ『しごと』と『くらし』」プロジェクト 報告書—

しまね生活白書 2015

～「しごと・くらし・ちいき」に関する基礎調査～

(連合島根と連合総研の共同調査研究)

2016年5月

公益財団法人

連合総合生活開発研究所

まえがき

連合総研は、東日本大震災の1年後の2012年に、被災地における地域づくりや地域再生に向けて、地元の労働組合がどのような取り組み・役割を果たしているか等について、ヒアリング調査を行ってきました。その調査報告を受けて、2013年3月に盛岡市で「地域づくりの担い手と労働組合の役割に関するシンポジウム」を開催しました。

この調査やシンポジウム等を踏まえて、被災地以外のいくつかの地域を対象に、地域における産業政策や雇用政策の策定とその具体化に関する事例研究を行うこととしました。その際、当該地域の大学、行政、経営者団体、市民団体、NOP、地域福祉団体などの各団体との連携のモデル事例を抽出するとともに、各団体が果たす役割を明らかにし、なかでも労働組合・労働団体が果たすべき役割について提言を行うこととしました。

具体的には、山形県、石川県、島根県の3地域において、地方連合会、地方連合総研と共同研究プロジェクトを設置し、それぞれの地域における各種の活動についての実態把握と地域の課題や労働組合の役割等について検討を進めてきました。

連合島根と連合総研との共同調査研究プロジェクトは、2014年4月に設置し、「次代につなぐ『しごと』と『くらし』プロジェクト」として、次代を担う「若者と女性」に着目をし、島根県内の若者や女性を取り巻く雇用状況、子育て環境などについて、ヒアリングやアンケート等を通じて、課題の抽出と労働組合をはじめ各団体の果たす役割などについて、検討を行ってきました。

この島根プロジェクトの特徴としては、産官学金労マスコミ等の幅広い分野（9団体）から委員として参加をして頂き、様々な視点からの議論ができたこと、また新たなネットワークが形成できた点にあります。

本報告書が、高齢化・人口減少、地域コミュニティの脆弱化など多くの課題が山積するなかで、地域再生、雇用創出、定住促進、ネットワークづくり等に向けた今後の各地域での取り組みの参考となれば幸いです。

最後に、本調査研究プロジェクト主査の毎熊浩一島根大学准教授、そして、委員としてご協力頂いた江口貴康島根大学准教授をはじめ各委員、協力者、ならびにヒアリングやアンケートにご協力を頂いた多くの皆様に、あらためて御礼を申し上げます。

2016年5月

公益財団法人 連合総合生活開発研究所
所長 中城吉郎

「次代につなぐ『しごと』と『くらし』」 今後への期待

連合島根会長 仲田敏幸

日頃より連合島根の活動に対し、格別のご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

連合総研と共同研究事業として、スタートした「次代につなぐ『しごと』と『くらし』プロジェクト」の活動は、地域における雇用創出や地域活性化に向け、約2年を掛けて取り組んで参りました。

～島根の元気と安心のために連合ができること～出来ることがあるのか？ないのか？あるはずだ。では何ができるのか？と手探りで始めたプロジェクトでしたが、島根大学「毎熊先生」をはじめ、「産・官・学・金・労・言」から、9つの団体の有識者の皆さまに参加いただき、2013年11月のフォーラム開催から、プロジェクト会議を7回、さらに調査研究の深堀のための作業部会9回を重ね、働き続け、住み続けられる地域・島根とするために、調査・研究を頂き、最終まとめまで導いてくださいました。改めまして、お力添えを頂きました、皆さま方に衷心より、感謝と敬意を表する次第です。

また、プロジェクトでは、連合島根各構成組織組合員を中心としたアンケート調査や各種団体および個人へのヒアリング調査などで、課題を抽出し、絞り込みといった手法で調査・研究が進められてまいりました。本当に多くの皆様のご協力があって、まとめられたものであり、ご協力頂いたすべての皆さまに御礼を申し上げます。

島根県は全国に先駆けて人口減少・高齢化が進み、大都市との経済格差の拡大が顕著となり、地域の疲弊は深刻な状態です。地域再生をめざすための産業・労働政策と労働組合の役割は重要であります。連合中央でのアンケート調査では、労働組合が働く者の味方との評価があるものの、連合のメッセージが十分に届いていないという現状が明らかとなりました。そのことを踏まえ、私たちは「社会の不条理に立ち向かい、自分より弱い立場にある人々と共に闘うこと」、「職場や地域で働く労働者の身近で、頼りになる存在となること」など、社会・地域に目を向けた運動を展開することとしています。

今回のプロジェクトを通じて労働組合として、様々な地域の皆さんと直接接点を持てたこと、組織内から外にもう一步・二歩踏み出し運動できたことにも大きな意味がありました。そして、今回の提言と成果を踏まえてどう生かしていくのが今後、最も重要であります。今後、私たち連合島根の役割と認識し、意識した運動にしたいと考えます。

地域が元気になれば、新たな地域産業が振興し、雇用が生みだされ、そして地域が元気になるという好循環となることを期待し、非常に難しい課題ではありますが、次代につなぐ仕事と暮らし創生への挑戦をしていく事をお誓いいたします。

＜委員会名簿と執筆担当＞

(所属・肩書は2015年9月現在)

主査	毎熊 浩一	島根大学法文学部准教授	第3章
委員	江口 貴康	島根大学法文学部准教授	第2章
	木村 雄治	島根県経営者協会協会コーディネーター	コラム④
	光明 浩徳	ふるさと島根定住財団地域活動支援課長(2014年4月～2015年3月)	
	日野 堅治	ふるさと島根定住財団地域活動支援課長(2015年4月～2015年9月)	コラム⑤
	高尾 雅裕	株式会社山陰中央新報社論説委員長	第4章・コラム③
	永井 康之	株式会社山陰経済経営研究所経済調査部長	コラム⑥
	南木 憲治	中国労働金庫島根県営業本部	コラム②
	足立 傑	全労済島根県本部推進企画課長	コラム⑦
	後藤 幸江	ユースネット島根理事長	コラム⑧
	白石 恵子	県議会議員松江選挙区	コラム①
	岩田 浩岳	県議会議員松江選挙区	コラム⑨
調査・研究協力者	山本 耀子	島根大学大学院人文社会科学研究所	資料：ヒアリングレコード
ヒアリング協力者	陰山 比佳梨	島根大学大学院人文社会科学研究所	
	矢野 玲子	島根大学大学法文学部研究生	
	堀江 良子	島根大学法文学部	
事務局	小熊 栄	連合総研主任研究員(2014年4月～8月)	
	伊東 雅代	連合総研主任研究員(2014年9月～2015年9月)	はじめに
	高山 尚子	連合総研研究員(2014年4月～8月)	
	前田 藍	連合総研研究員(2014年9月～2015年9月)	第1章
	原田 圭介	連合島根事務局長	第5章
	景山 誠	連合島根副事務局長	第5章
	錦織 泰治	連合島根副事務局長(2014年9月～2015年9月)	第5章
	岩田 守弘	連合島根副事務局長(2014年9月～2015年9月)	

目 次

まえがき

「次代につなぐ『しごと』と『くらし』」今後への期待

はじめに～「次代につなぐ『しごと』と『くらし』」プロジェクトについて～	1
第1節 プロジェクトの目的	1
第2節 アンケート調査とヒアリング調査	1
(1) アンケート調査	1
(2) ヒアリング調査	2
第3節 しまねプロジェクトの歩み	3
(1) プロジェクトの立ち上げ	3
(2) 各団体からの取り組み報告と課題認識について	3
(3) 課題整理と調査の進め方	6
(4) 課題を受けての新たな取り組み ～わいわいサークルの取り組み～	7
第4節 本報告書の概要	7
第1章 島根の概況	13
第1節 ちいき	13
(1) 地理、気候	13
(2) 自治体数、人口構造、高齢化率	14
(3) 人口減少に対する島根県の取り組み	15
第2節 しごと	16
(1) 産業構造	16
(2) 賃金、労働組合の状況	17
第3節 くらし	18
(1) 道路	18
(2) 医療機関	18
(3) 女性にとっての島根	19
第2章 しまね生活の特徴 -アンケート結果から-	25
第1節 島根の人口的特徴と分析視点	26
1. 島根県の人口的特徴	26
2. 分析視点	27
第2節 若者世代、女性、県内転入者	29
1. 若者世代の労働と生活	29
2. 女性の労働と生活	41

3. 県内への転入者の労働と生活	48
第3節 就業形態・仕事内容／勤務先の特性と就業者の意識	57
1. 就業形態・仕事内容の特性と就業者の意識	57
2. 勤務先の特性と就業者の意識	64
3. 考察	71
第3章 比較のなかのしまね生活 -若者と女性を中心に-	77
序 節	78
第1節 「しごと」比較	80
第2節 「くらし」比較	91
第3節 「ちいき」比較	98
第4節 小括—外的分析からみえる島根の特徴	109
第4章 ヒアリングから見えてきた「しまねの女性、生き方・働き方」	119
第1節 地方の生活感覚	119
第2節 定住の定義と流儀	122
第3節 実現したい自分	123
第4節 島根で働く	124
第5節 島根の子育て	126
第6節 住みやすさについて	127
第7節 政策の視点	129
第8節 労組の役割	131
第9節 東西格差	132
第10節 終わりに	133
第5章 地域社会へのアプローチ	137
第1節 結び目としての労働組合の可能性 ～島根の元気と安心のために連合ができること～	137
第2節 地域の声をきくことから見えてきたこと	139
第3節 若者との対話をとおして見えてきたこと	141
第4節 「次代につなぐ『しごと』と『くらし』シンポジウム」の報告	143
第5節 このプロジェクトの結びに — いくつもの縁（えにし）から見えた連合島根の課題—	145
資 料	149
1. しまね女性へのヒアリングの記録	151
2. 調査票及び結果	181
3. 最近の新聞記事から	190

はじめに

～「次代につなぐ『しごと』と『くらし』プロジェクトについて～

連合総研主任研究員 伊東 雅代

第1節 プロジェクトの目的

島根県は全国に先駆けて人口減少・高齢化を経験している。

人口減少の要因は、出生者が死亡者を下回る「自然減」のほかに、若者の県外流出や、グローバル化の進展による事業再編・工場閉鎖、県外移転による雇用の場の縮小などが考えられる。また、仮に雇用の場が十分にあったとしてもその労働環境は賃金が低いなど決して恵まれているとは言えず、若者にとって将来を描くことは難しい。

このような現状のもと、連合総研と連合島根は研究プロジェクト「次代につなぐ『しごと』と『くらし』プロジェクト」（以下、しまねプロジェクト）を立ち上げ、島根の持続可能性を高めるためには何が必要なのかを、3つの視点「しごと、くらし、ちいき」から考えていくこととした。その上で、とりわけ次世代を担う「若者と女性」に着目し、県内の若者や女性を取り巻く雇用の現状、子育て環境の現状などについて調査しながら、さまざまな課題を抽出していった。

島根の持続可能性を高める重要な要素と考えられる3つの視点「しごと、くらし、ちいき」については幅広く課題をあぶりだすために、アンケート調査を実施することとした。また世代を担う「女性と若者」については、アンケート調査では抽出しきれない課題をあぶりだすために「女性」についてはヒアリング調査を行い、若者に対しては、「わいわいサークル」というグループをつくりそこでの活動・議論を通して課題抽出を行った。

以上の調査を通して抽出された課題については、労働組合がどのように関わっていけるのか検討し、報告書にまとめることとした。

第2節 アンケート調査とヒアリング調査

（1）アンケート調査（詳細は巻末の資料を参照）

アンケート調査は連合島根を窓口とし、連合島根傘下の組合員に配布した。配付に当たっては、「若者」を意識した調査でもあることから、18歳以上50歳未満への配布を原則とした。

尚、アンケート結果については、配布対象者が組織化されている者のみに留意する必要がある。

調査結果は、第2章、第3章を参照してもらいたい。

【アンケート調査実施概要】

配布期間：2015年3月23日～4月9日

締め切り：2015年4月末日

配布枚数：6,048枚（各組織人員の2割を目安に配布）

回収枚数：3,928枚

回収率：64.9%

配布先：連合島根傘下組合の30組織

No.	組織名	人数	No.	組織名	人数	No.	組織名	人数
1	自治労島根県本部	10,986	11	交通労連島根県支部	521	21	フード連合	72
2	UAゼンセン	3,072	12	JR連合島根県協議会	404	22	全労金中国労働金庫	62
3	JAM山陰	2,897	13	日教組島根県協議会	220	23	NHK労連松江分会	52
4	自動車総連	2,816	14	紙パ連合日本製紙	212	24	全電線島根県協議会	32
5	山陰電力総連	2,162	15	中国国税職員組合	158	25	国交職組	31
6	JP労組	1,785	16	島根県私鉄協議会	132	26	森林労連島根分会	25
7	電機連合	1,410	17	国公総連	110	27	基幹労連昭和KDE	13
8	島根県農団労	788	18	全水道島根県協議会	101	28	全労済労働組合	11
9	情報労連島根県協議会	768	19	全造船機械	95	29	JR総連島根県協議会	2
10	運輸労連島根県連合会	560	20	政労連	72	30	島根県高教組	1,314
合計								30,883人

(2) ヒアリング調査（詳細は巻末の資料を参照）

今回はとりわけ次世代を担う「女性」の生き方・暮らし方についてヒアリングを行った。

調査結果は第4章を参照してもらいたい。また、記録として資料に詳細を添付した。

【ヒアリング調査実施概要】

調査期間：2015年4月～5月

調査件数：8回16人にヒアリングを実施した。

開催日	曜日	時間	場所	対象者	対象者数	チーフ	記録担当	ヒアリングスタッフ			掲載頁	
4月17日	金	10:00	子育て研究所	子育て中の働くお母さん	3	高尾	山本	伊東	錦織			P155
		16:00	労働会館	島根県出身独身女性	1	毎熊	山本	陰山	矢野	伊東	景山	P166
		19:00	労働会館	子育て中の働くお母さん	2	毎熊	陰山	矢野	景山			P151
		19:00	労働会館	島根県出身独身女性	3	江口	堀江	山本	伊東	原田		P162
4月24日	金	10:00	親子劇場	子育て中のお母さん	4	毎熊	矢野	錦織			P169	
5月21日	木	13:00	木次町	1ターンの女性	1	高尾	山本	錦織			P175	
		18:00	労働会館	単身赴任中の女性	1	毎熊	陰山	矢野	原田			P173
5月22日	金	10:00	勤務先	子育て中のお母さん	1	高尾	山本	原田			P178	

第3節 しまねプロジェクトの歩み

(1) プロジェクトの立ち上げ

2014年4月に連合総研と連合島根でしまねプロジェクトを立ち上げた。プロジェクトを立ち上げるに当たっては、産官学等の幅広い分野からの現状把握が必要と考え、9つの団体に委員をお願いし、まず、各団体の「若者と女性」、そしてU I ターンに関する取り組みを中心とした報告を受け、問題意識を共有することから始めた。

【委員選出団体名】

島根大学	島根県経営者協会	ふるさと島根定住財団
(株)山陰中央新報社	(株)山陰経済経営研究所	中国労働金庫
全労済島根県本部	ユースネット島根	島根県議会議員

(2) 各団体からの取り組み報告と課題認識について

各団体の取り組みは多岐にわたっており、ここでは委員会でご報告いただいた内容を中心に記載する。なお、各団体のさまざまな取り組みについては、各団体のホームページを参照いただきたい。

① 県会議員からの報告

島根県¹の取り組みについて。

- (a) 島根県では、女性の有業率が高いことが特徴になっている。考えられる要因は世帯収入が低いこと、三世帯同居がまだまだ多いこと、保育所数が足りていること、夫の家事参加が多いことなどがあげられる。今回の研究ではこれらの現状把握が必要と考える。
- (b) 行政によるワーク・ライフ・バランス（以下、WLB）の推進として「しまね子育て応援企業」²の認定や「しまねすくすく保育支援事業」³による子育て世帯への支援などを行っている。
- (c) 中山間地のU I ターン受け入れとして、農業と仕事のあわせ技である「半農半X」という働き方を紹介・提案し、自分の地域をまず知ることから始めようという「しまねの郷づくりカルテ」⁴の製作などの取り組みを進めている。
- (d) 若年者雇用への対応は、子供のころから「働くことへの意識」を高めることが大切であるという視点から、高等学校を拠点として、小・中学校および地域との連携を強化し、「地域ぐるみで

¹ 島根県のURL：<http://www.pref.shimane.lg.jp/>

² 子育て中の従業員を積極的に支援する企業を「しまね子育て応援企業（こっころカンパニー）」に認定し、積極的なPRと融資制度や県の入札制度での優遇などにより認定企業を支援する制度。

³ 国庫補助事業の要件を満たさない小規模なニーズ（例えば、障がい児保育や放課後児童健全育成など11事業）に対する市町村の取組みを支援する取り組み。

⁴ 子どもからお年寄りまですべての住民が、安全・安心に暮らすことができ、子どもの笑顔と声が響くような地域、そんな地域づくりには、自分たちの地域の姿を知ることが必要である。そこで、国勢調査や住民基本台帳の人口データ、店舗の数や医療機関への時間・距離等の暮らしの条件など、地区の状況の客観的データを用い、地域の診断ができるよう「しまねの郷づくりカルテ」を作成している。

人材を育てる」といったキャリア教育モデルをつくることを始めている。

②ふるさと島根定住財団からの報告

ふるさと定住財団⁵では、定住を促進するための事業を行っている。

(a) 求職者支援事業として「ジョブカフェしまね」⁶を運営している。そこでは島根県内の会社や林業公社の仕事などを日本全国に紹介し、若者を県内に呼び込もうとしている。具体的には学生登録、インターンシップ、短期就労体験、などの取り組みを積極的に行っている。

(b) UIターン推進事業として「しまね暮らし体験事業」を行っている。島根への移住を考えている県外在住者の方々に対し、しまねの暮らしを知っていただくために、例えば就農体験や保育園・小学校見学、そして民泊で交流会を行うなどの体験事業「しまね暮らし体験プログラム」⁷を実施している。

③山陰経済経営研究所からの報告

山陰経済経営研究所⁸は、山陰地域にかかわる経済動向や地域課題に関する調査やコンサルティングなどを通して、創造的で活力ある地域づくりに貢献している。

(a) 人口と経済の現状

- ・人口も経済も全国の0.4%規模である。
- ・県内総生産に占める産業のウェイトとしては、政府支出・建設が大きい。

(b) 人口減少社会の実態

- ・バブル期を除き、人口の社会減が続いている。近年落ち着いてはいるが、20～24歳の就学・就職による転出超過が人口減少に影響している。
- ・高卒就職者の1/4が県外就職で、うち3割が広島で就職をしている。

(c) 少子化と晩婚・未婚・離婚の実態

- ・有配偶者の子どもの数はあまり減っていない。少子化の原因は未婚化といえる。島根の平成24年の合計特殊出生率は1.68（全国平均1.41）であり、全国2位という高い水準にある。

(d) 子育てと女性を取り巻く現状

- ・島根はM字カーブの谷が浅く、女性の就業率が高いことが特徴である。
- ・25～44歳の女性雇用者のうち正規の占める割合は全国11位（54.5%）となっている。

(e) 持続可能な地域とは？

- ・島根県民は子育てに経済的負担を感じているようだ。
- ・各年代でそれぞれ課題があるが、それが絡み合って少子化・高齢化・過疎化が進展している。こ

⁵ ふるさと島根定住財団のURL：<http://www.teiju.or.jp/>

⁶ 若者と企業を結ぶための「しまね就職情報サイト」URL：<http://www.gogo-jobcafe-shimane.jp/>

⁷ UIターン支援事業「くらしまねっと」URL：<http://www.kurashimanet.jp/>

⁸ 山陰経済経営研究所のURL：<http://www.skeiken.co.jp/>

れをどう食い止めて持続可能な地域社会をつくるかを考えなければならない。

(f) 雇用・労働の現状

- ・有効求人倍率は持続的な改善を続けているが、正社員はまだ0.7倍である。
- ・有効求人倍率は卸売・小売、医療・福祉、建設業が高く、この分野では人出不足が生じている。
- ・島根では産業集積や歴史的な背景もあり、一人当たりの生み出す付加価値が低いという状況にある。

④ 経営者協会からの報告

島根県経営者協会⁹は、経営者相互の啓発と連携のもとに、労働問題の専管機関として発足した経営者集団で、現在は一般社団法人 日本経済団体連合会（経団連）の地方組織として活動している。

- (a) 求職者説明会、公共職業訓練情報提供・相談会、職場体験、各種助成・融資等説明会、合同就職面接会（合同企業説明会）を一体的事業として実施することで、島根県内で働くことを応援している。

一体的事業について、参加者はほぼ目標に達しているが、就職に結びついていないという課題がある。厚生労働省の事業のため使い勝手が悪いことと、説明会等の対象に新卒者と中途採用者が混じっていることも要因かと思われる。

- (b) WLB推進のための企業トップセミナーを開催し、WLBの好事例を紹介・広めている。好事例会社は業績もよく地域密着型で従業員を大事にする会社であることが多いためそれを理解してもらおう場としている。

- (c) 若者の早期離職を少なくするために「雇用のミスマッチ」に関するアンケート調査などの取り組みを行っている。調査結果を見ると、雇用のミスマッチ対策として、インターンシップ・職場体験に注目している企業が多いことが分かった。

⑤ 連合島根からの報告

働く者の地域組織である連合島根¹⁰は、賃金の下支えである最低賃金や生活改善を目指す春闘、そして社会貢献活動などを行っている。

- (a) 非正規労働者の組織作りと労働条件底上げ（最低賃金の引き上げや労働相談ダイヤルでの対応、地域ユニオン運動の活性化）などを進めている。
- (b) 政策・制度実現に向け、毎年県・市などに対し、働く者の視点から政策提言を行っている。
- (c) 地域に対する取り組みとして、災害ボランティア、NPO支援事業、高校への労働法に関する「出前講座」等を行っている。

⁹ 島根県経営者協会のURL：<http://shimanekeikyo.com/>

¹⁰ 連合島根のURL：<http://ws1.jtuc-rengo.or.jp/shimane/>

⑥中国労働金庫からの報告

ろうきんは、働く人たちのあたたかな絆から生まれた生活応援バンク（福祉金融機関）であり、中国労金¹¹は、ろうきんの地方組織である。

(a)助け合いの視点から、生活支援特別融資事業、多重債務の整理、福祉ローン、災害救援ローン等を行っている。

(b)地域へのサポート活動として、NPO事業サポートローン、NPO寄付システム、社会貢献活動提案事業などを行っている。

⑦全労済島根県本部からの報告

全労済は厚生労働省の認可を受けて共済事業を行う協同組合である。そして、共済事業とは、生活を脅かすさまざまなリスクに対し、相互扶助の精神で、保険のしくみを使った事業である。全労済島根県本部¹²はこの全労済の地方組織である。

(a)社会貢献活動として、防災・減災活動、子どもの健全育成活動、地域貢献助成制度などに取り組んでいる。

(b)在宅介護サービス事業として「全労済在宅介護サービスほほえみ」を運営している。

⑧ユースネットしまねからの報告

ユースネットしまね¹³は、不登校やひきこもり、若者無業者等の何らかの悩みを抱える若者に対して、復学や進学、就労、自立のための支援に関する事業を行っている。

また、すべての若者がそれぞれの能力と発達に応じて社会に参加し、健全に成長し自立できるような社会の実現に寄与することを目的とした活動を推進している。

(a)就労支援事業として個別対応就労支援、「働く体験」準備支援、中間就労支援を行っている。

(b)自立支援事業として個別訪問支援、イベント自立支援、自立寮制支援などの取り組みを行っている。

(3) 課題整理と調査の進め方

2014年4月～8月までに9つの団体から活動報告を受け、その取り組み内容と課題などを共有してきた。課題は「しごと」「くらし」「ちいき」と多岐にわたっており、すべてを調査することは難しく、いくつか絞って進めようと試みた。が、課題はそれぞれで独立しているわけではなく複雑に絡み合っていることから、調査に多少の強引さと荒さがあったとしても、結局、包括的な視点（しごと、くらし、ちいき）での現状把握をすることになった。手法としてはアンケートとヒアリングを行うこと

¹¹ 中国労働金庫のURL：<http://www.chugoku.rokin.or.jp/>

¹² 全労済島根県本部のURL：<http://www.zenrosai.coop/>

¹³ ユースネットしまねのURL：<http://youthnet-shimane.com/>

「ユースネットしまね」は、2016年4月30日に法人を解散し事業全般を終了。現在は、任意団体「すまいるーねっと」を立ち上げ活動を行っている。

とした。

その際注目すべきは、地域の持続可能性に影響力を持つであろう「女性」であり、これからの社会を担う「若者」であるという共通認識が得られた。

研究期間が2015年9月までとなっていることもあって、「女性」の生き方・暮らし方に視点をおいたヒアリング調査と、包括的な視点（しごと、くらし、ちいき）で現状把握をするためのアンケート調査を併行して行うこととした。詳細は、第2節に書いたとおりである。

（4）課題を受けての新たな取り組み ～わいわいサークルの取り組み～

持続可能な島根を目指すうえで、労働組合が若者と連携することは非常に重要なことである。そのような共通認識から、組織化されている・いないにかかわらず、さまざまな業界・立場を超えた若者を緩やかにつなぎ、さまざまなテーマのもと、行動を通して地域を活性化すること、それを目的に「わいわいサークル」を立ち上げることとなった。

業界・立場を越えての集まりとはいうものの、そう簡単に若者を集めることは出来ず、連合島根の青年女性委員会の委員長・副委員長、そして本研究委員会にご協力して下さっている団体に呼びかけ、10人あまりの若者に参加していただくことができた。

まだ、立ち上がったばかりだが、自分たちが島根を元気にするために何ができるのかを考えながら活動をしている。例えば、自分たちと同じ若者にも一緒に考えてもらいたいという思いから、活動をアピールするためのコマーシャル作りや街頭アンケートなどのアイデアを出しあっている。今後の具体的取り組みについては、連合島根を中心に議論をしていくところである。

このように、わいわいサークルにとどまらず、たとえば今回ヒアリングにご参加くださった子育て中のママ達とも緩やかにつながり、労働組合として元気な島根を描いていきたいと考えている。

第4節 本報告書の概要

第1章では、「島根県」そのものの姿を示すこととした。どのような土地柄なのか、何が特徴なのかなど、客観的な島根県の姿を「ちいき」「しごと」「くらし」の視点から紹介することとした。

第2章では、アンケートの集計内容を基本に分析を行った。

最初に、島根県の人口減少に歯止めをかけ次代を担える存在として「若者」、「女性」に着目している。また、人口増加につなげる視点から「転勤・就職による県内への転入者」にも着目し、その仕事・職場および生活の実態と意識について分析した。次いで、3者（若者、女性、転勤・就職による県内転入者）を含めた就業者全体に共通する仕事・職場の問題点を抽出し、その課題を提示するため、「雇用形態」「職種」「業種」「従業員規模」に着目し、それぞれ「職場・仕事の不満」、「WLBへの評価」、「メンタルヘルス疾患の可能性」について分析を行った。

第3章では、本アンケートと既存の全国調査とを比較することで、島根県の現況について一定の評価を試みることにした。ただし、既存調査との比較なので、調査における比較対象のズレなどに留意

する必要がある。

「しごと」面での満足度をみると、島根県は全国平均よりも恵まれているとの結果が得られた。「くらし」面ではやや劣り、「ちいき」では大きな差はみられないといった結果が得られた。また、ヒアリングのテーマでもあった「島根の女性」についてみると、島根の女性は男性に比べさまざまな面で満足度は低い傾向にあった。

第4章では、ヒアリングの調査結果を「島根の女性、生き方働き方」というテーマで編集している。

なお、ヒアリングの詳細は資料として添付しているので、こちらもぜひご一読いただきたい。

第5章では、連合島根が地域とどのようにかかわっていくのかについて述べている。労働組合が地域とつながるとはどういうことなのか。また次代を担う若者や女性とどのようにかかわっていけるのかをこの章では考えている。

この報告書を手にとって下さった方も一緒に、島根の「しごと」「くらし」「ちいき」について考えてもらえればと願っている。

“人口対策20年”の県に生きるとは

*コラム①～⑨は2015年9～10月に執筆したものです。

白石 恵子（県議会議員）

2014年4月から始まった「プロジェクト」に委員の1人として参加させてもらいました。とはいえ、2015年4月には統一地方選挙が行われたこともあって、どれほどの役割が果たせたのか、と申し訳ない思いがしています。

今、折りしも政府肝いりで全国の県、市町村が地方再生を目指すために「地方版総合戦略」の策定中です。島根県は全国で問題になるずっと以前から、人口減少や少子・高齢化に悩んできました。目立った大企業がなく県内のほとんどが中小企業、しかも圧倒的に弱小事業所が多い島根県では昔から若者が都会に出ていくことが当たり前になっていました。石見部では都会に出ることを親が奨励する風潮があると聞いたこともあります。出雲部より山が海岸線に迫り、農業用地が少ない石見部ならでは、なのでしょう。

ですから島根県は20年以上前から、人口減少対策、中山間地域対策に悩み、力も入れてきました。中山間地域研究センターやふるさと島根定住財団もこの問題への対策のために設置されたものだと思います。とりわけ定住財団では、学生の就職支援、UIターン者支援、少子化対策など様々な課題に挑戦してきました。また中山間研究センターでは、研究員によって島根再生の処方箋「地域の資源の活用、地域のお金は地域で回す、人口の1%増を目指そう」などの具体的な手法が提案されてもいます。しかし、その成果はまだ目に見えず、依然として若者の県外流出が続いているのが現状でもあります。

そのような中、プロジェクトでは改めて定住対策の現状調査と県内の若者・女性のニーズと政策がマッチしているのか、労働組合を始め各関係機関の役割は何かについて検証し、提言をするという目的を持って発足しました。

ヒアリングやアンケート調査では「島根で暮らし、働き続けるためには何が必要か」を解き明かしていく、とされ、個人的にもまた県議会議員としても、どんな結果が明らかにされるのか、期待していました。

アンケートは連合傘下の男女にお願いしたということでしたので、県内では比較的恵まれた労働環境にある方々なのかな、と思われます。アンケート項目の中では、男性の時間外労働、賃金や福利厚生、仕事の満足度がどう出ているか、女性では雇用形態、年収、暮らしの中で困ること、ワーク・ライフ・バランスに関する会社の対応、子育て環境といった項目に注目したいと思いましたが、残念ながら男女別のクロス集計*1はまだでした。そこで全体をみると、共働き・正規雇用が多く、時間外は多くない、持ち家が多い、という予想通り比較的恵まれた環境。そのせいか全ての質問に対し、満足、やや満足と答えた人が多く、交通の便や娯楽には不満があるが、島根暮らしに満足感があるのだと思われます。ただ、現役である故か地域の活動への参加は少なく、ご近所との付き合いも希薄かと思われる点、その結果として自分が地域で必要とされていると感じられていない点は、今後その地域で住み続け、リタイアする時期になった時の心配として気になる点でした。

男女別、年齢別、仕事別などもう少しクロス集計を丁寧にするればもっと色々な課題が見えてくるかもしれないですが、定住対策には、島根に住み続けたいと思う人VS思わない人それぞれの詳細な分析が役立つのではないのでしょうか。

いずれにしても若い人の定住は大きな課題です。若い世代が何を望んでいるのか、島根はそれにどう応えるのか、島根で暮らす「魅力」をどう伝えていくのか、私にとってもこれから挑戦しなければならない大きな課題です。

*1 2015年9月29日の第7回プロジェクト会議（最後の会議）では、単純集計のみ報告。クロス集計は、本プロジェクト会議以降に実施し、分析に反映した。

子どもの「夢」の遠い先に

*コラム①～⑨は2015年9～10月に執筆したものです。

南木 憲治（中国労働金庫 島根県営業本部）

私の子どもも県外の大学に進学して以来島根では暮らしていない。「帰って来い」と言うつもりはないが、島根で暮らすことを選ばせるために何が不足していたかをあえて考えてみた。

都会にある魅力や可能性は情報としてマスメディアを通じてあるいはネットを通じて大量に流れている。本人の能力は別にして都会での可能性に夢を見、挑戦することを否定はできない。厳しい現実打ちのめされながらもまだその夢の実現にしがみついている子どもを思うとき、第2の挑戦の場所として島根を選択できなくしているのは親として何かが欠けていたのであろう。

学生時代以外は島根に暮らしている私にとって島根の特徴である「ゆったりとした時間の流れ」「豊かな自然環境」などは当たり前のもので、その良さを子どもに感じさせる努力を怠った。

就職情報は主にネットで収集していたようだ。その中に島根県の企業がどれだけ情報を発信していたかは知らない。好きな道を選ばせようと思い、私自身も知ろうとしなかったし、薦めもしなかった。おそらく子どもは今も知らないであろう。

他県での就職を断念したときに、島根を選択できる仕組みがあれば、たとえば採用に当たっては新卒にこだわらず一定の年齢までは応募できるとか、再チャレンジできる社会の仕組み、そのような就職セーフティネットが島根にあればと思う。

利便性や、快適さはそこそこでいい。多少の不満はあっても苦しみもがくことがなく普通に安心して暮らせる仕組みが島根に出来ていれば、子どもが夢を実現した遠い先に、あるいは夢破れたときに「島根での暮らし」を薦めてみたい。

職業人としての最後の場面で「NPO活動」と出会う機会を得た。島根の課題を考える上でNPOがどのように活動成果をあげられるか、それだけの実力を付けられるかは大きなポイントになりそうだ。

労働運動が社会運動として手がけ、組合員の共感を得ながら事業として展開している労働金庫運動は、ソーシャルビジネスの走りと言える。そこに身を置き、携わっている「中国ろうきんNPO寄付システム」がまだまだ距離の遠い労働運動とNPOの結びつきのきっかけになり協働へと発展する手助けになれば幸いである。

就労の課題は労働運動の主要な課題でもあり、暮らしのセーフティーネット作りもこれからの重要な課題。暮らしに着目した社会運動としての取組みが労働運動の新たな課題のように思う。

勤労者の暮らしを守るため、地域の課題に取り組むNPOなど他団体との協働に向けて連合運動の持つ大きな力が発揮されることを期待する。

第 1 章

第1章 島根の概況

連合総研研究員 前田 藍

後の章を読み進める上での参考となるよう、本章では既存調査を用いながら島根の概況について触れておきたい。おそらく島根県外に住む人々にとって、島根のイメージは宍道湖や出雲大社といった観光名所や、あるいは「子育てしやすい県」というキャッチコピーから連想される「点」としての島根であるだろう。しまねプロジェクトでは、パブリックイメージとして語られる島根ではなく、島根で働き・暮らす日常の人々に焦点を当てることを狙いとしている。「点」としての島根が生活に溶け込んだとき、どのような特色が生み出されているのか、本章では大雑把にはあるが島根の特徴を整理することで、しまねプロジェクトの問題意識を深めていきたい。本章は島根の概況をまとめるにとどまるため、退屈と感じる読者は本章を読み飛ばしていただき、しまねプロジェクトの問題意識をもとに実施したアンケート調査の結果を整理した第2章「しまね生活の特徴」や、第3章「比較のなかのしまね生活」、島根に暮らす女性のリアルな声を集めた第4章「ヒアリングから見えてきた『しまねの女性、生き方・働き方』」から読み進めていただきたい。

第1節 ちいき

(1) 地理、気候

島根県は中国地方の北部に位置し、東は鳥取県、西は山口県、北は日本海に面し、南は大山に代表される中国山地が脊梁山脈を形成している。また、島根半島の北方40-80kmの海上には、島前、島後などからなる隠岐諸島がある。島根県の地形は東西に細長く伸び、平野部は少なく、県土の約8割が森林に覆われており、可住地面積比率（総面積－林野面積・主要湖沼面積）は19.2%と全国平均32.2%を大きく下回る中山間地域である。

島根県の気候は、県の中央部を北緯35°の緯度線が通っており、京都、名古屋と同じ緯度上にある。年平均気温は山沿いで約12度、平野部で約15度であり、暖候期（4～9月）は地域的な違いはそれほど見られないが、冬候期（10～3月）は日本海側気候の影響により、県東部の平野部では約30cm、東部の山沿いを中心に1メートルを超える積雪に見舞われこともある。

また、年間を通して湿度が高く、降水量が多い。年間降水量は1,600～2,300mmであり、特に西部山間部に降水が多い。年間の日照時間平均は松江では1,696時間となっており、全国平均1,864時間と比べても短い¹。日照時間が短く湿度が高いといった気象条件が、肌を美しく保つにはプラスの効果があるとして、株式会社ポーラが毎年実施している「美肌県グランプリ」では、四年連続全国1位を獲得するという実績へとつながっている。

¹ 資料出所：総務省統計局「第64回日本統計年鑑」2015

(2) 自治体数、人口構造、高齢化率

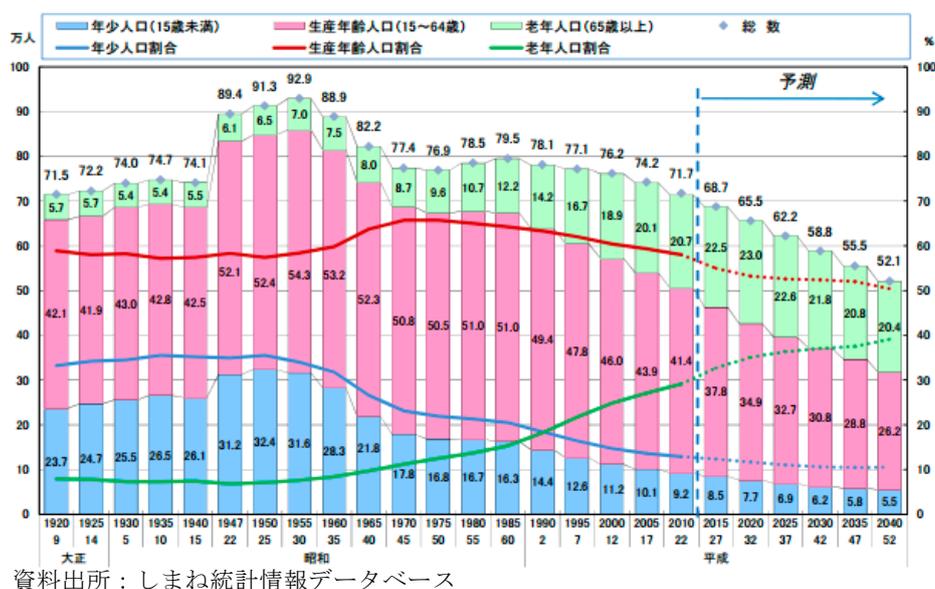
島根県の基礎自治体数は、8市10町1村の19市町村（2015年10月現在）である。1995年の合併特例法に始まった「平成の大合併」により、それまでの59市町村（8市41町10村）から21町村（8市12町1村）にまで減少し、その後も、2011年8月1日に松江市と東出雲町、10月1日に出雲市と斐川町が合併したことにより、現在の自治体数に至っている。

島根県の市町村合併においては、県が提示した合併推進要綱の基本パターンに沿って進んだケースが多いのが特徴であり、基本パターンから外れて誕生した自治体には人口1万人未満の小規模町に多い²。

島根県の人口は2015年9月1日推計で692,168人である。2014年にはじめて県人口が70万人を割り、本格的な人口減少状態に突入した。島根県の人口が70万人を割り込んだのは、国勢調査が始まって以来、初めてである。この間の島根県の人口構造の推移（図表1-1）を見てみると、島根県の人口のピークは1955年（昭和30年）であり93万人弱であった。その後、1975年（昭和50年）頃まで大阪や広島など大都市への人口流出が続き、2015年までの60年間に約25%に相当する人口が減少している。松江市や出雲市など都市部エリアではわずかな人口減少にとどまっているものの、インフラ整備が遅れ、産業基盤が弱いとされる石見・隠岐圏域では1955年当時から現在までの間に人口が半減している。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、2040年には島根県の人口は52万人まで減少すると試算している。

島根県の合計特殊出生率（一人の女性が一生に産む子どもの平均数）は、2013年では全国平均の1.43よりも高く、全国3位となる1.65となっている。また、第2子、第3子以上の出生率も高く、出産を前向きにとらえられる環境があることがうかがえる。一方、高齢化率は県平均で2013年30.9%である。秋田、高知に次いで、こちらも全国3位の高齢化率となる。2040年には39.1%となる予測がなされており、島根の高齢化率は全国平均の13年先の姿といえる。

図表1-1 島根県の人口構造の推移と予測



² 資料出所：森川洋「中国地方5県における「平成の大合併」の比較考察」『自治総研通巻387号』2011年1月号

日本社会全体が人口減少傾向にあるわけであるが、島根県の人口減少には、ひとつの特徴があげられる。島根県の社会減は若者の進学・就職にともなう転出超過に起因しているという点である。図表1-2より高校卒業時の人口移動を見ると、2014年度では大学に進学する県内高校生の8割にあたる約2,300人が県外に進学している。一方、進学による県内への転入は約1,000人と流出した人口を取り戻すには至っていない。島根県内の大学設置数は国立と公立2校のみであり、設置数は全国下位3県のひとつに数えられる。教育資源の少なさが社会減を引き起こす要因のひとつとなっており、若者の県外流出の抑制、および、転出者が再び戻ってこられる環境整備が重要な課題となっている。

また、就職においては、高校生の就職内定率は90%以上と高水準で推移しており³、県内就職内定者の割合も80%を超えている。しかし、就職3年以内の離職率が全国平均を上回っており、就職という入り口だけでなく、就業継続も含めた対策が求められている。

図表1-2 県内高校生の進学先・県内大学生の出身地（島根県・平成26年度）

県内高校の進学先大学所在地				県内大学の出身高校所在地			
順位	大学の所在地	入学者数（人）		順位	出身高校の所在地	入学者数（人）	
			割合				割合
1位	広島	487	17.3%	1位	島根	443	29.0%
2位	島根	443	15.7%	2位	広島	172	11.3%
3位	岡山	267	9.5%	3位	岡山	130	8.5%
4位	大阪	237	8.4%	4位	鳥取	118	7.7%
5位	東京	180	6.4%	5位	兵庫	114	7.5%
6位	兵庫	167	5.9%	6位	愛媛	41	2.7%
7位	京都	147	5.2%	7位	京都	40	2.6%
8位	山口	116	4.1%	8位	大阪	39	2.6%
9位	福岡	114	4.0%	9位	愛知	38	2.5%
10位	鳥取	97	3.4%	10位	福岡	31	2.0%
その他の地域		563	20.0%	その他の地域		361	23.6%
計		2,818	100.0%	計		1,527	100.0%
県外転出		2,375	84.3%	県外転入		1,084	71.0%

資料出所：文部科学省「学校基本調査」（平成26年度）

（3）人口減少に対する島根県の取り組み

島根県の人口減少に対する取り組みは全国に先駆けて動き出しており、バブル崩壊間際の1991年に県庁内に「人口定住促進連絡会」および「人口定住プロジェクトチーム」が設置されている。その翌年には当時の澄田知事が「定住元年」を宣言し、その後の取り組みの中心となる「ふるさと定住財団」が設立されている。「島留学」などの若者定住モデルが話題となった海士町や、子どもの医療費無料、第2子からの保育料無料などの施策により女性定住モデルとなった邑南町など、地域の特徴を活かした独自の取り組みは、今では「島根らしさ」のひとつとなっている。

³ 資料出所：島根労働局

島根県では、2010年度からU I ターン者を「市町村等の支援を受けて、県外から島根県に転入し、かつ定住する意思のある者」と定義し、各市町村からの報告をもとに集計している。ここでいう「市町村等の支援」とは、市町村などが実施している空き家バンク、各種奨励金、窓口での相談対応、ふるさと島根定住財団や県が実施している無料職業紹介、U I ターンしまね産業体験、U I ターンフェアなどが例として挙げられる。それらの集計をもとに、島根県におけるU I ターン者数の推移（**図表 1-3**）を見てみると、2012年度に一時的な落ち込みがみられるものの近年では復調しており、2014年度はUターン者で顕著な増加が見てとれる。人口の社会減を食い止めストップへ自然増へとつなげる島根県内の試みは、「U I ターン」の成功例として取り上げられる機会が増えており、人口減に悩む自治体からの視察も絶えない。島根県では、市町村等の支援を受けたかどうかにかかわらず、U I ターンの実態をもれなく把握するため、2015年度からU I ターン者の定義を「県外から島根県に転入し、転入市町村に5年以上在住する意志のある者」に変更し、転入届の手続き時にあわせて調査を行うことを発表しており、今後の推移に注目が集まっている。

図表 1-3 島根県におけるU I ターン者数の推移

年度	Uターン	Iターン	合計	増減
2010年	103	336	439	
2011年	120	483	603	164
2012年	148	416	564	▲ 39
2013年	140	435	575	11
2014年	390	483	873	298

資料出所：島根県地域振興部しまね暮らし推進課（2015年）

第2節 しごと

（1）産業構造

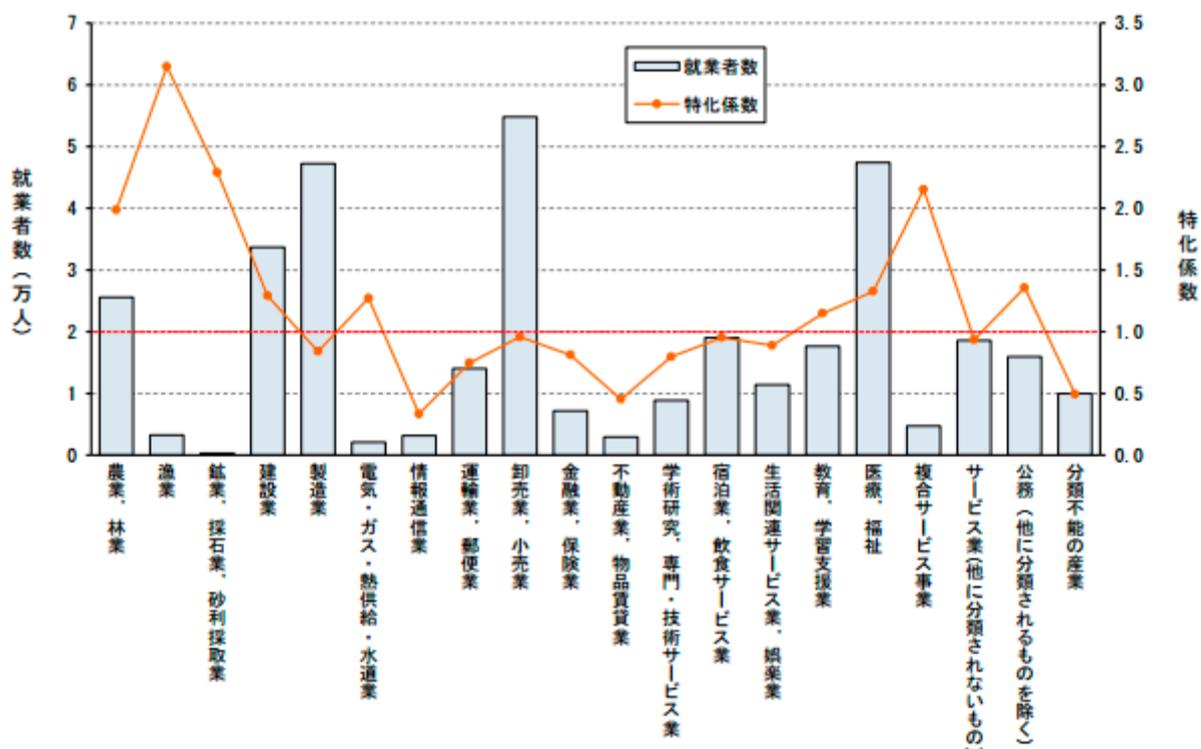
次に、島根での暮らしを支える仕事について焦点をあててみたい。**図表 1-4**は、平成22年の島根県における産業別就業者数を示したものであり、産業構造の特徴が見てとれる。特化係数1以下すなわち全国比で就業率の低い産業をみると、島根県では製造業や情報通信業があげられる。また農林・水産業、建設業や公共事業など政府サービスでは、就業率が高いとなっている。

2005年度以降、第1次産業は2%前後、第2次産業は22%前後、第3次産業は75%前後で推移しており、大きな構造変化は見られない。近年、第3次産業は高齢化する人口構造を反映し、サービス業の医療・介護分野が増加傾向にあるが、電気・ガス・水道業の減少、また、卸売り・小売業などが減少したことにより、全体を押し上げるまでには至っていない。

また、島根においては中小企業が全体の9割を占めており、その6割強が従業員4人以下の小規模

事業所である。2015年8月の有効求人場率は1.30倍と全国平均1.23倍を上回っているが、業種によっては人手不足が深刻化しており、先に述べたとおり社会減の要因となっている若者世代を県内での就労に結びつけ、就業継続を実現させることは、産業面においても持続可能性を維持する上では急務となっている。

図表1-4 産業別就業者数（島根県・平成22年）



資料：「国勢調査報告（総務省統計局）」（平成22年）

[注] 特化係数＝島根県の当該産業の比率/全国の当該産業の比率

（2）賃金、労働組合の状況

島根県の2012年度の県内総生産は名目値2兆3,420億円である。一人当たりの県民所得は236万3千円で、一人当たりの国民所得を100とした場合、島根県民所得水準は85.6にとどまる⁴。2015年7月の厚生労働省「毎月勤労統計地方調査（基幹統計）月報」によると、島根県の5人以上の事業所における賞与などを除いた「きまって支給する給与」は232,027円（全国調査：259,952円）であり、就業形態別に内訳を見てみると、一般労働者は282,271円（全国調査：331,311円）、パートタイム労働者⁵は94,230円（全国調査：97,463円）となっている。

また、同調査によると、常用労働者⁶数は234,184人、うちパートタイム労働者は62,654人であり、パートタイム労働者比率は26.8%となっている。なお、最低賃金は時間額696円（2015年10月4日から）

⁴ 島根県「平成24年度島根県県民経済計算」

⁵ 1日の所定労働時間または1週間の所定労働日数が一般の労働者より短い者

⁶ 期間を定めず、または1ヵ月を超える期間を定めて雇用されている者

であり、全国加重平均の780円を下回っている。

次に、労働組合の組織状況をみてみたい。厚生労働省「労働組合基礎調査結果(2014年)」によると、島根県内の労働組合数は410組合、組合員数は44,547人となる。推定組織率(雇用者数に占める労働組合員数の割合)は16.24%であり、ほぼ横ばいで推移している。そのうち、連合島根の構成組織は31団体、労働組合数は180組合、組織人員は30,816人(2015年10月現在)となっており、推定組織率は11.23%となっている。

第3節 くらし

(1) 道路

島根は森林県であり、東西に細長い地理的環境から、島根の暮らしと仕事にとって車は欠かせないインフラとなっている。京都から山陰地方を経由して山口県へ通ずる国道9号は、島根県においては安来市―津和野町間の230kmをつないでいる。県庁所在地の松江市から津和野町までJR特急で約3時間、車では約4時間を要することからも、島根の東西に伸びた地理感が伝わってくる。山陰道の整備状況は事業中区間や未事業化区間が含まれていることから、島根県内の供用率は2014年度では56%にとどまっている。

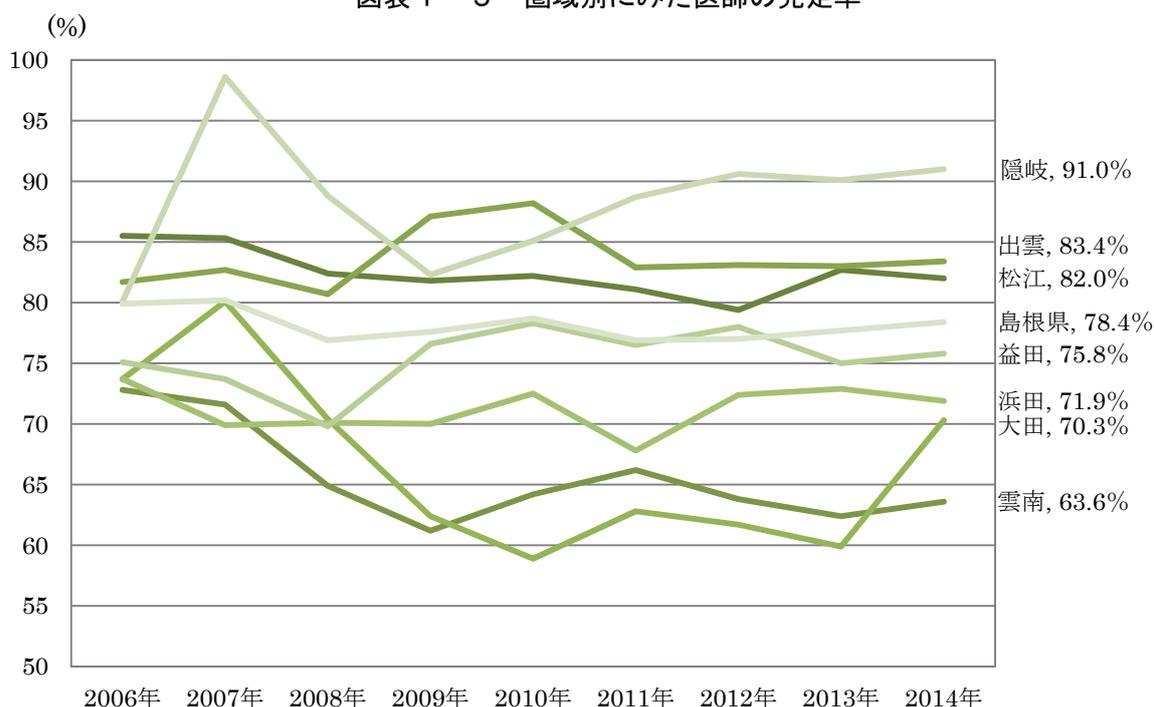
(2) 医療機関

前述の通り島根県内の移動は、場合によっては島根―東京間の移動よりも時間を要する。このような地理的特徴から、人口規模は少ないものの県内に7つの医療圏を設定し地域医療を展開している。人口10万対医師数は275人と、全国平均238人を上回っているが、医師の約7割が県庁所在地である松江医療圏と、大学病院が設置されている出雲医療圏に集中しており、他の5つの医療圏域では深刻な医師不足を引き起こしている。医師数密度(人/100km²)を確認してみると、全国平均80人に対し、島根県は29人と全国でも42位に位置する少なさである⁷。

島根県内に所在する病院および公立診療所を対象にした、しまね地域医療支援センターが実施した「平成26年勤務医師実態調査」(図表1-5)によると、医師の充足率は全県で78.4%、地区別では、雲南(63.6%)、大田(70.3%)、浜田(71.9%)が平均を大きく下回っている。また、診療科別の充足率にも偏りがみられ、皮膚科・泌尿器科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科が70%未満となっている。

⁷ 島根県「地域医療再生計画」「島根県の地域医療の状況」

図表1-5 圏域別にみた医師の充足率



資料出所：しまね地域医療支援センター「平成26年（2014）勤務医師実態調査」

（3）女性にとっての島根

2014年11月に「まち・ひと・しごと創生法」が策定され、全国で創生総合戦略の策定が進められている。島根県は2015年10月19日に「まち・ひと・しごと創生 島根県総合戦略」を策定し、島根の将来像として「子育てしやすく活力ある先進県」を目指すことが明記されている。島根県に抱くイメージのひとつに「子育てしやすい県」があげられる。島根県の合計特殊出生率が全国平均を上回っていることからその一端はうかがい知れるが、ここではいくつかの指標をたよりに、総合戦略において島根県が将来像として掲げた「子育てしやすい県」の現状について整理してみたい。

島根の女性の最大の特徴は、育児をしながら働く女性の多いことがあげられる。総務省「就業構造基本調査（2012年）」によると、育児中の母親の有業率は全国トップの74.8%である。女性が外で働くには、負担が女性に偏りがちな育児や介護、日々の家庭内労働をいかに軽減し、チームワークで乗り切るかが重要となってくる。

島根の女性の高い有職率を支える要因の一つは、住まい方に見ることができる。総務省「国勢調査（2010年）」では、島根の三世帯同居率は全国9位と上位に位置している。最近、話題に上ることが多い「隣居」や「近居」⁸を含めればさらに増えることが予想され、安来市や奥出雲町などでは三世帯世帯定住促進事業助成金を創設し促進に乗り出している。

さらに、公的保育環境も恒常的に待機児童を抱える大都市に比べると充実している。厚生労働省「社会福祉施設等調査（2010年）」では、子ども1,000人に対する保育所数は全国平均3.4か所に対し、島根

⁸ 徒歩圏内で行き来ができる距離に二世帯以上が住み、相互に生活のサポートを行う住まい方。同居に抵抗をもつ世代にも比較的受け入れやすいといわれている。

県は7.6か所と充実していることが分かる。保育所入居待機児童は、松江市など都市部を中心に発生しているものの、総数は129人（2014年10月現在）と少数に留まっている。

最後に、意識的な部分について触れておきたい。島根県が毎年行っている「島根県政世論調査」の平成25年度調査結果によると、「男は仕事、女は家庭」といった固定的な性別役割分担意識に対して、県民世論の約7割が否定的にとらえている。性別役割分担意識が強い県では、男性の長時間労働の割合も多く、女性の有業率が低いことが分かっているが⁹、島根の場合は、この逆のトレンドを示しており、共働き世帯の夫の家事・育児分担率が全国1位の22.4%であることも性別役割分担意識に否定的な傾向と整合的といえる。

⁹ 内閣府「平成27年度版男女共同参画白書」

「地方とは何か」を考えるために

*コラム①～⑨は2015年9～10月に執筆したものです。

高尾 雅裕（株式会社山陰中央新報社 論説委員長）

地方創生元年と安倍政権が位置づけた2015年、地方創生は結局「そこに住む理由」が問われていたのだが、間口も奥行きも深いこのテーマは、なかなかつかみ所がなかった。雇用政策につきるのか、新たな価値観が勝るのか、秋までに各自治体が策定した「地方版総合戦略」が手探り作業となり、かゆいところに手が届かなくなっていたのも、財源不足に加えて、焦点が絞りきれないことに起因する、「アイデア不足」が原因となっていたように思う。

それは、基本となる調査がないことに一つの理由があった。住民集会などで極力地域課題を拾う努力はされてきたが、地域社会の将来予測を交えたプロの目での分析がなかったことが大きい。今回のしまねプロジェクトは、その欠けていた部分を補う様に、重要なポイントに絞り、調査と分析が実施された。労働系の本格的な世論調査に、新聞が参画することは異例だったが、その趣旨に賛同し、期待を寄せて加わることになった。結果として、多くの示唆を与えて頂くこととなり、感謝したい。

新聞社には、世論調査の機能があって、地方紙も国政選挙などの際、選挙区ごとに実施し、それを通信社でとりまとめて全国情勢報道にしている。大手紙やテレビは独自に行うが、地方紙部数をすべて集めると国内最大のメディアを形成するというハードの強みとともに、地元信頼されているというソフトの強みが合わさって、なかなか「質の良い」データが得られていると思う。

以前、本社の行政（政治）グループ長時代に、世論調査を元にした、いわゆる「票読み」を担当していた。生データをそのままどこかに出すことはしない。必ず取材に基づく「経験値」を加味して判断（判定）した。最後に現下の政治テーマや当日の天候など、変動要素を加えても、選挙の姿（市町村ごとの得票分布の形など）は、ほとんど外すことはなかった。

調査票には選挙とは別に、目下の最優先課題についても質問して良いことになっていて、昨年の衆院選では、山陰中央新報は山陰両県の有権者に「原発の在り方」を尋ねた。これらが、新聞社の主張（社論）のベースづくりに役立っている。

一方で、地方自治体の行政目標の中心軸はここ20年ほどで、社会資本の整備から極めて個人的な生活分野（福祉、教育、医療、子育てなど）にシフトしている。それに合わせて社会課題の精査の対象も大きく変わるべきなのだが、実際はそうっていない。千差万別、個人の課題の難しさに加え、福祉分野での財政負担増など、「調べが付いても手を打つのが難しい」と、行政は及び腰で、後回しになりがちだ。

今回、毎熊主査が全国との比較検討に苦勞された。比較できる調査が少なかったためだ。が、逆にここに展開のヒントがある。しまねプロジェクトは、「東京の対極」にあるとされる島根での取り組み。地方の構造を見るには最適だった。さらに、地方で集められたデータは「質」が良い。そしてそれは地方で分析されことで精度が増す。地方紙の世論調査と同じ事が起きるはずだ。今回の調査を水平展開すれば、「地方とは何か」を考える重要な示唆が得られるだろう。

第 2 章

第2章 しまね生活の特徴 -アンケート結果から-

島根大学法文学部准教授 江口 貴康

第2章のポイント

第1節 島根の人口的特徴と分析視点

1. 島根県の人口的特徴

島根県の人口は1955年の約93万人から減少しており、2015年現在では70万人を切っている。人口減少の要因は自然減および社会減である。

2. 分析視点

(1) 第2章では、まず最初に、島根県の人口減少に歯止めをかけ次代を担える存在として「若者」、「女性」に着目するとともに、「転勤・就職による県内への転入者」も対象とし、その仕事・職場および生活の実態と意識について分析する。

(2) 次に、3者を含めた就業者全体に共通する仕事・職場の問題点を抽出し、その課題を提示するために、「雇用形態」「職種」「業種」「従業員規模」に着目し、それぞれ「職場・仕事の不満」、「WLBへの評価」、「メンタルヘルス疾患の可能性」について分析する。

第2節 若者世代、女性、県内転入者

1. 若者世代の労働と生活

「若者世代（20～34歳）」は、他の年齢層に比べて、仕事・職場の満足度が高く、またWLBへの評価も高い。また自由時間が多く、仕事以外の生きがいも感じており、個人生活も充実している。特に20代前半でこの傾向が見られる。よって、労働環境、個人生活ともに比較的バランスはとれていると言える。職場に定着して勤務年数が長くなり、その結果居住年数が長くなれば、島根に定住する可能性は高いと考えられる。

2. 女性の労働と生活

「女性」の労働条件・労働環境に対する満足度は男性とほぼ変わらない。職場において女性の労働環境に一定の配慮がなされているようである。しかし男性に比べ、自由時間や仕事以外での生きがいなどで若干余裕がなく、日常的ストレスなどもやや強く感じている。家事・介護・育児などで、ある程度家族等からの支援があるが、仕事と日常的な家事等での多忙さで、女性の個人生活にやや余裕がなくなっている。今後、職場での「休暇のとりやすさ」など一層の女性の事情を配慮した改善が必要である。

3. 県内への転入者の労働と生活

「転勤・就職による県内への転入者」の仕事・職場の満足度やWLBの評価は、全体に比べて全般的に高い。また自由な時間や仕事以外での生きがいも充実し、日常のストレスも比較的少ない。「交通の便」「娯楽」「気候」等で困っているが、生活満足度に大きな影響を与えるほどではない。社会参加や地域へのつながり意識は弱い。義務的な町内会の参加率、暮らしやすさ、地域的愛着は約50%である。約26%の持ち家率、10年以上の勤続年数が35%であることを考えると、転入者の定着率は一定程度見られる。島根に住み続けるかわからないという態度保留者に、いかにして島根に定着してもらうかが課題である。

第3節 就業形態・仕事内容／勤務先の特性と就業者の意識

1. 就業形態・仕事内容の特性と就業者の意識

「雇用形態」別

非正規雇用である「パート・アルバイト」「嘱託・契約職」「派遣職」に共通する不満は、「賃金」「福利厚生」である。さらに「パート・アルバイト」「派遣職」では「教育・訓練／研修」に対する不満もやや強い。「正規職」では、うつ病などのメンタルヘルス疾患の可能性が非正規雇用よりもやや強い。

「職種」別

「現場作業職」ではすべてにおいて不満の割合が高い。次いで不満の項目が多い「運輸職」では、特に「賃金」の不満が高い。全般的に不満が少ない「事務職」では「メンタルヘルス疾患の可能性」が他に比べて高い。また全職種において、WLB対応への評価は、「メンタルヘルス疾患の可能性」の割合と対応する傾向が見られる。

2. 勤務先の特性と就業者の意識

「業種」別

全体に比べて、すべての項目で不満度が高いのは「製造」である。次いで多いのが「運輸・交通」であるが、特に「賃金」への不満が強い。不満が高い割合と低い割合が混在しているのが、「情報・通信」、「教育」、「金融・保険」である。「情報・通信」で特に不満の割合が高い項目は「賃金」であり、「教育」では「労働時間」である。「金融・保険」では「仕事そのもの」である。「公務員」は、すべての項目で不満の割合が低い。「メンタルヘルス疾患の可能性」の割合はかなり高い。

「従業員規模」別

50人未満の規模では、あまり一貫した傾向が見られない。小規模の勤務先では経営理念や業務管理などに違いが出やすく、働きやすさに差が出ている可能性がある。50人以上では、従業員数が増加するにつれて不満の割合が減少する傾向にあり、またWLBの対応への評価が一貫して上昇する傾向が見られる。

3. 考察

ここまで、「雇用形態」「職種」という就業形態・仕事内容に関わる特性、および「業種」「規模」という勤務先の特性について、就業者の不満、ワークライフバランス（WLB）に関する勤務先の対応への評価、メンタルヘルス疾患の可能性を見てきた。これらの意識は、それぞれの仕事や職場の問題点が就業者の意識に反映していると考えられるが、同時に企業等の勤務先が抱える課題であるとも言える。ここでは、仕事や職場の問題点および課題について指摘したい。

第1節 島根の人口的特徴と分析視点

1. 島根県の人口的特徴

島根県の人口は、ピークである1955年(93万人弱)から減少傾向にあり、現在の人口は692,368人(2015年8月1日)である。10代後半から20代前半を主とした生産年齢人口の社会減による少子高齢化が進行しており、現在の高齢化率は31.8%(全国第3位)(2014年10月1日)である。

また、平成の大合併の影響により(H16~23年)、島根県内の市町村は59から19へ減少している。かつて人口が増加していた松江市や出雲市も人口減少が進行する市町村と合併したため、現在ではすべての市町村において人口が減少している。人口減少の要因は、死亡者が出生者を上回る自然減であり、かつ県外への転出者が県内への転入者を上回る社会減である。どの市町村においても、自然減による

人口減少は共通している。人口増減を見ると、島根県内で最も人口の多い自治体である松江市においても、平成25年10月から平成26年9月の間に約600人減少しており、減少数では浜田市に次ぐ多さである（『平成26年 島根の人口移動と推計人口』（島根県政策企画局統計調査課））。

一方で、社会増が見られる市町村もある。出雲市(265)、邑南町(13)、海士町(8)、知夫村(4)、吉賀町(1)がそれであり（カッコ内は社会増の人数）、U I ターン等の定住政策を推進している市町村などの中には人口流入の傾向が見られる。

2. 分析視点

(1) 上記のように、島根県では一部の市町村で社会増が見られるものの、人口減少や少子高齢化が進行している状態にあるが、このような人口減少・少子高齢化は将来的に社会の衰退をもたらす。このような現状を踏まえた問題意識に基づき、第2章では「島根で働く人の『しごと』と『くらし』意識調査」データの分析の際に、まず以下の対象者に焦点を当てて分析する。

①若者世代（20～34歳）

若者は、働き手として地域を支える重要な社会の担い手であると同時に、次世代を生き育てる存在でもある。その若者の労働条件、労働環境、そして日常生活での実態や満足度を通して、他の年齢層との比較から仕事と生活の状態について分析する。ここでは、10代後半の就業者のサンプル数が少なく、また回答にやや偏りが見られたため、分析対象を20～34歳とする。

②女性

女性も、若者と同じく、地域社会にとって重要な働き手であると同時に次世代を産み育てる重要な存在である。特に、次世代をつなぐという意味では欠かせない存在である。その女性の、労働条件、労働環境、そして日常生活での実態や満足度を通して、男性との比較から仕事と生活の状態について分析する。

③転勤・就職による県外からの転入者

島根県の人口減少の原因の一つが、県外への転出が転入を上回っている状態、すなわち社会減である。しかし県内への転入も一定数あり、その転入者が島根県に定着する可能性もある。過疎地域などへの転入者がIターン者として注目されることが多いが、都市部への転入者も多く、島根県全体の人口動態という観点からすれば重要な存在である。その県内転入者の労働条件、労働環境、そして日常生活での実態や満足度を通して、全体との比較から仕事と生活の状態について分析する。

(2) 次に、「雇用形態」「職種」という就業形態・仕事内容に関わる特性および「業種」「規模」という勤務先の特性が就業者の不満等にどのような影響を与えているかについて分析する。これら就業者の不満などの傾向を把握することで、勤務先や仕事内容が抱える問題を把握することができる。これらの問題は職場が抱える課題として捉えられるが、各企業等がその課題に対応していくことで、若者、女性、転入者を含めた島根県の就業者全体の労働条件・労働環境の改善につながると考える。

人材生かす変革が必要

*コラム①～⑨は2015年9～10月に執筆したものです。

木村 雄治（島根県経営者協会 協会コーディネーター）

ほんの少し前まで就職難と言われた時期が長く続き、ここ数年で急に人材不足といわれるようになった。ここ島根においては、全国トップクラスの過疎先進県である。今までと同じように人材・労働力が必要と考えるならば、団塊世代がリタイヤ世代となり少子化が長く続き団塊ジュニア世代の女性の出産適齢期が過ぎていることもあり、人材・労働力不足は深刻である。

そのような中、島根においてこのようなプロジェクトが行われたことは、大いに意味があったと思っている。いま、政府においてもまち・ひと・しごと創生総合戦略を展開しているが、島根の実情を多面的に捉えた1年間のプロジェクトであったと思っている。

このプロジェクトの中で様々な意見や、アンケートの結果、ヒアリングでの生の声、わいわいサークルというつながりの中での意見で、興味深い結果となった点がいくつかあった。

1、女性について

育児介護休業法により制度の充実がはかられたが、現実には「会社に対して遠慮もあり取りにくい」「3歳までの短時間勤務が難しい」などの意見があった。このような現実のなか、一歩進んだ取り組みが必要ではないだろうか、今までは休暇取得に対しての不安があり、ネガティブな取得であったが、これをポジティブ的に積極的取得をするような会社に気がねのない制度とするため、育児復帰プランナーによる支援制度の拡充や休暇中の自己啓発、資格取得等ができるような取り組みも必要ではないだろうか（もちろん育児に影響のでない範囲であるが）そうすることにより男性の育児休暇の取得も進むのではないだろうか。出産・育児とすばらしいことのために会社から人材がいなくなることを防ぐような取り組みを先進的に島根でする意味はあるのではないだろうか

2、仕事に対する満足度は高い

新卒者の多くが県外へ就職するなかで、県内で就職者は満足度が高いということである。県外流出が高いので満足度は低いのではと考えていたが、アンケート結果では満足度は高いとの結果であった。この結果から島根の企業も優良企業がたくさんあると言えるのではないかと、島根の学生は都市部の大企業や公務員志望が多いようであるが、仕事についてもっと多面的に考えていただきたい。そのためにも、キャリア教育の支援やインターンシップ等を積極的に支援し、中小企業、農業などのインターンシップを受け入れにくい企業等においては、事業主団体等で対応する取り組みも必要ではないか。

3. 非正規雇用労働者

非正規雇用労働者の中にも自ら望んで非正規雇用を選択する方もおられるが、不本意非正規雇用の方も多し。正規雇用への積極的な登用をはかるキャリアアップシステムも必要でないか。

他県企業は、島根出身の人材を高く評価し積極的に採用をしようとしているようである。このような人材を逃がさないよう、島根独自の人材活用、人材育成や、女性の活躍推進をし、企業のメインストリームとなって能力を発揮できる企業への変革が求められる。島根の将来のため企業と労働者、関係団体、島根全体が同じ方向で取り組みをすることが必要であり、これからも島根にあった施策を展開していくよう望む。

第2節 若者世代、女性、県内転入者

1. 若者世代の労働と生活

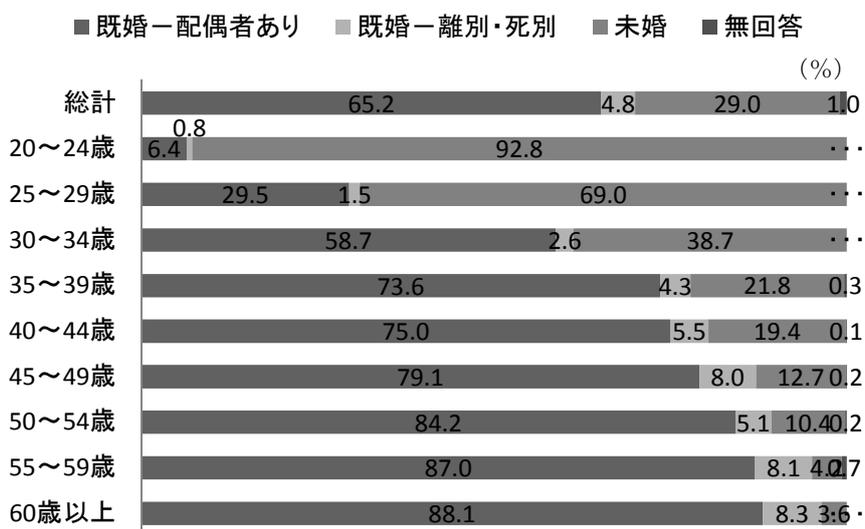
(1) 属性的特徴

図表2-1 年齢層別および性別のサンプル数

	(%)			サンプル数
	男性	女性	無回答	
総計	63.7	35.1	1.2	3,928
19歳以下	81.8	13.6	4.5	22
20～24歳	66.7	32.6	0.8	264
25～29歳	71.8	28.2	...	397
30～34歳	61.9	37.9	0.2	504
35～39歳	68.0	31.9	0.2	609
40～44歳	60.4	39.4	0.1	715
45～49歳	67.9	31.8	0.4	560
50～54歳	58.0	41.3	0.7	450
55～59歳	60.0	39.3	0.7	285
60歳以上	59.5	40.5	...	84

サンプルの性別および年齢を見ると、全体（図表2-1中「総計」。以下同）における男性の割合は63.7%、女性では35.1%である。20代前半の男性の割合は66.7%、後半で71.8%であり、全体よりも男性の割合が高いが、特に20代後半で高い。それに比べて30代前半はやや男性の割合が低くなっている。

図表2-2 未婚・既婚（年齢層別）



図表2-2をみる。全体における既婚・配偶者ありの割合は65.2%であるが、若者世代（20～34歳）ではそれを下回っている。20代前半では6.4%、後半では29.5%、30代前半では58.7%と年齢が上がるにつれて割合が上昇している。特に、30代前半ではかなり全体と近くなっている。

(2) 労働条件・労働環境と職場・仕事の満足度

①労働条件

図表 2-3 本人年収（年齢層別）

	本人年収（万円）											無回答	件数	中央値・万円	平均値・万円
	0	2	3	4	5	6	7	8	1	1	1				
総計	8.4	13.7	20.4	18.2	16.1	10.9	5.7	2.7	0.3	0.1	3.3	3928	432.1	443.0	
19歳以下	40.9	31.8	13.6	4.5	4.5	22	221.4	259.5	
20～24歳	11.4	45.5	33.0	6.8	0.8	2.7	264	282.1	282.7	
25～29歳	5.8	27.0	40.3	19.1	5.3	1.0	1.5	397	340.9	341.2	
30～34歳	10.1	14.7	37.7	20.2	9.9	4.2	0.6	2.6	504	363.4	365.4	
35～39歳	7.2	6.9	20.7	32.2	17.6	10.3	2.8	0.2	0.2	0.2	1.8	609	444.4	439.9	
40～44歳	5.9	8.7	14.1	21.0	27.7	12.3	4.8	2.2	0.1	0.1	3.1	715	494.3	477.6	
45～49歳	7.3	4.1	10.7	13.2	21.1	20.2	12.7	7.0	1.1	0.2	2.5	560	563.6	547.2	
50～54歳	7.1	8.9	7.3	12.9	18.2	20.7	14.0	7.6	0.9	...	2.4	450	568.9	543.6	
55～59歳	10.9	9.5	9.8	13.7	18.6	16.5	12.6	6.0	2.5	285	526.4	500.7	
60歳以上	31.0	38.1	17.9	1.2	3.6	1.2	1.2	1.2	4.8	84	243.8	253.1	

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表 2-3 より、全体で見ると、本人年収の割合がもっとも大きいのは300万円台の20.4%であり、400万円台の18.2%が続いている。50代前半までは、年齢が高くなるにつれて本人年収も増加するが、50代後半ではやや減少し、60歳以上では200万円未満や200万円台の割合も増加し平均値も約240万円となっている。

若者世代の本人年収を見ると、20代前半では、平均値が約280万円であり、200万円台が45.5%で最も多く、次いで多いのが300万円台の33.0%である。20代後半では、平均値が約340万円であり、300万円台が40.3%で最も多く、次いで多いのが200万円台の27.0%である。30代前半では、平均値が約360万円であり、300万円台が37.7%で最も多く、次いで多いのが400万円台の20.2%となっている。

図表 2-4 1週間の労働時間（時間外労働を含む）（年齢層別）

	労働時間（時間）											無回答	件数	中央値・時間	平均値・時間
	1	1	2	3	3	4	4	5	5	6	6				
総計	11.0	2.3	2.0	1.9	12.5	34.1	17.9	8.4	3.7	4.3	1.9	3928	42.8	39.7	
19歳以下	13.6	4.5	4.5	50.0	13.6	...	9.1	...	4.5	22	42.5	37.7	
20～24歳	12.9	2.7	1.9	1.9	10.6	33.7	19.7	12.5	1.1	1.9	1.1	264	42.9	38.6	
25～29歳	9.8	0.8	1.0	1.0	11.8	29.0	19.9	11.6	6.3	7.3	1.5	397	44.3	42.3	
30～34歳	11.9	2.8	2.4	2.0	11.7	34.1	21.0	6.0	3.2	4.2	0.8	504	42.8	39.0	
35～39歳	11.0	3.4	1.1	2.1	11.8	34.3	17.9	9.0	3.9	4.6	0.7	609	42.9	39.7	
40～44歳	12.4	3.2	1.4	1.1	12.0	36.4	18.2	7.8	2.9	3.8	0.7	715	42.7	38.9	
45～49歳	9.8	1.8	2.7	1.8	10.9	33.2	19.3	10.0	4.8	4.6	1.1	560	43.4	40.7	
50～54歳	9.8	2.0	1.8	1.6	11.6	36.4	16.7	8.0	4.4	6.7	1.1	450	43.1	40.9	
55～59歳	10.9	1.4	3.2	2.8	20.4	39.6	11.6	5.3	2.5	1.1	1.4	285	41.3	37.8	
60歳以上	13.1	...	9.5	10.7	32.1	21.4	6.0	1.2	2.4	1.2	2.4	84	37.4	34.1	

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表2-4より、1週間の労働時間を見ると、全体では中央値42.8時間、平均値39.7時間となっており、40～44時間が34.1%と最も割合が高く、45～49時間が続いている。

若者世代を見ると、20代前半では、中央値42.9時間、平均値38.6時間、40～44時間が最も割合が高く33.7%、45～49時間の19.7%が続いている。20代後半では、中央値44.3時間、平均値42.3時間、40～44時間が最も割合が高く29.0%、そして45～49時間の19.9%が続いている。この年齢層では、55～59時間が6.3%、60時間以上が7.3%と、長時間労働が他の年齢層よりも高く、これが中央値、平均値を引き上げていると言える。30代前半では、中央値42.8時間、平均値39.0時間、40～44時間が最も割合が高く34.1%、45～49時間の21.0%が続いている。20代前半、30代前半は全体と近い傾向が見られるが、20代後半では、一部の就業者に労働時間が長い傾向が見られる。

図表2-5 1週間の時間外労働（年齢層別）

(%)

	ない	1 ～ 4 時間	5 ～ 9 時間	10 ～ 14 時間	15 ～ 19 時間	20 ～ 24 時間	25 ～ 29 時間	30 ～ 34 時間	35 ～ 39 時間	40 ～ 44 時間	45 ～ 49 時間	50 時間 以上	無 回 答	件 数	中 央 値 ・ 時 間	平 均 値 ・ 時 間
総計	19.7	39.4	20.1	10.0	3.5	2.4	1.2	0.5	0.7	1.1	1.5		3928	4.0	6.4	
19歳以下	27.3	36.4	27.3	9.1	22	3.5	4.3	
20～24歳	16.3	40.9	22.0	15.2	2.3	1.9	0.4	...	0.4	...	0.8	0.8	264	4.3	5.9	
25～29歳	<u>12.3</u>	36.8	23.4	13.4	5.5	3.5	1.0	0.8	0.8	1.3	1.3	1.3	397	5.1	7.7	
30～34歳	19.2	40.9	23.2	8.1	3.0	2.2	1.0	0.8	0.4	0.6	0.6	0.6	504	4.0	6.0	
35～39歳	15.3	43.2	22.2	9.4	2.8	2.6	1.6	0.5	0.7	1.3	0.5	0.5	609	4.2	6.7	
40～44歳	20.4	40.3	19.4	9.4	3.9	2.9	1.1	0.1	0.7	0.8	0.8	0.8	715	3.9	6.2	
45～49歳	16.6	38.8	21.1	12.0	5.5	2.3	1.3	0.9	0.4	0.9	0.4	0.4	560	4.4	6.9	
50～54歳	22.2	38.4	16.9	9.3	3.3	2.0	2.4	0.9	0.4	3.1	0.9	0.9	450	3.8	7.1	
55～59歳	34.4	38.9	<u>14.0</u>	7.4	1.1	1.1	2.5	0.4	0.4	0.4	285	2.6	4.6	
60歳以上	54.8	29.8	<u>9.5</u>	<u>3.6</u>	...	1.2	1.2	84	0.8	2.8	

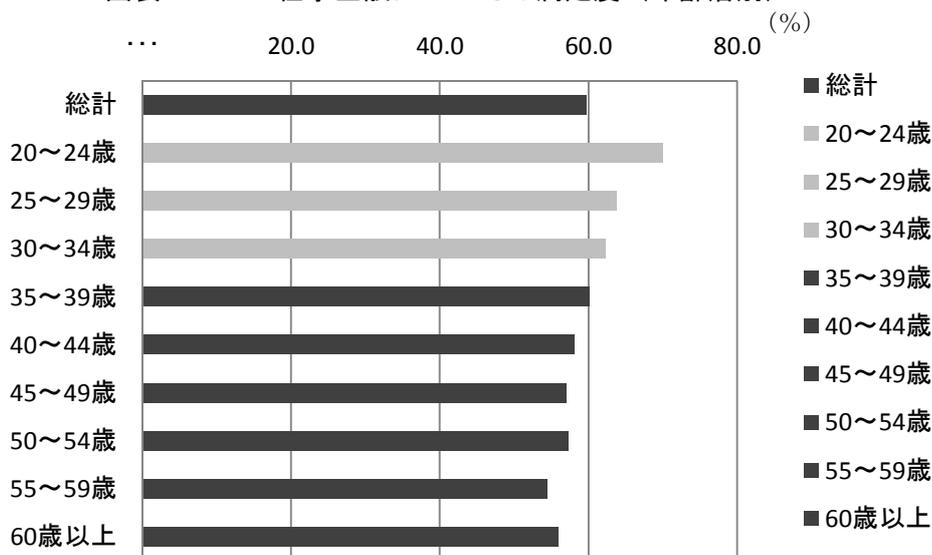
※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表2-5より、1週間の時間外労働を見ると、全体では中央値4.0時間、平均値6.4時間となっており、1～4時間が39.4%と最も割合が高く、5～9時間の20.1%が続いている。

若者世代を見ると、20代前半では、中央値4.3時間、平均値5.9時間、1～4時間が最も割合が高く40.9%、5～9時間の22.0%が続いている。20代後半では、中央値5.1時間、平均値7.7時間、1～4時間が最も割合が高く36.8%、5～9時間の23.4%が続いている。この年齢層は労働時間が長い傾向が見られたが、15～19時間が5.5%、20～24時間が3.5%など、時間外労働が全体よりも長く、これが中央値、平均値を引き上げていると言える。30代前半では、中央値4.0時間、平均値6.0時間、1～4時間が最も割合が高く40.9%、5～9時間の23.2%が続いている。20代前半、30代前半は全体と近い傾向が見られるが、20代後半では、労働時間と同じく一部の就業者に時間外労働が多い傾向が見られる。なお、時間外労働がない割合は、20代前半16.3%、20代後半12.3%、30代前半19.2%であり、20代後半でやや割合が低い。

②職場・仕事の満足度

図表 2-6 仕事全般についての満足度（年齢層別）



図表 2-6 より、仕事全般の満足度は、全体（59.7%）と比べて、若者世代は全般的に満足度が高い（20代前半70.1、後半63.7、30代前半62.3）。特に20代前半では、全体と比べて、10%以上高くなっている。

次に、図表 2-7 より職場や仕事における満足度について、「賃金」、「労働時間」、「休暇のとりやすさ」、「福利厚生」、「職場の人間関係」、「職場の雰囲気」、「仕事そのもの」、「自分の仕事ぶりに対する評価」、「教育・訓練／研修等」の9項目から、若者世代の特徴を見ていく。

図表 2-7 職場・仕事の満足度（年齢層別）

	賃金	労働時間	さ休暇のとりやす	福利厚生	職場の人間関係	職場の雰囲気	仕事そのもの	に自分の仕事ぶり	修教育・訓練／研	件数
総計	52.5	64.0	65.8	72.3	73.3	71.5	66.9	61.9	56.4	3,928
19歳以下	59.1	77.3	81.8	86.4	81.8	81.8	77.3	68.2	86.4	22
20～24歳	48.5	71.6	75.4	83.3	84.8	82.6	71.2	64.8	70.8	264
25～29歳	53.7	64.0	67.5	80.4	79.8	78.6	70.8	62.7	61.0	397
30～34歳	48.4	65.5	67.3	76.6	78.2	76.0	69.8	69.4	57.3	504
35～39歳	54.7	64.4	64.5	71.9	74.1	70.6	65.4	63.4	55.0	609
40～44歳	54.4	60.6	63.5	72.4	71.7	68.7	65.9	63.1	57.6	715
45～49歳	60.9	61.8	62.1	67.7	68.9	69.1	65.2	58.6	53.2	560
50～54歳	53.6	61.1	61.6	66.7	67.6	66.4	66.2	56.0	49.6	450
55～59歳	43.2	66.7	68.8	64.6	67.0	68.1	60.4	55.4	49.5	285
60歳以上	26.2	72.6	75.0	60.7	66.7	66.7	71.4	58.3	57.1	84

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

まず、20代前半（20～24歳）について見てみよう。満足度が70%を超えているものは、割合が高いものから「職場の人間関係」（84.8%）、「福利厚生」（83.3%）、「職場の雰囲気」（82.6%）、「休暇のと

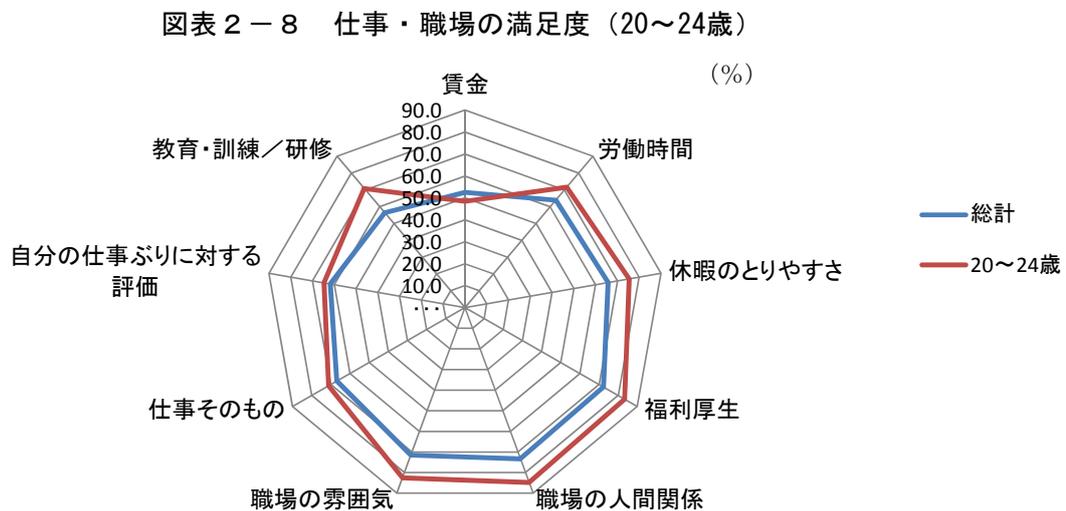
りやすさ」(75.4%)、「労働時間」(71.6%)、「仕事そのもの」(71.2%)、「教育・訓練／研修等」(70.8%)である。

次に、全体を上回る項目を見る。割合の差がもっとも大きいのは「教育・訓練／研修等」(+14.5%)であり、次いで「職場の人間関係」(+11.6%)、「職場の雰囲気」(+11.1%)、「福利厚生」(+11.0%)、「休暇のとりやすさ」(+9.6%)、「労働時間」(+7.6%)が続く(5%以上差があるもの)。「賃金」の満足度は48.5%で、全項目中唯一全体(52.5%)を下回っており、-4.0%低い。

20代後半(25～29歳)で満足度が70%を超えているのは、割合が高いものから「福利厚生」(80.4%)、「職場の人間関係」(79.8%)、「職場の雰囲気」(78.6%)、「仕事そのもの」(70.8%)である。また、全体を上回る項目で割合の差がもっとも大きいのは「福利厚生」(+8.0%)であり、次いで「職場の雰囲気」(+7.1%)、「職場の人間関係」(+6.6%)が続く(5%以上差があるもの)。「賃金」の満足度は53.7%で若干全体を上回っている。これは、この年齢層でやや男性の割合が全体よりも高く、残業等で収入が多いためと思われる。

30代前半(30～34歳)で満足度が70%を超えているのは、割合が高いものから「職場の人間関係」(78.2%)、「福利厚生」(76.6%)、「職場の雰囲気」(76.0%)である。全体を上回る項目で割合の差がもっとも大きいのは「自分の仕事ぶりに対する評価」(+7.6%)であり、それ以外に5%を超えるものは見られない。「賃金」の満足度は48.4%で、唯一全体を下回っており、-4.1%低い。

先述のとおり、若者世代の中で特に満足度が全般的に高いのは20代前半である。図表2-8は、20代前半の各項目に関する満足度を、全体と比較したレーダーチャートである。

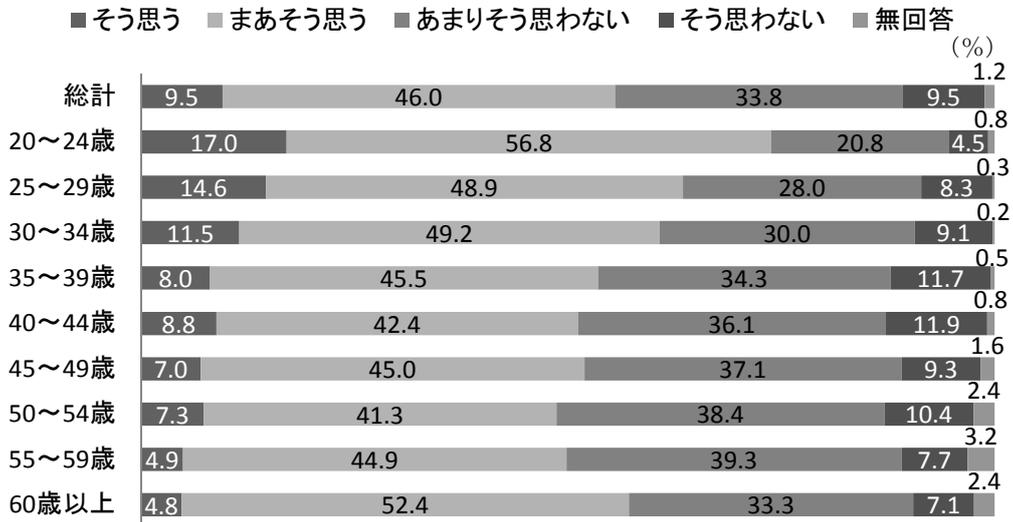


「教育・訓練／研修等」が全体よりも一番上回るのは、勤務先に就職してまだ間がないためであろう。それ以外では、特に「職場の人間関係」、「福利厚生」、「職場の雰囲気」の割合が高く、また全体との差も大きい。これはこの世代にとって職場環境が良いことを示している。20代後半でも同様の傾向が見られるため、若者世代を大事にする職場環境の存在が見受けられる。「休暇のとりやすさ」「労働時間」も全体に比べて高く、労働環境も若者にとって良いようである。ただ賃金に関しては平均値・

中央値とも約280万円であることを反映してか、全体よりも満足度が低い。

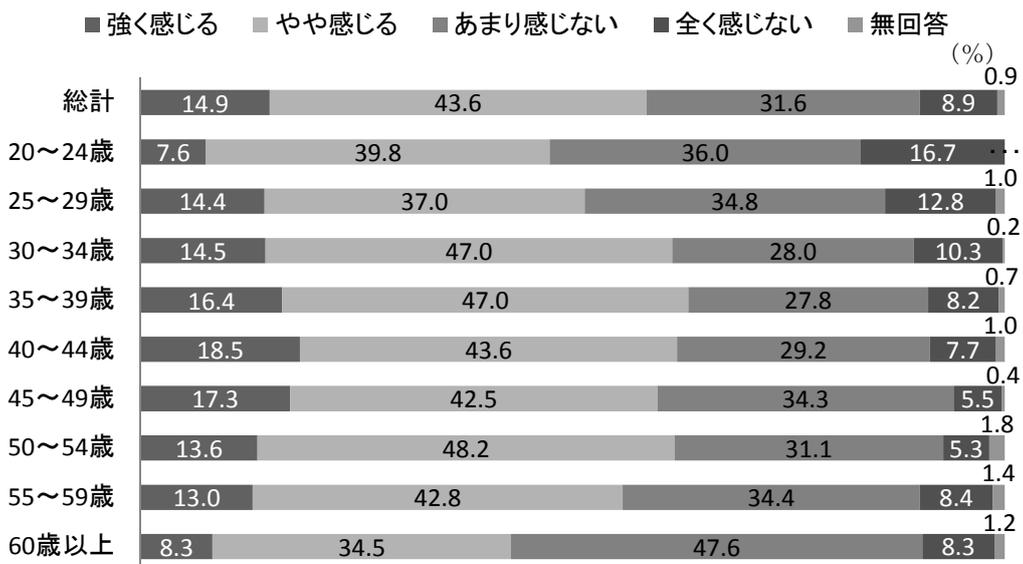
③WLBへの評価とメンタルヘルス疾患の可能性

図表 2-9 WLBの会社対応は十分か（年齢層別）



図表 2-9 より、WLBへの会社対応の評価は、全体（55.5%）と比べて、若者世代で高い（肯定の割合：20代前半73.9%、後半63.5%、30代前半60.7%）。60歳以上を除くと、年齢が高くなるにつれて評価が下がる傾向が見られる。

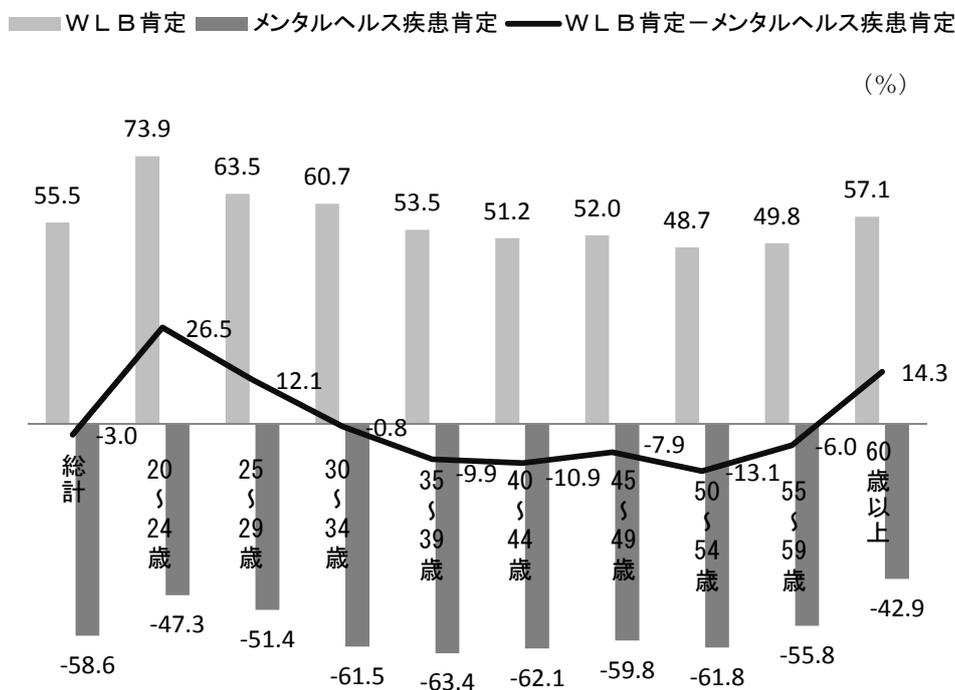
図表 2-10 メンタルヘルス疾患の可能性（年齢層別）



図表 2-10 より、うつ病などのメンタルヘルス疾患の可能性がある（あった）と感じた割合は、全体（58.5%）に比べて20代で低い（前半47.4%、後半51.4%）。特に20代前半では、強い肯定である「強

く感じる」割合が7.6%（全体は14.9%）であり、かなり低くなっている。

図表2-11 WLB対応肯定とメンタルヘルス疾患の可能性肯定（年齢層別）



図表2-11は、ワークライフバランス（WLB）への会社の対応を肯定する割合とうつ病などのメンタルヘルス疾患の可能性に対して肯定的な割合を比較したものである。メンタルヘルス疾患の可能性については、肯定の割合をマイナスで表記している。折れ線グラフは、WLBの会社対応の肯定の割合からメンタルヘルス疾患の可能性を肯定する割合を引いたものである。

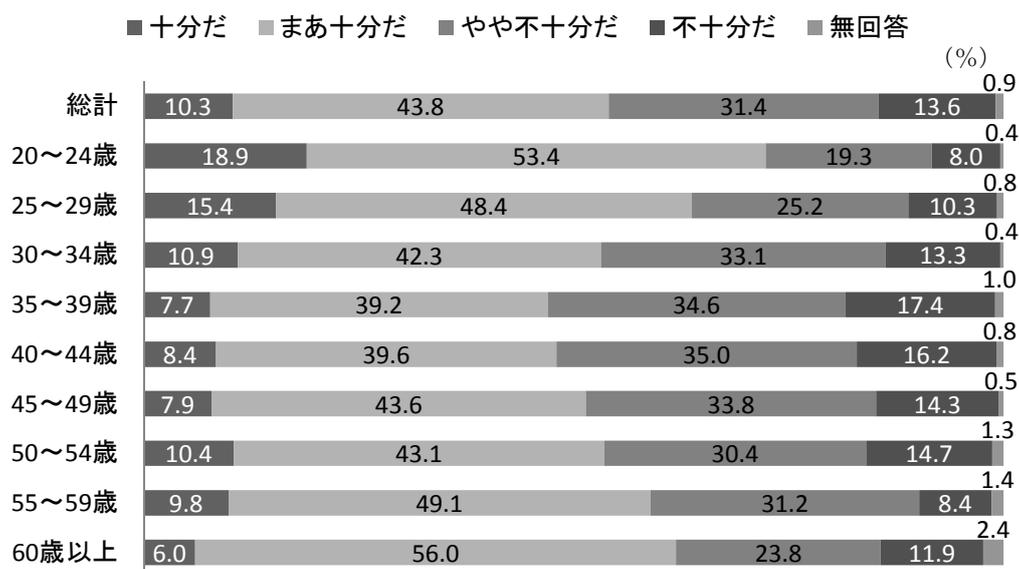
この数値により、年齢層別における、WLBの評価の高さとメンタルヘルス疾患の可能性の関係を見ることができる。プラスの数値が大きいほど、会社によるWLBの取り組みへの評価がメンタルヘルス疾患発生の可能性を上回っている、すなわちWLBへの取り組みが機能しており、逆にマイナスの数値は機能していない可能性があると言える。

20代前半は+26.5%、後半は+12.1%であり、30代前半は-0.8%であるがほとんど同じである。若者世代、特に20代において、WLBの取り組みは機能している可能性が高い。一方30代後半から50代後半までは数値がマイナスであり、WLBの取り組みがうまく機能していない可能性がある。

(3) 個人生活

若者世代の仕事以外の個人生活が充実しているか、他の世代と比較しながら、自由時間、仕事以外の生きがい、日常生活への満足度、日常生活のストレスから見てみる。

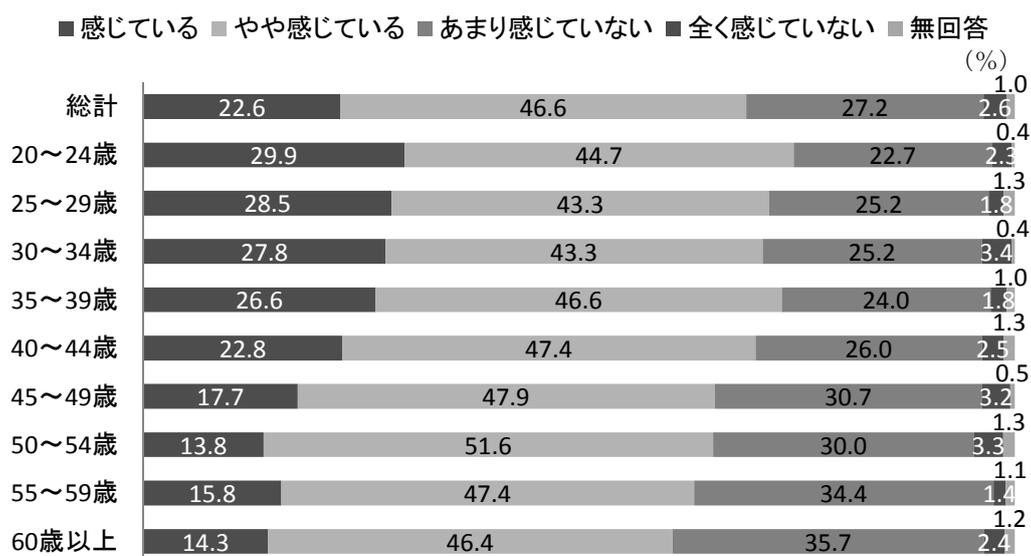
図表 2-12 自由な時間（年齢層別）



図表 2-12より、自由時間が十分かどうかについて、年齢層別に見ると、若い世代は十分だと回答する割合は高いが、30代後半から40代前半にかけて十分だと回答する割合が低くなり、それ以降はまた年齢を経るに従い割合が高くなっている。30代後半から40代前半で、子どもと同居する家庭では、子どもがまだ小さく手がかかることが背景にある。

若者世代について詳細を見ると、全体（54.1%）と比べて、30代前半（53.2%）ではほぼ同じであるが、20代前半（72.3%）および後半（63.7%）では十分だと考える割合が高い。特に20代前半で高くなっている。

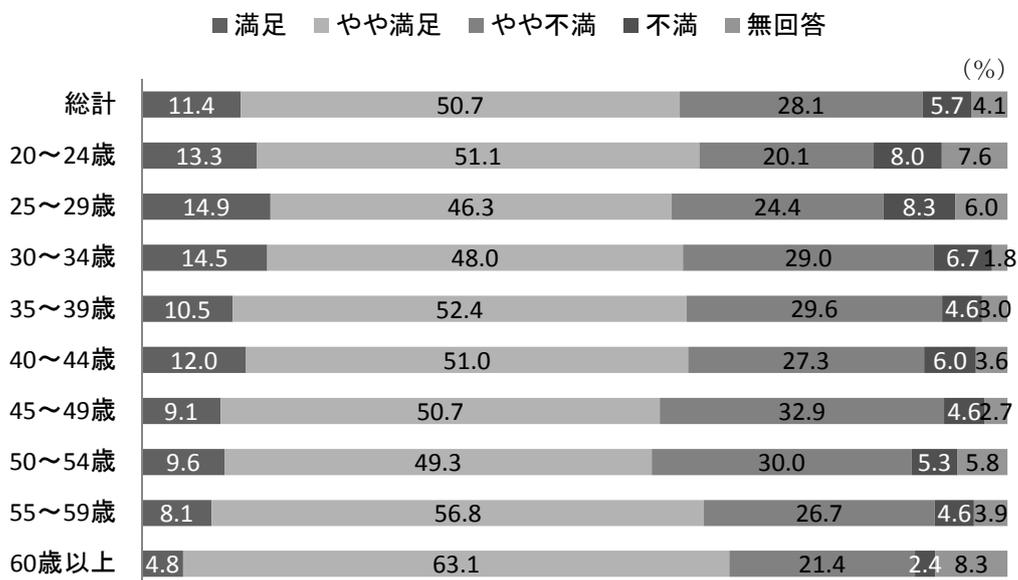
図表 2-13 仕事以外の生きがい（年齢層別）



図表 2-13より、仕事以外の生きがいについて、年齢層別に見ると、20～30代では肯定の割合が高いが、それ以降は徐々に減少している。若者世代について詳細を見ると、全体（69.2%）と比べて、

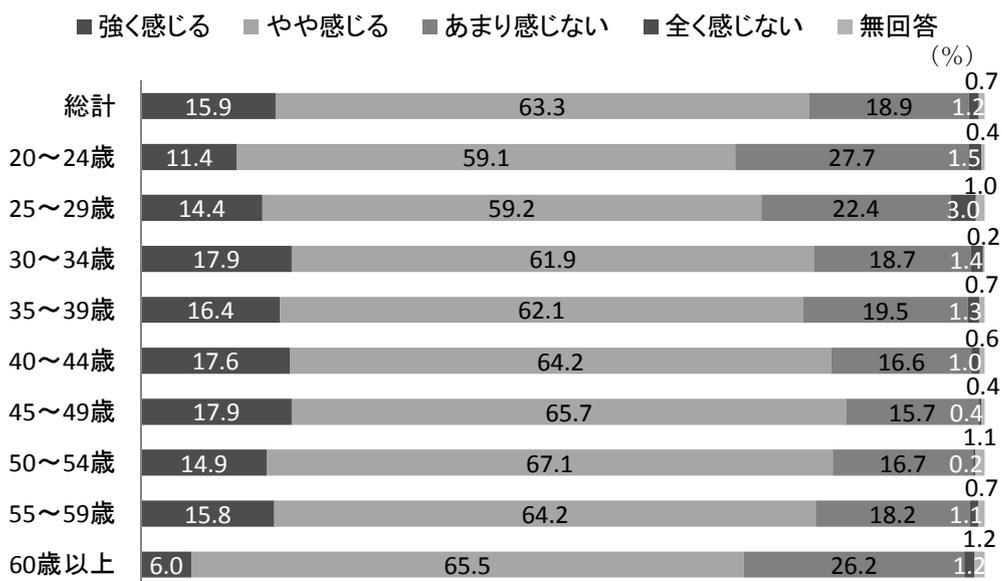
若者世代は若干高い（20代前半74.6%、後半71.8%、30代前半71.0%）。

図表 2-14 日常生活の満足度（年齢層別）



図表 2-14より、日常生活への満足度について、年齢層別に見ると、若干40代後半から50代前半にかけて満足度が下がるものの、全般的に高いことが分かる。若者世代について詳細を見ると、20代前半64.4%、後半61.2%、30代前半62.5%であり、全体（62.1%）とほぼ同じである。ただし、「満足」という強い肯定では、他の世代より高くなっている。

図表 2-15 日常的なストレス（年齢層別）



図表 2-15より、日常生活でのストレスについて、年齢層別に見ると、全般的に感じている割合が高いが、特に30～50代にかけて高めになっている。若者世代について詳細を見ると、全体（79.2%）

と比べて、20代では感じている割合がやや低い（前半70.5%、後半73.6%）。30代前半はほぼ同じである（79.8%）。

（4）地域への社会参加と地域意識

ここでは、若者世代における地域を中心とした社会参加と地域意識について見る。

図表 2-16 隣近所できき合いをする人数（年齢層別）

	(%)					
	概ね 20 人以上	概ね 10 ～ 19 人	概ね 5 ～ 9 人	概ね 4 人 以下	交流 はない	無 回答
総計	8.9	15.8	27.7	23.4	22.2	2.0
20～24歳	6.4	12.5	21.6	21.6	37.1	0.8
25～29歳	4.3	10.8	22.2	20.4	40.1	2.3
30～34歳	4.0	10.5	24.6	31.5	28.2	1.2
35～39歳	7.4	13.5	28.2	22.7	25.5	2.8
40～44歳	9.4	17.5	30.8	23.1	18.3	1.0
45～49歳	12.1	19.6	32.3	22.3	11.6	2.0
50～54歳	12.9	20.7	26.7	22.0	14.2	3.6
55～59歳	15.4	19.6	31.6	21.8	10.2	1.4
60歳以上	11.9	16.7	27.4	23.8	17.9	2.4

図表 2-16より、隣近所できき合いをする人数を見ると、おおむね年齢が上がるほど人数が増える傾向が見られる。若者世代では、全体と比べると、一般的に若者世代の隣近所とのきき合いは少ない。特に20代では前半で37.1%、後半で40%の人で交流がない。

図表 2-17 社会参加と地域意識（年齢層別）

	(%)					
	町内会・自治会 活動への参加 (しばしば・ときどき)		NPO等の 市民活動 への参加	地域からの 助力	地域からの 必要性意 識	地域的愛 着
	義掃 務除 的等 の活 動	楽祭 しり みなど 活動の	(参加 としば す る とき ば +) +	やそ やう そう 思う 思う	やそ やう そう 思う 思う	やと やも 好き 好き +
総計	62.0	56.4	28.6	49.3	28.8	60.7
20～24歳	38.6	42.8	21.2	39.4	19.3	54.9
25～29歳	37.3	41.1	23.2	42.6	18.9	58.2
30～34歳	46.2	47.8	24.6	41.7	24.2	62.3
35～39歳	58.8	53.7	25.6	45.3	23.6	62.1
40～44歳	68.8	64.8	29.0	53.6	35.4	63.9
45～49歳	75.7	63.8	32.5	55.7	30.0	57.3
50～54歳	77.1	62.2	32.4	56.9	36.7	61.6
55～59歳	83.2	67.7	38.2	54.7	37.5	61.4
60歳以上	77.4	60.7	34.5	52.4	36.9	61.9

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

まず社会参加について見てみる（図表2-17）。町内会・自治会活動（掃除などの義務的なもの）への参加状況を見ると、年齢が上がるにつれて参加する割合が高くなる傾向がある。全体（62.0%）と比べても、若者世代の参加（20代前半38.6%、後半37.3%、30代前半46.2%）は少ない。

町内会・自治会活動（祭りなどの楽しみ活動）への参加状況を見ると、年齢が上がるにつれて参加する割合が高くなるが、40歳以上はほぼ同じで60%台である。全体（56.4%）に比べて、若者世代の参加（20代前半42.8%、後半41.1%、30代前半47.8%）は少ないが、義務的活動に比べると参加度は若干高い。

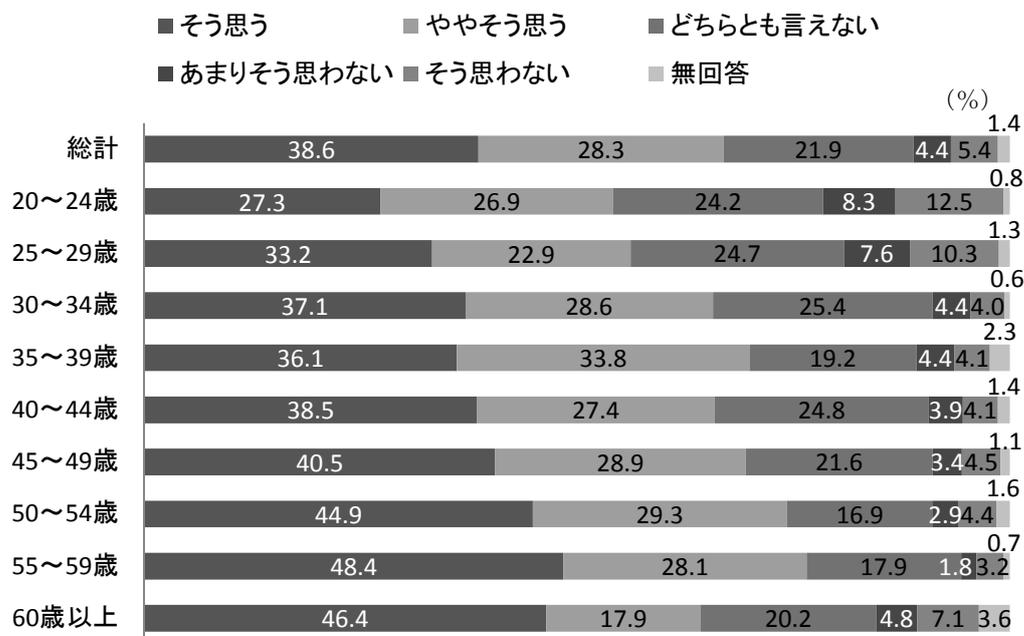
NPOやボランティア活動などの市民活動への参加状況を見ると、年齢が上がるにつれて参加する割合が高くなる、すなわち若者世代の参加（20代前半21.2%、後半23.2%、30代前半24.6%）は少ないが、町内会・自治会活動ほど年齢差が見られない。

次に地域意識について見てみる。困ったとき居住地域からの助力が得られるかについての意識は、年齢が上がるにつれて参加する割合が高くなる傾向がある。若者世代では、町内会・自治会活動への参加頻度とかなり近い割合となっている。

居住地域に必要とされているという意識は、20代、30代およびそれ以上の年齢層と、年齢層が上がるにつれて参加する割合が高くなる傾向がある。全体（28.8%）に比べて、若者世代の割合（20代前半19.3%、後半18.9%、30代前半24.2%）は低い。

居住地域への愛着意識では、上記の意識ほど年齢層で差が見られない。20代前半で54.9%とやや割合が低いものの、若者世代でも全体（60.7%）とほぼ変わらない。

図表2-18 今後も島根に住み続けたいと思うか（年齢層別）



図表2-18より、島根に住み続けたいという意識は、年齢が上がるにつれて参加する割合が高くなる傾向がある。全体（66.9%）に比べて、20代の割合（20代前半54.2%、後半56.2%）は低い、30

代前半（65.7%）ではかなり近い割合になっている。

（5）考察

若者世代（20～34歳）は、他の年齢層に比べて、仕事・職場の満足度が高く、またWLBへの評価も高い。特に20代前半でこの傾向が見られる。

20代前半を中心に自由時間が多く、仕事以外の生きがいも他の世代より感じている割合がやや高い。日常生活の満足度も「満足」と答える回答が多く、仕事以外の個人生活でも充実している。20代前半では日常的なストレスは比較的少ないが、30代前半では日常的なストレスやうつ病の危険性を感じる割合がやや高くなっている。

地域内の社会関係や地域等への社会参加は、他の世代に比べて消極的であるが、年齢が上がるほど参加度が高くなる年齢効果が見られる。地域から助力を得られるという信頼感や地域から必要とされているという承認意識などの地域意識はやや低い。地域的愛着は他の世代と比べてあまり差が見られない。島根に住み続けたいという意識は年齢が上昇するにつれて高くなっている。

以上から、若者世代は仕事・職場などの労働環境は比較的良く、かつ個人生活においても比較的充実しており、他の世代に比べて、労働と個人生活でのバランスが取れていると言えよう。地域内社会関係や社会参加はやや希薄であり、地域とのつながりに関する意識はやや弱い。これらは年齢が高くなるにつれて強くなる傾向がある。

地域との関係がやや希薄な若者世代であっても、仕事・職場に満足し、勤務年数が長くなり、その結果居住年数が長くなれば、結婚して家庭を持つことで、地域内での社会関係が強くなると推測できるので、島根に定着する可能性は高いと考えられる。

ところで、若者世代の中でも、20代前半の年齢層は労働環境や個人生活への満足度が非常に高い。そこで、その属性的特徴を見てみる。まず高校卒業での就職者が47.0%であり、20代後半30.5%、30代前半の38.3%よりもかなり多い。20代後半以降の年齢層の傾向として、年齢が高くなるにつれて高卒が多くなり、逆に大卒は減るが、20代前半ではそれが当てはまらない。また県外に出たことがない割合が45.8%でかなり高い。職種では「専門・技術職」が最も多い（35.6%）。

その背景であるが、リーマンショック後の2009年（平成21年）の島根県の有効求人倍率は0.61（前年は0.86）であったが、それ以降は上昇し2012年では0.95である（厚労省「職業安定業務統計」）。同時期、高校卒業後、県内での就職者は2009年（1,029人、63.1%）から2013年（1,052人、75.0%）にかけて実数および割合で上昇している（平成26年度「学校基本調査結果報告書（島根県分）」）。

これらから、近年島根県内の企業は高卒者の求人数を増やしており、特に「専門・技術職」等で離職しないよう、教育も含め職場環境を良くするよう対応しているため、特に20代前半の仕事・職場の満足度が高いと考えられる。しかし2014年以降は全国的にも求人倍率が上昇した結果、県外就職者が増加する一方で、県内就職者の割合が減少しつつある。

今後は、高卒者への対応だけでなく、他県で就職した県内出身者のうち、特に転入出が多い20代後半から30代を中心とした年齢層のUターンを促すためにも、さらなる労働条件や労働環境の改善が求

められよう。

2. 女性の労働と生活

(1) 属性的特徴

図表2-19 性別における年齢の中央値・平均値および未婚・既婚の割合

	中央値・歳	平均値・歳	既婚－配偶者あり	既婚－離別・死別	未婚	無回答	サンプル数
総計	41.0	40.8	65.2	4.8	29.0	1.0	3,928
男性	40.5	40.4	66.5	3.4	29.9	0.2	2,502
女性	41.8	41.6	64.3	7.2	28.3	0.1	1,380

図表2-19より、年齢は男女とも中央値・平均値とも40歳強である。未婚・既婚は、既婚・配偶者あり65%前後、未婚30%弱であり、ほぼ変わらない。ただし、既婚の離死別の割合は女性6.9%、男性3.4%であり、男性の倍になっている。

同居家族では、配偶者60%強、子ども50%強であり、同居の割合は男性とほぼ同じである。配偶者の親との同居は、男性5.0%、女性18.2%であり、女性の割合が高い。

最終学歴では、高校卒は男性53.5%、女性39.4%と男性の割合が高い。四年制大学（男性27.0%、女性19.5%）および大学院（男性3.2%、女性0.9%）では男性がやや高く、専修・各種学校、短大・高専は、女性の割合がかなり高い（男性6.2%、女性20.6%）。

島根での居住歴を見ると、「島根県外に出たことがない」人は男女ともほぼ同じで30%後半である。「大学進学時のみ県外に出た」のは女性が多い（男性18.9%、女性24.6%）。「他県で就職したことがある」人は男女とも20%前後であり、就職で島根に来た人は男性が多い（男性11.5%、女性5.7%）。

(2) 労働条件・労働環境と職場・仕事の満足度

①労働条件

雇用形態を見ると、正規職員の割合は男性93.3%、女性74.8%である。女性のパート・アルバイトの割合は13.0%、嘱託・契約の社員・職員は10.7%である。

勤務先業種では、男性の割合が高いのは「製造」（男性23.7%、女性12.8%）、「運輸・交通」（男性10.4%、女性2.6%）であり、女性では「公務員」（男性27.1%、女性36.0%）、「卸売・小売」（男性6.4%、女性15.1%）「金融・保険」（男性3.7%、女性7.9%）が高い。特に、女性における公務員の割合は36.0%とかなり高くなっている。

職種では、男性の割合が高いのは「現場作業職」（男性18.2%、女性7.5%）、「運輸職」（男性7.6%、女性0.3%）であり、女性では「事務職」（男性30.9%、女性39.3%）、「営業・販売職」（男性9.2%、女性17.0%）である。「専門・技術職」は男女ともほぼ変わらない（男性29.5%、女性28.3%）。

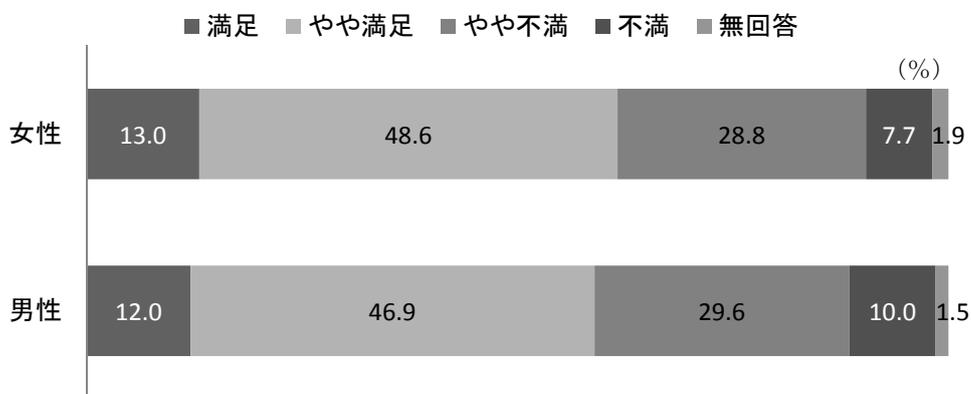
労働条件について、まず年収を見てみる。本人年収の平均値を見ると、男性では489万円、女性では358万円であり約140万円ほど女性の方が少ない（中央値もほぼ同じ）。200万円台までは女性の割合が高く、300万円台以降は男性の割合が高い。また年収が上がるにつれて男女差が大きくなっている。

1週間の労働時間の中央値は男性で43.7時間、女性で41.4時間、平均値は男性41.2時間、女性37.0時間であり、女性の方が短い。40時間前半までは女性の割合が高いが、40時間後半以降は男性の割合が高くなっている。

1週間の時間外労働の中央値は男性4.8時間、女性2.6時間、平均値は男性7.5時間、女性4.3時間であり、女性の方が短い。4時間までは女性の割合が高く、5時間以上は男性の割合が高くなっている。最も多い時間帯は、1～4時間である（男性38.4%、女性42.2%）。

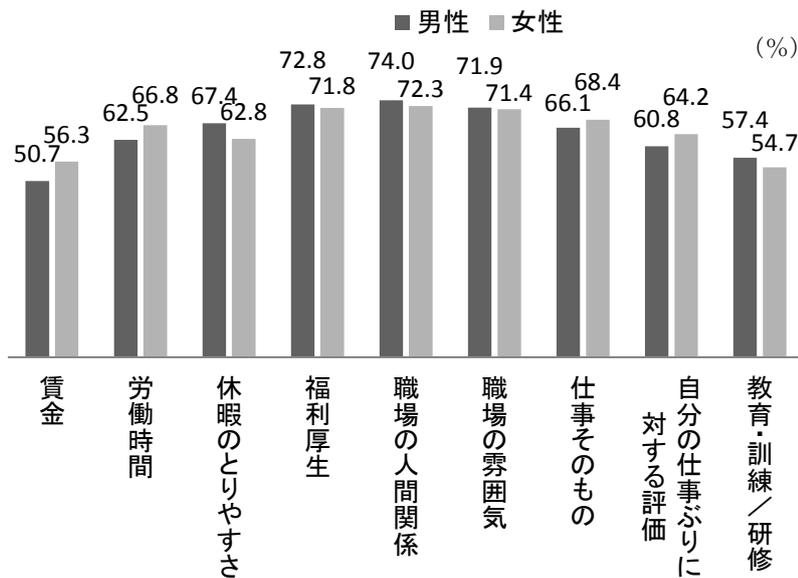
②職場・仕事の満足度

図表 2-20 仕事全般についての満足度（性別）



図表 2-20より、仕事全般の満足度は、「満足」「やや満足」という肯定的意見が男女とも約60%前後であるが、若干女性の満足の割合が高い（男性58.9%、女性61.6%）。

図表 2-21 仕事・職場への満足度（性別）



図表2-21より、仕事・職場への満足度について各項目を見てみると、男女差はほとんどなく、もっとも差が大きいのは「賃金」の5.6%である。

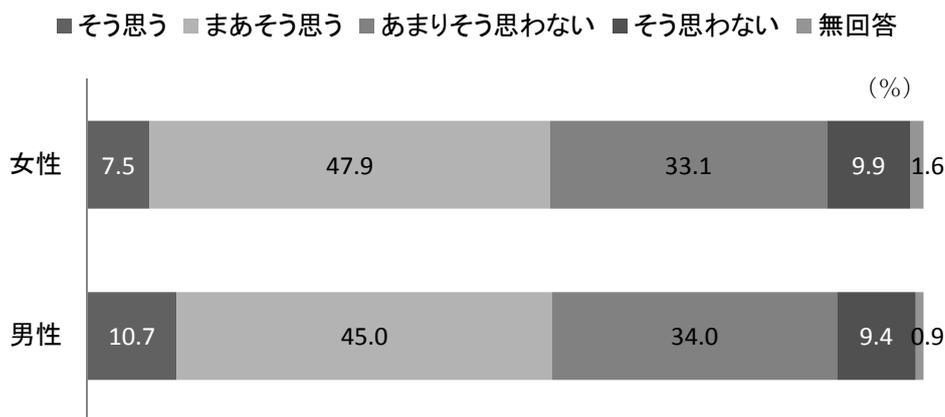
これらの満足度を詳しく見ると、女性の割合が高いのは、「賃金」(男性50.7%、女性56.3%)、「労働時間」(男性62.5%、女性66.8%)「仕事そのもの」(男性66.1%、68.4%)、「自分の仕事ぶりに対する評価」(男性60.8%、女性64.2%)である。「賃金」「労働時間」といった労働条件や、直接「仕事」に関わる内容の満足度が、若干ではあるが高くなっている。

逆に、女性の満足度で男性より割合が低くもっとも差があるのは「休暇のとりやすさ」である(男性67.4%、女性62.8%)。

「今の仕事を続けたい」という意識では、女性で若干否定的意見が強いが、肯定的な意見は男女ともほぼ同じである(男性78.4%、女性74.2%)。

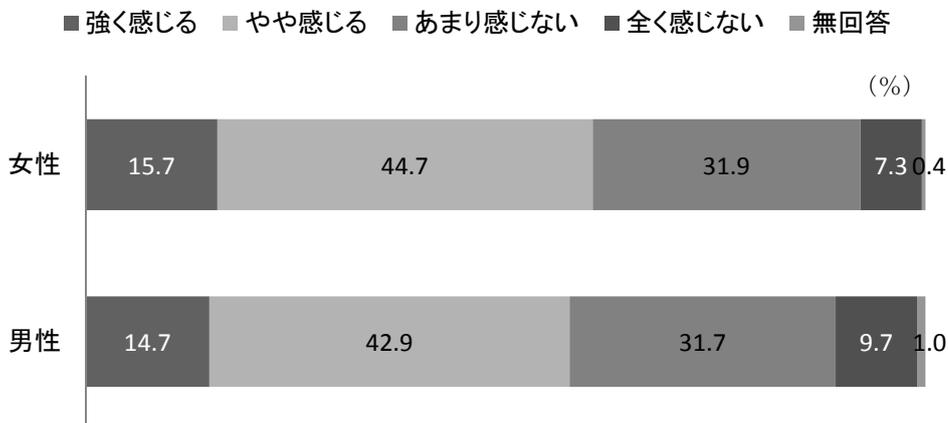
③WLBへの評価とメンタルヘルス疾患の可能性

図表2-22 WLBの会社対応は十分か(性別)



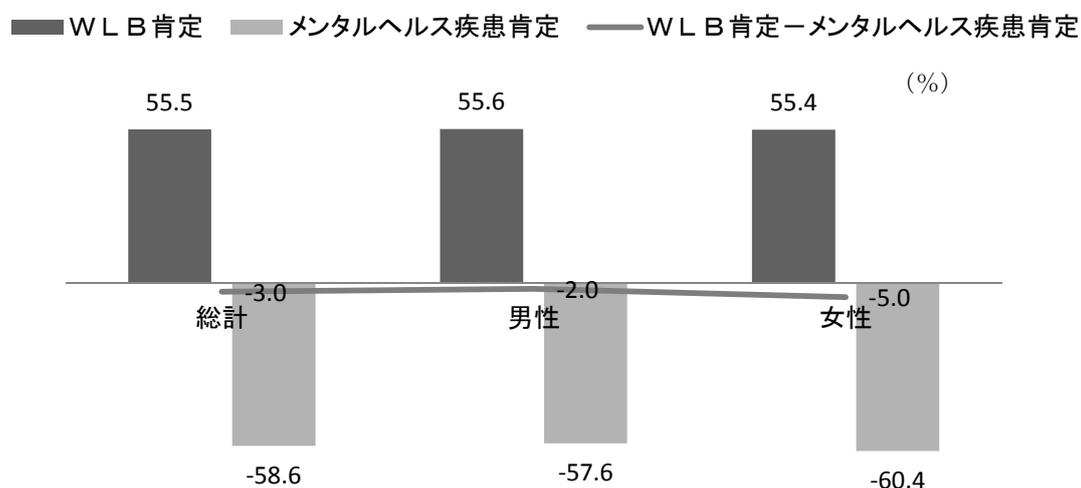
図表2-22より、ワーク・ライフ・バランス(WLB)に関する会社の対応への評価を見ると、男女とも50%台半ばが肯定的で、ほぼ同じ評価である。

図表2-23 メンタルヘルス疾患の可能性(性別)



また図表2-23より、メンタルヘルス疾患（うつ病など）の可能性について起こりうる、起こりえたという回答は、男性57.6%、女性60.4%であり、女性の方が若干高い。「強く感じる」人は男女とも15%前後である。

図表2-24 WLB対応肯定とメンタルヘルス疾患の可能性肯定（性別）



若者世代と同様に、WLBの対応とメンタルヘルス疾患を肯定する割合（マイナスの数値は肯定の割合）を比較（図表2-24）すると、メンタルヘルス疾患を肯定する割合で女性の方が若干高くなっている（男性-2.0%、女性-5.0%）。勤務先におけるワークライフバランスの取り組みは、女性の方で若干対応が機能していない可能性がある。

（3）個人生活

①自由な時間と仕事以外の生きがい

自由な時間（趣味、くつろぎ、交際等）が十分かどうかについて、肯定的（「十分だ」＋「まあ十分だ」）な割合は、男性55.7%、女性51.6%であり、若干女性の割合が低い。

仕事以外の生きがいを感じるかどうかについて、肯定的（「感じている」＋「やや感じている」）な割合は、男性71.1%、女性66.1%であり、若干女性の割合がやや低い。

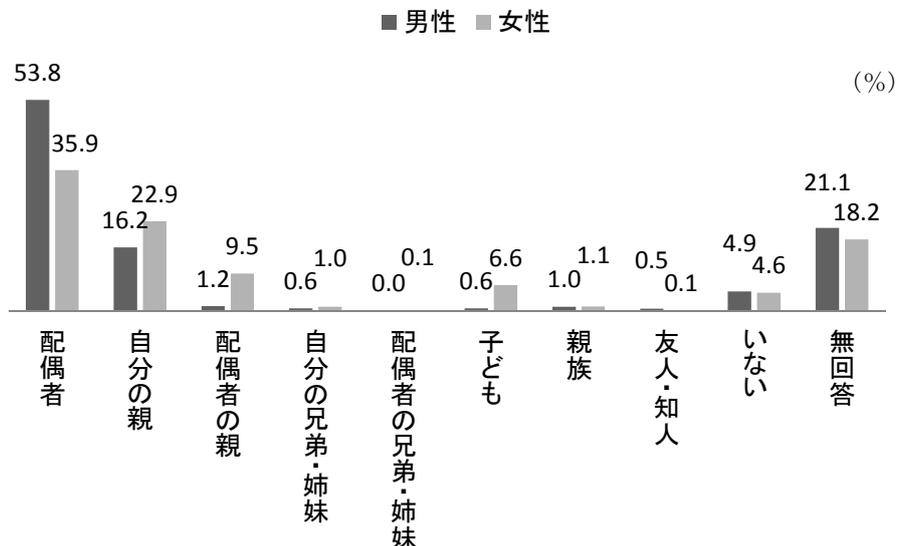
②家事・介護・子育ての時間と手伝う人

平日の家事・介護・子育ての時間を見ると、男性の中央値が0.7時間（平均値1.0時間）、女性の中央値が2.2時間（平均値2.5時間）であり、中央値で見ると女性の方が1.5時間長い。男性で0時間が20.8%、1時間未満が約39%であり、1～2時間未満では男女ほぼ同じで20%強であるが男性がやや多い（男性25.1%、女性22.8%）。2時間以上は女性の方で割合が高くなっている。

休日の家事・介護・子育ての時間を見ると、男性の中央値が1.6時間（平均値2.8時間）、女性の中央値が4.0時間（平均値5.3時間）であり、中央値で見ると女性の方が2.4時間長い。休日では男女とも平日よりも家事等の時間が長く、また男女間の差も広がっている。

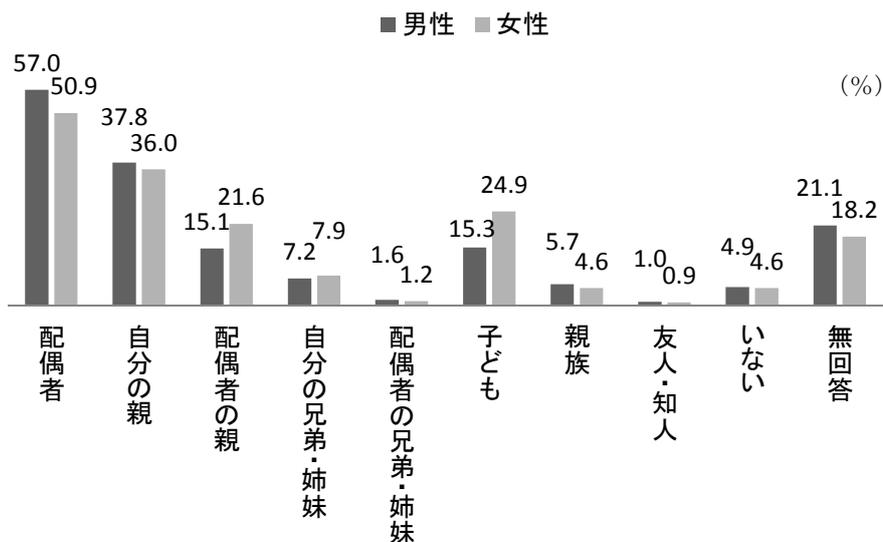
男性では0～2時間未満が60%弱を占める。女性での0～2時間未満は約25%である。2時間以上は女性の方で割合が高くなっている。

図表 2-25 家事・介護・子育てを手伝ってくれる人（第1位）



図表 2-25より、家事・介護・育児を一番手伝ってくれる人は、男性では53.8%で配偶者が最も多く、次いで16.2%の自分の親であり、この両者がほぼ全体を占めている。女性では、35.9%が配偶者、次いで自分の親（22.9%）、配偶者の親（9.5%）、子ども（6.6%）が続いている。無回答が男女とも20%前後と多いのは、質問数の制約により、家事・介護・子育てを一緒に聞いていることで回答しにくかったことが一因であると思われる。

図表 2-26 家事・介護・子育てを手伝ってくれる人（複数回答）



また図表 2-26より、第3位までの複数回答を見ると、男女とも配偶者が一番多く、次いで自分の親が多い。その次に配偶者の親と子どもが続くが、この両者において男女差が見られ、女性の割

合が高くなっている。女性の方が、手伝ってくれる人が多いことが分かる。

介護・家事・育児への協力は十分だという意識では、男性の86.7%の肯定に比べると、割合が低いものの約78%の女性が肯定的である。また女性の「そう思わない」という強い否定の割合を見ると、4.5%でありかなり少ない。

③日常生活の満足度とストレス

日常生活の満足度については、男性で62.1%、女性で62.3%であり、男女とも6割強が満足している。日常的ストレスについては、男性76.5%、女性84.3%であり、男女とも日常的なストレスを感じているが、女性で感じる割合がやや高くなっている。

(4) 地域への社会参加と地域意識

図表 2-27 隣近所できき合いをする人数（性別）

	概ね20人以上	概ね10~19人	概ね5~9人	概ね4人以下	交流はない	無回答
総計	8.9	15.8	27.7	23.4	22.2	2.0
男性	11.8	17.8	26.6	20.7	21.2	1.9
女性	3.8	12.0	29.9	28.6	23.9	1.8

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表 2-27より、隣近所で交流する人数が多い人は男性の方が多く、それに比べて女性の方は交流する人数が少ない。また、男女とも交流がない人は、20%前半である。

図表 2-28 社会参加と地域意識（性別）

	町内会・自治会活動への参加 (しばしば・ときどき)		NPO等の市民活動への参加	地域からの助力	地域からの必要性意識	地域的愛着
	義務的等の活動	掃除・祭りのみなど	(参加) ときどき	やや思う	やや思う	やや好き
総計	62.0	56.4	28.6	49.3	28.8	60.7
男性	66.2	59.1	32.9	51.0	32.8	61.6
女性	54.9	52.1	20.7	46.6	22.0	59.4
女性-男性	-11.4	-7.0	-12.2	-4.4	-10.8	-2.1

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

まず社会参加について見てみる(図表 2-28)。掃除などの義務的な町内会・自治会活動への参加は、

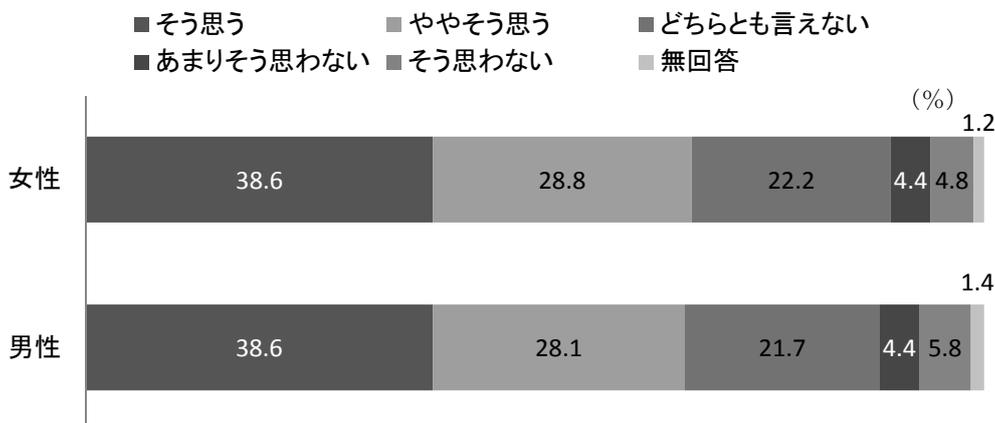
男性66.2%、女性54.9%であり、女性の方が参加する割合が10%以上低い。なお、女性ではまったく参加しない人が23.1%である。祭り等の町内会・自治会活動への参加は、義務的な活動と同じく女性の方が参加する割合がやや低い（男性59.1%、女性52.1%）。男女とも義務的な活動よりも参加度はやや低い。女性はまったく参加しない人が22.7%である。

市民活動等への参加は、男性32.9%、女性20.7%であり、女性の方が参加する割合が10%以上低い。女性はまったく参加しない人が42.5%である。町内会・自治会活動に比べると男女とも参加の割合は低い。参加の男女差は義務的な町内会・自治会活動よりもやや大きい。

次に地域意識について見てみる。困ったとき居住地域からの助力が得られるかについての意識は、肯定的意見が男性51.0%、女性46.6%であり、女性の割合の方がやや低い。男女差は-4.4%であり比較的小さい。

居住地域に必要とされているという意識は、女性の方が必要とされると考える割合が10%以上低く、男性が32.8%、女性が22.0%である。居住地域への愛着意識は、好きという肯定的意見が、男性61.6%、女性59.4%であり、若干女性の方の割合が低いが、他の意識に比べると差がかなり少なくほぼ同じであると言える。

図表 2-29 今後も島根に住み続けたいか（性別）



島根に住み続けたいという意識（図表 2-29）は、男性66.7%、女性67.5%であり、男女ともほぼ同じく約67%の人が肯定的である。

（5）考察

今回の調査における正規雇用の割合は男性93.3%、女性74.8%である。女性の年収は男性より低く、また労働時間は男性より短い。仕事・職場への満足度は全般的に男性とほぼ同じであるが、男性よりマイナスの差があるのは「休暇のとりやすさ」である（-4.6%）。WLBに対する評価はほぼ同じであり、メンタルヘルス疾患が起り得る可能性については若干女性の割合が高い（+2.8%）。

自由な時間が十分取れる割合では女性で若干低く（-4.1%）、仕事以外の生きがいを感じる割合でも女性の割合が若干低い（-5.0%）。このように個人生活の面では、女性の方で若干余裕が見られな

い。

家事、介護、育児にかかる時間は平日、休日とも女性の方がかなり多い。1番多く手伝ってくれる人の協力は十分かという問いに対する女性側の肯定的な意見は約78%であり、「そう思わない」という強い否定が4.5%である。また手伝いの平均時間も平日2.1時間、休日3.6時間であるので、ある程度家事に協力してくれる状況にある。また、女性を手伝ってくれる人を複数回答で聞くと、配偶者50.9%、自分の親36.0%、配偶者の親21.6%、子ども24.9%であり、家事等を支援する家族ネットワークがある程度形成されていると考えられる。

日常生活への満足度は男女とも6割強であり差がないが、日常的なストレスはやや女性に多く見られる(+7.8%)。地域生活においては、若者と同じく地域内社会関係や社会参加はやや希薄であり、地域とのつながりに関する意識はやや弱い傾向がある。

このように、男性と比べると、女性の労働条件・労働環境に対する満足度はほぼ変わらない。島根県内の企業等において、労働環境における女性への配慮がある程度なされていると考えられる。しかし、男性に比べると、自由時間・仕事以外での生きがいなどで若干女性に余裕がなく、また日常的ストレスなどでも女性の方でやや感じる割合が高くなっている。ある程度家族等からの支援があるものの、仕事と日常的な家事等での多忙さで、女性の個人生活にやや余裕がなくなっていると捉えられる。

県外への進学後、島根にUターンする割合は女性の方が高い。女性は島根県において労働市場を担う貴重な人材であるとともに次世代をつなぐ存在でもある。今後さらなる労働環境の改善、例えば職場での「休暇のとりやすさ」など女性の事情を配慮した改善がより必要であると考えられる。

3. 県内への転入者の労働と生活

(1) 属性的特徴

図表2-30 島根居住歴における性別の割合

	(%)			サンプル数
	男性	女性	無回答	
総計	63.7	35.1	1.2	3928
島根県外に出たことがない	63.9	34.8	1.3	1500
大学進学時のみ島根県外に住んだ	57.7	41.2	1.1	822
他県で就職したことがある	66.0	33.3	0.8	793
就職で島根県に引っ越してきた	78.0	21.2	0.8	368
その他	58.8	39.7	1.5	403

図表2-30より、性別では、全体(63.7%)と比べて、男性の割合が78.0%と高い。

図表2-31 転入者の年齢・婚姻状況・学歴

	年 齢 層										
	19歳以下	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50~54歳	55~59歳	60歳以上	無回答
総計	0.6	6.7	10.1	12.8	15.5	18.2	14.3	11.5	7.3	2.1	1.0
就職で島根県に引っ越してきた	0.5	18.8	20.9	18.5	13.0	13.3	4.9	5.7	2.4	1.4	0.5

	未婚・既婚				最 終 学 歴							
	配偶者あり	離別・死別	未婚	無回答	中学校	高校	専修・各種学校	短大・高専	四年制大学	大学院	無回答	
総計	65.2	4.8	29.0	1.0	1.6	48.1	11.5	11.3	24.2	2.3	1.1	
就職で島根県に引っ越してきた	51.4	3.3	44.8	0.5	0.5	37.8	5.4	13.6	33.2	8.7	0.8	

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表2-31より、年齢層別に見ると、全体（29.6%）と比べて、転入者では20代～30代前半の若者世代の割合が58.2%と高い。特に20代前半では、全体の6.7%に対し18.8%であり、かなり差が見られる。婚姻の有無では、未婚者の割合が、全体（29.0%）と比べて転入者は44.8%であり高くなっている。

最終学歴では、全体と比べて、高校卒（全体48.1%、転入者37.8%）、専修・各種学校（全体11.5%、転入者5.4%）がやや少なく、転入者の割合が高いのは、四年制大学（全体24.2%、転入者33.2%）、大学院（全体2.3%、転入者8.7%）である。

(2) 労働条件・労働環境と職場・仕事の満足度

①労働条件

図表2-32 転入者の就業状況

	雇 用 形 態						業 種										
	正規の社員・職	パート・アルバイト	嘱託・契約社員	派遣社員・職員	その他	無回答	製造	卸売・小売	建設・資材	運輸・交通	金融・保険	情報・通信	教育	光食・宿泊・観	公務員	その他	無回答
総計	85.9	5.2	6.8	0.5	0.4	1.1	19.6	9.4	2.1	7.6	5.3	3.9	3.7	0.5	30.0	16.3	1.6
就職で島根県に引っ越してきた	94.0	1.4	2.4	0.8	...	1.4	16.8	9.8	3.3	5.7	4.1	3.5	1.9	0.3	22.0	31.5	1.1

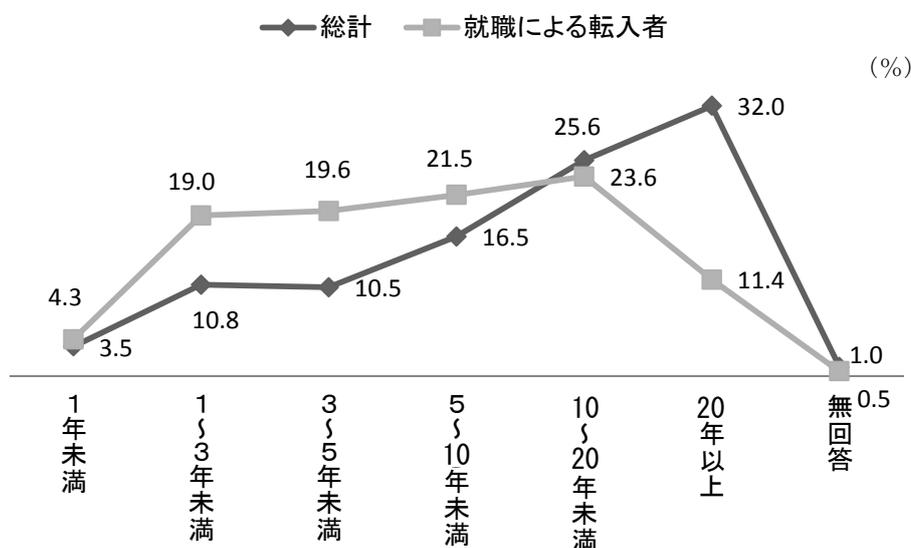
	従 業 員 規 模							職 種									
	1~5人	6~9人	10~19人	20~29人	30~49人	50~99人	100人以上	現場作業	専門・技術職	事務職	営業・販売職	運輸職	その他	無回答			
総計	1.8	1.9	3.9	3.2	5.8	11.9	35.2	18.7	15.0	2.6	14.3	28.8	33.6	11.8	5.0	4.8	1.8
就職で島根県に引っ越してきた	1.4	0.3	1.9	2.4	5.7	12.0	23.1	28.8	23.1	1.4	10.6	44.6	23.4	13.9	3.3	3.3	1.1

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表 2-32より、雇用形態では、正規職員の割合が、全体（85.9%）と比べて、転入者の方が高く94.0%を占めている。勤務先業種では、全体と比べると「製造」「運輸・交通」「教育」「公務員」でやや低く、転入者では「その他」が高くなっている（全体16.3%、転入者31.5%）。

勤務先従事者規模では、全体と比べると、転入者では「300人以上の1,000未満」（全体18.7%、転入者28.8%）、および「1,000人以上」（全体15.0%、転入者23.1%）といった規模の大きい勤務先に勤める割合が高い。勤務先職種では、全体と比べて「専門・技術職」の割合が高い（全体28.8%、転入者44.6%）。

図表 2-33 転入者の勤続年数



図表 2-33より、勤続年数では、全体と比べて転入者は短いですが、10～20年未満が23.6%、20年以上が11.4%であり、10年以上勤務している人は35%である。

図表 2-34 本人年収（転入者）

(%)

	0 ～ 1 9 9 万円	2 0 9 9 万円	3 0 9 9 万円	4 0 9 9 万円	5 0 9 9 万円	6 0 9 9 万円	7 0 9 9 万円	8 0 9 9 万円	1 0 9 9 万円	1 2 0 0 万円	無 回 答	中 央 値 ・ 万 円	平 均 値 ・ 万 円
総計	8.4	13.7	20.4	18.2	16.1	10.9	5.7	2.7	0.3	0.1	3.3	432.1	443.0
就職で島根県に引越してきた	3.5	13.6	28.8	24.5	13.9	8.7	2.7	1.4	0.8	0.3	1.9	412.8	434.5

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表 2-34より、本人年収では、全体と比べて、転入者は中央値（全体432.1万円、転入者412.8万円）、平均値（全体443.0万円、転入者434.5万円）とも低い。転入者では300万円台（28.8%）、400万円台（24.5%）の収入が多く、合わせて50%強を占めている。

図表 2-35 1週間の労働時間（転入者）

	(%)											中央値・時間	平均値・時間
	10時間未満	10～19時間	20～29時間	30～39時間	40～49時間	50～59時間	60時間以上	無回答					
総計	11.0	2.3	2.0	1.9	12.5	34.1	17.9	8.4	3.7	4.3	1.9	42.8	39.7
就職で島根県に引っ越してきた	14.9	1.6	0.8	0.3	10.9	28.0	22.3	10.9	4.6	3.8	1.9	43.7	39.3

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表 2-35より、1週間の労働時間は、全体と比べて、転入者は中央値（全体42.8時間、転入者43.7時間）、平均値（全体39.7時間、転入者39.3時間）である。中央値で見ると転入者で労働時間がやや長い、10時間未満のものでは転入者の割合がやや高く、これにより全体にくらべて平均値を下げている。残業がほとんどない40～44時間では、全体が34.1%、転入者が28.0%と全体の方で割合が高いが、45～59時間では転入者の方で割合が高くなっている。1週間の時間外労働では、「ない」が全体と比べて転入者で割合が低い（全体19.7%、転入者11.7%）、5～9時間（全体20.1%、転入者24.2%）、10～14時間（全体10.0%、転入者14.7%）では割合がやや高い。

②職場・仕事の満足度

図表 2-36より、仕事全般への満足度では、肯定（満足+やや満足）の割合が、全体と比べて、転入者でやや高い（全体59.7%、転入者69.9%）。「満足」だけを見ても、転入者で割合がやや高い（全体12.3%、転入者17.7%）。

図表 2-36 仕事の満足度（転入者）

	(%)										件数
	賃金	労働時間	休暇のとりやすさ	福利厚生	職場の人間関係	職場の雰囲気	仕事そのもの	対する評価	自分の仕事ぶりに	教育・訓練／研修	
総計	52.5	64.0	65.8	72.3	73.3	71.5	66.9	61.9	56.4	3,928	
就職で島根県に引っ越してきた	55.7	70.4	73.6	81.8	82.3	81.5	74.7	69.6	65.2	368	

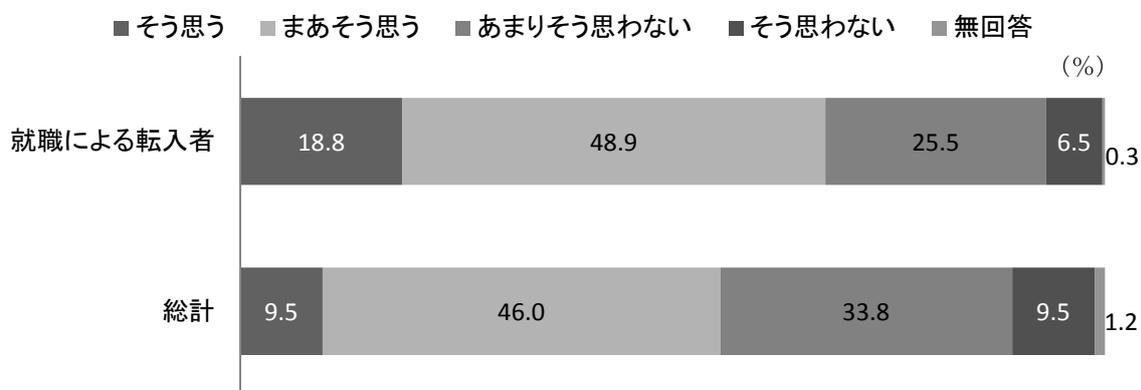
※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

全体と比べて、転入者の仕事の満足度がすべての項目に関して高い（数値は「満足」と「やや満足」を合計した割合）。賃金以外では、それぞれ5～10%高くなっている。満足の割合が高くかつ全体との差も大きいのは「職場の人間関係」（全体73.3%、転入者82.3%）、「福利厚生」（全体72.3%、転入者81.8%）、「職場の雰囲気」（全体71.5%、転入者81.5%）である。

今の仕事を続けたいという意識では、全体と比べて、転入者でやや高い（全体76.8%、転入者83.2%）。

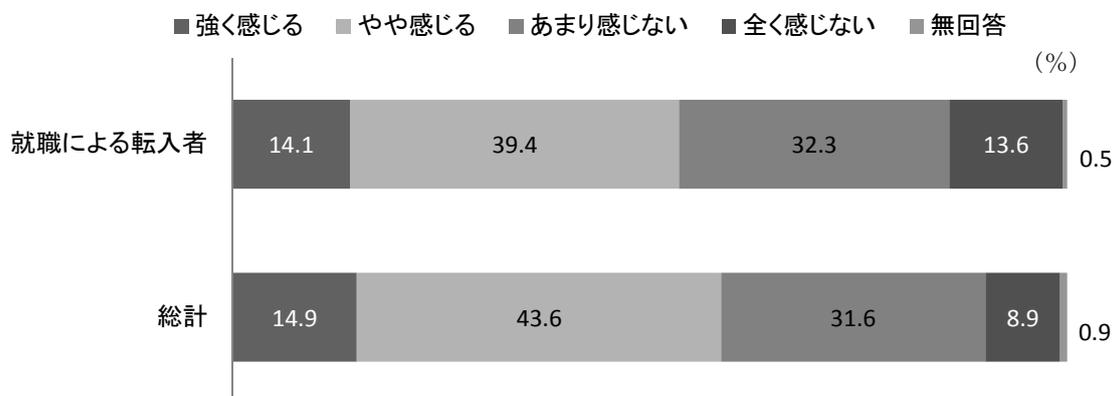
③WLBへの評価とメンタルヘルス疾患の可能性

図表 2-37 WLBの会社対応は十分か（転入者）



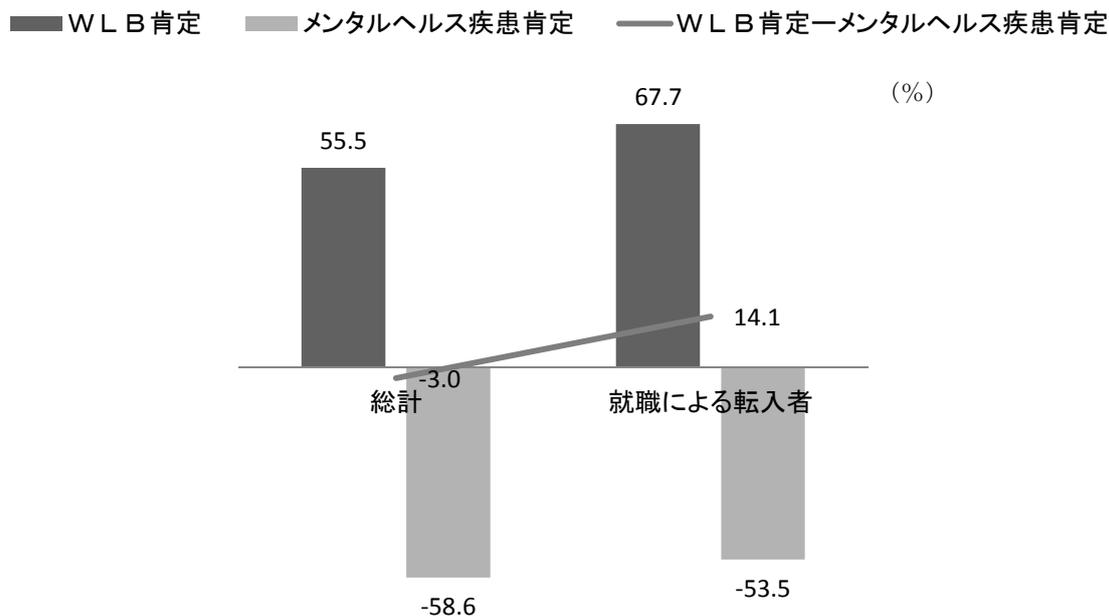
図表 2-37より、ワーク・ライフ・バランス（WLB）に関する会社の対応への評価を見ると、全体と比べて、転入者で肯定の割合が高い（全体55.5%、転入者67.7%）。「そう思う」という強い肯定で差が大きい（全体9.5%、転入者18.8%）。

図表 2-38 メンタルヘルス疾患の可能性（転入者）



また、図表 2-38より、メンタルヘルス疾患（うつ病など）の可能性について起こりうる、起こりえたという回答（「強く感じる」＋「やや感じる」）の割合は、全体58.5%、転入者53.3%であり、転入者の方が若干低い。「強く感じる」人は全体、転入者とも15%弱である。

図表 2-39 WLB対応肯定とメンタルヘルス疾患の可能性肯定（転入者）



図表 2-39より、WLBの対応とメンタルヘルス疾患を肯定する割合（マイナスの数値は肯定の割合）を比較すると、メンタルヘルス疾患を肯定する割合で転入者の方が若干低くなっている（全体-3.0、転入者+14.1）。勤務先におけるワークライフバランスの取り組みでは、全体よりも転入者の方で恵まれており、かつ機能していると考えられる。

(3) 個人生活

図表 2-40 自由時間、仕事以外の生きがい、日常の生活満足感とストレス（転入者）

	自由時間		仕事以外の		日常生活		日常的	
	十分だ	まあ十分だ	感じている	いやや感じて	満足	やや満足	強く感じる	やや感じる
総計	10.3	43.8	22.6	46.6	11.4	50.7	15.9	63.3
就職で島根県に引越してきた	17.7	42.9	28.8	44.6	14.1	47.0	13.6	58.2

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

①自由な時間と仕事以外の生きがい

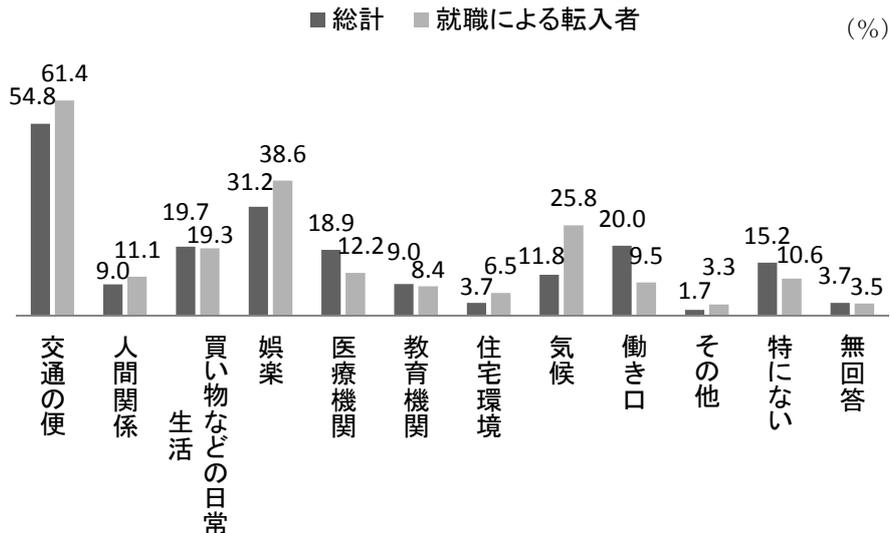
図表 2-40より、自由な時間（趣味、くつろぎ、交際等）が十分かどうかについて、肯定的（「十分だ」+「まあ十分だ」）な割合は、全体（54.1%）に比べて、転入者の割合がやや高い（60.6%）。特に「十分だ」の差が大きい（全体10.3%、転入者17.7%）。

仕事以外の生きがいを感じるかどうかについて、肯定的（「感じている」+「やや感じている」）な割合は、全体に比べて（69.2%）、転入者のほうが若干高くなっている（73.4%）。

②日常生活の満足度とストレス

図表 2-40より、日常生活の満足度については、肯定的（「満足」＋「やや満足」）な割合は、全体（62.1%）と転入者（61.1%）の割合はほぼ同じである。日常的ストレスについては、肯定的（「強く感じる」＋「やや感じる」）な割合は、全体に比べて（79.2%）、転入者のほうがやや低くなっている（71.8%）。

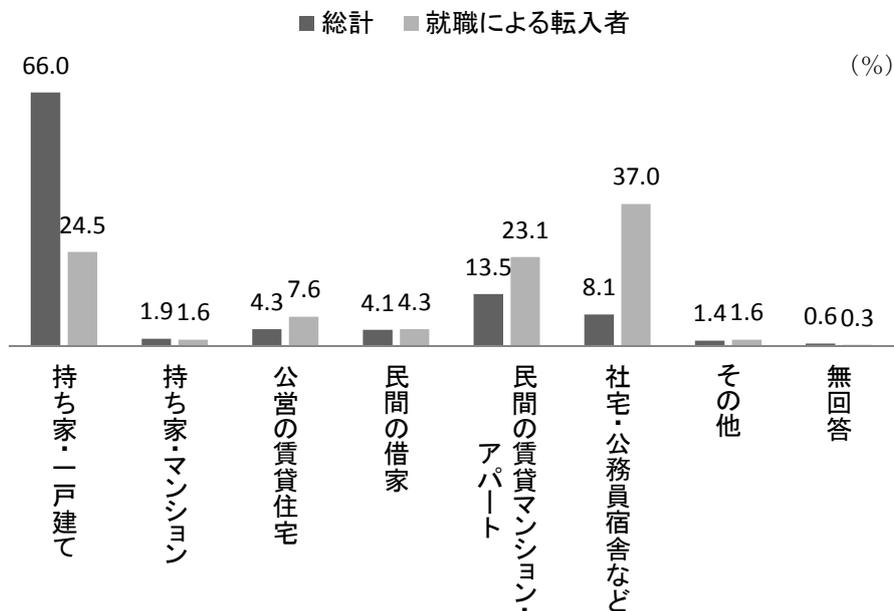
図表 2-41 島根の生活で困ること（転入者）（複数回答）



図表 2-41より、「島根の生活で困ること」では、全体と比べて、転入者の割合が高いのは、「交通の便」（全体54.8%、転入者61.4%）、「娯楽」（全体31.2%、転入者38.6%）、「気候」（全体11.8%、転入者25.8%）、「住宅環境」（全体3.7%、転入者6.5%）などである。特に「気候」では、倍以上の差が見られる。一方で、「特にない」では、転入者の方が低くなっている（全体15.2%、転入者10.6%）。

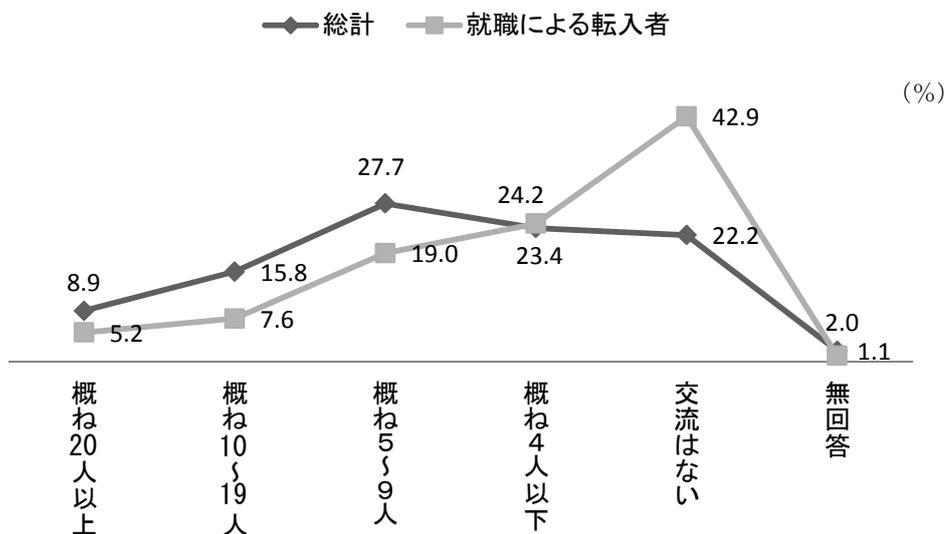
(4) 地域への社会参加と地域意識

図表 2-42 転入者の居住形態



図表2-42より、居住形態において、全体と比べて割合が高いのは、「社宅・公務員宿舍等」（全体8.1%、転入者37.0%）、「民間の賃貸アパート等」（全体13.5%、転入者23.1%）「公営の賃貸住宅」（全体4.3%、転入者7.6%）などで、低いのは「持ち家（一戸建て）」（全体66.0%、転入者24.5%）である。転入者の「持ち家」の割合は、一戸建て・マンションの合計で約26%である。

図表2-43 隣近所で付き合いをする人数（転入者）



図表2-43より、隣近所で付き合いをする人数は、全体と比べると、全般的につき合う人数が多い割合が低くなっている。また「交流はない」は倍近く高い（全体22.2%、転入者42.9%）。

図表2-44 社会参加と地域意識（転入者）

	町内会・自治会活動への参加 (しばしば・ときどき)		NPO等の市民活動への参加 (参加しときどきする) (+) +	地域からの助力 ややそう思う やう思う	地域からの必要性意識 ややそう思う やう思う	地域的愛着 やや也喜欢 やう好き+	居住地域の暮らしやすさ ややそう思う やう思う
	義務的等の活動	楽祭しみなどの活動					
総計	62.0	56.4	28.6	49.3	28.8	60.7	57.7
就職で島根県に引っ越してきた	49.2	45.7	24.7	38.3	19.0	49.7	48.9

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

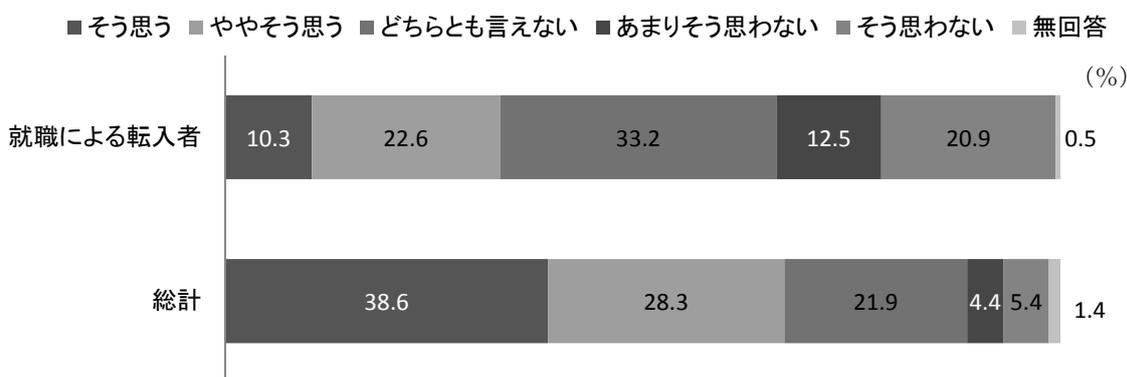
図表2-44より、まず社会参加について見てみる。掃除などの義務的な町内会・自治会活動への参加は、全体（62.0%）と比べると、参加頻度は低く（49.2%）、転入者の参加する割合が13%近く低い。なお、転入者ではまったく参加しない人が32.3%である。祭り等の町内会・自治会活動への参加は、全体（56.4%）と比べると、義務的な活動と同じく参加頻度は低く（45.7%）、転入者の参加する割合が11%近く低い。転入者でまったく参加しない人が29.6%である。

市民活動等への参加は、全体（28.6%）と比べると、参加頻度はやや低く（24.7%）、転入者の方が参加する割合が4%近く低いが、町内会・自治会活動に比べると差の割合が小さくなっている。転入者でまったく参加しない人が42.7%である（全体34.1%）。

次に地域意識について見てみる。困ったとき居住地域からの助力が得られるかについての意識は、肯定的意見を全体（49.3%）と比べると、転入者の割合は低く（38.3%）、割合の差では11%低い。居住地域に必要とされているという意識は、肯定的意見を全体（28.8%）と比べると、転入者の割合は低く（19.0%）、割合の差では10%近く低い。

居住地域への愛着意識は、好きという肯定的意見を、全体（60.7%）と比べると、居住地域への愛着の割合は低く（49.7%）、割合の差では11%低い。居住地域は総合的に見て暮らしやすいという意識は、肯定的意見を全体（57.8%）と比べると、転入者の割合は低く（48.9%）、割合の差では9%近く低い。

図表 2-45 今後も島根に住み続けたいか（転入者）



図表 2-45より、今後も島根に住み続けたいかという意識は、肯定的意見を全体（66.9%）と比べると、転入者の割合は低い（32.9%）。転入者だけを見ると、肯定32.9%、どちらとも言えない33.2%、否定33.4%であり、意識が3等分している。

(5) 考察

就職・転勤による転入者は、若者世代（20～34歳）が多く（58.2%）、高学歴の男性の割合が高い。勤務先の従業員規模は比較的大きく、「専門技術職」が多い。年収は300～400万円台で、全体よりもやや労働時間、時間外労働が長い。10年以上の勤続年数者は35%である。仕事・職場の満足度は、全体に比べて全般的に高い。また、勤務先のWLBの評価も高く、現在の仕事を続ける意識は80%を超えている。

全体に比べて、自由な時間がやや多く、仕事以外の生きがいを持つ人もやや多い。日常的なストレスも比較的少ない。「交通の便」「娯楽」「気候」等で困ると感じているが、日常生活の満足度は全体とほぼ同じであり、大きな影響を与えるほどではない。

以上のことから、県内への転入者は、労働条件・環境および個人生活において、全体よりも balan

スがとれていると言える。

地域生活に関しては、全体に比べて、地域等の社会参加や地域とのつながりの意識は全般的に約10%程度低いが、義務的な町内会の参加率や、地域の暮らしやすさ、愛着は約50%である。若い年齢層が多いことも理由であるが、もともと地縁のない転入者であることを考慮すると、地域への社会参加や地域とのつながりの意識が高いように感じられる。

島根に今後とも住み続けたいという意識は、「肯定」「どちらとも言えない」「否定」がほぼ同じ割合で約33%である。一戸建ておよびマンションの持ち家率は約26%、10年以上県内で勤めて続けている人が35%であることを考えると、転入者の定着率は一定程度見られる。

今後の人口減対策とのかかわりで言えば、今後は「どちらとも言えない」という態度保留者にどう定着してもらうかが課題となろう。より一層働きやすい労働環境が整えられ、転入者による勤務先定着率が高くなれば、結果として定住につながっていくと考えられる。企業等の自助努力だけでは限界があると思われるため、今後は行政による支援もより一層求められよう。

第3節 就業形態・仕事内容／勤務先の特性と就業者の意識

前節では、「若者」「女性」「転入者」という島根県の人口動態にかかわる対象に焦点を当てた。この節では「雇用形態」「職種」という就業形態・仕事内容に関わる特性、および「業種」「規模」という勤務先の特性に焦点を当て、就業者の不満、ワークライフバランス（WLB）に関する勤務先の対応への評価、メンタルヘルス疾患の可能性について分析する。

1. 就業形態・仕事内容の特性と就業者の意識

(1) 「雇用形態」別

① 属性的特徴

図表2-46 「雇用形態別」性別と年齢層

(%)

	性別			年齢層											件数
	男性	女性	無回答	19歳以下	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60歳以上	無回答	
正規の社員・職員	69.1	30.6	0.3	0.5	7.2	10.6	12.6	16.4	19.0	15.0	11.5	6.9	0.2	0.1	3,376
パート・アルバイト	11.3	87.7	1.0	0.5	4.9	5.4	17.6	8.8	16.2	11.8	12.3	13.2	9.3	...	204
嘱託・契約の社員・職	45.4	54.6	...	0.7	3.3	8.2	14.9	13.0	12.6	8.6	11.9	7.1	19.3	0.4	269
派遣社員・職員	52.4	47.6	4.8	14.3	9.5	14.3	9.5	14.3	9.5	14.3	9.5	...	21
その他	43.8	50.0	6.3	6.3	12.5	...	6.3	6.3	6.3	18.8	6.3	12.5	25.0	...	16

※セル内の数値は%

図表2-46より、性別では、「正規職」で男性69.1、女性30.6%と男性が多く、約7割を占める。「パート・アルバイト」は、男性11.3%、女性87.7%と女性が多く、女性が9割弱を占める。「嘱託・契約職」は、男性45.5%、女性54.6%と、やや女性の割合が高い。「派遣職」では、男性52.4%、女性47.6%と、やや男性の割合が高い。

年齢層別の特徴として、「派遣職」「正規職」においてやや20代の割合が高いことがあげられる（派遣職：19.1%、正規職：17.8%、パート・アルバイト：10.3%、嘱託・契約職11.5%）。「パート・アルバイト」や「派遣職」で、50代後半の割合がやや高い（正規職：6.9%、パート・アルバイト：13.2%、嘱託・契約職7.1%、派遣職14.3%）。また「嘱託・契約職」で、60歳以上の割合が高い（正規職：0.2%、パート・アルバイト：9.3%、嘱託・契約職19.3%、派遣職9.5%）。

②仕事・職場への不満

図表 2-47 仕事・職場への不満（雇用形態別）

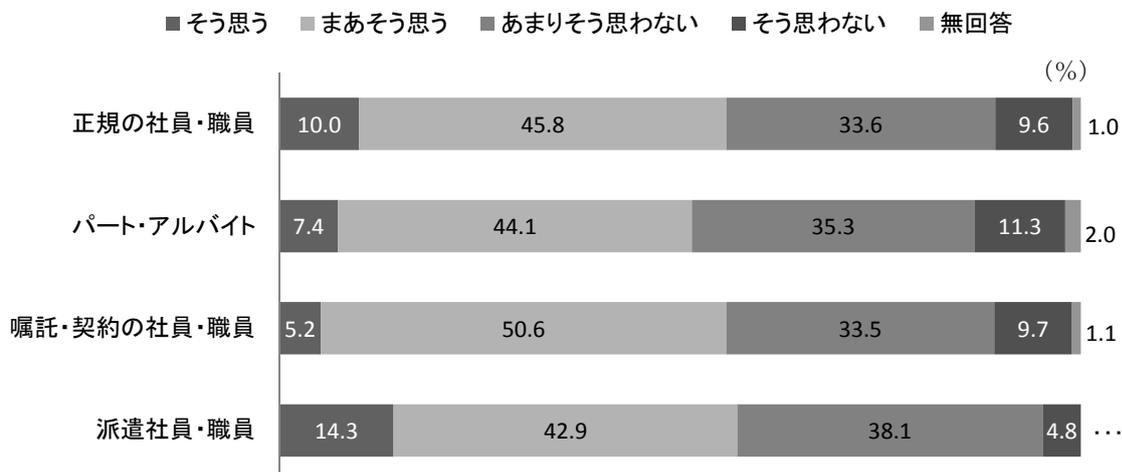
	賃金	労働時間	やすやすのとり	福利厚生	関係場の人間	職場の雰囲気	の仕事そのもの	自分の評価に對する仕事	教育・研修・訓練
総計	46.5	35.0	33.2	26.2	25.6	27.2	31.7	35.7	41.6
正規の社員・職員	44.3	35.6	33.9	24.9	25.4	27.1	31.8	36.3	41.1
パート・アルバイト	52.9	30.4	32.4	33.3	28.4	27.9	28.4	29.4	48.0
嘱託・契約の社員・職員	65.1	30.1	25.7	36.4	23.8	26.4	32.3	33.5	43.1
派遣社員・職員	52.4	42.9	38.1	33.3	33.3	19.0	42.9	38.1	47.6
その他	75.0	37.5	50.0	31.3	50.0	37.5	31.3	43.8	31.3

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表 2-47より、仕事・職場への不満を見ると、「正規職」においては、どの項目も全体とほぼ変わらない。「パート・アルバイト」では、全体と比べて、「賃金」(52.9%)、「福利厚生」(33.3%)、「教育・訓練／研修」(48.0%)で不満の割合がやや高い。「契約・嘱託職」では、「賃金」(65.1%)、「福利厚生」(36.4%)で高い。特に「賃金」の不満が大きい。「派遣職」は、サンプル数が少なくデータに偏りがある可能性があるが、全体と比べて、全般的に不満の割合が高い。

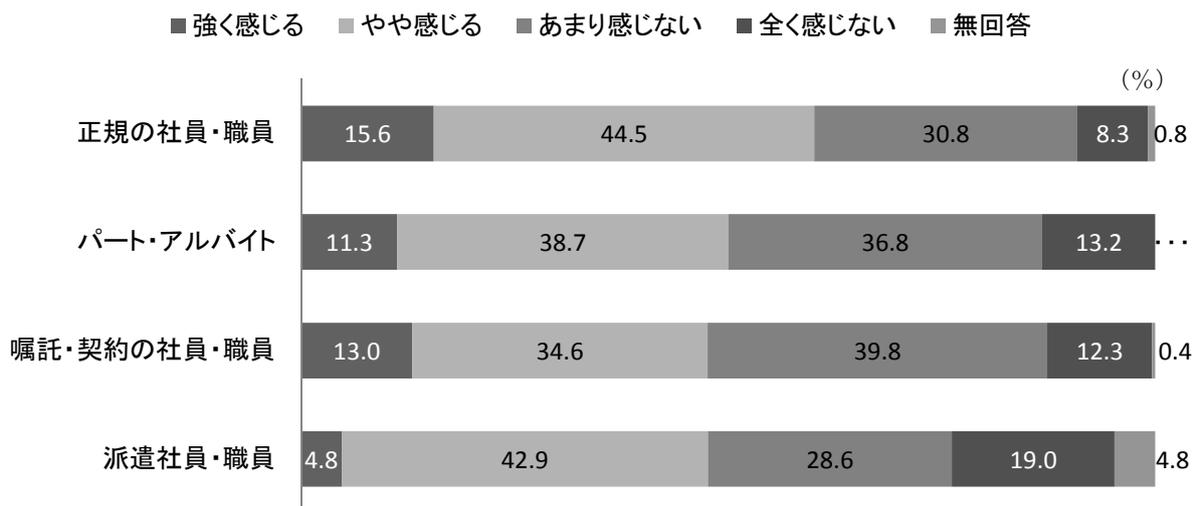
③WLBへの評価とメンタルヘルス疾患の可能性

図表 2-48 WLBの会社対応は十分か（雇用形態別）



図表2-48より、ワーク・ライフ・バランス（WLB）に関する会社の対応への評価を見ると、肯定（「そう思う」＋「まあそう思う」）の割合は、「パート・アルバイト」で若干低いですが、その他の雇用形態ではほぼ同じである。「そう思う」という強い肯定では、「正規職」が10.0%で高く、「パート・アルバイト」（7.4%）「嘱託・契約職」（5.2%）と続く。「派遣職」はサンプル数が少なくデータに偏りがある可能性があるが、14.3%と最も高くなっている。

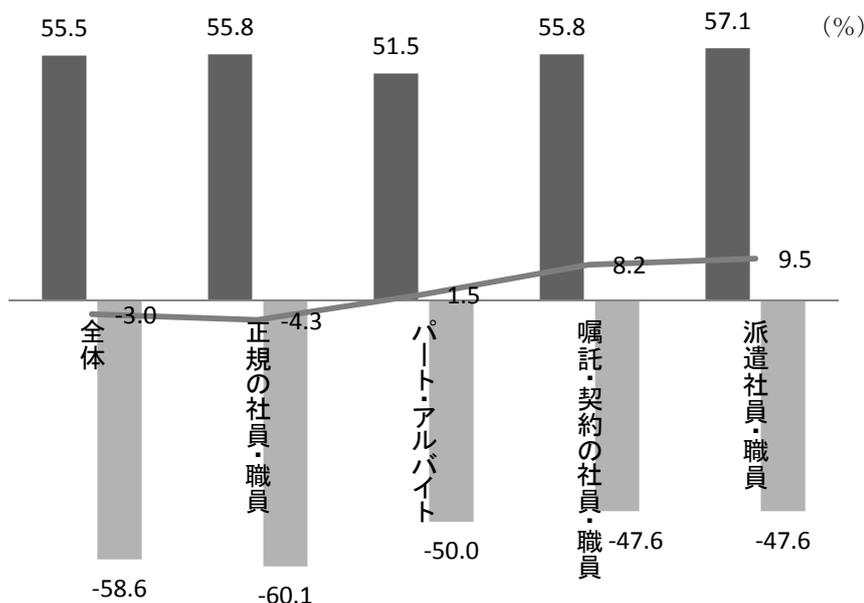
図表2-49 メンタルヘルス疾患の可能性（雇用形態別）



また、図表2-49より、メンタルヘルス疾患（うつ病など）の可能性について起こりうる、起こりえたという回答（「強く感じる」＋「やや感じる」）の割合は、「正規職」60.1%で最も高く、「パート・アルバイト」（50.0%）、「嘱託・契約職」（47.6%）、「派遣職」（47.6%）と続く。

「強く感じる」という強い肯定では、「正規職」が15.6%で最も高く、「嘱託・契約職」（13.0%）「パート・アルバイト」（11.3%）と続く。「派遣職」はサンプル数が少なくデータに偏りがある可能性があるが、4.8%と最も低くなっている。

図表 2-50 WLB対応肯定とメンタルヘルス疾患の可能性肯定（雇用形態別）
 ■ WLB肯定 ■ メンタルヘルス疾患肯定 — WLB肯定－メンタルヘルス疾患肯定



図表 2-50より、WLBの会社対応への評価を肯定する割合とメンタルヘルス疾患の可能性を肯定する割合（マイナスの数値は肯定の割合）を比較すると、メンタルヘルス疾患を肯定する割合の方が高いのは、「正規職」である（メンタル疾患の可能性の方が4.3%高い）。「パート・アルバイト」、「嘱託・契約職」、「派遣職」では逆に、WLBの会社対応への評価の割合の方がそれぞれ1.5%、8.2%、9.5%高くなっている。「正規職」は他の雇用形態と比べると、メンタル面でより圧力がかかっていると思われる。

(2) 「職種」別

① 属性的特徴

図表 2-51 「職種別」性別と年齢層

	性別			年齢層											件数
	男性	女性	無回答	19歳以下	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50~54歳	55~59歳	60歳以上	無回答	
現場作業	81.3	18.6	0.2	0.7	8.4	9.5	10.5	15.4	16.8	20.5	10.9	6.3	0.9	0.2	560
専門・技術職	65.1	34.5	0.4	0.6	8.3	12.2	13.6	15.7	15.0	13.5	12.3	6.8	1.8	0.2	1,132
事務職	58.5	41.2	0.3	0.3	5.0	8.6	12.4	16.5	22.6	15.2	11.4	6.5	1.6	...	1,319
営業・販売職	49.4	50.6	...	0.4	7.1	11.0	15.7	14.2	19.2	9.5	10.3	7.8	4.5	0.2	464
運輸職	97.4	2.0	0.5	1.5	3.6	12.2	15.8	13.8	12.8	12.8	13.3	13.3	1.0	...	196
その他	52.7	46.3	1.1	1.1	6.9	7.4	11.7	17.0	15.4	10.1	11.7	12.2	6.4	...	188

※セル内の数値は%

図表 2-51より、性別では、男性の割合が高い職種は、多いものから「運輸職」(97.4%)「現場作業」(81.3%)「専門技術職」(65.1%)、「事務職」(58.5%)、「その他」(52.7%)であり、女性が多いのは「営業・販売職」(50.6%)である。突出して「運輸職」の男性の割合が高く、次いで「現場作業」が続いている。

年齢層別では、大きな特徴は見られないが、「現場作業職」で「40代後半」が他の職種に比べてやや高い(20.5%)。また、「運輸職」で「50代後半」が他の職種と比べて割合がやや高くなっている(13.3%)。

②仕事・職場への不満

図表 2-52 仕事・職場への不満（職種別）

	賃金	労働時間	す休 暇の とり やす さ	福 利 厚 生	係職 場 の 人 間 関 係	職 場 の 雰 囲 気	仕 事 そ の も の	価 り 自 分 に 対 す る 事 務 評 価	研 修 ・ 訓 練 ／
総計	46.5	35.0	33.2	26.2	25.6	27.2	31.7	35.7	41.6
現場作業	58.2	41.1	46.8	39.5	38.6	40.5	42.7	49.8	53.4
専門・技術職	41.5	38.0	33.2	24.6	22.6	24.6	26.2	32.1	37.7
事務職	39.0	28.8	26.4	19.0	22.1	23.0	31.5	34.2	38.4
営業・販売職	52.8	33.2	33.8	26.9	24.1	26.3	32.5	36.0	44.0
運輸職	65.8	49.0	41.3	36.7	31.6	30.1	32.1	36.2	46.9
その他	53.7	31.4	33.0	33.5	28.2	29.3	31.4	27.1	45.2

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

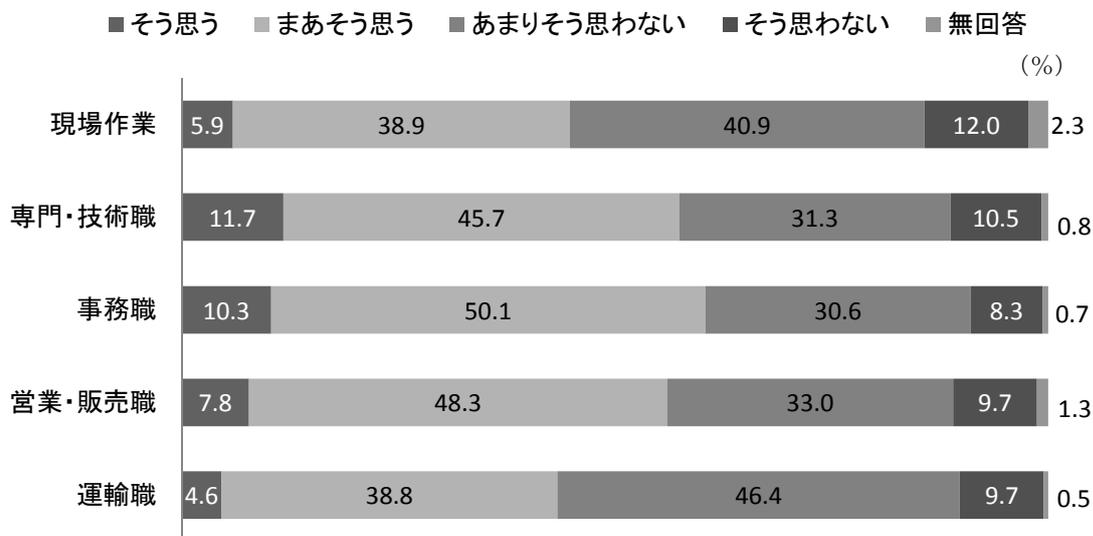
図表 2-52より、仕事・職場への不満を見ると、全体と比べて、全般的に不満の割合が高いのは「現場作業」である。すべての項目において不満が大きい傾向が見られる。労働時間への不満を除くと、全体と比べて10%以上の差が見られる。特に差が大きいのは「自分の仕事ぶりに対する評価」(+14.1%)であり、「休暇のとりやすさ」(+13.6%)が続いている。

次いで「運輸職」で不満の割合が高い項目が多くなっている。「賃金」「労働時間」「休暇の取りやすさ」「福利厚生」「職場の人間関係」「教育・訓練／研修」で全体よりも不満が大きいのが、特に「賃金」の不満が際立って大きく(+19.3%)、「労働時間」(+14.0%)が続いており、労働条件で不満が大きい。「営業・販売職」では、「賃金」への不満の割合がやや高い。

全体と比べて不満の割合が低い項目が最も多いのは、「事務職」である。「賃金」「労働時間」「休暇のとりやすさ」「福利厚生」で不満が少なくなっており、労働条件では恵まれていることがわかる。また、「専門・技術職」では、「仕事そのもの」での不満が少ないのが特徴である。

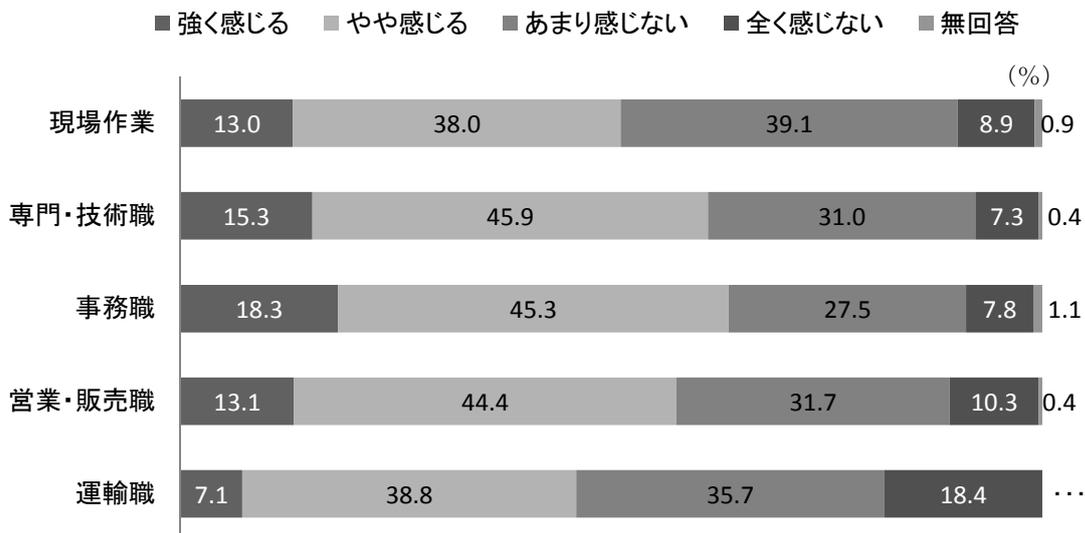
③WLBへの評価とメンタルヘルス疾患の可能性

図表 2-53 WLBの会社対応は十分か（職種別）



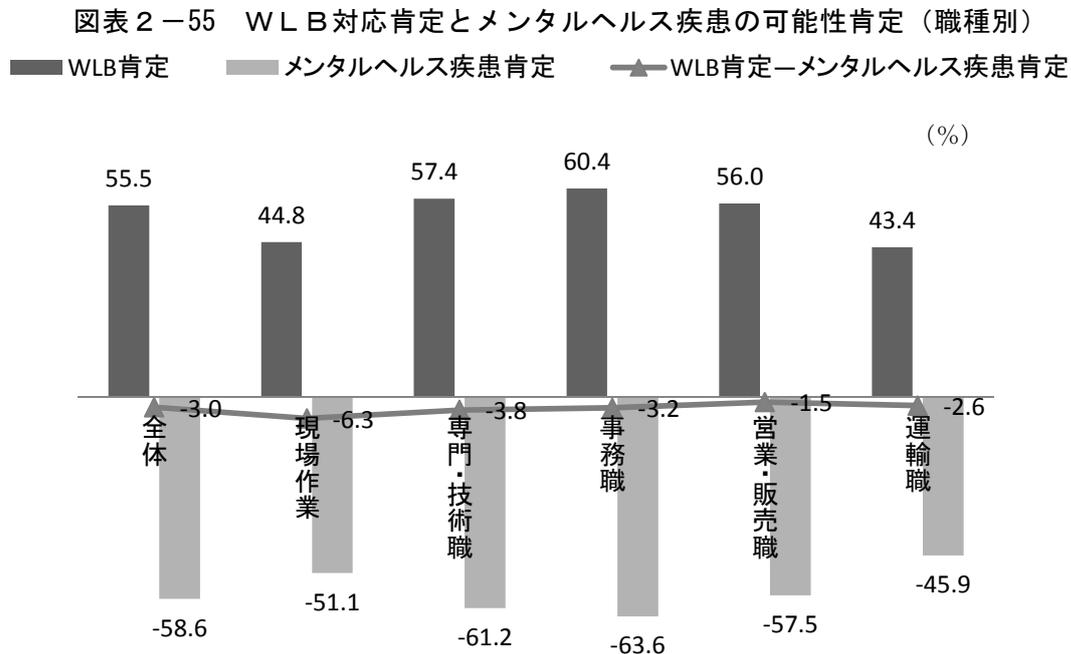
図表 2-53より、ワーク・ライフ・バランス（WLB）に関する会社の対応への評価を見ると、肯定（「そう思う」＋「まあそう思う」）の割合は、「事務職」60.4%で最も高く、次いで「専門・技術職」57.4%、「営業・販売職」56.0%と続く。割合が低いのは、「運輸職」43.4%、「現場作業」44.8%である。「そう思う」という強い肯定では、最も高いのが「専門・技術職」11.7%、最も低いのは「運輸職」4.6%である。

図表 2-54 メンタルヘルス疾患の可能性（職種別）



また、図表 2-54より、メンタルヘルス疾患（うつ病など）の可能性について起こりうる、起こりえたという回答（「強く感じる」＋「やや感じる」）の割合は、「事務職」63.6%で最も高く、次いで「専門・技術職」61.2%、「営業・販売職」57.5%と続く。割合が低いのは、「運輸職」45.9%、「現場作業」51.1%である。

「強く感じる」という強い肯定では、最も高いのが「事務職」18.3%であり、最も低いのは「運輸職」7.1%である。



図表 2-55より、WLBの会社対応への評価を肯定する割合とメンタルヘルス疾患の可能性を肯定する割合（マイナスの数値は肯定の割合）を比較すると、メンタルヘルス疾患を肯定する割合の方が最も高いのは、「現場作業」である（メンタル疾患の可能性の方が6.3%高い）。しかし、その他の職種の比較でも、「専門・技術職」3.8%、「事務職」3.2%、「運輸職」2.6%、「営業・販売職」1.5%の差で、若干メンタル疾患の可能性の方が高い。

興味深いのは、職種において、WLBの会社対応への評価を肯定する割合とメンタルヘルス疾患の可能性を肯定する割合が、均衡している点である。メンタルヘルス疾患の可能性を感じている職場はWLBの会社対応への評価が高く、メンタルヘルス疾患の可能性を比較的感じていない職場はWLBの会社対応への評価が低い。これらのことから、ある程度職場の状況に応じてWLBの対応が行われていると考えられるが、差がやや大きい「現場作業」の職場では、より対応が必要とされている可能性がある。

2. 勤務先の特性と就業者の意識

(1) 「業種」別

① 属性的特徴

図表 2-56 「業種別」性別と年齢層

(%)

	性別			年齢層											件数
	男性	女性	無回答	9歳以下	10~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50~54歳	55~59歳	60歳以上	無回答	
製造	76.8	23.0	0.3	0.4	6.1	9.3	12.7	13.7	17.6	22.6	10.8	6.4	0.3	0.1	771
卸売・小売	43.4	56.4	0.3	0.8	7.6	10.6	14.9	14.6	17.6	8.7	11.7	7.3	6.2	...	369
建設・資材	84.0	16.0	...	2.5	13.6	16.0	21.0	27.2	11.1	3.7	1.2	2.5	1.2	...	81
運輸・交通	87.5	12.1	0.3	1.7	6.1	14.1	13.8	13.8	13.8	9.8	13.8	11.8	1.0	0.3	297
金融・保険	46.9	52.2	1.0	...	7.2	9.1	16.3	21.1	17.2	12.9	11.0	5.3	209
情報・通信	78.6	21.4	1.3	1.9	5.2	7.1	11.0	7.1	9.7	28.6	27.3	0.6	154
教育	60.3	38.4	1.4	6.8	8.9	11.0	21.9	24.0	25.3	2.1	146
飲食・宿泊・観光	44.4	55.6	11.1	11.1	11.1	11.1	27.8	16.7	5.6	...	5.6	...	18
公務員	57.6	42.2	0.3	0.3	4.8	9.7	11.8	16.4	23.1	14.1	12.0	7.2	0.4	0.2	1,178
その他	65.0	34.7	0.3	0.8	12.3	12.0	14.5	18.2	15.3	12.0	10.0	4.2	0.8	...	642

※セル内の数値は%

図表 2-56より、性別では、男性の割合が高い業種は、多いものから「運輸・交通」(87.5%)、「建設・資材」(84.0%)、「情報・通信」(78.6%)、「製造」(76.8%)、「その他」(65.0%)、「教育」(60.3%)、「公務員」(57.6%)であり、女性の割合が高い業種は、多いものから「卸売・小売」(56.4%)、「飲食・宿泊・観光」(55.6%)、「金融・保険」(52.2%)である。

年齢層別では、「建設・資材」で20~30代の割合が他の職種に比べてやや高い。「製造」で40代後半、「教育」で40代後半~50代前半、「情報・通信」で50代後半~60歳以上の割合がやや高くなっている。

② 仕事・職場への不満

図表 2-57 仕事・職場への不満 (業種別)

(%)

	賃金	労働時間	すやすやのとりや	福利厚生	係職場の人間関係	職場の雰囲気	仕事そのもの	価りに対する仕事評価	研修・訓練
総計	46.5	35.0	33.2	26.2	25.6	27.2	31.7	35.7	41.6
製造	58.0	40.9	44.1	42.3	38.0	40.6	41.2	47.6	54.6
卸売・小売	49.6	35.5	38.8	30.6	27.9	29.5	30.4	35.5	45.0
建設・資材	<u>33.3</u>	33.3	38.3	<u>16.0</u>	28.4	32.1	<u>25.9</u>	34.6	<u>28.4</u>
運輸・交通	67.0	46.8	39.1	34.3	27.6	29.6	31.0	32.7	46.5
金融・保険	54.5	34.9	<u>24.9</u>	21.5	21.1	25.8	45.0	40.7	48.3
情報・通信	70.1	<u>26.6</u>	<u>16.2</u>	<u>18.8</u>	26.6	27.9	39.6	44.2	41.6
教育	<u>21.2</u>	71.9	46.6	22.6	21.9	26.7	<u>21.2</u>	<u>24.7</u>	47.3
飲食・宿泊・観光	44.4	44.4	44.4	38.9	38.9	33.3	27.8	38.9	61.1
公務員	<u>32.2</u>	<u>29.1</u>	29.9	<u>19.6</u>	22.2	<u>21.0</u>	<u>26.5</u>	31.8	36.8
その他	46.0	<u>26.9</u>	<u>23.7</u>	<u>17.9</u>	<u>15.9</u>	<u>19.2</u>	28.2	<u>28.8</u>	<u>29.0</u>

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表2-57より、仕事・職場への不満を見ると、全体と比べて、全般的に不満の割合が高いのは「製造」である。すべての項目において不満が大きい傾向が見られる。労働時間および仕事そのものへの不満を除くと、全体と比べて10%以上の差が見られる。特に差が大きいのは「福利厚生」(+16.1%)であり、「職場の雰囲気」(+13.4%)、「教育・訓練／研修」(+13.0%)が続いている。

次いで「飲食・宿泊・観光」で不満の割合が高い項目が多い。サンプル数が少なくデータに偏りがある可能性があるが、全体と比べて、全般的に不満の割合が高い。特に「教育・訓練／研修」で全体との差が大きい(+19.5%)

次に不満の割合が高い項目が多いのは、「運輸・交通」である。「賃金」「労働時間」「休暇のとりやすさ」「福利厚生」で不満の割合が高いが、特に全体との差が大きいのは「賃金」(+20.5%)である。

「卸売・小売」は、ほぼ全体と同じ傾向であるが、「休暇のとりやすさ」でやや不満の割合が高くなっている(+5.5%)。

全体と比べて、不満が高い割合と低い割合が混在しているのが、「情報・通信」、「教育」、「金融・保険」である。「情報・通信」で不満の割合が高い項目は「賃金」「仕事そのもの」「自分の仕事ぶりに対する評価」であるが、特に「賃金」で全体との差が大きい(+23.6%)。「仕事そのもの」(+7.9%)、「自分の仕事ぶりに対する評価」(+8.4%)といった不満も大きいのが特徴的であると言える。逆に不満の割合が低いのは「労働時間」「休暇のとりやすさ」「福利厚生」であり、「賃金」以外の労働条件に関しては恵まれている。

「教育」で不満の割合が高い項目は、「労働時間」「休暇のとりやすさ」「教育・訓練／研修」であるが、特に全体との差が大きいのは「労働時間」(+37.0%)であり、他の業種と比べても極端に大きな差が見られる。また「休暇のとりやすさ」(+13.4%)の不満も大きい。逆に不満の割合が低いのは「仕事そのもの」(-10.5%)、「自分の仕事ぶりに対する評価」(-11.1%)であり、仕事面では充実している。

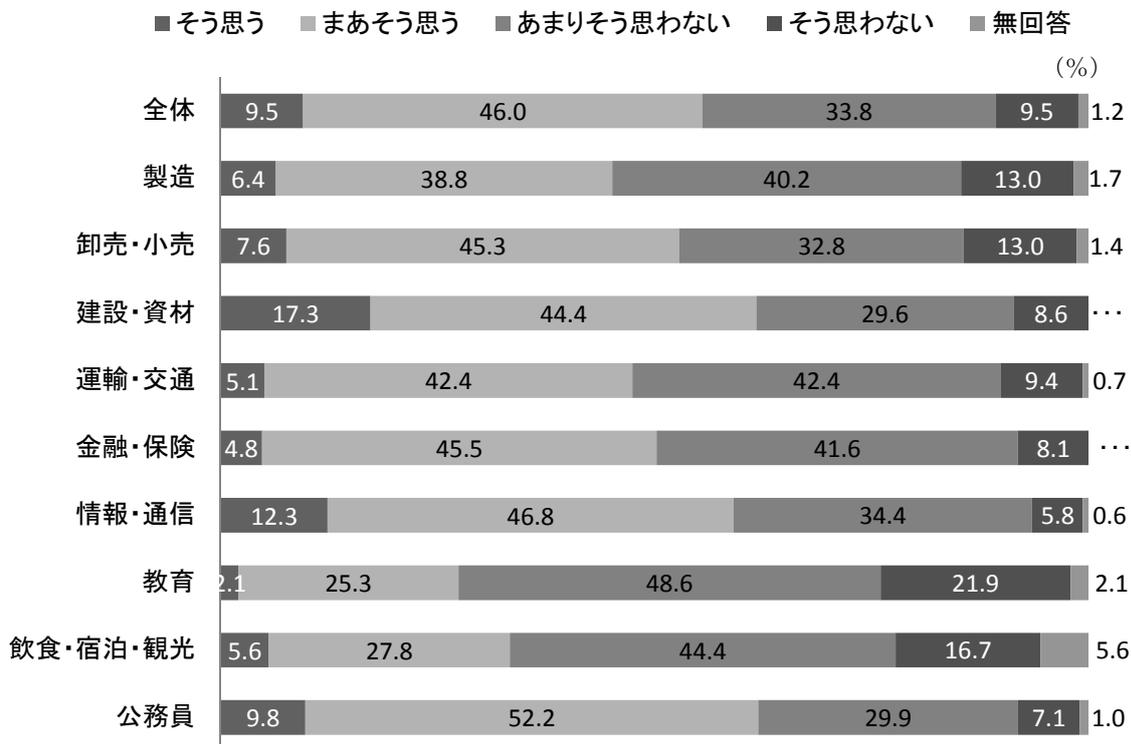
「金融・保険」で不満の割合が高い項目は、「仕事そのもの」「賃金」「教育・訓練／研修」であるが、特に全体との差が大きいのは「仕事そのもの」(+13.3%)である。逆に不満の割合が低いのは「休暇のとりやすさ」である。

「建設・資材」では「休暇のとりやすさ」でやや不満の割合が高いものの、全体に比べて不満の割合が低い項目が多い。「教育・訓練／研修」「賃金」「福利厚生」「仕事そのもの」がそれである。ただし、「建設・資材」のサンプル数はやや少ないため、データに偏りがある可能性がある。

「公務員」は、全体に比べてすべての項目で不満の割合が低い。特に「賃金」「福利厚生」「職場の雰囲気」「労働時間」「仕事そのもの」でやや低くなっている。また「その他」も同じく、全体に比べてすべての項目で不満の割合が低い。

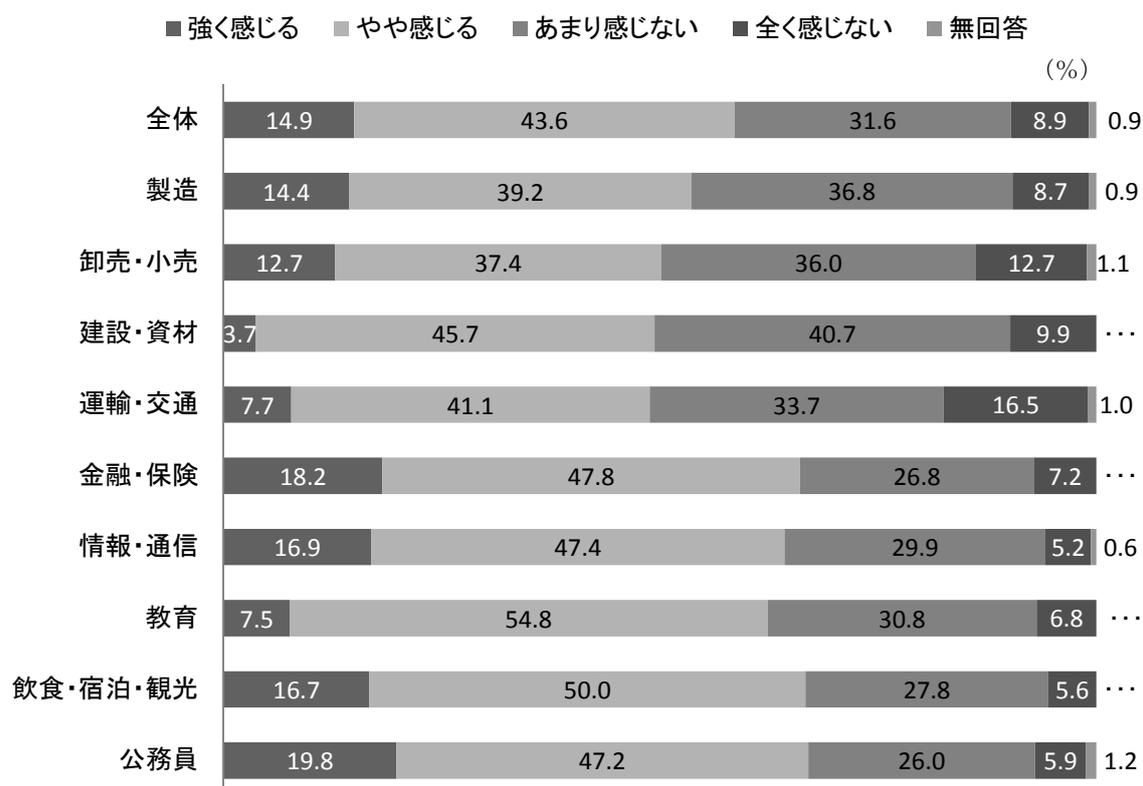
③WLBへの評価とメンタルヘルス疾患の可能性

図表 2-58 WLBの会社対応は十分か（業種別）



図表 2-58より、ワーク・ライフ・バランス（WLB）に関する会社の対応への評価を見ると、肯定（「そう思う」＋「まあそう思う」）の割合は、「公務員」62.0%で最も高く、次いで「建設・資材」61.7%、「情報・通信」59.1%と続く。割合が最も低いのは、「教育」27.4%であり、「飲食・宿泊・観光」33.3%、「製造」45.1%が続いている。「そう思う」という強い肯定では、最も割合が高いのが「建設・資材」17.3%であり、「情報・通信」12.3%、「公務員」9.8%が続く。最も割合が低いのは「教育」2.1%であり、「金融・保険」4.8%、「運輸・交通」5.1%が続いている。

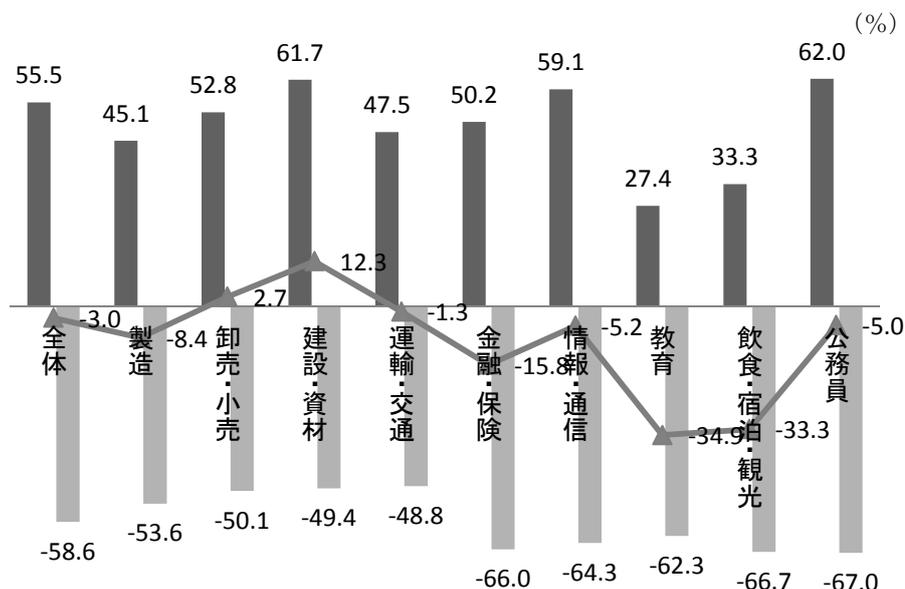
図2-59 メンタルヘルス疾患の可能性（業種別）



図表2-59より、メンタルヘルス疾患の可能性について起こりうる、起こりえたという回答（「強く感じる」＋「やや感じる」）の割合は、「公務員」67.0%で最も高く、次いで「飲食・宿泊・観光」66.7%、「金融・保険」66.0%と続く。最も割合が低いのは「運輸・交通」48.8%であり、「建設・資材」49.4%、「卸売・小売」50.1%が続いている。

「強く感じる」という強い肯定では、最も割合が高いのが「公務員」19.8%であり、「金融・保険」18.2%、「情報・通信」16.9%が続く。最も割合が低いのは「建設・資材」3.7%、「教育」7.5%、「運輸・交通」7.7%が続いている。

図表2-60 WLB対応肯定とメンタルヘルス疾患の可能性肯定（業種別）
 ■ WLB肯定 ■ メンタルヘルス疾患肯定 ▲ WLB肯定－メンタルヘルス疾患肯定



図表2-60より、WLBの会社対応への評価を肯定する割合とメンタルヘルス疾患の可能性を肯定する割合（マイナスの数値は肯定の割合）を比較すると、メンタルヘルス疾患を肯定する割合の方が最も高いのは「教育」である（メンタル疾患の可能性の方が34.9%高い）。「教育」では勤務先のWLBの取組がうつ病などのメンタルヘルス疾患の症状が現れる可能性に対処できていない可能性がある。同様にWLBへの対応とメンタルヘルス疾患の可能性の間で差が大きいのは、「飲食・宿泊・観光」（-33.3%）、「金融・保険」（-15.8%）、「製造」（-8.4%）である。ただし「飲食・宿泊・観光」はサンプル数が少なくデータに偏りがある可能性があることは留意しておきたい。

「公務員」や「情報・通信」では、かなりメンタルヘルス疾患の可能性が高いが、WLBの対応の評価も高い。これらは、精神的な圧力がかかる業種ではあるものの職場での対応もある程度なされていると考えられる。

(2) 従業員「規模」別

① 属性的特徴

図表2-61 「従業員規模別」性別と年齢層

	性別			年齢層										件数	
	男性	女性	無回答	19歳以下	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60歳以上		無回答
1～5人	38.0	59.2	2.8	1.4	2.8	4.2	11.3	21.1	16.9	15.5	19.7	7.0	71
6～9人	32.9	67.1	5.5	5.5	11.0	12.3	26.0	12.3	13.7	9.6	2.7	1.4	73
10～19人	60.0	39.4	0.6	1.3	8.4	10.3	12.3	17.4	20.0	11.0	9.7	7.1	2.6	...	155
20～29人	72.6	27.4	...	1.6	5.6	13.7	8.1	20.2	18.5	10.5	13.7	5.6	1.6	0.8	124
30～49人	74.1	25.0	0.9	0.4	7.9	11.8	14.5	11.4	18.0	19.7	10.1	4.8	1.3	...	228
50～99人	65.9	33.7	0.4	1.1	5.8	9.2	14.7	17.9	19.4	9.8	15.8	5.3	1.1	...	469
100～299人	63.2	36.5	0.3	0.4	4.9	9.9	13.3	13.7	19.9	16.1	11.4	8.4	2.0	0.1	1,381
300～999人	61.9	38.0	0.1	0.5	9.3	9.4	13.8	16.2	17.3	14.0	9.7	6.8	2.7	0.3	734
1000人以上	76.3	23.6	0.2	0.3	8.1	12.9	11.2	17.1	14.7	14.1	10.2	8.1	3.1	0.2	590

※セル内の数値は%

図表2-61より、性別では、男性の割合が高い従業員規模のうち、70%を超えているのは「1,000人以上」(76.3)、「30～49人」(74.1%)、「20～29人」(72.6%)、60%を超えているのは「50～99人」(65.9%)、「100～299人」(63.2%)、「300～999人」(61.9%)、「10～19人」(60.0%)である。女性の割合が高いのは、「1～5人」(59.2%)、「6～9人」(67.1%)と小規模の勤務先になっている。

年齢層別では、大きな特徴は見られない。

②仕事・職場への不満

図表2-62 仕事・職場への不満（規模別）

	賃金	労働時間	す 休 暇 の と り や す さ	福 利 厚 生	係 職 場 の 人 間 関 係	職 場 の 雰 囲 気	仕 事 そ の も の	価 り 自 分 に 対 し て の 仕 事 の 評 価	研 修 ・ 訓 練 ／ 研 究
総計	46.5	35.0	33.2	26.2	25.6	27.2	31.7	35.7	41.6
1～5人	36.6	19.7	21.1	21.1	19.7	19.7	28.2	29.6	32.4
6～9人	46.6	19.2	39.7	24.7	34.2	34.2	39.7	47.9	54.8
10～19人	48.4	28.4	29.0	22.6	25.2	25.8	24.5	31.6	39.4
20～29人	43.5	38.7	29.8	25.0	25.0	25.0	26.6	34.7	41.1
30～49人	53.1	52.6	46.1	34.6	26.3	29.4	27.6	37.7	47.8
50～99人	44.3	36.9	35.4	25.6	27.3	31.1	31.3	35.0	40.1
100～299人	47.2	35.8	37.0	29.5	26.5	27.7	33.2	37.9	45.1
300～999人	47.4	31.6	28.6	23.8	24.4	24.7	31.3	32.8	38.7
1000人以上	43.7	34.2	25.8	20.3	22.7	24.9	33.1	34.4	36.3

※下線数字は「総計」より5ポイント以上少ないことを示す
 ※薄い網掛け数字は「総計」より5ポイント以上多いことを示す
 ※濃い網掛け数字は「総計」より15ポイント以上多いことを示す

図表2-62より、仕事・職場への不満を見ると、全体と比べて、不満の割合が高い項目が多いのは、従業員規模が「6～9人」の勤務先である。全体との差が大きいものから見ると、「教育・訓練／研修」「自分の仕事ぶりに対する評価」「職場の人間関係」「仕事そのもの」「職場の雰囲気」「休暇の取りやすさ」で不満が大きい。ただし、「労働時間」の不満の割合は、全体に比べて、低くなっている（-15.8%）。

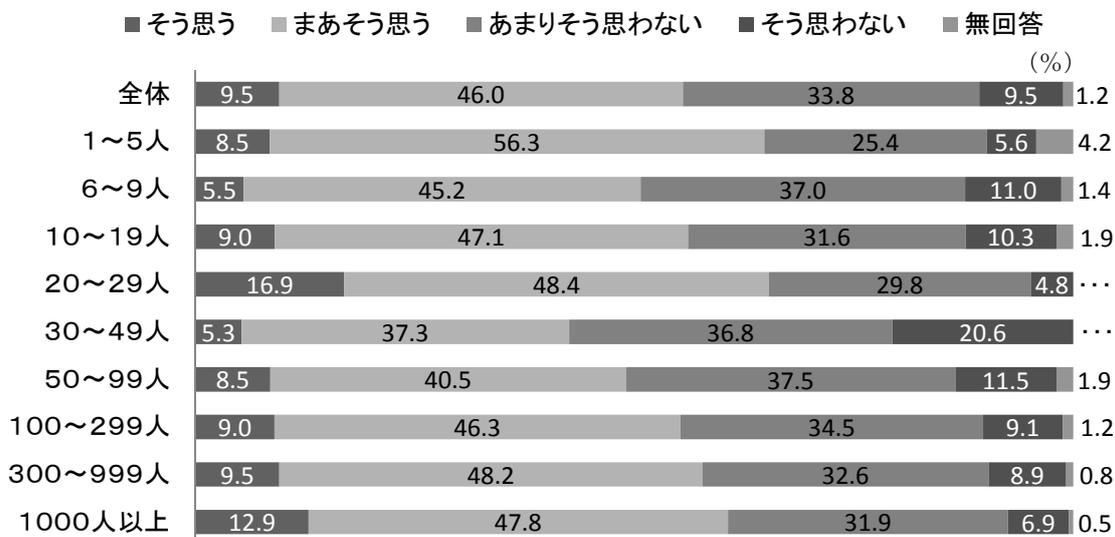
次に不満の割合が高い項目が多いのは、「30～49人」である。全体との差が大きいものから見ると、「労働時間」「休暇の取りやすさ」「福利厚生」「賃金」「教育・訓練／研修」で不満が大きい。特に「労働時間」では、全体と比べて、不満の割合の差が大きい（+17.7%）。

逆に、不満の割合が低い項目がもっとも多いのは、「1～5人」である。特に「労働時間」の不満の割合は、全体に比べてかなり低い（-15.2%）。また、「10～19人」「20～29人」でも不満の割合が低い項目がやや見られる。

50人以上の従業員規模になると、不満の割合が高い項目がほとんど見られない。特に「1,000人以上」の規模になると、「休暇の取りやすさ」「福利厚生」「教育・訓練／研修」で不満の割合が低い傾向が見られる。

③WLBへの評価とメンタルヘルス疾患の可能性

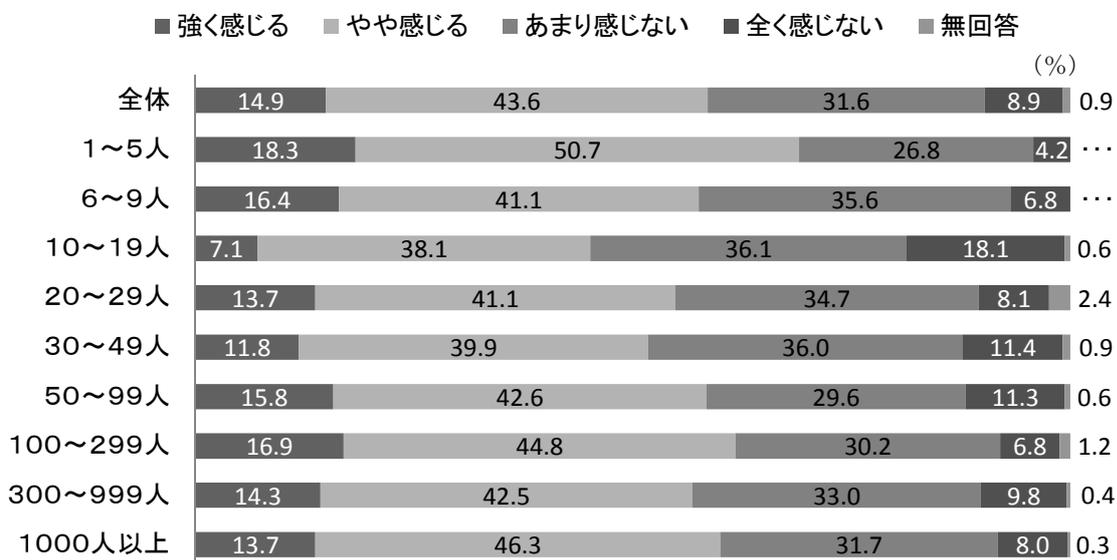
図表 2-63 WLBの会社対応は十分か（規模別）



図表 2-63より、ワーク・ライフ・バランス（WLB）に関する会社の対応への評価を見ると、肯定（「そう思う」＋「まあそう思う」）の割合は、「20～29人」65.3%で最も高く、次いで「1～5人」64.8%、「1,000人以上」60.7%と続く。割合が最も低いのは、「30～49人」42.5%であり、「50～99人」49.0%、「6～9人」50.7%が続いている。「そう思う」という強い肯定では、最も割合が高いのが「20～29人」16.9%であり、「1,000人以上」12.9%、「300～999人」9.5%が続く。最も割合が低いのは「30～49人」5.3%、「6～9人」5.5%、「1～5人」および「50～99人」8.5%が続いている。

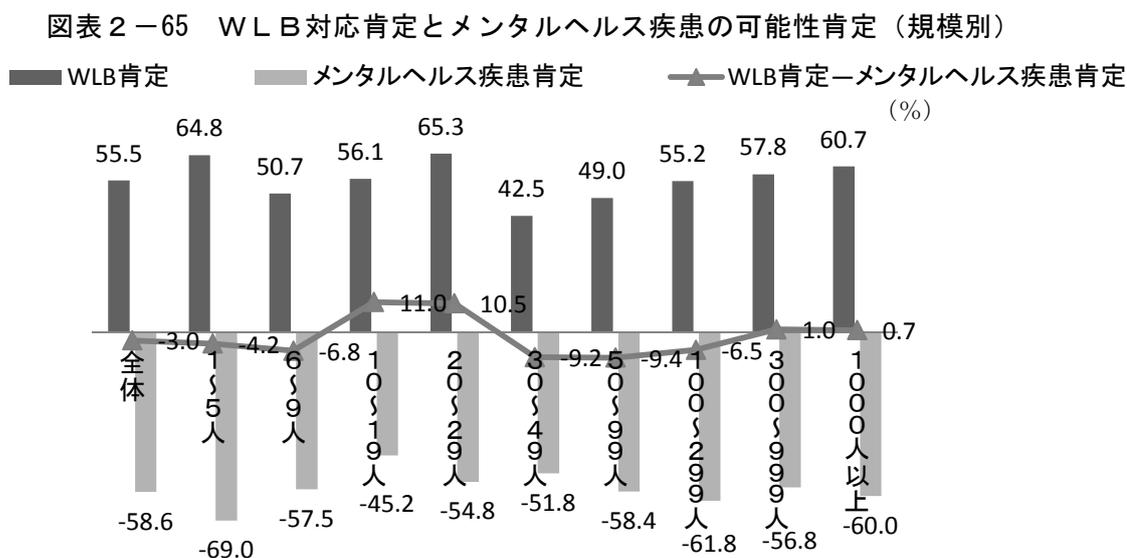
50人未満の従業員規模の勤務先では、サンプル数がやや少ないこともあり、あまり一貫した傾向が見られない。従業員規模の小さい勤務先では、WLBの対応において会社の取り組み方に差が生じている可能性がある。50人以上では、従業員数が増加するにつれてWLBの対応への評価が一貫して上昇する傾向が見られる。

図表 2-64 メンタルヘルス疾患の可能性（規模別）



図表2-64より、また、メンタルヘルス疾患（うつ病など）の可能性について起こりうる、起こりえたという回答（「強く感じる」＋「やや感じる」）の割合は、「1～5人」69.0%で最も高く、次いで「100～299人」61.8%、「1,000人以上」60.0%と続く。最も割合が低いのは「10～19人」45.2%であり、「30～49人」51.8%、「20～29人」54.8%が続いている。従業員「10～49人」の中規模の勤務先で、比較的精神的な圧力がかかっていない。

「強く感じる」という強い肯定では、最も割合が高いのが「1～5人」18.3%であり、「100～299人」16.9%、「6～9人」16.4%が続く。最も割合が低いのは「10～19人」7.1%であり、「20～29人」および「1,000人以上」の13.7%が続いている。



図表2-65より、WLBの会社対応への評価を肯定する割合とメンタルヘルス疾患の可能性を肯定する割合（マイナスの数値は肯定の割合）を比較すると、メンタルヘルス疾患を肯定する割合の方が最も高いのは「50～99人」である（メンタル疾患の可能性の方が9.4%高い）。同様にWLBへの対応とメンタルヘルス疾患の可能性の間で差が大きいのは、「30～49人」（-9.2%）、「6～9人」（-6.8%）、「100～299人」（-6.5%）である。逆にWLBの会社対応への評価を肯定する割合が高いのは、「10～19人」（+11.0%）、「20～29人」（+10.5%）である。またWLBの会社対応への評価を肯定する割合およびメンタルヘルス疾患の可能性を肯定する割合が、どちらも60%を超えて高いのは、「1～5人」および「1,000人以上」である。

30人未満の従業員規模の勤務先では一貫した傾向が見られないが、30人以上では従業員規模が大きくなるにつれて、WLBの会社対応への評価を肯定する割合とメンタルヘルス疾患の可能性を肯定する割合の差が0に近づく、すなわちより両者のバランスが取れていく傾向が見られる。

3. 考察

ここまで、「雇用形態」「職種」という就業形態・仕事内容に関わる特性、および「業種」「規模」と

いう勤務先の特性について、就業者の不満、ワークライフバランス（WLB）に関する勤務先の対応への評価、メンタルヘルス疾患の可能性を見てきた。これらの意識は、それぞれの仕事や職場の問題点が就業者の意識に反映していると考えられるが、同時に企業等の勤務先が抱える課題であるとも言える。ここでは、仕事や職場の問題点および課題について指摘したい。

①「雇用形態」

非正規雇用である「パート・アルバイト」「嘱託・契約職」「派遣職」に共通する不満は、「賃金」「福利厚生」であり、「パート・アルバイト」「派遣職」では「教育・訓練／研修」に対する不満もやや強い。非正規雇用に共通する問題はやはり「賃金」や「福利厚生」であり、今後さらなる改善が必要とされる。また職場での「教育・訓練／研修」についても、非正規雇用者の意見を聞いて対処することが必要である。

「正規職」では、非正規雇用の人よりも仕事や職場の不満が少ないが、うつ病などのメンタルヘルス疾患の可能性でやや強い傾向がある。「正規職」である責任によりストレスが強くなっていると考えられる。勤務先におけるWLBの対応への評価もやや高いが、今後も職場におけるメンタル面での配慮が必要だと思われる。

②「職種」

「現場作業職」で、全般的に不満の割合が高い。労働条件、労働環境など、対処しやすい項目から順次改善していく必要があるだろう。次いで「運輸職」で不満の割合が高いものが多いが、特に「賃金」は65.5%とかなり高い（全体は46.5%）。歩合制等の給与形態による給与の不安定さが要因の一つと考えられるが、「賃金」に関しては改善の必要がある。他方「現場作業職」「運輸職」では、「メンタルヘルス疾患の可能性」の割合は低く、比較的工作や職場からのプレッシャーがかからない職種と言える。

「営業・販売職」は全体と比べてあまり差がないが、「賃金」ではやや不満が高く、まず改善すべき点だと言える。「専門・技術職」も全体と比べてあまり差がなく、「仕事そのもの」については不満の割合が低く、比較的満足度が高い傾向が見られる。「事務職」での不満の割合は全体と比べて全般的に低く比較的満足度が高いと言えるが、「メンタルヘルス疾患の可能性」については、その割合が他に比べて高くなっており、メンタル面での配慮を意識する必要がある。

また、全職種において、WLBの会社対応の評価は、「メンタルヘルス疾患の可能性」の割合とほぼ対応する傾向が見られる。職種という職場に直結するカテゴリーでは、就業者に対してある程度メンタル面で配慮されていると言えよう。ただし「現場作業職」では、他の職種に比べて、メンタル疾患の可能性がWLB肯定の割合を上回る幅がやや大きい。現場作業においてはメンタル面での辛さが見過ごされている場合も考えられる。

③「業種」

全体に比べて、すべての項目に不満の割合が高いのは「製造」である。特に「福利厚生」に対する不満が強く、最初に改善すべき点として上げられよう。次いで不満の割合が高い項目が多いのは「運輸・交通」である。「賃金」「労働時間」「休暇のとりやすさ」「福利厚生」など労働条件に関するもの

で占められているが、特に「賃金」に対する不満が非常に強く、対応が必要だと考えられる。

全体と比べて、不満が高い割合と低い割合が混在しているのが、「情報・通信」、「教育」、「金融・保険」である。「情報・通信」で不満の割合が高い項目は「賃金」「仕事そのもの」「自分の仕事ぶりに対する評価」であるが、特に「賃金」で高い。「情報・通信」の属性を見ると、50代後半および60歳以上の年齢層で50%を超えており、かつ「嘱託・契約職」の割合が突出して高いため、「賃金」への不満は、業種というよりも「嘱託・契約職」の職種の要因が強いと考えられる。

「教育」で不満の割合が高い項目は、「労働時間」「休暇のとりやすさ」「教育・訓練／研修」であるが、特に不満が大きいのは「労働時間」である。全体に比べて不満の割合が2倍にも達しており、看過できない状態である。また「メンタルヘルス疾患の可能性」の割合に比べてWLBの対応への評価が非常に低い、このことは職場において不満を産み出す問題に対処できていない現状を反映している。教育における「労働時間」および「休暇のとりやすさ」の管理は、構造的な問題として早急に取り組みなければならない課題だと言える。

「金融・保険」で不満の割合が高い項目は、「仕事そのもの」「賃金」「教育・訓練／研修」であるが、特に全体との差が大きいのは「仕事そのもの」である。また、「メンタルヘルス疾患の可能性」についても「公務員」などと並びかなり高い割合となっている。業務に直結する「仕事そのもの」を変えるわけにはいかないが、就業者への意識調査などを実施して、業務などの不満を具体的に洗い出し、管理面からより良い職場になるよう改善していく必要があると考えられる。

「公務員」は、全体に比べてすべての項目で不満の割合が低い。しかし、「メンタルヘルス疾患の可能性」の割合はかなり高く、現状でも評価が高いWLBの取り組みを今後も継続する必要があると思われる。

④「従業員規模」

「1～5人」規模の勤務先では、全体と比べて全般的に不満の割合が低く、逆に「6～9人」規模では、不満の割合が高い項目が多い。特に「職場の人間関係」「自分の仕事の評価」など労働環境面で不満が強い。また「30～49人」規模の勤務先では「賃金」「労働時間」「休暇のとりやすさ」「福利厚生」などの労働条件面を中心に不満が大きい。特に「労働時間」では全体との差が大きく開いている。ただ、50人未満の従業員規模の勤務先では、サンプル数がやや少ないこともあり、あまり一貫した傾向が見られない。小規模の勤務先の場合、経営理念や業務管理などに違いが出やすいため、働きやすさに差が出ている可能性がある。

それより大きな50人以上の規模では、従業員数が増加するにつれておおむね不満の割合が減少する傾向にあり、またWLBの対応への評価が一貫して上昇する傾向が見られる。

コラム：しまねに暮らす⑤

定住のキーワードは「共感」

*コラム①～⑨は2015年9～10月に執筆したものです。

日野 賢治（ふるさと島根定住財団 地域活動支援課長）

県人口が自然減に転じた平成4年、ふるさと島根定住財団は島根県の外郭団体として誕生しました。この年、島根県は「定住元年」を掲げ、定住対策を強力に実施していく方針が表明された時期でしたが、定住財団の設立もその一つでありました。以来、島根県と一体となって定住対策に取り組み24年目に入った財団ですが、現在は次の3つを柱として事業を展開しています。

- ・若年者を中心とした県内就職促進
- ・県外からのU I ターンの促進
- ・活力と魅力ある地域づくりの促進

第1の柱はどちらかというと外に出さない施策、第2の柱は外から受け入れる視点での施策となるわけですが、私が現在所属する部門（3つ目の柱がメイン）は、受け皿となる地域の活性化や地域を守っていく取り組みを支援する立場となります。県内でも都市部は都市での地域の困りごとや課題があり、中山間地域といっても、それぞれの地域によって課題は変わってきます。隠岐地域は離島としての課題があり、地域それぞれの支援が求められるのが実態かと思います。

地域づくり支援に携わるなかで、過疎・高齢化の進行に対する危機感を共有し、これに立ち向かおうとしている地域グループやNPOなどが少なくないことを実感しています。ポイントは、実際に活動ができるか、またその力が地域に備わっているかではないかと思われます。若者が残り地域を支える、あるいは県外から担い手が来る、どちらも地域にとって悪い話ではありません。地域活動が継続して発展していくために、地域のニーズ（シーズ）と担い手のシーズ（ニーズ）のマッチングも重要となります。

私が最近感じているのは、「人が人を呼ぶ」現象です。特に若い世代で見られます。生き方、ライフスタイルに共感し、その人が生活する地域にU I ターンする方がちらほら見受けられます。私がUターンした頃とは、明らかに状況が異なっています。SNSなどの普及によって、情報のやりとりがより充実したこともありますし、地方創生の関係で、全国各地の地方で暮らしている方々のライフスタイルが紹介されている雑誌、サイトなどが増加していることも一因かもしれません。

キーワードは「共感」。これは、地域づくり活動にも通じることかもしれません。

第 3 章

第3章 比較のなかのしまね生活 -若者と女性を中心に-

島根大学法文学部准教授 毎熊 浩一

第3章のポイント

■三つのテーマと三つの視点

本章は、この「しまねプロジェクト」のアンケート結果と既存の全国調査との比較を通じて、島根の現況について一定の評価を試みるものである。テーマは大きく三つ、「しごと」、「くらし」、「ちいき」。それぞれについて、アンケート回答者の全体（＝総計）をみるのはもちろん、あわせて、女性と若者に着目する。すなわち、ここでの問題関心を大雑把に述べれば、第一に、島根は、全般的に全国より住みやすい地域と言えるのかどうか、第二に、全国との比較において、島根の女性は男性と比してどのような状況にあるのか、第三に、これまた全国との対比のなかでみたとき、島根の若者は他の年齢層と比べてどうなのか、となる。

■「しごと」面では、島根は全国よりもかなり恵まれている。けれども・・・

比較した全28項目のうち、島根が全国を上回った項目は18。率にして約65%である。全体的には多少よい、というところであろうか。ただ、個別にみれば、「しごと」面では、ほとんどの項目について島根の方がかなり恵まれた状況にあることがわかる。ところが、「ちいき」については、さほど大きな違いはなく、「くらし」面では全国よりもやや劣っている。

■島根は女性の力でもっている？

比較できた19項目のうち、全国との対比において女性が男性よりも相対的によい状況にあると評価された項目は実に4つにすぎない。このうち「しごと」に関するものが3つ。「仕事全般の満足」、「失業に対する不安」、「仕事そのものについての満足」である。これらが比較的ざっくりした項目であることに鑑みれば、島根の女性は“総合的には”男性よりマシな状況にあると言えるのかもしれない。他方、個々具体的な項目（例えば、賃金、労働時間、休暇など）については男性より不満や不安が大きい。また、「くらし」でも、「経済的ゆとり感」を除けば、すべて（例えば、時間的ゆとり感、仕事以外の生きがい、健康など）について男性の方がよい状況にある。以上要するに、島根の女性は随分と寛容で、島根はかなりそれに支えられていると言えそうである。

■「しごと」では比較的よい状況にある島根の若者も・・・

総じて言えば、全国との比較において、島根の若者は他の年齢層よりも恵まれている。特に「しごと」面では、「賃金」や「労働時間」などの「条件」面に問題はあるにせよ、「失業に対する不安」は最も低く、「人間関係」や「仕事そのもの」についての満足も最も高い。ただし、「くらし」面では「日常生活についての満足」について、「ちいき」面では「全体的な暮らしやすさ」について、20代が最下位となっていることは気がかりである。他方、島根の若者は「子育て環境」について比較的高く評価していること、また、「近所つきあい」も盛んな方であることは明るい材料と言えよう。

一 序 節

島根の現況はどう評価できるだろうか。それには全国（他）との比較が必要である。もっとも、本プロジェクト（以下、しまねプロジェクト）のアンケートは、島根県内のみを対象としたもので全国調査は行っていない。そこで、既存の類似調査を利用することとする。もちろん、全く同じ調査ではないがゆえの問題も少なくない。そもそも、こういった比較自体、厳密にはあまり意味を持たないとの向きもあろう。しかし、島根のみ眺めていても島根の姿は見えない。今後より深い調査が必要になるであろうが、本章がそのための「仮説」抽出の一助にでもなれば幸いである。

1. 主要な全国調査の概要

比較にあたって用いた調査のうち主要なものの概要を表にまとめておく。特に、回答者の属性の違いには注意が必要である。例えば、35歳以上で構成されるサンプルもあれば、就業者以外も回答者に含まれている調査もある。結果に大きな影響を与える要因である。留意されたい。

	調査名	島根で働く人の「しごとと「くらし」意識調査	連合「連合生活アンケート」(れんごう政策資料No.224)	内閣府・経済社会研究所「平成25年度 生活の質に関する世論調査[個人調査]	平成26年度 内閣府「国民生活に関する世論調査」	第5回「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」(2012)
1	略称	しまねプロジェクトアンケート	「れんごう」調査	「生活の質」調査	「国民生活」調査	「サラリーマン」調査
2	調査時期	2015年4月	2014年6～8月	2014年1～2月	2014年6～7月	2011年10月
3	標本数	6,048人	35,135人	3086世帯・5572人	10,000人	149万人
4	回収率(数)	64.9%(3,928人)	68.1%(23,915)	世帯:62.6%(1,932/3,086) 個人:73.0%(4,066/5,572)	62.5%(6,254人)	5,145人
5	性別(男:女)	63.7:35.1	81.3:17.1	45.5:54.5	46.4:53.6	54.4:45.6
6	年齢	<～19> 0.6% <20> 16.8% <30> 28.3% <40> 32.5% <50> 18.8% <60～> 2.1% 平均:40.8歳	<～19> - <20> 17.6% <30> 36.5% <40> 30.2% <50> 13.3% <60～> 0.6% 平均:39.1歳	<～19> 5.7% <20> 14.3% <30> 12.0% <40> 17.0% <50> 19.7% <60～> 31.2% 平均:48.7歳	<～19> 0% <20> 6.9% <30> 13.2% <40> 18.1% <50> 17.2% <60> 44.7%	<35-44>29.4 <45-54>23.9 <55-64>24.5
7	未婚率	29%(+離死別4.8)	31.0%	29.2%	15.3%(+離死別12.1)	8.8%(+離死別7.0%)
8	単身割合	11.2%	16.9%	6.3%	9.6%	8.8%
9	子どもあり	55.2%(同居のみ)	52.6%	71.8%	77.7%	76.0%
10	公営・公務	30.0%	17.6%	—	—	3.1%
11	就業者の割合	100.0%	100.0%	68.7%	62.5%	62.3%
12	正規雇用率	85.9%	100.0%	54.3%	63.8%(役員ふくむ)	68.4%

2. 質問項目一覧

以下では、しまねプロジェクトで実施したアンケートの調査項目すべてを扱っているわけではない。その主たる理由は、そもそも比較の必要性がない項目もあるということに加え、比較対象たり得る全国データが入手できなかったことにある。使用した項目は以下の表の通りである。

I. しごと	1. 仕事全般の満足 2. 失業に対する不安 3. 賃金についての満足 4. 労働時間についての満足 5. 休暇のとりやすさについての満足 6. 福利厚生についての満足 7. 人間関係についての満足 8. 仕事そのものについての満足 9. 自分の仕事ぶりへの評価についての満足 10. 教育・訓練・研修についての満足 11. WLBに関する会社の対応への評価
II. くらし	1. 日常生活についての満足 2. 経済的ゆとり感 3. 時間的ゆとり感 4. 仕事以外の生きがい 5. 健康状態 6. 日常のストレス 7. メンタルヘルス疾患の可能性
III. ちいき	1. 居住地域の暮らしやすさ 2. 地域への愛着度 3. 地域の不安感 4. 困ったときの助力 5. 子育て環境への評価 6. 介護環境への評価 7. 隣近所とのつき合い程度 8. 町内会(義務的活動)への参加度 9. 町内会(楽しみ活動)への参加度 10. ボランティア・NPO 活動への参加度

3. 留意事項

その他、留意すべき点を列挙しておく。

- ・本分析では、全体(総計)に加え、性別と年齢別をみる。その際、特に女性と若者(20代)に焦点をあてる。ただし、なかにはクロス集計の結果を部分的にしか公表していない全国調査もあり、データに欠ける項目もある。
- ・各項目の結果表には60代のデータも含めているが、しまねプロジェクトでのサンプル数が極めて限られているため、考察の対象とはしていない。
- ・質問項目によっては、しまねプロジェクトのそれとほぼ同じものもあれば、かなり異なるものもある。特にそのズレが大きいものについては、その都度脚注で注意を促すが、その他についても多かれ少なかれ違いがあることは予め確認しておきたい。
- ・選択肢にズレがある場合、適宜、操作した。例えば、選択肢に「どちらとも言えない」があるかないか。含まれる方については、集計にあたり、原則その半分を加算した。具体的には、各項目「質問対応表」のなかの「集計法」を参照されたい。
- ・可能な限り、直接の比較対象とした調査以外の全国調査も参照した。ただし、ほぼ「総計」に限られている。その質問や集計法については、それぞれ脚注で解説している。
- ・各項目の「グラフ」にみられる「(Q+数字)」は、しまねプロジェクトアンケートの質問Noを指している。

第1節 「しごと」比較

1. 仕事全般の満足

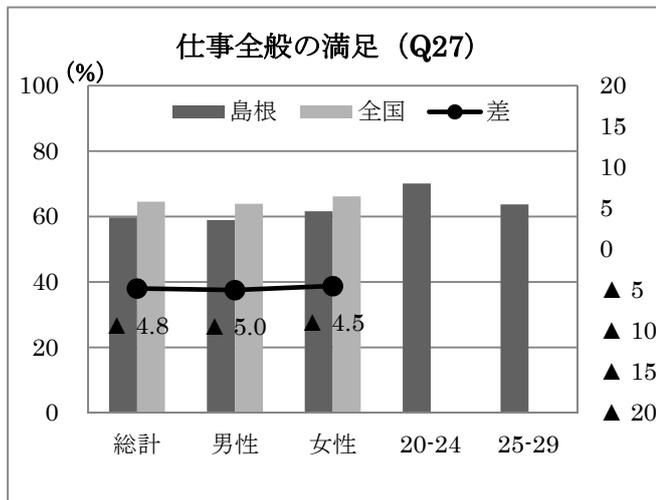
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 27 現在の仕事全般について、満足していますか。 1. 満足 2. やや満足 3. やや不満 4. 不満	1+2
「サラリーマン」調査	問 10. 現在のお仕事や職場について、どのように感じていますか。(1)～(8)のそれぞれについてお答えください。 (8)全体として 1. とても満足している 2. やや満足している 3. どちらともいえない 4. やや不満である 5. とても不満である	1+2 +3(×1/2) ¹

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		59.7	0.0	64.5	0.0	▲ 4.8
性別	男性	58.9	▲ 0.8	63.9	▲ 0.6	▲ 5.0
	女性	61.6	1.9	66.1	1.6	▲ 4.5
年齢	20-24	70.1	10.4	-	-	-
	25-29	63.7	62.9	-	-	-
	30-34	62.3		-	-	-
	35-39	60.1	59.0	60.7	▲ 3.8	▲ 1.7
	40-44	58.0	▲ 1.7	61.1	▲ 3.4	▲ 4.0
	45-49	57.0	▲ 2.7			
	50-54	57.3	▲ 2.4			
	55-59	54.4	▲ 5.3	66.6	2.1	▲ 11.9
60-	56.0	▲ 3.7				

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：仕事全般に対する満足度は、島根は全国より多少低い²。その差は▲4.8p。なお、「生活の質」調査³では47%が満足となっており、それよりは島根の方が高い。

②性別：島根でも全国でも女性の方が男性より満足度は高いが、その差は島根が2.7p、全国が2.2pとごくわずかである。また、男女それぞれを全国と比べても、その差は男性が▲5.0、女性が▲4.5と、ほとんど変わらない。つまり、全国と比べたとき、仕事全般の満足について島根の男性と女性とで差はほぼないと言える。

③年齢：20代の全国データがないので何ともいえないが、全体的な傾向としては、島根では若いほど満足度は高くなるのに対し、全国では(35歳以上のデータしかないけれども)逆になっている。全国と比べたとき、島根で相対的に満足度が高い層は若い層と言えそうである。

¹ 「3(×1/2)」は、選択肢3の半分を加算したことを意味している。

² なお、この「サラリーマン」調査の対象である35歳以上のみをしまねプロジェクトの結果と比較してみても、すべての年齢層で島根の方が低くなっている。

³ ここでの問いと選択肢は以下の通り。「次の質問は生活の各局面であなたがどの程度満足を感じているかを何うものですか。各生活局面で『全く満足していない』を0点、『非常に満足している』を10点とすると何点くらいになりますか」(問11)。集計では、6点から10点それぞれの回答数の合計に、5点の回答数の半数を加えた。

2. 失業に対する不安

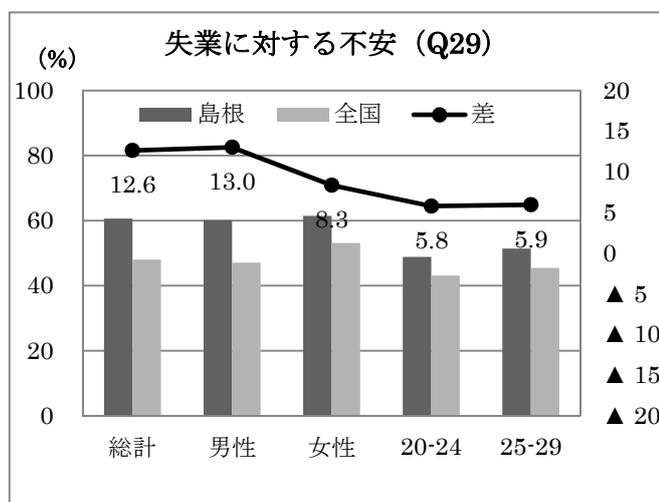
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 29 あなたは失業に対する将来的な不安はありますか。 1. ある 2. ややある 3. あまりない 4. ない	1+2
「れんごう」調査	Q18. あなたは現在の職場生活の中で、以下のA-Rの各項目についてどのように感じていますか。 A 今の仕事が続けられるか不安である 1. そう思う 2. どちらともいえない 3. そうは思わない	1+2(×1/2)

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		60.6	0.0	48.0	0.0	12.6
性別	男性	60.1	▲ 0.5	47.1	▲ 0.9	13.0
	女性	61.4	0.8	53.1	5.1	8.3
年齢	20-24	48.9	▲ 11.8	43.1	▲ 4.9	5.8
	25-29	51.4	▲ 9.2	45.4	▲ 2.6	5.9
	30-34	58.9	▲ 1.7	45.2	▲ 2.8	13.8
	35-39	61.4	0.8	46.5	▲ 1.5	14.9
	40-44	64.5	3.9	49.8	1.8	14.7
	45-49	66.6	6.0	52.8	4.8	13.8
	50-54	64.7	4.1	54.6	6.6	10.1
	55-59	62.5	1.8	49.4	1.4	13.0
	60-	54.8	▲ 5.9	46.0	▲ 2.0	8.8

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：失業への不安感は、島根の方が全国より極めて大きい。その差は12.6p。なお、「生活の質」調査⁴では、46.1%が失業不安を感じるしており、ここでも島根の方が大きい。年齢別にみても、20代から50代まですべての層で、島根の方が大きい。

②性別：島根でも全国でも女性の方が男性より不安感は大いだが、その差は島根が1.3p、全国が6.0pと、全国の方がかなり大きい。また、男女それぞれを全国と比べても、その差は男性が13.0p、女性が8.3pと、男性の方が大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に不安感が小さいのは女性と言える。

③年齢：すべての年齢層で島根の方が全国より不安感は大いだが、その差は20代でもっとも小さい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的にもっとも不安感が小さい層は20代前半である。逆にもっとも大きい層は30代後半である。

⁴ ここでの問いは、「あなたは以下（1. 失業）[筆者挿入]についてどの程度、不安を感じますか」（問 12）、選択肢は「1. 常を感じる 2. 少し感じる 3. どちらともいえない 4. あまり感じない 5. 全く感じない」。集計では、選択肢1と2に、3の半数を加えた。

3. 賃金についての満足

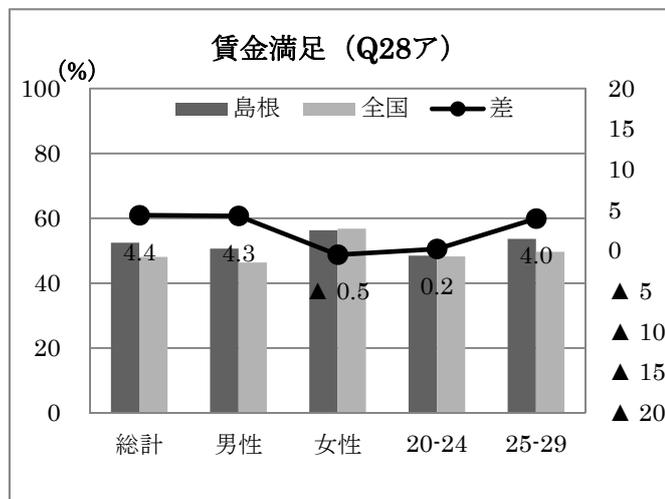
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 28 次のア～ケの各項目について満足度をおたずねします。 (ア)賃金 1. 満足 2. やや満足 3. やや不満 4. 不満	1+2
「れんごう」調査	Q1.(2) あなたは年間賃金総額に満足していますか。 1. 十分に満足している 2. まあ満足している 3. やや不満がある 4. おおいに不満がある	1+2

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		52.5	0.0	48.1	0.0	4.4
性別	男性	50.7	▲ 1.8	46.4	▲ 1.7	4.3
	女性	56.3	3.8	56.8	8.7	▲ 0.5
年齢	20-24	48.5	▲ 4.0	48.3	0.2	0.2
	25-29	53.7	1.2	49.7	1.6	4.0
	30-34	48.4	▲ 4.1	53.1	5.0	▲ 4.7
	35-39	54.7	2.2	51.4	3.3	3.3
	40-44	54.4	1.9	48.9	0.8	5.5
	45-49	60.9	8.4	43.6	▲ 4.5	17.3
	50-54	53.6	1.1	40.0	▲ 8.1	13.6
	55-59	43.2	▲ 9.3	38.3	▲ 9.8	4.8
60-	26.2	▲ 26.3	32.2	▲ 15.9	▲ 6.0	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：賃金についての満足度は、島根の方が全国より多少高い。その差は4.4p。なお、「生活の質」調査⁵と「サラリーマン」調査⁶で本データに相当する値をみると、それぞれ、37.5%、45.8%、いずれについても島根の方が満足度は高くなっている。

②性別：島根でも全国でも女性の方が男性より満足度は高いが、その差は、島根が5.6p、全国が10.4pと、島根の方が小さい。また、男女それぞれを全国と比べても、男性は島根の方が高い(4.3p)のに対し、女性はわずかながら全国より低い(▲0.5p)。つまり、全国と比べたとき、賃金について島根で相対的に満足度が高いのは男性と言える。

③年齢：20代でも満足度は島根の方が全国より高い。ただし、その差は総計(4.4p)ほどではない。特に20代前半は、0.2pの差しかない。全国と比べたとき、島根で相対的に満足度がもっとも高い層は40代後半である。逆にもっとも低いのは30代前半である。

⁵ ここでの問いは「あなたは、ご自身の仕事の質(2. 賃金は良い)[筆者挿入]について、どのように感じていますか」(問 30-2)、選択肢は「1. 全くそう思わない 2. どちらかといえばそう思わない 3. どちらでもない 4. どちらかといえばそう思う 5. 非常にそう思う」。集計では、選択肢3の半数に、4と5を加えた。

⁶ ここでの問いは「現在のお仕事や職場((4)賃金)[筆者挿入]について、どのように感じていますか」(問 10)、選択肢は「1. とても満足している 2. やや満足している 3. どちらともいえない 4. やや不満である 5. とても不満である」。集計では、選択肢1と2に、3の半数を加えた。

4. 労働時間についての満足

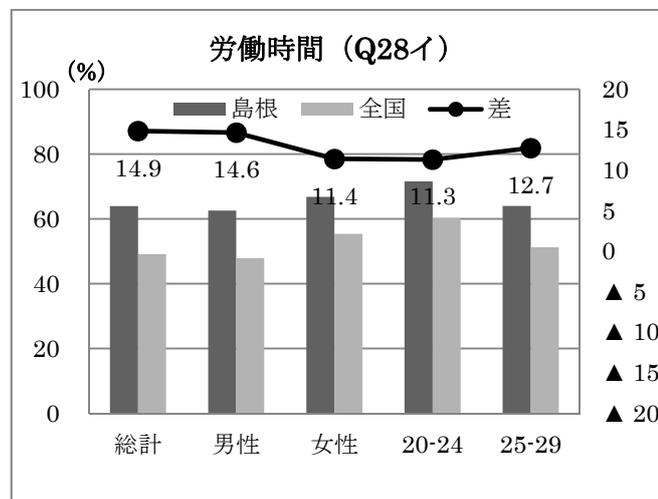
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 28 次のア～ケの各項目について満足度をおたずねします。 (イ)労働時間 1. 満足 2. やや満足 3. やや不満 4. 不満	1+2
「れんごう」調査	Q17. あなたは、自分自身の現在の総実働時間についてどのように感じていますか。 1. 非常に長いと思う 2. やや長いと思う 3. 適正だと思う 4. やや短いと思う 5. 非常に短いと思う	3

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		64.0	0.0	49.1	0.0	14.9
性別	男性	62.5	▲ 1.4	47.9	▲ 1.2	14.6
	女性	66.8	2.9	55.4	6.3	11.4
年齢	20-24	71.6	7.6	60.3	11.2	11.3
	25-29	64.0	0.0	51.2	2.1	12.7
	30-34	65.5	1.5	49.0	▲ 0.1	16.5
	35-39	64.4	0.4	47.2	▲ 1.9	17.2
	40-44	60.6	▲ 3.4	47.7	▲ 1.4	12.9
	45-49	61.8	▲ 2.2	48.7	▲ 0.4	13.1
	50-54	61.1	▲ 2.8	47.5	▲ 1.6	13.6
	55-59	66.7	2.7	51.6	2.5	15.1
60-	72.6	8.7	63.1	14.0	9.5	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：労働時間についての満足度は、島根の方が全国より極めて高い。その差は14.9p。なお、「生活の質」調査⁷では、47.3%が本データに相当する値となっており、ここでも島根の方が高い。

②性別：島根でも全国でも女性の方が男性より満足度は高いが、その差は島根が4.3p、全国が7.5pと、島根の方が全国より小さい。また、男女それぞれを全国と比べてみても、その差は、男性が14.6p、女性が11.4pと、女性の方が小さい。つまり、全国と比べたとき、労働時間について島根で相対的に満足度が高いのは男性と言える。

③年齢：他の年齢層同様、20代でも満足度は島根の方が全国より高いが、その差は総計よりも小さい。特に20代前半は全国との差がもっとも小さい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に満足度がもっとも低い層は20代前半である。逆に、もっとも高い層は、30代後半である。

⁷ ここでの問いは「あなたは、ご自身の仕事の質（10. 自己啓発や生活の時間が確保しやすい職場環境にある）[筆者挿入]について、どのように感じていますか」（問 30-2）、選択肢は「1. 全くそう思わない 2. どちらかといえばそう思わない 3. どちらでもない 4. どちらかといえばそう思う 5. 非常にそう思う」。集計では、選択肢3の半数に、4と5を加えた。なお、ここでは特に質問のズレに留意されたい。

5. 休暇のとりやすさについての満足

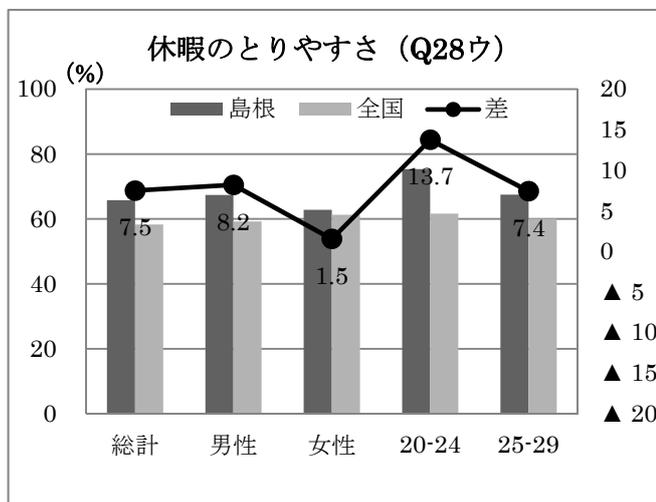
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 28 次のア～ケの各項目について満足度をおたずねします。 (ウ) 休暇のとりやすさ 1. 満足 2. やや満足 3. やや不満 4. 不満	1+2
「れんごう」調査	Q18. あなたは現在の職場生活の中で、以下のA～Rの各項目についてどのように感じていますか。 N 有給休暇がとりにくい 1. そう思う 2. どちらともいえない 3. そうは思わない	2(×1/2) +3

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		65.8	0.0	58.3	0.0	7.5
性別	男性	67.4	1.6	59.2	0.9	8.2
	女性	62.8	▲ 3.0	61.3	3.0	1.5
年齢	20-24	75.4	9.6	61.6	3.3	13.7
	25-29	67.5	1.7	60.1	1.8	7.4
	30-34	67.3	1.5	57.9	▲ 0.4	9.4
	35-39	64.5	▲ 1.3	58.3	▲ 0.0	6.2
	40-44	63.5	▲ 2.3	57.4	▲ 0.9	6.1
	45-49	62.1	▲ 3.6	56.5	▲ 1.8	5.6
	50-54	61.6	▲ 4.2	57.3	▲ 1.0	4.2
	55-59	68.8	3.0	62.2	3.9	6.5
	60-	75.0	9.2	66.1	7.8	8.9

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：休暇のとりやすさについての満足度は、島根の方が全国よりかなり高い。その差は7.5p。

②性別：島根では女性の方が満足度は低いが、全国では逆である。また、男女それぞれを全国と比べてみても、その差は男性が8.2p、女性が1.5pと、女性の方がかなり小さい。つまり、全国と比べたとき、休暇のとりやすさについて島根で相対的に満足度が高いのは男性と言える。

③年齢：すべての年齢層で島根の方が全国より満足度は高いが、20代前半はもっとも差が大きい(13.7p)。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に満足度が最も高い層は20代前半である。逆に、もっとも低い層は50代前半である。

6. 福利厚生についての満足

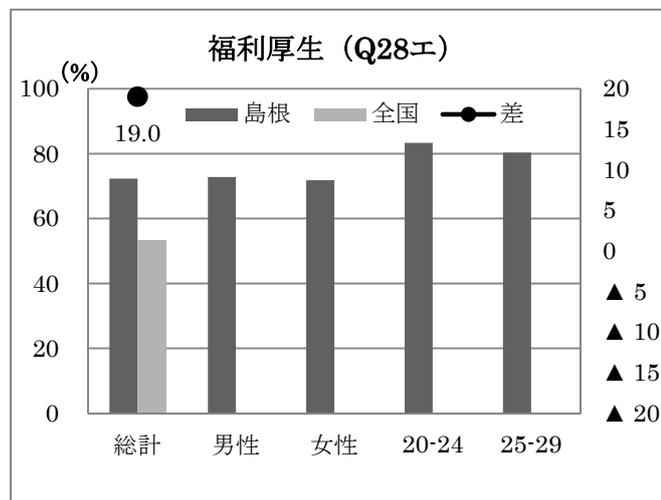
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 28 次のア～ケの各項目について満足度をおたずねします。 (エ)福利厚生 1. 満足 2. やや満足 3. やや不満 4. 不満	1+2
「サラリーマン」調査	問 10. 現在のお仕事や職場について、どのように感じていますか。 (10)福利厚生 1. とても満足している 2. やや満足している 3. どちらともいえない 4. やや不満である 5. とても不満である	1+2 +3(×1/2)

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		72.3	0.0	53.3	0.0	19.0
性別	男性	72.8	0.5	-	-	-
	女性	71.8	▲ 0.5	-	-	-
年齢	20-24	83.3	11.0	-	-	-
	25-29	80.4	8.0	-	-	-
	30-34	76.6	4.3	-	-	-
	35-39	71.9	▲ 0.4	-	-	-
	40-44	72.4	0.1	-	-	-
	45-49	67.7	▲ 4.6	-	-	-
	50-54	66.7	▲ 5.7	-	-	-
	55-59	64.6	▲ 7.8	-	-	-
	60-	60.7	▲ 11.6	-	-	-

(3) グラフ



(4) 考察

- ①全体：福利厚生についての満足度は、島根の方が全国より極めて高い。その差は19.0p。
- ②性別：データなし。
- ③年齢：データなし。

7. 職場の人間関係についての満足

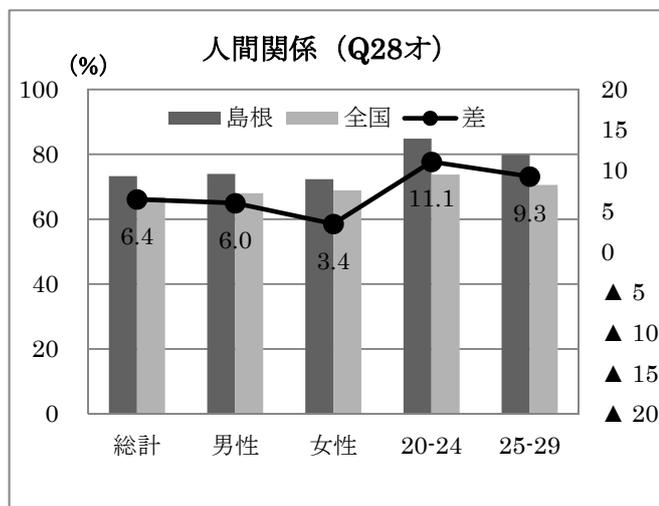
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 28 次のア～ケの各項目について満足度をおたずねします。 (オ)職場の人間関係 1. 満足 2. やや満足 3. やや不満 4. 不満	1+2
「れんごう」調査	Q18. あなたは現在の職場生活の中で、以下のA～Rの各項目についてどのように感じていますか。 P 職場の人間関係がよくない 1. そう思う 2. どちらともいえない 3. そうは思わない	2(×1/2) +3

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		73.3	0.0	66.9	0.0	6.4
性別	男性	74.0	0.7	68.0	1.2	6.0
	女性	72.3	▲ 1.0	68.9	2.1	3.4
年齢	20-24	84.8	11.6	73.8	6.9	11.1
	25-29	79.8	6.6	70.6	3.7	9.3
	30-34	78.2	4.9	69.0	2.2	9.1
	35-39	74.1	0.8	67.2	0.3	6.9
	40-44	71.7	▲ 1.5	65.4	▲ 1.5	6.4
	45-49	68.9	▲ 4.4	64.5	▲ 2.3	4.4
	50-54	67.6	▲ 5.7	62.8	▲ 4.1	4.8
	55-59	67.0	▲ 6.3	63.7	▲ 3.2	3.4
60-	66.7	▲ 6.6	64.4	▲ 2.4	2.2	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：人間関係についての満足度は、島根の方が全国よりかなり高い。その差は6.4p。なお、「サラリーマン」調査⁸と「生活の質」調査⁹をみると、本データに相当する値は、それぞれ64.6、48.7%となっており、いずれについても島根の方が高い。

②性別：島根では女性の方が多少満足度は低いが、全国ではわずかながら女性の方が高い。また、男女それぞれを全国と比べてみても、その差は男性が6.0p、女性が3.4pと、女性の方が小さい。つまり、全国と比べたとき、人間関係について島根で相対的に満足度が高いのは男性と言える。

③年齢：どの年齢層でも島根の方が全国より高いが、20代前半でその差はもっとも大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的にもっとも満足度が高い層は20代前半である。逆に、もっとも低い層は50代後半である。

⁸ ここでの問いは、「現在のお仕事や職場（(7) 職場の人間関係・雰囲気）について、どのように感じていますか」（問10）、選択肢は「1. とても満足している 2. やや満足している 3. どちらともいえない 4. やや不満である 5. とても不満である」。集計では、選択肢1と2の合計に、3の半数を加えた。

⁹ ここでの問いは、「あなたは、ご自身の仕事の質（9. 職場の人間関係にはストレスが多い）[筆者挿入]について、どのように感じていますか」（問30-2）、選択肢は「1. 全くそう思わない 2. どちらかといえばそう思わない 3. どちらでもない 4. どちらかといえばそう思う 5. 非常にそう思う」。集計では、選択肢1と2の総計に、3の半数を加えた。

8. 仕事そのものについての満足

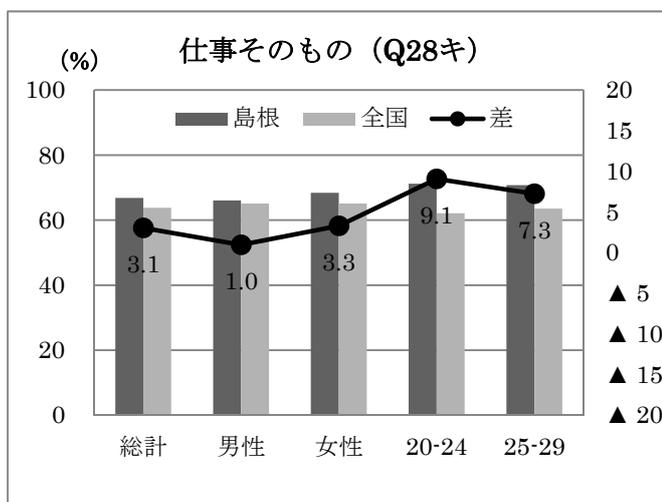
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 28 次のア～ケの各項目について満足度をおたずねします。 (キ)仕事そのもの 1. 満足 2. やや満足 3. やや不満 4. 不満	1+2
「れんごう」調査	Q18. あなたは現在の職場生活の中で、以下のA～Rの各項目についてどのように感じていますか。 1 仕事が自分に合っていない 1. そう思う 2. どちらともいえない 3. そうは思わない	2(×1/2) +3

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		66.9	0.0	63.8	0.0	3.1
性別	男性	66.1	▲ 0.8	65.1	1.3	1.0
	女性	68.4	1.6	65.1	1.3	3.3
年齢	20-24	71.2	4.4	62.1	▲ 1.7	9.1
	25-29	70.8	3.9	63.5	▲ 0.3	7.3
	30-34	69.8	3.0	65.8	2.0	4.1
	35-39	65.4	▲ 1.5	65.4	1.6	▲ 0.0
	40-44	65.9	▲ 1.0	62.6	▲ 1.2	3.2
	45-49	65.2	▲ 1.7	62.6	▲ 1.2	2.5
	50-54	66.2	▲ 0.6	64.2	0.4	2.0
	55-59	60.4	▲ 6.5	63.1	▲ 0.7	▲ 2.8
	60-	71.4	4.6	68.5	4.7	3.0

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：仕事そのものについての満足度¹⁰は、島根の方が全国より多少高い。その差は3.1p。なお、「サラリーマン」調査では、71.6%が満足としており島根より高くなっている¹¹。他方、「生活の質」調査で関連する質問をいくつか比べてみると、島根の方がいくらか高いと言えそうである¹²。

②性別：島根ではわずかながら女性の方が満足度は高いが、全国では男女の差はない¹³。また、男女それぞれを全国と比べてみても、男性が1.0p、女性が3.3pと、女性の方が大きい。つまり、全国と比べたとき、仕事そのものについて島根で相対的に満足度が高いのは女性と言える。

③年齢：ほとんど年齢層で島根の方が全国より高いが、その差は20代前半が最も大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に満足度が高い層は20代前半である。逆に、もっとも低いのは50代後半である。

¹⁰ ここでは特に質問のズレに留意されたい。

¹¹ ここでの問いは「現在のお仕事や職場（(1)仕事の内容）[筆者挿入]について、どのように感じていますか」（問10）、選択肢は「1. とても満足している 2. やや満足している 3. どちらともいえない 4. やや不満である 5. とても不満である」。集計では、選択肢1と2に、3の半数を加えた。なお、この調査の対象である35歳以上のみを比べてみても、島根はおおよそ5pほど低い。

¹² ここでは、「あなたは、ご自身の仕事の質について、どのように感じていますか」（問30-2）という問いにつき、以下の4項目をみた。「1. 自分の仕事は要求が厳しく、ストレスが多い」、「3. 仕事の仕方については、自分で決めることができる範囲が大きい」、「4. 仕事は単調で退屈である」、「6. 常に締切に追われている」。集計結果は、それぞれ41.7%、56.0%、71.4%、53.2%である。

¹³ ただし、「サラリーマン」調査では、男性の満足度が70.8%、女性のそれが73.5%と、女性の方が多少高くなっている。

9. 自分の仕事ぶりへの評価についての満足

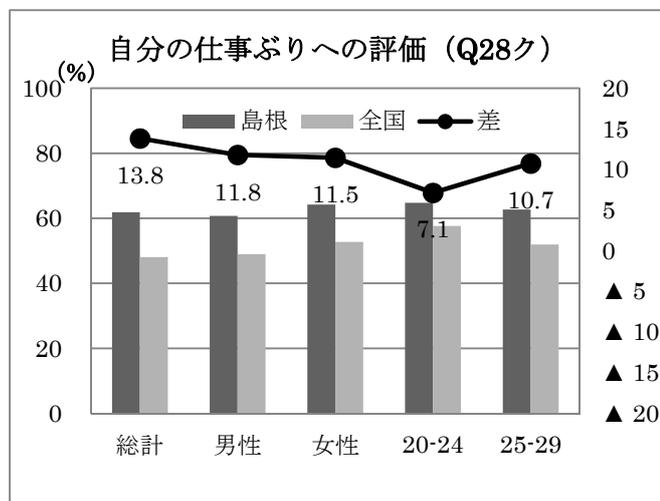
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 28 次のア～ケの各項目について満足度をおたずねします。 (ク)自分の仕事ぶりに対する評価 1. 満足 2. やや満足 3. やや不満 4. 不満	1+2
「れんごう」調査	Q18. あなたは現在の職場生活の中で、以下のA～Rの各項目についてどのように感じていますか。 D 処遇に不公平がある 1. そう思う 2. どちらともいえない 3. そうは思わない	2(×1/2) +3

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		61.9	0.0	48.1	0.0	13.8
性別	男性	60.8	▲ 1.1	49.0	0.9	11.8
	女性	64.2	2.3	52.8	4.7	11.5
年齢	20-24	64.8	2.9	57.6	9.6	7.1
	25-29	62.7	0.8	52.0	3.9	10.7
	30-34	69.4	7.6	50.9	2.8	18.6
	35-39	63.4	1.5	48.7	0.6	14.7
	40-44	63.1	1.2	47.2	▲ 0.8	15.8
	45-49	58.6	▲ 3.3	44.5	▲ 3.6	14.1
	50-54	56.0	▲ 5.9	42.2	▲ 5.8	13.8
	55-59	55.4	▲ 6.5	43.7	▲ 4.4	11.8
60-	58.3	▲ 3.6	38.9	▲ 9.1	19.4	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：自分の仕事ぶりへの評価についての満足度は、島根の方が全国より極めて高い。その差は13.8p。なお、「サラリーマン」調査では、49.1%が本データに相当する値¹⁴となっており、ここでも島根の方が高い。

②性別：島根でも全国でも女性の方が満足度は高いが、その差は島根が3.4p、全国は3.8pとほぼ同じである。また、男女それぞれを全国と比べても、その差は、男性が11.8、女性が11.5と、ほとんど変わらない。つまり、全国と比べたとき、仕事ぶりへの評価の満足について島根の男性と女性とで差はほぼないと言える。

③年齢：すべての年齢層で島根の方が全国より高いが、20代前半はその差がもっとも小さい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に満足度がもっとも低い層は20代前半である。逆に、もっとも高い層は30代前半である。

¹⁴ ここでの問いは「現在のお仕事や職場（(5)業績評価の公平さ）[筆者挿入]について、どのように感じていますか」（問10）、選択肢は「1. とても満足している 2. やや満足している 3. どちらともいえない 4. やや不満である 5. とても不満である」。集計では、選択肢1と2に、3の半数を加えた。なお、同質問では「(3)職場での地位の高さ」についても問うており、その満足度は62.5%である。

10. 教育・訓練・研修についての満足

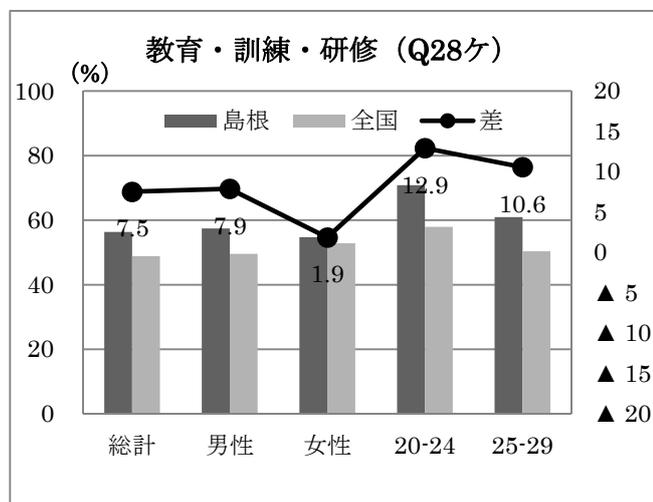
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 28 次のア～ケの各項目について満足度をおたずねします。 (ケ)教育・訓練／研修 1. 満足 2. やや満足 3. やや不満 4. 不満	1+2
「れんごう」調査	Q18. あなたは現在の職場生活の中で、以下のA～Rの各項目についてどのように感じていますか。 K 教育訓練の機会が乏しい 1. そう思う 2. どちらともいえない 3. そうは思わない	2(×1/2) +3

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		56.4	0.0	48.9	0.0	7.5
性別	男性	57.4	1.1	49.6	0.7	7.9
	女性	54.7	▲ 1.7	52.9	4.0	1.9
年齢	20-24	70.8	14.5	57.9	9.1	12.9
	25-29	61.0	4.6	50.4	1.5	10.6
	30-34	57.3	1.0	48.2	▲ 0.6	9.1
	35-39	55.0	▲ 1.4	47.5	▲ 1.3	7.5
	40-44	57.6	1.3	48.0	▲ 0.9	9.6
	45-49	53.2	▲ 3.2	47.3	▲ 1.5	5.9
	50-54	49.6	▲ 6.8	50.0	1.1	▲ 0.4
	55-59	49.5	▲ 6.9	51.3	2.4	▲ 1.8
60-	57.1	0.8	49.7	0.8	7.5	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：教育・訓練・研修についての満足度は、島根の方が全国より極めて高い。その差は7.5p。なお、「生活の質」調査¹⁵では、40.6%が本データに相当する値となっており、ここでも島根の方が高い。

②性別：島根では女性の方が満足度は低いが、全国では逆である。また、男女それぞれを全国と比べてみても、その差は、男性が7.9p、女性が1.9pと、女性の方がかなり小さい。つまり、全国と比べたとき、教育・訓練・研修について島根で相対的に満足度が高いのは男性と言える。

③年齢：50代を除き全ての年齢層で島根の方が全国より高いが、その差は20代が最も大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に満足度が高い層は20代である。逆に、もっとも低いのは50代後半である。

¹⁵ ここでの問いは「あなたは、ご自身の仕事の質（5. 将来のキャリアアップにつながる仕事である）[筆者挿入]について、どのように感じていますか」（問 30-2）、選択肢は「1. 全くそう思わない 2. どちらかといえばそう思わない 3. どちらでもない 4. どちらかといえばそう思う 5. 非常にそう思う」。集計では、選択肢3の半数に、4と5を加えた。

11. ワークライフバランスに関する会社の対応への評価

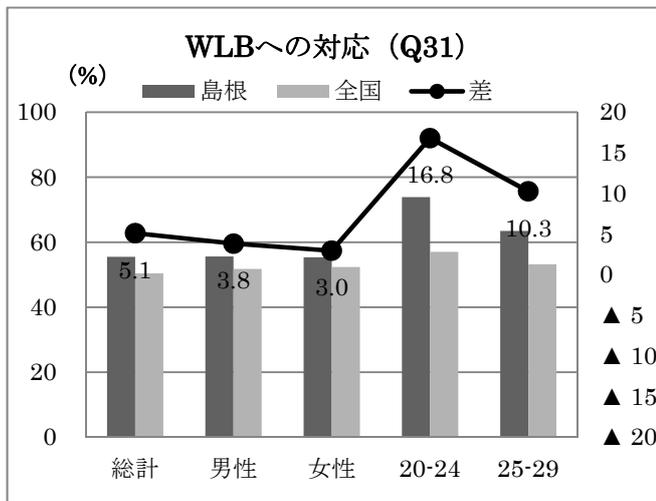
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 31 ワーク・ライフ・バランスに関するあなたの会社の対応は十分だと思いますか。 1. そう思う 2. まあそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない	1+2
「れんごう」調査	Q34. あなたは仕事と家庭生活との両立ができていますか。 1. うまく両立できている 2. 仕事の負担が大きいため両立できていない 3. 家庭生活の負担が大きいため両立できていない 4. どちらともいえない 5. 両立の必要性を感じない	1+5(×1/2)

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		55.5	0.0	50.4	0.0	5.1
性別	男性	55.6	0.1	51.8	1.4	3.8
	女性	55.4	▲ 0.2	52.4	2.0	3.0
年齢	20-24	73.9	18.3	57.0	6.6	16.8
	25-29	63.5	8.0	53.2	2.8	10.3
	30-34	60.7	5.2	49.9	▲ 0.5	10.8
	35-39	53.5	▲ 2.0	48.0	▲ 2.4	5.5
	40-44	51.2	▲ 4.3	48.0	▲ 2.4	3.2
	45-49	52.0	▲ 3.6	49.2	▲ 1.2	2.8
	50-54	48.7	▲ 6.9	52.8	2.4	▲ 4.1
	55-59	49.8	▲ 5.7	57.3	6.9	▲ 7.5
	60-	57.1	1.6	54.7	4.3	2.4

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：WLBへの会社対応について肯定的な回答の割合は、島根の方が全国よりかなり高い。その差は5.1p。なお、「国民生活選好度調査」¹⁶と「生活の質」調査¹⁷で本データに相当する値を見てみると、前者は60.2%で島根を上回るが、後者は42.1%となっており、島根より低い。

②性別：島根では男性の方が満足度は高く、全国では逆に女性の方が高いが、いずれもわずかな差である（それぞれ0.2p、1.4p）。また、男女それぞれを全国と比べると、その差は、男性が3.8p、女性が3.0pと、ほとんど変わらない。つまり、全国と比べたとき、WLBへの会社の対応に関する評価については、島根の男性と女性とでは差はほぼないと言える。

③年齢：50代を除き全ての年齢層で島根の方が全国より高いが、その差は20代前半が最も大きい。つまり、全国と比べたとき、WLB対応に関する会社の対応を相対的に島根でもっとも高く評価している層は20代前半である。逆に、もっとも低い評価の層は50代後半である。

¹⁶ 内閣府『国民生活選好度調査』（平成 21 年度）。ここでの問いは、「次のそれぞれの項目（(14)仕事と生活のバランス確保）について、あなたはどの程度満足していますか」（問9）。選択肢は、「1. 満足している 2. まあ満足している 3. どちらともいえない 4. どちらかといえば不満である 5. 不満である」。集計では、選択肢1と2に、3の半数を加えた。

¹⁷ ここでの問いは、「あなたは、ご自身の仕事の質（8. 職場は、子育てや介護をしている人にとって仕事と両立しやすい環境が整っている方である）[筆者挿入]について、どのように感じていますか」（問30-2）選択肢は、「1. 全くそう思わない 2. どちらかといえばそう思わない 3. どちらでもない 4. どちらかといえばそう思う 5. 非常にそう思う」。集計では、選択肢1と2に、3の半数を加えた。

第2節 「くらし」比較

1. 日常生活についての満足

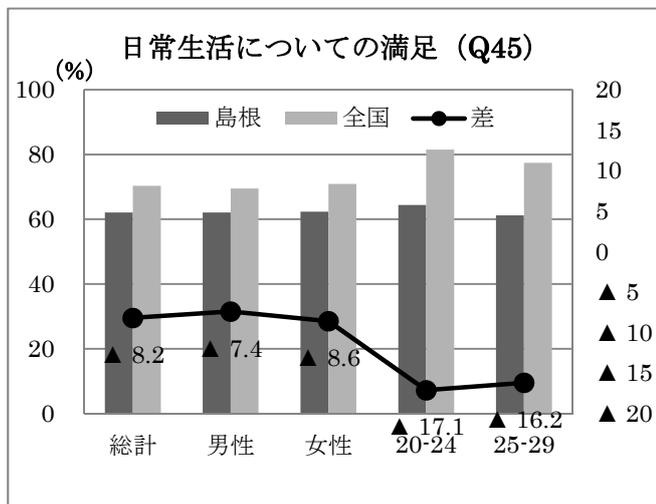
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 45 あなたは今の日常生活に満足していますか。 1. 満足 2. やや満足 3. やや不満 4. 不満	1+2
「国民生活」調査	Q2 あなたは、全体として、現在の生活にどの程度満足していますか。 (ア)満足している (イ)まあ満足している (ウ)やや不満だ (エ)不満だ	(ア)+(イ)

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		62.1	0.0	70.3	0.0	▲ 8.2
性別	男性	62.1	▲ 0.0	69.5	▲ 0.8	▲ 7.4
	女性	62.3	0.2	70.9	0.6	▲ 8.6
年齢	20-24	64.4	2.3	81.5	11.2	▲ 17.1
	25-29	61.2	▲ 0.9	77.4	7.1	▲ 16.2
	30-34	62.5	0.4	72.6	2.3	▲ 10.1
	35-39	62.9	0.8	69.4	▲ 0.9	▲ 6.5
	40-44	63.1	1.0	69.7	▲ 0.6	▲ 6.6
	45-49	59.8	▲ 2.3	69.4	▲ 0.9	▲ 9.6
	50-54	58.9	▲ 3.2	62.5	▲ 7.8	▲ 3.6
	55-59	64.9	2.8	67.9	▲ 2.4	▲ 3.0
	60-	67.9	5.7	69.4	▲ 0.9	▲ 1.5

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：日常生活についての満足度は、島根の方が全国よりかなり低い。その差は▲8.2p。なお、他の調査で本データに相当する値をみると、「れんごう」調査¹⁸が64.7%、「生活の質」調査¹⁹が70.0%、「就業実態」調査²⁰が72.2%と、いずれと比較しても島根の方が低くなっている。

②性別：島根では男女の満足度はほぼ同じ（その差0.2p）であるが、全国ではわずかながら女性の方が高い（1.4p）。また、男女それぞれを全国と比べても、その差は、男性が▲7.4p、女性が▲8.6pと、わずかながら女性の方が大きい。つまり、全国と比べたとき、日常生活について島根で相対的に満足度が高いのは男性と言える。

③年齢：全ての年齢層で島根の方が全国より低くなっているなか、その差は20代前半が最も大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に満足度のもっとも低い層は20代である。逆に、もっとも高い層は50代後半である。

¹⁸ ここでの問いは、「あなたは全体として現在の生活に満足していますか」（Q35）、選択肢は「1. 十分満足している 2. まあ満足している 3. やや不満がある 4. おおいに不満がある」。集計では選択肢1と2を合算した。

¹⁹ ここでの問いと選択肢は、「あなたは全体として最近の生活にどの程度満足していますか。『全く満足していない』を0点、『非常に満足している』を10点とすると、何点くらいになるとお考えですか」（問10）。集計では、6点から10点それぞれの回答数の合計に、5点の回答数の半数を加えた。

²⁰ 正確な問いは不明だが、「現在の生活に対する満足の状況」について問うたものである。集計では、肯定的な回答（61.8%）に「どちらともいえない」（20.8%）の半分を加えた。

2. 経済的ゆとり感

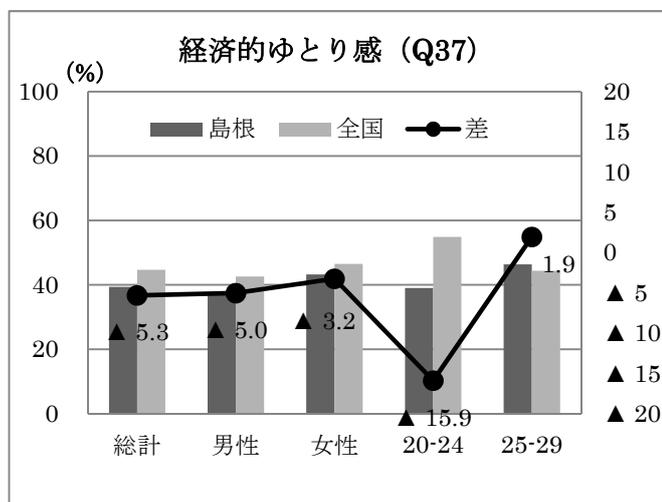
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 37 あなたは現在の生活(収入・支出)が苦しいと感じますか。 1. とてもゆとりがある 2. ややゆとりがある 3. やや苦しい 4. とても苦しい	1+2
「国民生活」調査	Q3 あなたは、次の生活のそれぞれの面では、どの程度満足していますか。 (1)所得・収入 (ア)満足している (イ)まあ満足している (ウ)やや不満だ (エ)不満だどちらともいえない わからない	(ア)+(イ)

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		39.4	0.0	44.7	0.0	▲ 5.3
性別	男性	37.6	▲ 1.8	42.6	▲ 2.1	▲ 5.0
	女性	43.3	3.9	46.5	1.8	▲ 3.2
年齢	20-24	39.0	▲ 0.4	54.9	10.2	▲ 15.9
	25-29	46.3	7.0	44.4	▲ 0.3	1.9
	30-34	40.7	1.3	45.4	0.7	▲ 4.7
	35-39	42.7	3.3	43.6	▲ 1.1	▲ 0.9
	40-44	42.9	3.6	45.3	0.6	▲ 2.4
	45-49	33.4	▲ 6.0	47.5	2.8	▲ 14.1
	50-54	33.6	▲ 5.8	41.9	▲ 2.8	▲ 8.3
	55-59	33.7	▲ 5.7	46.3	1.6	▲ 12.6
	60-	36.9	▲ 2.5	41.9	▲ 2.8	▲ 5.0

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：経済的なゆとり感については、島根の方が全国よりかなり低い。その差は▲5.3p。なお、「サラリーマン」調査での本データに相当する値は55.6%²¹、「れんごう」調査のそれは47.4%²²、いずれと比しても島根の方が低くなっている。

②性別：島根でも全国でも女性の方が経済的なゆとり感が高いが、その差は島根が5.7p、全国が3.9pと、島根の方が大きい。男女それぞれを全国と比べると、その差は男性が▲5.0p、女性が▲3.2pと、女性の方が小さい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に経済的なゆとり感が高いのは女性と言える。

③年齢：20代後半のみ、全国よりも肯定的回答の割合が高い。つまり、全国と比べて、島根で相対的に経済的ゆとり感の高い層は20代後半である。他方、20代前半は、島根のなかでは平均的な値でありながら、全国との差がもっとも大きい(▲15.9p)。つまり、全国と比べたとき、相対的にもっとも経済的ゆとり感に欠ける層は20代前半である。

²¹ ここでの問いは「現在のあなたの生活で、以下のこと(3)経済的ゆとり[筆者挿入]がどの程度満たされていると思いますか(問13)、選択肢は「1.十分に満たされている 2.まあ満たされている 3.どちらともいえない 4.やや欠けている 5.まったく欠けている」。集計では、選択肢1と2に、3の半数を加えた。

²² ここでの問いは、「あなたの世帯の家計状況は、現在どのくらいゆとりがありますか(Q6)、選択肢は「1.繰り越しができるぐらいのゆとりがある 2.収支トントンである 3.貯金を取り崩すなどしないと、やりくりできない」。集計では、選択肢1に2の半数を加えた。

3. 時間的ゆとり感

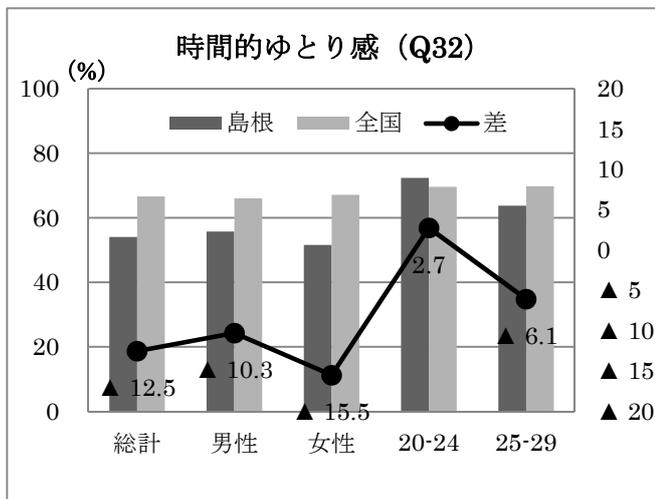
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 32 あなたの「自由な時間」(趣味、くつろぎ、交際等)は十分ですか。 1. 十分だ 2. まあ十分だ 3. やや不十分だ 4. 不十分だ	1+2
「国民生活」調査	Q6 あなたは、日頃の生活の中で、休んだり、好きなことをしたりする時間のゆとりがありますか。それとも、仕事や家事、学業などに精一杯で時間のゆとりがありませんか。この中から1つお答えください。 (ア)かなりゆとりがある (イ)ある程度ゆとりがある (ウ)あまりゆとりがない (エ)ほとんどゆとりがない わからない	(ア)+(イ)

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		54.1	0.0	66.6	0.0	▲ 12.5
性別	男性	55.7	1.6	66	▲ 0.6	▲ 10.3
	女性	51.6	▲ 2.5	67.1	0.5	▲ 15.5
年齢	20-24	72.3	18.3	69.6	3.0	2.7
	25-29	63.7	9.7	69.8	3.2	▲ 6.1
	30-34	53.2	▲ 0.9	54	▲ 12.6	▲ 0.8
	35-39	47.0	▲ 7.1	50.1	▲ 16.5	▲ 3.1
	40-44	48.0	▲ 6.1	53.5	▲ 13.1	▲ 5.5
	45-49	51.4	▲ 2.6	52.3	▲ 14.3	▲ 0.9
	50-54	53.6	▲ 0.5	57.5	▲ 9.1	▲ 3.9
	55-59	58.9	4.9	64.3	▲ 2.3	▲ 5.4
	60-	61.9	7.8	70.2	3.6	▲ 8.3

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：時間的なゆとり感については、島根の方が全国より極めて低い。その差は▲12.5p。なお、「生活の質」調査²³は島根とほぼ同じ値であるが、「サラリーマン」調査²⁴での本データに相当する値は70.7%となっており、島根の方が実に低い。

②性別：島根では女性の方が時間的ゆとり感は低い、全国では逆である。また、男女それぞれを全国と比べると、その差は男性が▲10.3p、女性が▲15.5pと、女性の方が大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に時間的ゆとり感が高いのは男性と言える。

③年齢：20代前半のみ、全国よりも時間的ゆとり感が高い。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に時間的ゆとり感の高い層は20代前半である。ただし、20代後半は全国より低く、かつ、差も最大(▲6.1p)となっている。つまり、相対的にもっとも時間的ゆとり感の低い層は20代後半である。

²³ ここでは、「次の質問は生活の各局面であなたがどの程度満足を感じているかを何うものです。各生活局面で『全く満足していない』を0点、『非常に満足している』を10点とすると何点くらいになりますか」(問11)との問いにつき、「好きなことを行う時間の長さ」と「生活における時間配分」をみた。集計結果(満足度)は、それぞれ54.0%、53.4%。

²⁴ ここでの問いは「現在のあなたの生活で、以下のこと(2)時間的ゆとり[筆者挿入]がどの程度満たされていると思いますか」(問13)、選択肢は「1.十分に満たされている 2.まあ満たされている 3.どちらともいえない 4.やや欠けている 5.まったく欠けている」。集計では、選択肢1と2に、3の半数を加えた。

4. 仕事以外の生きがい

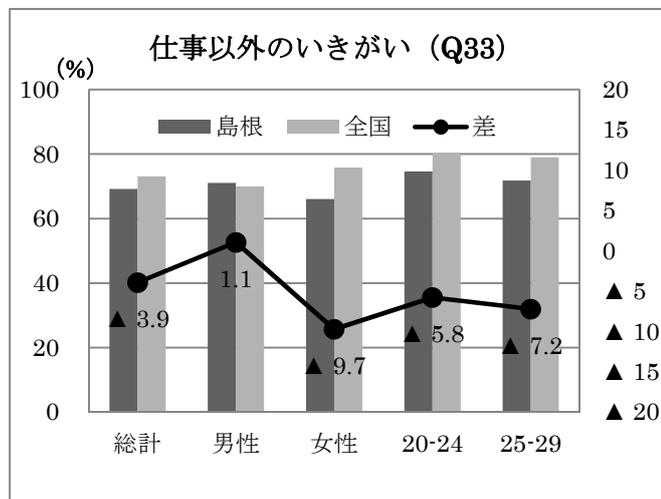
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 33 あなたは仕事以外に、生きがいを感じていますか。 1. 感じている 2. やや感じている 3. あまり感じていない 4. 全く感じていない	1+2
「国民生活」調査	Q4 あなたは、日頃の生活の中で、どの程度充実感を感じていますか。 (ア)十分充実感を感じている (イ)まあ充実感を感じている (ウ)あまり充実感を感じていない (エ)ほとんど(全く)充実感を感じていない どちらともいえない わからない	(ア)+(イ)

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		69.2	0.0	73.1	0.0	▲ 3.9
性別	男性	71.1	1.9	70	▲ 3.1	1.1
	女性	66.1	▲ 3.1	75.8	2.7	▲ 9.7
年齢	20-24	74.6	5.5	80.4	7.3	▲ 5.8
	25-29	71.8	2.6	79	5.9	▲ 7.2
	30-34	71.0	1.9	81.1	8.0	▲ 10.1
	35-39	73.2	4.1	75.9	2.8	▲ 2.7
	40-44	70.2	1.0	78.3	5.2	▲ 8.1
	45-49	65.5	▲ 3.6	73.7	0.6	▲ 8.2
	50-54	65.3	▲ 3.8	67.5	▲ 5.6	▲ 2.2
	55-59	63.2	▲ 6.0	75.4	2.3	▲ 12.2
60-	60.7	▲ 8.5	71.3	▲ 1.8	▲ 10.6	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：仕事以外の生きがい²⁵について肯定的な回答の割合は、島根の方が全国より多少低い。その差は▲3.9p。なお、「サラリーマン」調査²⁶では、65.1%が本データに相当する値となっており、多少島根の方が高くなっている。

②性別：島根では、女性の方が男性より肯定的な回答の割合が小さいが、全国では逆である。また、男女それぞれを全国と比べても、男性は島根の方が高い(1.1p)のに対し、女性は全国より低く、かつ、その差も▲9.7pとかなり大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に生きがいを強く感じているのは男性と言える。

③年齢：どの年齢層においても島根の方が低い。なかでも50代後半はその差がもっとも大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的にもっとも生きがいを感じていない層は50代後半である。逆に、もっとも強く感じている層は、50代前半である。なお、20代は島根においては比較的生きがいを感ずる割合の高い層であるが、全国の20代よりも低く、その差も総計よりも多少大きい。

²⁵ ここでは特に質問のズレに留意されたい。

²⁶ ここでの問いは、前問(「よく『生きがい』言われますが、次の中で『生きがい』を表すのに最も適当なのはどれだと思いますか。あなたのお考えに最も近いものから2つまで選んでください)をうけた形で、「そのような生きがいを、あなたは現在持っていますか」(問 15)となっている。選択肢は、「1. 持っている 2. 前は持っていたが、今は持っていない 3. 持っていない 4. わからない」。集計対象は1のみ。

5. 健康状態

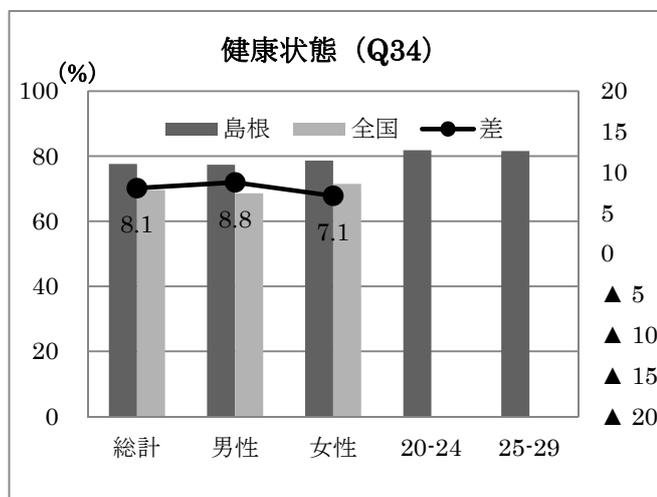
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 34 あなたの健康状態はいかがですか。 1. 良い 2. まあまあ良い 3. あまり良くない 4. 良くない	1+2
「サラリーマン」調査	問 13. 現在のあなたの生活で、以下のことがどの程度満たされていると思いますか。 (1)健康 1.十分に満たされている 2.まあ満たされている 3.どちらともいえない 4.やや欠けている 5.まったく欠けている	1+2 +3(×1/2)

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		77.6	0.0	69.6	0.0	8.1
性別	男性	77.4	▲ 0.2	68.6	▲ 1.0	8.8
	女性	78.6	1.0	71.5	2.0	7.1
年齢	20-24	81.8	4.2	-	-	-
	25-29	81.6	4.0	-	-	-
	30-34	81.7	4.1	-	-	-
	35-39	81.0	3.3	65.3	▲ 4.3	15.7
	40-44	75.7	▲ 2.0	64.8	▲ 4.8	10.9
	45-49	76.1	▲ 1.6	66.8	▲ 2.8	9.3
	50-54	74.0	▲ 3.6	65.3	▲ 4.3	8.7
	55-59	68.4	▲ 9.2	71.3	1.8	▲ 2.9
60-	73.8	▲ 3.8	70.2	0.7	3.6	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：健康状態について肯定的な回答の割合は、島根の方が全国よりかなり高い。その差は、8.1%。なお、「生活の質」調査では69.8%が本データに相当する値²⁷となっており、ここでも島根の方が高い。

②性別：島根でも全国でも女性の方が男性より肯定的な回答割合は高いが、その差は全国が3.0p、島根が1.2pと、島根の方が小さい。また、男女それぞれを全国と比べても、その差は男性が8.8p、女性が7.1pと、女性の方が多少小さい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に健康状態がよいのは男性と言える。

③年齢：20代および30代前半のデータなし。30代後半以降については、50代後半をのぞき島根の方が肯定的回答の割合が高い。ただし、その差は年齢が高くなるとともに小さくなる傾向にある。単純に推測すれば、逆に若いほど全国との差が大きい、つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に健康状態がよいのは若者である、と言えるかもしれない。

²⁷ ここでの問いは、「現在あなたの健康状態をどのように感じていますか」(問 26)、選択肢は「1. 健康である 2. どちらかといえば健康である 3. どちらともいえない 4. どちらかといえば健康ではない 5. 健康ではない」。集計では、選択肢1と2に、3の半数を加えた。

6. 日常のストレス

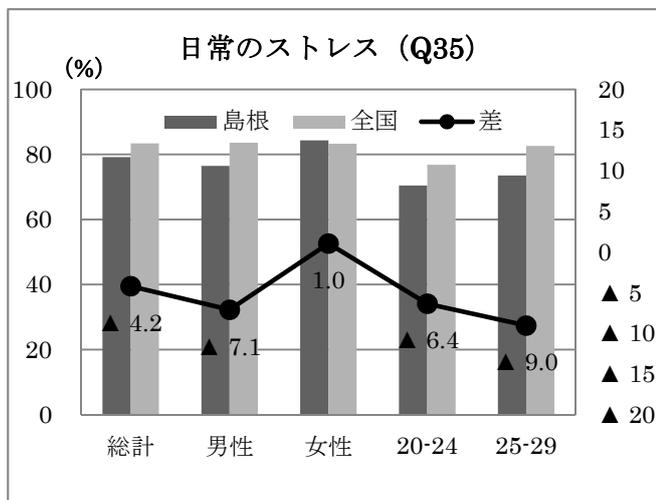
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 35 あなたは日常的にストレスを感じますか。 1. 強く感じる 2. やや感じる 3. あまり感じない 4. 全く感じない	1+2
「れんごう」調査	Q25. 最近、あなたは仕事上で精神的なストレスを感じることがありますか。 1. 常に感じている 2. 感じることが多い 3. 時々感じている 4. あまり感じない 5. まったく感じない	1+2+3

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		79.2	0.0	83.4	0.0	▲ 4.2
性別	男性	76.5	▲ 2.7	83.6	0.2	▲ 7.1
	女性	84.3	5.1	83.3	▲ 0.1	1.0
年齢	20-24	70.5	▲ 8.7	76.8	▲ 6.6	▲ 6.4
	25-29	73.6	▲ 5.6	82.6	▲ 0.8	▲ 9.0
	30-34	79.8	0.6	84.7	1.3	▲ 4.9
	35-39	78.5	▲ 0.7	84.5	1.1	▲ 6.0
	40-44	81.8	2.6	85.2	1.8	▲ 3.4
	45-49	83.6	4.4	84.9	1.5	▲ 1.3
	50-54	82.0	2.8	84.6	1.2	▲ 2.6
	55-59	80.0	0.8	77.3	▲ 6.1	2.7
	60-	71.4	▲ 7.8	69.1	▲ 14.3	2.3

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：日常的にストレスを感じている人の割合は、島根の方が多少低い。その差は▲4.2p。なお、「国民生活」調査²⁸では、66.7%が本データに相当する値となっており、島根の方が極めて高い。

②性別：島根では女性の方がストレスを感じる人の割合が高く、しかもその差も7.8pとかなり大きい。全国ではごくわずかながら女性の方が低い。また、男女それぞれを全国と比べても、男性は全国よりも低い(▲7.1p)一方、女性は全国よりも高い(1.0%)。つまり、つまり、全国と比べたとき、島根で相対的にストレスを強く感じているのは女性と言える。

③年齢：50代後半をのぞき全ての年齢層で、ストレスを感じる人の割合は全国より低いが、とくに20代後半はその差が大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的にもっともストレスが大きい層は50代後半、逆に、もっとも小さい層は20代後半である。

²⁸ ここでの問いは、「あなたは、日頃の生活の中で、悩みや不安を感じていますか、それとも、悩みや不安を感じていませんか」(Q5)、選択肢は「1. 悩みや不安を感じている 2. 悩みや不安を感じていない 3. わからない」。集計では1のみを対象とした。無論、質問のズレには特に留意が必要である。

7. メンタルヘルス疾患の可能性

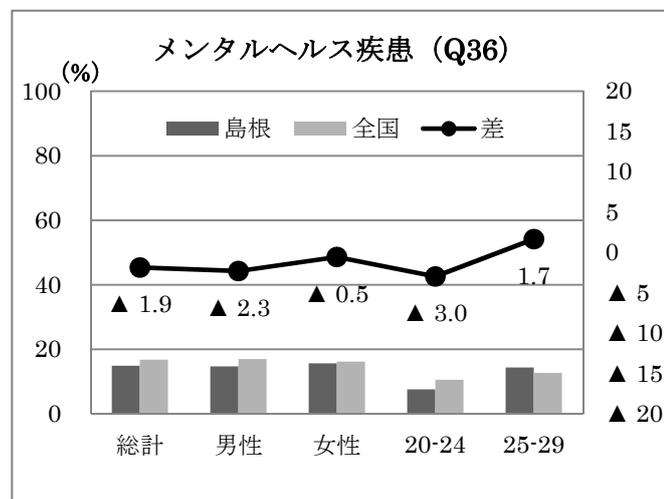
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 36 あなたはメンタルヘルス疾患(うつ病など)が自分にも起こりうる、又は起こりえたと感じますか。 1. 強く感じる 2. やや感じる 3. あまり感じない 4. 全く感じない	1
「れんごう」調査	Q18. あなたは現在の職場生活の中で、以下のA-Rの各項目についてどのように感じていますか。 0 常に過労による健康不安がある 1. そう思う 2. どちらともいえない 3. そうは思わない	1

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		14.9	0.0	16.8	0.0	▲ 1.9
性別	男性	14.7	▲ 0.2	17	0.2	▲ 2.3
	女性	15.7	0.7	16.2	▲ 0.6	▲ 0.5
年齢	20-24	7.6	▲ 7.4	10.5	▲ 6.3	▲ 3.0
	25-29	14.4	▲ 0.6	12.7	▲ 4.1	1.7
	30-34	14.5	▲ 0.5	16.1	▲ 0.7	▲ 1.6
	35-39	16.4	1.5	16.8	0.0	▲ 0.4
	40-44	18.5	3.5	18.4	1.6	0.1
	45-49	17.3	2.4	20.5	3.7	▲ 3.2
	50-54	13.6	▲ 1.4	19.3	2.5	▲ 5.8
	55-59	13.0	▲ 2.0	18.7	1.9	▲ 5.7
60-	8.3	▲ 6.6	13.4	▲ 3.4	▲ 5.1	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：メンタルヘルス疾患の可能性は、全国より島根の方が多少低い²⁹。その差は▲1.9p。

②性別：わずかながら島根では女性の方が男性よりメンタルヘルス疾患の可能性を感じる人の割合は高いが、全国では逆である（ただし、その差は0.8pと小さい）。また、男女それぞれを全国と比べても、その差は男性が▲2.3p、女性が▲0.5pと、女性の方が小さい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的にメンタルヘルス疾患の可能性を強く感じているのは女性と言える。

③年齢：ほとんどの年齢層でメンタルヘルス疾患の可能性を感じる人の割合は全国より低いかほぼ同じであるが、20代後半のみ全国よりも高い。つまり、全国と比べたとき、メンタルヘルス疾患の可能性を島根で相対的にもっとも強く感じているのは20代後半である。逆に、その可能性が島根においてもっとも弱いのは50代前半である。

²⁹ ここでは特に質問のズレおよび集計法に留意されたい。

第3節 「ちいき」比較

1. 居住地域の暮らしやすさ

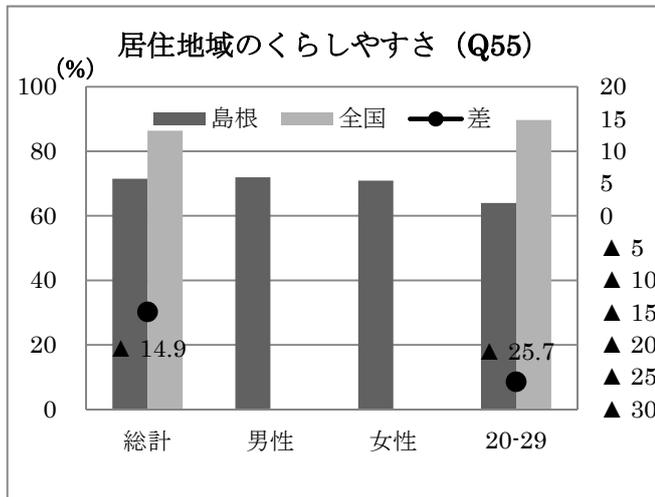
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 55 あなたが今お住まいの地域は、総合的に見て、暮らしやすい地域だと思いますか。 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	1+2 +3(×1/2)
「コミュニティ」調査 ³⁰	この地域は住みやすいまちと思うか。 1. 思う 2. まあまあ思う 3. あまり思わない 4. 思わない	1+2

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国			
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差				
総計		71.5	0.0	86.4	0.0	▲ 14.9			
性別	男性	71.9	0.4	-	-	-			
	女性	70.9	▲ 0.6	-	-	-			
年齢	20-24	66.1	64.0	89.7	▲ 3.4	▲ 25.7			
	25-29	62.6					▲ 5.4		
	30-34	70.0	71.4				85.4	1.0	▲ 14.0
	35-39	72.5							
	40-44	73.1	73.1				85.6	0.8	▲ 12.5
	45-49	73.0							
	50-54	76.1	75.3				87.9	▲ 1.5	▲ 12.6
	55-59	74.0							
60-	75.6	4.1	90.3	▲ 3.9	▲ 14.7				

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：居住地域を暮らしやすいと考える人の割合は島根の方が全国³¹よりきわめて低い。その差は▲14.9p。なお、本「コミュニティ調査」の「住みやすいと感じる理由」をみると、「交通の便」、「買い物の利便性」、「医療機関の利便性」が上位3位を占めている。

②性別：データなし。

③年齢：すべての年齢層で、島根の方が低い。とくに20代の全国との差は最大(▲25.7p)。つまり、全国と比べたとき、暮らしやすさを最も感じていない層は20代である。

³⁰ 参照、総務省・今後の都市部におけるコミュニティのあり方に関する研究会本報告書『都市部のコミュニティに関するアンケート調査報告書』(2014年3月)および当研究会中間報告資料編(2013年3月)。なお、以上には調査票が掲載されていないため、正確な質問文は不明である。ここでは、報告書の記述(特に集計結果)から推測した。

³¹ 正確に言えば、ここでの調査対象は「全国」ではなく「都市部」に限られている。

2. 地域への愛着度

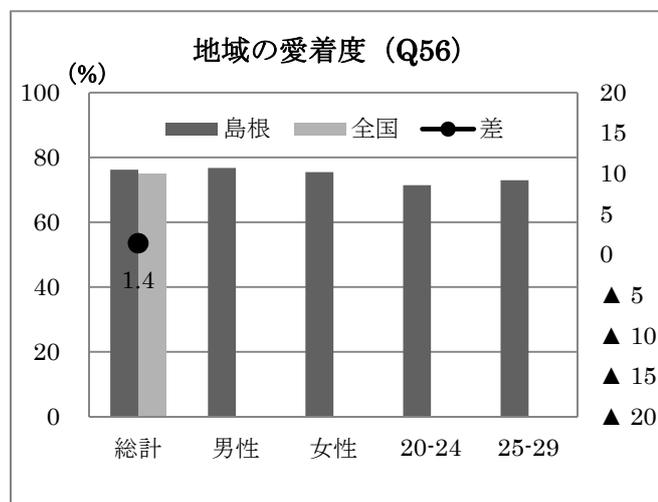
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 56 あなたは、今お住まいの地域が好きですか。 1. とても好き 2. やや好き 3. どちらとも言えない 4. やや嫌い 5. とても嫌い	1+2 +3(×1/2)
「若者意識」調査	Q37 あなたは、あなたの今住んでいる地域(市町村)が好きですか。 1. 好きである 2. どちらかといえば好きである 3. どちらかといえば好きでない 4. きらいである	1+2

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		76.2	0.0	74.8	0.0	1.4
性別	男性	76.7	0.5	-	-	-
	女性	75.4	▲ 0.8	-	-	-
年齢	20-24	71.4	▲ 4.8	-	-	-
	25-29	72.9	▲ 3.3	-	-	-
	30-34	76.8	0.6	-	-	-
	35-39	77.1	0.9	-	-	-
	40-44	79.2	3.0	-	-	-
	45-49	74.0	▲ 2.2	-	-	-
	50-54	77.2	1.0	-	-	-
	55-59	77.5	1.3	-	-	-
	60-	78.6	2.4	-	-	-

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：居住地域への愛着度は、島根の方が多少高い³²。その差は1.4p。なお、ブランド総合研究所の調査（2010年）によれば、島根県は「愛着度ランキング」29位、「自慢度」では45位にランクされている。

②性別：データなし。

③年齢：データなし。

³² 因みに、調査対象7か国中、日本は4位。上位3国は、ドイツ（83.0%）、アメリカ（79.0%）、韓国（76.0%）である。

3. 地域の不安感

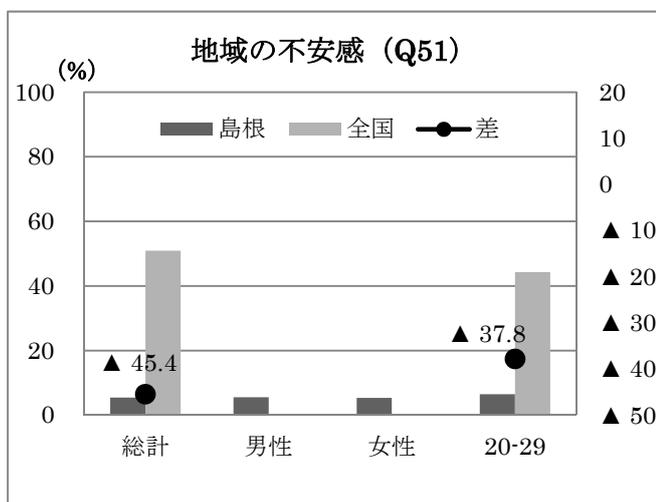
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 51 あなたがお住まいの地域は安心して暮らせると感じますか。 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	4+5
「生活の質」調査	問12 あなたは以下についてどの程度、不安を感じますか。 (2)食の安全 (3)子どもの将来 (4)治安 (5)自然災害 (6)孤独死 1. 常に感じる 2. 少し感じる 3. どちらともいえない 4. あまり感じない 5. 全く感じない	1+2

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		5.5	0.0	50.9	0.0	▲ 45.5
性別	男性	5.6	0.1			
	女性	5.4	▲ 0.1			
年齢	20-24	6.8	6.5	1.3	44.3	▲ 6.6
	25-29	6.3		0.8		
	30-34	6.3	5.5	0.9	54.3	3.4
	35-39	4.8		▲ 0.7		
	40-44	5.7	5.9	0.3	53.7	2.8
	45-49	6.1		0.6		
	50-54	3.1	3.8	▲ 2.4	53.9	3.0
	55-59	4.9		▲ 0.6		
60-	3.6	▲ 1.9	54.9	4.0	▲ 51.3	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：居住地域での不安感³³は、島根の方が全国より極めて小さい³⁴。その差は▲40.0p。

②性別：データなし。

③年齢：どの年齢層でも島根の方が不安感の小さいが、20代はその差がもっとも小さい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的にもっとも不安感の高い層は20代である。逆に、もっとも不安感の小さい層は50代である。

³³ ここでは特に質問のズレに留意されたい。なお、ここで「不安」を集計したのは、「安心」感のデータが使えないためである。加えて、「生活の質」調査では、5歳幅のデータも公表されていない。

³⁴ この「生活の質」調査には、「夜に一人で歩くとき、どの程度安全だと感じますか」を問うた質問がある。それに対する否定的な回答、つまり不安を感じる割合は22.8%である。

4. 困ったときの助力

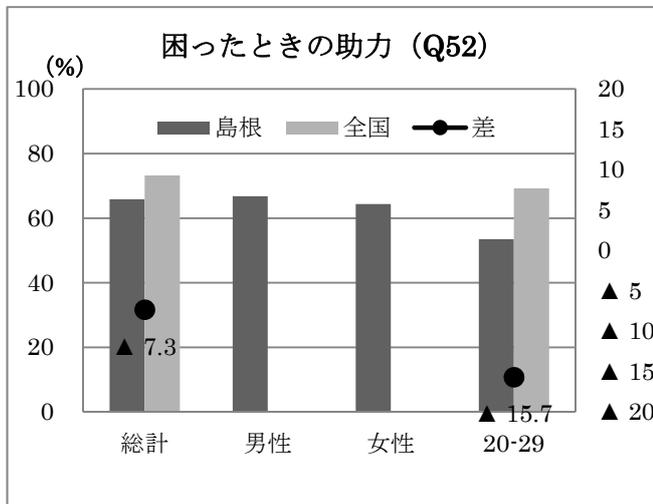
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 52 あなたが困ったときなどに、お住まいの地域の人から助力を得られると思いますか。 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	1+2 +3×(1/2)
「コミュニティ」調査 ³⁵	いざというときに近所と協力しあえるか。 1. 協力しあえる 2. おそらく協力しあえる 3. あまり協力しあえると思わない 4. まったく協力しあえると思わない	1+2

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		65.9	0.0	73.2	0.0	▲ 7.3
性別	男性	66.8	0.9			
	女性	64.4	▲ 1.5			
年齢	20-24	56.6	53.5	69.2	▲ 4.0	▲ 15.7
	25-29	59.2				
	30-34	61.7	52.0	68.6	▲ 4.6	▲ 16.6
	35-39	64.3				
	40-44	69.1	62.0	70.4	▲ 2.8	▲ 8.4
	45-49	69.8				
	50-54	70.7	63.1	79.2	6.0	▲ 16.1
	55-59	70.2				
60-	70.8	5.0	85.7	12.5	▲ 14.9	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：困ったときに地域の人から助力を得られる³⁶と考えている人の割合は、島根の方がかなり低い。その差は▲7.3p。

②性別：データなし。

③年齢：どの年齢層でも島根の方が助力を得られると考える人の割合は低い。20代は、総計と比べると倍近くの差はあるが、他のおおくの年齢層とさほど変わらない。全国と比べたとき、島根で相対的にもっとも助力を得られると考える割合の高い層は40代である。

³⁵ 本報告書には調査票が掲載されていないため、正確な質問文は不明である。ここでは、報告書の記述（特に集計結果）から推測した。

³⁶ ここでは特に質問のズレ（「困ったとき」と「いざというとき」）には留意されたい。

5. 子育て環境への評価

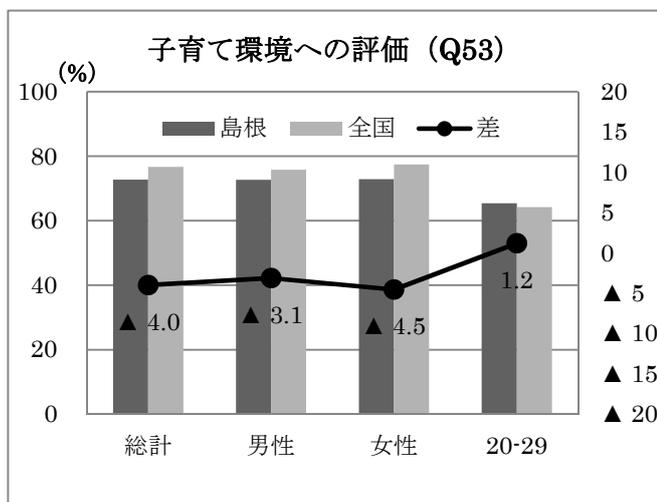
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 53 あなたが今お住まいの地域は、子育てするのに良い環境だと思いますか。 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	1+2 +3×(1/2)
「母子保健」 ³⁷ 調査	Q11 あなたは、今のお住まいの地域が、子育てに良い環境だと思いますか。 (ア)そう思う (イ)どちらかといえばそう思う (ウ)どちらかといえばそう思わない (エ)そう思わない わからない	1+2

(2) 集計表

		島根		全国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		72.7	0.0	76.7	0.0	▲ 4.0
性別	男性	72.7	▲ 0.0	75.8	▲ 0.9	▲ 3.1
	女性	72.9	0.2	77.4	0.7	▲ 4.5
年齢	20-24	65.5	65.4	64.2	▲ 12.5	1.2
	25-29	65.2				
	30-34	70.6	▲ 2.1			
	35-39	74.9	2.2			
	40-44	74.5	74.3	79.6	2.9	
	45-49	74.0				
	50-54	75.9	1.3	80.1	3.4	
	55-59	76.3	3.2			
60-	74.4	3.6	76.5	▲ 0.2	▲ 2.1	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：子育て環境に対する評価は、島根の方が全国より多少低い。その差は▲4.0p。なお、「生活の質」調査³⁸では、「子育て」についての満足が50.6%、「子育て支援サービス」に対するそれが26.4%となっており、それに比べれば島根は高い。また、「平成21年度国民生活選好度調査」³⁹では、38.9%が本データに相当する値となっており、ここでも島根の方が高い。

②性別：島根では男女の評価はほぼ同じ（その差0.2p）であるが、全国では多少女性の方が高い（1.6p）。また、男女それぞれを全国と比べても、その差は男性が▲3.1p、女性が▲4.5pと、女性の方が多少大きい。つまり、全国と比べたとき、子育て環境について島根で相対的に評価が高いのは男性と言える。

③年齢：ほとんどの年齢層で島根の方が低い。唯一の例外は20代である。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に子育て環境への評価が高い層は20代である。

³⁷ 内閣府「平成26年度 母子保健に関する世論調査」（平成26年7月）。

³⁸ ここでの問いと選択肢は、「次の質問は生活の各局面（8.子育て & 9.子育て支援サービス）[筆者挿入]でああなたがどの程度満足を感じているかを伺うものです。各生活局面で『全く満足していない』を0点、『非常に満足している』を10点とすると何点くらいになりますか」（問11）。集計では、6点から10点それぞれの回答数の合計に、5点の回答数の半数を加えた。

³⁹ ここでの問いは、「次のそれぞれの政策目標（(1)安心して子どもを産み育てることのできる社会の実現）[筆者挿入]について、現状、あなたはどの程度満足していますか」（問7）。選択肢は「1. 満足している 2. まあ満足している 3. どちらともいえない 4. どちらかといえば不満である 5. 不満である」。集計では、選択肢1と2の合計に、3の半数を加えた。

6. 介護環境への評価

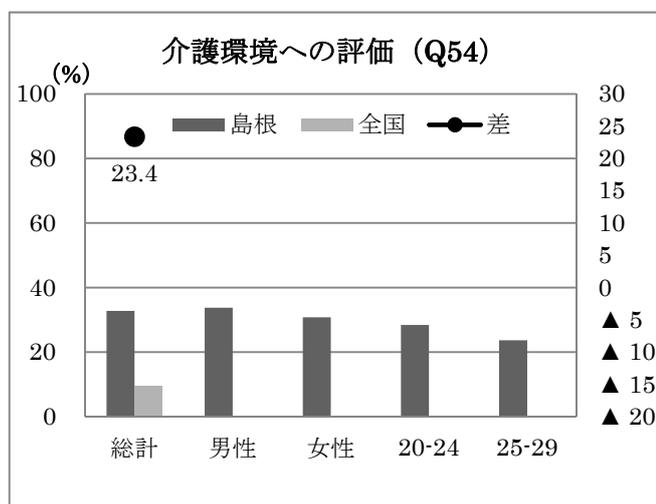
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 54 あなたが今お住まいの地域は、親の介護をするのに良い環境だと思いますか。 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	1+2
国民生活選好度調査	問 26 いまお答えいただいた各項目について、今度は、現在、それぞれがどの程度満たされているかをお答えください。 (1)十分満たされている (2)かなり満たされている (3)どちらともいえない (4)あまり満たされていない (5)ほとんど満たされていない	1+2

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		32.8	0.0	9.4	0.0	23.4
性別	男性	33.8	1.0	-	-	-
	女性	30.8	▲ 2.0	-	-	-
年齢	20-24	28.4	▲ 4.4	-	-	-
	25-29	23.7	▲ 9.1	-	-	-
	30-34	30.0	▲ 2.8	-	-	-
	35-39	31.9	▲ 0.9	-	-	-
	40-44	33.0	0.2	-	-	-
	45-49	34.1	1.3	-	-	-
	50-54	39.1	6.3	-	-	-
	55-59	38.9	6.2	-	-	-
	60-	40.5	7.7	-	-	-

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：親介護の環境に対する評価は、島根の方が極めて高い。その差は23.4p。

②性別：データなし。

③年齢：データなし。

7. 隣近所とのつきあい程度

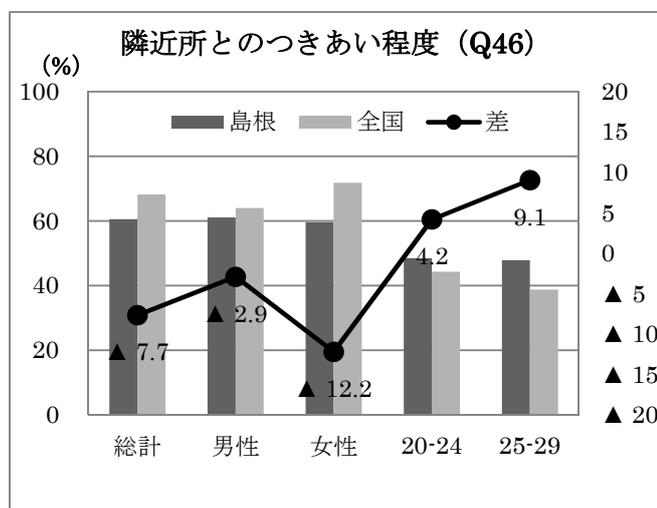
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 46 あなたは隣近所との程度のつき合いをしていますか。 1. 生活面(買い物や家族の世話など)で協力する 2. 日常的に立ち話をする 3. 挨拶程度 4. 全くしていない	1+2 +3×(1/2)
社会意識調査	Q6 あなたは、地域での付き合いをどの程度していますか。 (ア)よく付き合っている (イ)ある程度付き合っている (ウ)あまり付き合っていない (エ)全く付き合っていない わからない	(ア)+(イ)

(2) 集計表

	島 根		全 国		島根-全国
	計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計	60.5	0.0	68.2	0.0	▲ 7.7
性別	男性	61.1	64.0	▲ 4.2	▲ 2.9
	女性	59.6	71.8	3.6	▲ 12.2
年齢	20-24	48.5	44.3	▲ 23.9	4.2
	25-29	47.9	38.8	▲ 29.4	9.1
	30-34	54.3	47.3	▲ 20.9	7.0
	35-39	57.9	56.4	▲ 11.8	1.5
	40-44	62.6	64.1	▲ 4.1	▲ 1.5
	45-49	66.8	65.0	▲ 3.2	1.8
	50-54	69.0	69.5	1.3	▲ 0.5
	55-59	72.6	70.3	2.1	2.3
60-	68.5	72.5	4.3	▲ 4.0	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：隣近所とのつきあい程度は、島根の方が全国よりかなり低い^{40 41}。その差は7.7p。

②性別：島根では女性の方が男性よりつきあい程度は低い、全国では逆である。また、男女それぞれを全国と比べても、その差は、男性が▲2.9p、女性が▲12.2pと、女性の方がかなり大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的につきあい程度が高いのは男性と言える。

③年齢：島根のなかでは20代はつきあい程度のもっとも低い層であるが、全国の20代と比べたら高い。特に20代後半は、全国との差が最も大きい(9.1p)。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的につきあい程度のもっとも高い層は20代後半である。

⁴⁰ ここでは特に選択肢の違いに留意されたい。しまねプロジェクト調査にいう「挨拶程度」は、「社会意識調査」にいう「ある程度付き合っている」「あまり付き合っていない」双方に関わるであろう。そのため、「挨拶程度」の半分を集計に加えた。

⁴¹ なお、「正規職員」のみを比較してみれば、島根は64.5%、全国は55.8%と、島根の方が高い。

8. 町内会（義務的活動）への参加度

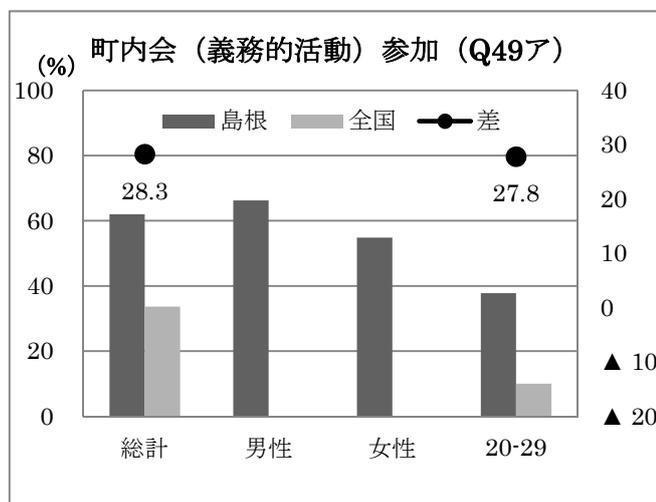
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 49 あなたは町内会や自治会の活動に参加していますか。 (ア)義務的な活動(公園の掃除など) 1. しばしば参加 2. ときどき参加 3. あまり参加しない 4. まったく参加しない	1+2
「生活の質」調査	問 28 あなたは以下のような事柄をどのくらいの頻度で行いますか。 (3)地域活動(防災訓練、町会活動等)への参加 1. 全くしない 2. あまりしない 3. たまにする 4. よくする	3+4

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根-全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		62.0	0.0	33.7	0.0	28.3
性別	男性	66.2	4.3	-	-	-
	女性	54.9	▲ 7.1	-	-	-
年齢	20-24	38.6	37.8	10.0	▲ 23.7	27.8
	25-29	37.3				
	30-34	46.2	53.1	25.0	▲ 8.7	28.1
	35-39	58.8				
	40-44	68.8	71.8	30.0	▲ 3.7	41.8
	45-49	75.7				
	50-54	77.1	79.5	40.0	6.3	39.5
	55-59	83.2				
60-	77.4	15.4	55.0	21.3	22.4	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：町内会の義務的活動への参加度は、島根の方が全国より極めて高い。その差は28.3p。なお、「コミュニティ」調査（2014）⁴²では、調査対象7地区のうちもっとも参加度合いの高い仙台B地区でも52.8%となっており、島根の方が高い。

②性別：データなし。

③年齢：島根のなかでは20代は参加度のもっとも低い層であるが、全国の20代と比べると高い⁴³。ただし、その差はもっとも小さい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に参加程度のもっとも低い層は20代である。逆に、もっとも高い層は40代となっている。

⁴² 正確な問いは不明だが、「自治会、町内会の参加状況」について問うたものである。集計では「普段参加している」に、「参加した経験がある」の半分を加えた。

⁴³ この「生活の質」調査には年齢別のクロス集計表がない。ここでの値は、掲載されているグラフから目分量で集計したものである。

9. 町内会（楽しみ活動）への参加度

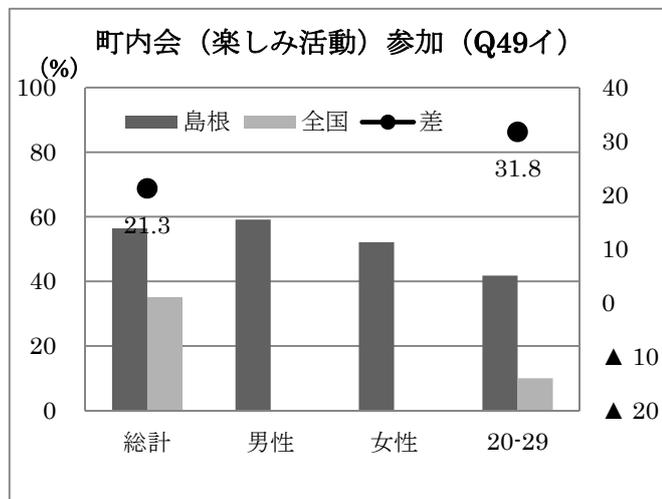
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 49 あなたは町内会や自治会の活動に参加していますか。 (イ)楽しみ活動(祭りなど) 1. しばしば参加 2. ときどき参加 3. あまり参加しない 4. まったく参加しない	1+2
「生活の質」調査	問 28 あなたは以下のような事柄をどのくらいの頻度で行いますか。 (4)地域行事への参加 1. 全くしない 2. あまりしない 3. たまにする 4. よくする	3+4

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		56.4	0.0	35.1	0.0	21.3
性別	男性	59.1	2.7	-	-	-
	女性	52.1	▲ 4.3	-	-	-
年齢	20-24	42.8	41.8	10.0	▲ 25.1	31.8
	25-29	41.1				
	30-34	47.8	51.0	30.0	▲ 5.1	21.0
	35-39	53.7				
	40-44	64.8	64.3	35.0	▲ 0.1	29.3
	45-49	63.8				
	50-54	62.2	64.4	40.0	4.9	24.4
	55-59	67.7				
60-	60.7	4.3	50.0	14.9	10.7	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：町内会の楽しみ活動への参加度⁴⁴は、島根の方が全国より極めて高い。その差は21.3p。

②性別：データなし。

③年齢：島根のなかでは20代は参加度のもっとも低い層であるが、全国の20代と比べると極めて高い。その差は他のどの年齢層よりも大きい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に参加度のもっとも高い層は20代である。

⁴⁴ ここでは特に質問のズレに留意されたい。

10. ボランティア・NPO活動への参加度

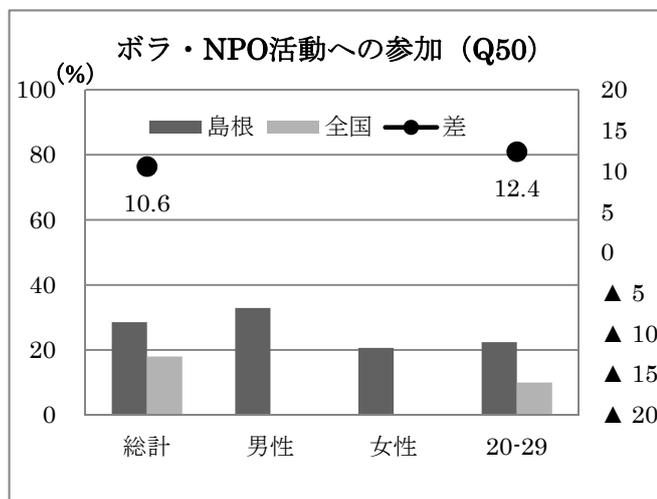
(1) 質問対応表

調査名	質問 & 選択肢	集計法
しまねプロジェクト調査	問 50 あなたはボランティア活動・NPO・市民活動にどの程度参加していますか。 1. しばしば参加 2. ときどき参加 3. あまり参加しない 4. まったく参加しない	1+2
「生活の質」調査	問 28 あなたは以下のような事柄をどのくらいの頻度で行いますか。 (5)ボランティア活動への参加 1. 全くしない 2. あまりしない 3. たまにする 4. よくする	3+4

(2) 集計表

		島 根		全 国		島根－全国
		計(%)	総計との差	計(%)	総計との差	
総計		28.6	0.0	18.0	0.0	10.6
性別	男性	32.9	4.3	-	-	-
	女性	20.7	▲ 7.9	-	-	-
年齢	20-24	21.2	22.4	10.0	▲ 8.0	12.4
	25-29	23.2				
	30-34	24.6	25.2	10.0	▲ 8.0	15.2
	35-39	25.6				
	40-44	29.0	30.5	15.0	▲ 3.0	15.5
	45-49	32.5				
	50-54	32.4	34.7	20.0	2.0	14.7
	55-59	38.2				
60-	34.5	6.0	30.0	12.0	4.5	

(3) グラフ



(4) 考察

①全体：ボランティア等への参加度は、島根の方が全国より極めて高い。その差は10.6p。なお、「サラリーマン」調査によれば、社会活動に参加している人の割合は全体で28.7%、島根とほぼ同じであるが、35歳から59歳までを5歳幅で比べてみる⁴⁵と、どの層でも島根の方が高くなっている。

②性別：データなし。

③年齢：島根のなかでは20代は参加度のもっとも低い層であるが、全国の20代と比べたら高い。ただし、その差はもっとも小さい。つまり、全国と比べたとき、島根で相対的に参加程度のもっとも低い層は20代である。逆に、もっとも高い層は40代となっている

⁴⁵ ここでの問いは、「あなたは、地域活動やボランティア活動など、何か社会に役立つ活動に参加されていますか。団体活動でも個人の活動でもかまいません」(問 12)、選択肢は「1. 定期的に参加している 2. ときどき参加している 3. 以前に参加したことがある 4. 参加していない」。集計では選択肢1と2を合算した。

地域のリノベーションが必要に

*コラム①～⑨は2015年9～10月に執筆したものです。

永井 康之（株式会社山陰経済経営研究所 経済調査部長）

アンケートの結果をみると、島根県の「働く人」の暮らしや仕事などに対する全体としての満足度はまずまずの状況と拝察しました。調査のサンプル（標本）は職業として公務員が多いことや勤務する事業所の規模が比較的大きなところが多く、地域的にも松江市がやや多いといった印象はあるものの、各種質問の回答結果は概ね実感に近く、そう違和感はないものです。

島根県の場合、従来から言われている通りで、全国と比べ、三世帯同居率が高い、持家の比率も高い、世帯員の就業でも夫婦共働き家庭が多いなど、今回の結果からもこのような傾向が表れています。

今後、人口減少が進み、現役世代にとっては、仕事をはじめ、子育て、家事、介護などの負担が重くのしかかってくるであろう時代の到来を見越すとすれば、現役世代の働き方としてのワーク・ライフ・バランスの実現とその持続は欠かせない点です。

相互扶助（共助）による負担の軽減や補完関係の強化は益々重要な視点と考えられます。三世帯で暮らす、地域コミュニティの一員、企業社会の一員であるといった平素からの人間関係が果たす役割がより重視されるように思われます。

核家族化から一人暮らし（独居）の増加、個人主義的な価値観の拡大、ネット社会化などが指摘される時代にあって、今一度こうした家族形態や地域社会、人々の関係性のモデルを模索・再構築（リノベーション）する必要があるように思われます。現状の満足度を少なくとも維持し、できれば向上させていくことがまずは、求められていくのではないのでしょうか。二世帯住宅や二地域居住、ルーム・シェアなど、人々の住まい方の多様化などその芽は既に成長を始めている気がします。

一方、過疎・少子高齢化地域といわれる島根県にあっては、大都市の専門細分化された経済社会において、特化した強みを活かすような職業観（生き方）とは異なる、総合的な人間力という強み（生きる力）を磨くことで、地域社会の多様性や環境変化への柔軟な適応力を深めていく視点も「島根ならではのスタイル」ということが言えるかもしれません。「半農半X」や「里山資本主義」、「しまね留学」等々が連想されます。次世代を担う若者、中でも女性の視点を中心とした生き方（ライフコース）のヒント（モデル）が島根県には存在しているような気がします。今回のアンケートにおいて、島根県の若年女性の大学卒業後のUターン割合が高いという結果の背景に、一つではないにせよ、何らかの理由があるものと考えられます。加えて、島根県は、出生率も高い状況にあります。このあたりを掘り下げながら、島根県の若年層の女性がさらに活躍できる社会風土づくりを模索していく視点が今後ますます重要性を増していくものと思われます。ここを端緒に将来にわたる持続可能な地域社会（「しごと」、「暮らし」の有り様）をどう創造していくかの方向性も見えてくるかもしれません。そしてこのことは、「地方創生」という大きなテーマにも重要な役割を及ぼすことにつながると想像されるところです。

私どもの会社も、地域社会の将来的な有り様や活性化の方策等について、微力ながら、調査研究レポートなどの情報提供や研修等での人づくりを通じて貢献を続けていきたいと考えています。

第4節 小括外的分析からみえる島根の特徴

1. 整理表とその見方

本節では、全国との比較からみえてくる島根（全体、女性、若者）の特徴をみていく。まずは整理表の見方を解説しておこう（図表3-1）。

図表3-1 整理表の見方

		島根	全国	差	評価	男女差	全国比の中の若者		
							20-24	25-29	
I しごと	1	仕事全般の満足	59.7	64.5	▲4.8	△	▲0.5	—	—
	2	失業に対する不安	60.6	48	▲12.6	◆	▲4.7	6.8	6.7
	3	賃金についての満足	52.5	48.1	4.4	○	4.8	▲4.2	▲0.4
	4	労働時間についての満足	64	49.1	14.9	☆	3.2	▲3.5	▲2.1
	5	休暇のとりやすさについての満足	65.8	58.3	7.5	◎	6.7	6.3	▲0.1
	6	福利厚生についての満足	72.3	53.3	19	☆	—	—	—
	7	人間関係についての満足	73.3	66.9	6.4	◎	2.6	4.6	2.8
	8	仕事そのものについての満足	66.9	63.8	3.1	○	▲2.3	6.0	4.2
	9	自分の仕事ぶりへの評価についての満足	61.9	48.1	13.8	☆	0.3	▲6.7	▲3.1
	10	教育・訓練・研修についての満足	56.4	48.9	7.5	◎	6.0	5.4	3.1
	11	WLBに関する会社の対応への評価	55.5	50.4	5.1	◎	0.9	11.7	5.1
II くらし	1	日常生活についての満足	62.1	70.3	▲8.2	×	1.2	▲8.9	▲8.0
	2	経済的ゆとり感	39.4	44.7	▲5.3	×	▲1.8	▲10.6	7.3
	3	時間的ゆとり感	54.1	66.6	▲12.5	◆	5.2	15.3	6.5
	4	仕事以外の生きがい	69.2	73.1	▲3.9	△	10.8	▲1.8	▲3.3
	5	健康状態	77.6	69.6	8.1	◎	1.7	—	—
	6	日常のストレス	79.2	83.4	4.2	○	8.1	2.2	4.8
	7	メンタルヘルス疾患の可能性	14.9	16.8	1.9	○	1.7	1.1	▲3.5
III ちいき	1	居住地域の暮らしやすさ	71.5	86.4	▲14.9	◆	—	▲10.8	
	2	地域への愛着度	76.2	74.8	1.4	○	—	—	—
	3	地域の不安感	5.5	50.9	45.5	☆	—	▲7.7	
	4	困ったときの助力	65.9	73.2	▲7.3	×	—	—	—
	5	子育て環境への評価	72.7	76.7	▲4.0	△	1.4	5.2	
	6	介護環境への評価	32.8	9.4	23.4	☆	—	—	—
	7	隣近所とのつき合い程度	60.5	68.2	▲7.7	×	9.3	11.8	16.7
	8	町内会(義務的活動)への参加度	62	33.7	28.3	☆	—	▲0.5	
	9	町内会(楽しみ活動)への参加度	56.4	35.1	21.3	☆	—	10.5	
	10	ボランティア・NPO活動への参加度	28.6	18	10.6	☆	—	1.8	

「島根」および「全国」の列には、それぞれ「総計」のデータを載せている。その横の「差」とは、

文字通り、「島根」から「全国」のデータを減じたものである。例えば、「I-1. 仕事全般の満足」については、島根の方が4.8ポイント（59.7-64.5）、全国より低いことがわかる。基本的にこの値は、プラスの方が、また、その場合大きな値であるほど、状況は島根の方がよい、ということになる。しかし、一部、これとは逆に解すべき項目が含まれていることには留意されたい。グレーの網掛け箇所、全4項目である。例えば、「I-2. 失業に対する不安」。言うまでもなく、「不安」は小さいほどよいだろう。これらについては、逆に、「全国」から「島根」を減じている。

「評価」は、**図表3-2**に示す基準に基づき機械的につけたものである。例えば、先の「仕事全般の満足」は「▲4.8」であるので「△」となる。ただし、この数値の大きさ自体は、厳密にはそれほどの意味はない。もともとの選択肢の数や、その集計法により基準が異なるからである⁴⁶。主に視覚的なイメージ喚起のため、と理解されたい。

図表3-2 「評価」の基準

差の値	▲10未満	▲10以上 ▲5未満	▲5以上 ▲0.1未満	▲0.1以上 0.1未満	0.1以上 5未満	5以上 10未満	10以上
マーク	◆	×	△	≡	○	◎	☆

「男女差」とは、正確には、全国比較のなかでみたときの島根の男女間の差を意味する。すなわち、「島根の男性と全国の男性との差」から「島根の女性と全国の女性との差」を減じたものである。例えば、「I-4. 労働時間についての満足」（3.2p）をとりあげてみよう。もとの値は**図表3-3**の通りである。

図表3-3 労働時間についての満足

	島根	全国	差
男性	62.5	47.9	14.6
女性	66.8	55.4	11.4

島根の男性と全国の男性との差は、「62.5-47.9=14.6」、女性については「66.8-55.4=11.4」。その差であるから、「14.6-11.4=3.2」となるわけである。この値がプラスであるということは、男性の方がよりよい状況にあることを意味している。ただし、それは、あくまで「全国との比較において」ということに注意されたい。この「労働時間についての満足」、島根だけをみたときは、女性の方が男性を上回っている。また、男女ともに島根の方が全国より高い。しかし、全国では、島根と同じく女性の方が男性より高いものの、その男女差は島根より大きい。そのため、それぞれの差は、男性の方

⁴⁶ 例えば、「II-7. メンタルヘルス疾患の可能性」。これについては、選択肢一つのみを集計に使っているため、その差は比較的小さくなる。

が大きくなるのである。

「全国比の中の若者」とは、「島根の若者と全国の若者との差」が「島根の全回答者（＝総計）と全国のそれとの差」と比べてどの程度か、をみたものである。具体例として、「I-2. 失業に対する不安」をみてみよう。もとのデータは**図表3-4**の通りである。

図表3-4 失業に対する不安

	島根	全国	島根－全国	総計の差との差
総計	60.6	48.0	12.6	—
20-24	48.9	43.1	5.8	6.8
25-29	51.4	45.4	5.9	6.7

総計の差は「 $60.6 - 48.0 = 12.6$ 」、20代前半・後半のそれは、それぞれ5.8p、5.9pである。総計の差の方が明らかに大きい。逆に言えば、島根の若者は、回答者の全体よりも全国との差が小さい。つまり、(ここでの「不安感」は小さいほど望ましいため)、全国との比較においては、島根の若者は全国の若者よりもよりよい状況にあるということになる。

2. 考察

(1) 全体

図表3-5 全体評価

	I しごと	II 暮らし	III ちいき	計
プラス	9	3	6	18
マイナス	2	4	4	10
計	11	7	10	28

評価を集計すると**図表3-5**の通りである。プラスの評価が6割強(18/24)であることからすれば、全体的には、島根の現状は一定程度評価できるのではないかと。特に「しごと」については、8割強の項目がプラス、かなりよい状況にあると言えそうである。因みに、ここでのマイナス評価は「仕事全般の満足」と「失業への不安」の二つ。島根の人たちは、具体的な事項については満足度が高いものの、漠然とした不安や不満を抱いている、と言えるのかもしれない。「暮らし」については、マイナスの方がやや多い。心身が比較的健康であることは無論好ましいが、特に全体的な満足度が全国よりも劣るのは気がかりである。「ちいき」については、プラスが若干上回っているものの、特に、総合的な暮らしやすさ、困ったときの助力、子育て環境への評価がマイナスであることは注意しておきたい。もちろん、社会参加の度合いが比較的高いのは実感としても理解でき、ある意味、島根の強みの一つであると言えるだろう。

参考までに、評価マークごとの集計表を図表3-6に載せておく。先述の通り、厳密に言えば数値自体にはさしたる意味はないが、☆が最も多いことはやはり特記しておいてよからう。

図表3-6 評価マークごとの集計結果

評価	◆	×	△	≡	○	◎	☆	計
実数	3	4	3	0	5	5	8	28
割合	10.7%	14.3%	10.7%	0%	17.9%	17.9%	28.6%	100%

(2) 女性

図表3-7 女性の評価

	I しごと	II 暮らし	III ちいき	計
プラス	7	6	2	15
マイナス	3	1	0	4
計	10	7	2	19

図表3-7の通り、男女差のプラスとマイナス、比にしておよそ4対1である。つまり、ごくごく単純に表現すれば、全国と比したとき、島根の男性は島根の女性よりも4倍ほどよい状況にある、と言える。

ところで、「しごと」について、マイナスとなっている項目、つまり、女性の方が相対的によい状況にある項目をみてみよう。「仕事全般の満足」、「失業に対する不安」、「仕事そのものについての満足」の3つである。これらは、比較的あいまいな問いと言える。これからすると、島根の女性は、「しごと」では、具体的な事項については男性ほどよい状況にはないものの、総合的には男性よりマシであると解釈できよう。それだけ島根の女性は受容力が高いということかもしれない。

他方、「暮らし」にあっては、女性の方が相対的によいのは「経済的ゆとり感」のみ、男性の方がいかに恵まれているか、がわかる。また、「ちいき」で「子育て環境」への評価も女性の方が低いことも気がかりである。以上要するに、島根は、随分と女性の力に支えられていると言えそうである。

(3) 若者

図表3-8 若者の評価

	20-24	25-29	20代
プラスの数	10	9	3
マイナスの数	6	7	3

図表3-8は、「総計（の全国との差）」と若者の値を比べたときのプラスマイナスの数を整理したものである。ここから判断すれば、全体的には、島根の若者は全国よりもいくらかよい状況にあると言えそうである。

次いで、年齢別「ランキング」をもとに多少具体的にみていこう。まずは、「しごと」について、

図表3-9 しごとについての項目別年齢別ランキング

しごと	2	3	4	5	7	8	9	10	11	(年齢)
	失業不安	賃金	労働時間	休暇	人間関係	仕事そのもの	仕事ぶり評価	教育・訓練	MLB	
1位	20-24	45-49	35-39	55-59	20-24	20-24	30-34	20-24	20-24	
2位	25-29	50-54	30-34	50-54	25-29	25-29	40-44	25-29	30-34	
3位	50-54	40-44	55-59	45-49	30-34	30-34	35-39	40-44	25-29	
4位	55-59	55-59	50-54	40-44	35-39	40-44	45-49	30-34	35-39	
5位	30-34	25-29	45-49	35-39	40-44	45-49	50-54	35-39	40-44	
6位	45-49	35-39	40-44	30-34	50-54	50-54	55-59	45-49	45-49	
7位	40-44	20-24	25-29	25-29	45-49	35-39	25-29	50-54	50-54	
8位	35-39	30-34	20-24	20-24	55-59	55-59	20-24	55-59	55-59	

この図表3-9からすると、島根の20代は、「賃金」や「労働時間」など、いわば「条件」については、全国との比較において相対的にもっともよくない状況にあるものの、「人間関係」、「仕事そのもの」など、働くこと自体については、比較的よい状況にあると言えそうである。なお、「仕事ぶりへの評価」と「教育・訓練・研修」の状況が真逆になっていることには特に注意しておきたい。

次に、「くらし」について図表3-10をみよう。ここで特に気がかりなことは、全国と比したとき、島根の20代は「日常生活についての満足」がもっとも低い層にあるということだろう。「ストレス」はもっとも少なく、「生きがい」もそれなりに持っているにもかかわらず、である。仕事以外で「楽しめる」場が少ないことが大きな要因なのかもしれない。

加えて、ここで特筆しておくべきは、20代の前半と後半とで大きく状況が異なる項目もあるということである。例えば、20代前半は、経済的には恵まれていないが時間的な余裕がある一方、20代後半では、経済的には満足度は高いが、時間的なゆとりとメンタルヘルス疾患の可能性の点でもっとも悪い。

図表3-10 暮らしについての項目別年齢ランキング

暮らし	1	2	3	4	6	7	(年齢)
	日常生活	経済的ゆとり	時間的ゆとり	生きがい	ストレス	メンタルヘルス	
1位	55-59	25-29	20-24	50-54	25-29	50-54	
2位	50-54	35-39	30-34	35-39	20-24	55-59	
3位	35-39	40-44	45-49	20-24	35-39	45-49	
4位	40-44	30-34	35-39	25-29	30-34	20-24	
5位	45-49	50-54	50-54	40-44	40-44	30-34	
6位	30-34	55-59	55-59	45-49	50-54	35-39	
7位	25-29	45-49	40-44	30-34	45-49	40-44	
8位	20-24	20-24	25-29	55-59	55-59	25-29	

最後に、「ちいき」図表3-11をみよう。ここでも、「総合的な暮らしやすさ」や「地域での不安」について若者が最下位であることが気になりである。先の「暮らし」とも大きく関わっているのだろう。

他方、「子育て環境」や「近所つきあい」が上位にあることは明るい材料と言っていいだろう。また、町内会活動のうち「義務的活動」と「楽しみ活動」とで真逆の結果が出ていることは、若者を地域に誘うときの留意点を教えてくれているのかもしれない。

図表3-11 ちいきについての項目別年齢ランキング

ちいき	1	3	4	5	7	8	9	10	(年齢)
	暮らしやすさ	地域不安	困ったとき	子育て環境	近所つきあい	町内会(義務)	町内会(楽しみ)	ボランティア	
1位	40-	50-	40-	20-	25-29 30-34	40-	20-	40-	
2位	50-	30-	20-	30-	20-24 55-59	50-	40-	30-	
3位	30-	40-	50-	50-	45-49 35-39	30-	50-	50-	
4位	20-	20-	30-	40-	50-54 40-44	20-	30-	20-	

若者流出の歯止めにヒント

*コラム①～⑨は2015年9～10月に執筆したものです。

足立 傑（全労済島根県本部 推進企画課長）

島根県内では、UIターン、定住促進施策に関する様々な取り組みが展開されているが、若者の県外流出、早期離職には歯止めがかかっていない状況があります。一方、島根県内に居住する方を対象とした今回のアンケート結果では、若い世代で仕事や職場に満足している傾向がみられ、また、自由な時間、仕事以外の生きがい全体平均より若者世代で高い結果となりました。この島根県内で居住する若い世代の傾向を掘り進めることが今後求められます。そのひとつの手段として「わいわいサークル」の今後の取り組みに期待するところです。

全労済は、1954年大阪で労働組合を中心とした労働者共済（労済）運動がはじまりであり、「みんなでたすけあい、豊かで安心できる社会づくり」を理念とする共済事業を行う協同組合（非営利組織）です。組合員保障の最適化を目指した活動（生活保障設計運動）を展開し、「組合員と家族の生涯の幸せ」を追求し“可処分所得向上”“確実な生活保障”の実現に向け取り組んでいます。

地域では、「地域の人々がたすけあって環境を守る活動、子どもの健やかな育ちを支える活動を支援し、活動の輪が広がることにより人と人との絆が強まりコミュニティーの形成、発展、再生につながる」ことを期待し地域貢献助成事業として取り組んでいます。さらに、「東日本大震災」を契機とした防災・減災の意識の高まりに応える活動として、防災に関する取り組み（ぼうさいカフェ）を都道府県本部単位で開催し、子どもから大人まで気軽に楽しみながら、自然災害の恐ろしさを知り、防災を学ぶことで被害の軽減を目指し、日頃からの身近な備えを呼びかけるなど、地域防災に貢献することを目的とした活動を展開しています。今後は、そのときどきの時代が求める課題を捉え、地域貢献助成事業のあり方を模索していくことが必要であり、防災に携わっている各種ボランティア団体との地域でのネットワークの形成・強化を図ること求められると感じました。

人口急減問題は、結婚・出産・子育て支援、地方への定住・移住促進、雇用創出など取り組むべき課題は多岐にわたり、日本の将来を左右する重要課題です。今回のアンケートより、衣食住という生活の基本と人との関係を楽しめる状況をつくるのが若者の県外流出、早期離職には歯止めとなるのではと感じました。住まいの安心、子育て支援の確保の視点から同居の見直し、空き家の活用による住まいや事務所の確保、コミュニティー、地方部にはこれらを確保・活用しやすい環境があるといえます。

一方、利益最優先の考え方と人が生活していくのに必要なものはかけ離れているともいわれています。今回のこの重要課題に対しては、「協働」（異なる主体が何らかの目標を共有し、ともに力を合わせ活動すること）がどこまで進むかがポイントとなると感じました。そのうえで、生活協同組合（非営利組織）である事業体として、何が担えるのかを模索していくことが今後取り組むべきことと感じました。

第 4 章

第4章 ヒアリングから見えてきた「しまねの女性、生き方・働き方」

株式会社山陰中央新報社論説委員長 高尾 雅裕

「地方に住む」ということは・・・

※プライバシー保護のため、「仮名」を使用しております。

2015年の島根も、地方創生総合計画（地方版総合戦略）の策定が佳境に入り、地域独自の人口減少対策が打ち出される、はずだった。しかし、子育て支援に進展が見られたものの、女性や若者を社会の活力としてどう生かしていくか、方向性が見えないまま、従来の総合計画の看板掛け替えに終わった自治体も多かった。

しまねプロジェクトでは、アンケートに平行して、島根の女性にヒアリングを実施した。対象はUIターン者、独身者、子育て中、子育て卒業など、20代から40代に絞り、地方人口政策の焦点となる「女性の生き方、働き方」について聞いた。浮かび上がった個別のテーマからは、「地方に住む」動機について重要な論点が得られ、今後の深掘りが必要なものも見えてきた。近年の取材や情報分析を交えて、まとめた。

第1節 地方の生活感覚

「島根かぁ」が変わった

「水都松江」と呼ばれる松江市の市街地には、堀や中小河川が縦横に巡る。川沿いの静かな環境にあるNPO「子育て研究所」を借りて、子育て中の女性に集ってもらい、今回のヒアリングがスタートした。

野崎咲良さんは東京生まれ。実家は彫刻家の父とギャラリー経営の母という芸術一家育ちで、大学を卒業してすぐに両親の会社を手伝いながらダンスの指導者になるという自分の夢を追い続けた。

「親の仕事とダンス講師、二足の草鞋でした。結婚したいのにこのままでは結婚できなさそうだけど、何がいけないかなとか色々考えて、ずっと家族と一緒にいることがいけないんじゃないかと思って、じゃあ仕事を辞めてしまえって思った」。仕事をやめたとたんに、「これで結婚できなかつたらまずい」と思ったが、「そしたら結婚できてしまったんで。仕事をやめて良かったんですけど、主人に島根に行くぞって言われ、島根かあって。私、島根がどこかも分からなかったし」。退路を断つ、思い切りの良い選択の結果、東京とはある意味対極にある島根という土地に来ることになった。

ダンスの教室は閉じて来たが、幸運なことに松江でも講師の仕事が見つかった。仕事の性質上、いつ東京に帰っても生活プランは立つのだろうが、だんだん島根暮らしが気に入ってきた。「最初は友達もいないし両親もいないし不安でした。ですが、子供を生んでからは子育てにはいい環境だと思ってます。東京は人が多すぎ、何をすることもお金がかかる。公園に行こうと思うと、電車乗って、子供

を抱えながらほんとに迷惑そうな顔されながらです。東京じゃちょっとやる自信がないなって。こっちに来てから子どもたちの顔が子どもって顔をしてるなって思ったんですよ。それがすごく良い。島根の人って奥ゆかしいから、アピールがすごく下手で、こんなに良い素材がいっぱい転がってるのにどうしてそれを活かさないんだろう」。

先立つ心配は教育問題

野崎さんが「主人はずっと島根ですが、島根にいたからっていろんな教育が受けられなかったかっていうと、そういうわけでもないし」と話すと、子供の将来について育児休業中の県職員で島根生まれの尾木芽衣子さんが話をつないだ。「本音を言えば、子供には島根に戻って欲しいんですけど、本人にはいつも大学は外に出なさいと言って育てています。ずっと島根にいと、島根の良さも分からないし、大学しか出るチャンスがない。就職も島根に戻って欲しいと思ってますけど、彼が何を専攻するか分からないので、島根に帰れないかもしれないと思っています。本当は可愛くて仕方ないので、手放したくないけど、彼の将来を思うと、それを先に決めてしまうと、専門職に就こうといった時には島根県では選択肢が少ないので。時代を見ながら。島根はいいとこだよって言いながら育ててみて、って言う感じですよ」。このあたりに、島根の若いお母さんの平均的な感覚がある、という印象を持った。

同席した柳英恵さんも島根出身。「このままいくと住んでいる所の小中学校に行って、市内の高校に行って、大学行くかなって感じになると思うんですけど。その場所に自分の子どもが適合するか適合しないかは入ってみないと分からないじゃないですか。もしその場所がその子が嫌だっていうSOSを言ってきたら、その時に考えようかなって。私たちが子どもの頃は我慢してでも行かせようって。でも今はもう時代が違うから。フリースクールかもしれない、高校いけるかわかんないってこともあるかもですけど、その子の成長と共にバックアップできると思う」。地方の選択肢の少なさは少し気になるが、その時はその時と肝が据わっている。

タイミングを見計らって

UIターンの支援をする仕事に就いた大山瑞樹さんは、大阪出身で2年前に夫の古里島根に帰ってきた。島根移住のタイミングについては、「仕事も終えて、子育ても終えて、50代6代になってからかなって思ってたんですけど、主人が自分の育ったところで子供を育てたいと。じゃあ、必然的にもっと早くなるよね、と。仕事を探すためにも、35歳くらいまでかなあ。ということでしまね定住財団を通して企業を紹介してもらったんです」。

夫が最終的に決めた会社は、「思っていた給料とギャップがあった。大阪で2人分の給料が2分の1かっていうとそうではなくって。正直、3分の1、4分の1くらいの収入になるので凄く迷いました」。

「主人には、ブランド物はないよと言われてました。一応主人なりに島根の良さを伝えようみたいな感じで、2泊3日のツアーを組んでもらって。松江とか安来とか回って、これが全てです、みたいな。それでも一緒に来てもらえますかと言う形で。確かに何にもないなって感じですけど、でも今、買おうと思ったらネットでも買えますし、実家があり年に何回か帰ることもできるし、そこはそんな

に、は気にならなかったですけど」。

夫の実家は、松江よりさらに奥まった町。「主人はゆくゆくは帰りたいみたいです。お墓も向こうにあるし。過疎が進んで若い人がいないので。両親は直接的には言わないですけど、ご近所さんとかにはね早く帰ってこいよとか、言われるようですよ」。

古里へのUターンか、県内で利便性の良い市部に途中下車するJターンなのか。さまざまな選択がこの後にも待っている。

都会の理想と地元のギャップ

「正直、帰りたくって帰ってきた訳ではないんです」というのは、30代独身の倉田麻衣さん。松江市にある労働会館で、ヒアリングに協力してくれた。後期就職氷河期世代である。「就職が決まらなかったで帰って来た。どちらかという、土地に拘らずにやりたいことがやれることが良いなあと思っていました」。

大阪で学生時代を過ごした。「楽しいこととか圧倒的に都会の方が沢山あるし、誘惑もいっぱいあるじゃないですか。特に、私、大田市ってとこの出身なんですけど、松江市に比べてもお店がない、友人もいない、皆ほとんど出ているので。だからやっぱり帰りたくなかった」。

大田市は、宝島社の月刊誌「田舎暮らしの本」が実施する「日本住みたい田舎ベストランキング」で2015年、総合1位を獲得した自治体だが、倉田さんは厳しい。「それは都会の人が憧れる理想像。田舎にいると何とも思わない。子育てするのは良いと思うんですよ。四季を感じさせながら。家には田んぼもあるので、お米育てて皆で刈ってみんなで食べようっていうのは、すごく良いと思うんですけど不便な部分の方が多い」。

結婚の希望や「大家族制」には憧れを持っているという。「やっぱり誰かは後継ぎをして欲しいです。倉田姓が途絶えたらやっぱり先祖に申し訳ない。名前、苗字ですね。県外に出ても姓が繋いでいければ別に良いかな、と。実家がみんな女性で、一人が福岡に嫁いで2番目は一応別の姓で。倉田っていう姓が終わってしまうのがとても寂しいなあと思って。かといって、養子ってあんまり考えたことなくて。親からは結婚しろとか婿養子をとれとか、跡を継げとかはないんですよ。だけど、だから余計に申し訳ない」。

倉田さんは松江市内のマスコミ関係で嘱託職員として働いていたが、その後、観光関係に転職。仕事の裁量も増え、キャリアアップを目指している。

「なんとなく」落ち着く

別の日のヒアリング、松江市の労働会館に二十代独身の藤谷葵さんほか2人が参加してくれた。藤谷さんは、高校の時には古里がそんなに好きではなく、全く知り合いのいない大学に行こうと思って県外に行った。「やっぱり出てみると、恋しくなって、結局求めて、就職ではこっちに帰ってきたので、なんだかんだでここが好きで、落ち着いているんだろうと思います」。

「落ち着く」という感覚は、「幸福感」にもつながる重要なキーワード。だが、ずっと島根に住み続

けたいかと聞くと、それは別だという。「結婚する相手による。今は知り合えるのは公務員とかが多く、クリエイティブな仕事の人は絶対もうどこかへ行っている。友達もそうですね。みんな公務員ばかり。趣味もないし、仕事と家との往復な感じで、やりたいこともないし」と、独身の悩みは深い。

第2節 定住の定義と流儀

地方移住、地方定住の主役となっているのが「地域おこし協力隊」だ。島根県内には2009年から移住が始まり、2015年現在、14市町村で90人が活躍している。任期終了後の定着率は38%。特に高くも低くもない、全国の平均的なところだろう。雲南市木次町に住む外山明日香さんを、見晴らしの良い立派な日本家屋の持ち家に訪ねた。

「食」でつながる

外山さんは、2011年に東京から島根に移住、14年まで協力隊員として地域づくりを担った。移住のきっかけは「食」だったという。「独立して、東京・三鷹台で美容や健康の仕事をしているうちに、体のもとになる食べ物に興味を沸き、そのうち食べ物を作る現場のことが気になるようになって、農のある暮らしに興味を持つようになった。一応、都会っこで、生まれも育ちも東京なので田舎暮らしにはハードルが高かったけど、東日本大震災に夫婦で西へ移住したいと思っていました」。

ネットで移住先を探した。「当面の収入と地域とのつながりをどうしようと思ってたら、地域のお手伝いをしてしばらく過ごせる制度があるんだっていうのを知り、しかも偶然ですが、東京で飲んでいた木次の牛乳ってこの牛乳なんだって。それで面白い場所だなって思って決断したんです」。

大学時代は、社会人アメリカンフットボールのアシスタントトレーナー。農業は素人。「全く関係なくて、大学時代の私を知っている人は、びっくりしてますね」。

家を買ったらさすがに定住

協力隊の任期が終わる頃。「市の空き家対策で、小さい農地も空き家とセットなら購入できる制度がありまして、ちょうど自給自足サイズくらいですが、購入しました。空き家と言っても道路幅で移転新築された一軒家で、1年、2年経たないくらいの時点で売りに出してくださったのをインターネットで見つけました。適度に街と田舎の間の地区でもあり、両方のいいとこ取りみたいな感じで、暮らしやすいです」。

移住と定住の微妙な境目。「どこからが定住なのかっていう定義は曖昧じゃないですか。もしかすると、協力隊として移住してきましたっていう時点で、定住系のカウントになっていたりするかもしれませんが、気持ちとしては仕事が終わった後、どうやって暮らして行けるかだと思う」。外山さんの場合はどうですかと聞くと、「家を買ったらさすがに定住だなって。家と農地を買ったので。ご縁の神様の国なので、神様からここで暮らしていきなさいっていうことを言われたんだなって、そういう気持ちで有り難く思っています」。

柔らかな発想と仕事の流儀

その日常は、複数の仕事を組み合わせる「マルチワーク」の達人といえる暮らしぶり。「週に1回、交流センターで広報誌を作るお手伝いとか、ブログやHPの更新とか、広報系のお仕事をして、あと、4月5月が休みなんですけど、市のスポーツのプロジェクトや文科省の学校スポーツクラブの手伝いなどをしています。中学校の部活にトップアスリートを派遣する事業もしました」。夫は町内企業に就職。農業も組み合わせて暮らす。

「その意味では、私は現代版のお百姓ですね。お百姓さんは別に米作りだけやってたわけじゃなくて、山仕事もするし畑もするし、何かを作ったりもするし、いろんな仕事を組み合わせて生活しておられたわけです。私の場合、農業への興味が強いんですが、神話や文化など、島根には潜在的な資源が多いので選択肢は多いと思う。目に見えないものの存在を、当たり前で暮しているその感じが東京とは違うし、実際暮してみても凄く大事なヒントに色んなところで気付かされます」。

マルチワークの成否は、地域に仕事の選択肢があるかどうかにかかるといえる。それを自ら開拓していくという、柔軟な「島根暮らし」だ。

第3節 実現したい自分

結婚の前後で、見えるもの、見たいものは変化する。「縁」とはよく言ったもので、自分の力ではどうしようもない面がある。にも関わらず「なぜ結婚しないんですか」「仕事はどうするんですか」と調査員は聞く。本当は「余計なお世話」である。

結婚は競争でもある

前述の藤谷葵さん（松江生まれ）は県外の大学に進学後、戻って就職。一見順調なこれまでだが、心中は複雑なものもある。「女性でも家を継ぐのにプレッシャーがあります。婿取らなきゃだめよっていわれた人もいます。3姉妹の友達だと松江市内でも競争。妹が先に結婚してしまったから、次おねえちゃんと自分で、どっちかが家を継がなきゃいけない、どうしようって、早い者勝ちしかない」。

ヒアリングに同席した真島香織さんも正職員。「ズバリどうやって相手見つけるかに困ってます。こればかりは縁のものだしね。出雲大社が近くにあるけど、参拝し過ぎて、もうなんかあんまり効果がないような…。やっぱり結婚問題は大きいです。街コン（街中出会いコンパ）とかにも参加したことありますけど、なんかあんまり発展しない、そこから。普段の生活にはそんな不満はないので、日常は結構みなさん楽しくやっていますからね」。それでも、自分で「縁」を開拓しようと、真島香織さんは今「ジムに行こうかなって。ちょっとなんか努力はしてます。まさに今、靴を買って、行こうとしています」。ジムと靴が婚活にどうつながるかは、不明だったが。

子供はほしい

2人の横で、長瀬茉央さんは子供のことに関心を向ける。長瀬さんは独身の保健師さん。看護職か

ら思い立って転職した。「子供はほしいです。私は2人ほしいです。結婚後とか仕事はできれば辞めたい。産休も育休もとって産みたい」という。

これに対して藤谷さんは「私はそんなに子どもが欲しいってわけじゃないんですけど、まあ一般的にいないといけなかなって思って。少子化問題ってわけじゃないですけど、なんとなく、ある程度の年齢になると、子どもがいないとなんかちょっと心配されたりするじゃないですか。そういわれるのが面倒くさいから…」。

という独身の声がある一方で、別の日のヒアリング会場では「私の話、参考になるかしら」と、松江市在住の渡辺麻里さん。3人の子供を持ち、育休中。19歳で最初の子を産んだ。「1人目の子供の時は相手がいたんですけど。未婚で、1人で産んで。というのも家の宗教の関係とかもあって。結婚するんだったら自分の親と縁を切れって、こんな立ち入った話しても？ 汚い話ですよ。縁を切れって言われて、でも私19の時に親と縁切れなくて。だって、嫌だったんです。1人で育てて行く決意をして、産前産後、一般的な産休をいただいて、産後1ヶ月くらいでまた仕事に出て。でもご縁をいただいて松江に来て、で、今子供がポンポンと出来て。何の話でしたっけ？」と、明るい。苦しみながらも家族の形を実現した人。最後は、たくましが決め手かも。

自宅で仕事が理想です

ヒアリングの回答で、意外と多かったのは「家でできる仕事」がしたい、という希望。柳英恵さんは、ハンドマッサージなどの技術を磨いてきた。「高校卒業してからずっと働いてきたし、高齢出産だということもあるので、これからは、できるだけ子供の傍に居ながら自分の好きな、得意とする仕事をしたいというのがあります。癒しとか、人にしてあげる仕事とか、自営業で。起業がいいよって人もおれば、止めときなあって、普通に働いときなあって人もいるし。主人は普通に働いてほしいみたい。私は仕事にのめり込んでしまうタイプなので、会社に勤めても、働けるときはがつつり働きたいですが、子供が熱が出ました、じゃあ迎えに来てくださいとなった時にすんなりOKしてくれる職場ってどのくらいあるんだろうって思うんですよね。やっぱ、それでもう辞めてしまう話とかもよく聞くので。そういうのを聞くと、はてさて自分はどうしたものやらって」。

子供にとっては、母親が家で仕事をしているというのは、一つの理想の形だろう。地方の暮らし方では、大きな要素になる。

第4節 島根で働く

今回のヒアリング調査では、労働組合の内と外、さらに正規と非正規の構造的な格差が、随所に現れた。断片的ではあるが、今後の調査に重要な視点を与えたと考えることができる。ここからは日時、会場を横断的にテーマ別に拾ってみたい。

公務員という暮らし

尾木芽衣子さんは、小学生と1歳半の子育て中。仕事は県職員。育児休業中で、制度としては3歳まで休めるが、職場と調整して2歳過ぎで復帰する予定だ。

「職場に理解を頂いて、2人目の育児休暇をゆっくり取らせて頂いています。1人目の時は、1歳1カ月で復帰しました。で、初めてだから子どもを育てながら仕事をするというのがどんなものかが分からない状態で、もう復帰したらバリバリ仕事もして子育てもして、両立するんだわって思っていたら、まず辞令をもらいに行く初日に子どもがお試し保育でもらった病気にかかって40度の熱が出て、辞令貰いについて帰ってみたい。スタートからそんな調子でした」

「子供が病気になるときに、病児保育もお願いするんだけど、今日はいっぱいですって。とにかく病気の合間に如何に自分がしなければいけない仕事をするかというとの戦いで、ちっとも楽しくなかった。仕事も楽しくなかった。今思えば、ものすごく良くしていただいたんですけど、当時あまりにも切羽詰っていたので、仕事が割り当てられているのができないと、土日に出てやるんですけど、あとで振り返ると出なくてもよかったのにつて、やっぱり余裕がなかった」。一見恵まれた環境の中にも、潜むのがワークライフバランスの課題だった。

労働組合と職場

長瀬栄央さんは看護師から保健師への転職について「労働組合もありましたが、労働条件や勤務条件はいいとはいえず、やめたんです。給料は絶対的によかったですけど。夜勤も入って三交代制。休みがない。仕事がハードすぎて、それこそ趣味とかに費やせないで、もうちょっと自分の時間が欲しかったなと思って。辞めたときはすごい不安でしたけど、ハローワーク行くと（資格があるので）大丈夫かみたいなの」。

渡辺麻里さんは「うちの会社ってね、組合が結構強いと思うんですよ。有給を取りきれなかった部分とか、あってはならない話なので。そういうのでは、良い会社かなと思っていますし。今一緒に働いている所は、小学校と保育園のお子さんがある先輩がいますけど、その方も短時間勤務を取られていて、自分を取りやすいですね。先輩は、あなたが今若いけど、あなたが先輩になった時にあなたが取ってると下の子が取りやすいから取らないとだめよって言われて、その人に、ちゃんと子育てする時間はそこしかないからしっかり取った方が良いよって言われると、勇気になりますよね」。

正職員も契約社員も悩みがある

文化事業や子育て支援で、地元では有名なNPO法人「おやこ劇場松江センター」。松田市子さんは高校卒業して銀行に5年勤めた経験を持つ。「違う係の上司に、（将来のことを考えるとき、いざとなったら）女性は結婚と出産があるからなと言われ、元々失言の多い上司だったけど失望した。私は仕事をやり続けたい。でもだんだん年齢があがると結婚かなあ、という空気も上司からとか、女同士でもあるから、そこで、いや、私の人生は私で決めると思って退職して、大学に進学して、卒業して証券会社に就職。大学の中に結構、企業セミナーとかいっていたので、事業計画『働く女性を応援する』

っていうコンセプトがあったので、将来的に子供が落ち着いたときに何か別の仕事で独立したいと思って準備中です」という。

契約社員ならではの苦労はやはり、経済面だ。話を倉田麻衣さんに戻してみると、倉田さんはピアリング当時、気持ちは転職に傾いていた。「仕事をものすごくしたくて、仕事で自分を表現したいと思っているので、かなり時間とか力を費やしているんですけど、それに対しての見返りはないっていう。正社員と同じ働きをしているんですけど、お給料は全然違う。人間関係はすごく良かった。だから全然、人が嫌でやめようとかっていうのは全くなくなって。むしろものすごい人間関係が良くて楽しいので。だから中々やめたくないっていうのはありますね。離れるのが寂しい」

仕事の価値を自分で評価したら「正社員と同じ、っていう自負も当然あった。今の給与にせめて月額プラス5万円位あったら続けられてた」。倉田さんは結局、職場を去った。職場にとっても貴重な戦力を失ったことになる。

第5節 島根の子育て

これまでのところで、仕事と子育ての両立について、さまざまな意見を聞くことができた。地域とのつながり、家族関係などについてもっと聞いてみたいとも感じたが、そこは後々の調査研究に任せるとして、いくつか入り口の視点を拾ってみる。

仕事と介護と子育てと

中井奈々子さん。結婚を機に仕事をやめてしばらくパートの勤務だった。子供ができて落ち着いて、そろそろ仕事をとった時に、「うちの家にまだ大きいおばあさん（義理の母）がおられて、ちょっと働くのはやめてくれって。いずれ介護のお世話もあるだろう、子供にもしなにかあったら家に車を運転する者がいないのはまずい。働かなくても主人の収入でまだやっていけるんじゃないかっていうことになった」。おそらくこのパターンは島根には多いと思われる。女性の社会参加を阻む「地方版ガラスの壁」といえるものだ。

阿川絵里さんは現役教員。「長女で休んでいる間に次男も作ってしまおうという計画で、続けて休みました。一回復帰して4年間働いて、また休みましたけれど、やめるという選択肢はないですね。仕事は好きですが、やはり両立というのはとっても難しく、どうしても家のことが後になってしまう。ジレンマを感じながら働いていました。犠牲にしているのが子供であり、どんどん家が無法地帯になっていく、それにストレスがありました」。

阿川さんの場合、自分の親も夫の親も近くに住み、子供の病気は「お願い！」といえれば頼める「すごいありがたい環境があった。もしその環境がなければ、やめたいと思ったかもしれません。無理です。親の協力がなくて働けないなといつも思っています」。

一方、松田市子さんは今後、夫の実家の敷地内に家を建てる予定だという。「私がしんどい時は頼るからって宣言、その代わりにばあちゃんの老後のことは任せてよ、という関係をつくった」。多世代同居

のスタートだ。

すごいピンチもあったのだ

大阪からIターンの大山瑞樹さんは、実は子育てで随分悩んだ1人。「なかなか自分の親には言えなくて。かといって。主人の両親にはもっと言えないです。ふとした会話の中で、義両親の家に行って喋った時に、子ども虐待されて亡くなるみたいな、ニュースとかあって。ほんとに何でこんなことするか分からん、みたいな話をしてるんですけど、正直私もそっちの立場だったんです。自分が産後鬱みたいになった時に、2人っきりで何十時間も、泣き止まない我が子と対峙する時に、正直、虐待をする側…本当にもう耐えきれなくて叩いてしまうっていうお母さんがいるっていうのが、ちょっと気持ちが分かるような気がして」

危ないところがあったのだが、危ない時がありますってことを口に出して言ったことで、周りも「へっ?!」みたいな、「大丈夫?」みたいな助け船が入った。「実際その渦中にいるときは、言えないですよ。自分自身も危なかったなって。ママ友とかに助けられた感じで。保健師さんとか、助産師さんとか公民館の子育てサロンなど結構自分から行けば、アプローチすればいいんですけど。なかなかそれって勇気がいる。ママ友の中でも、私みたいなIターンの人や、旦那の転勤できている人も多い。何年かしたら自分はまた違うところに行く、仲良くなってもさよならって言う人もいるから。そういう人も巻き込めたら良いのになって」、今では冷静に振り返る。

一方、松田市子さん。「働くのをぱっとやめて家庭に入ったので、主人にも育児ノイローゼになるんじゃないかって心配されたけど、意外にやってみたら子育ても主婦も忙しいし、楽しいし、ママ友とかも出来てくると、そんな焦らなくて良いかなあと思い始めてます」。何が効いたか?。「旦那のサポート。ズバリいいとこどりです。こっちが子供にこう（視界がせまくなるジェスチャー）なってるときにいいガス抜きをしてくれて、大丈夫、大丈夫と軽く言ってくれるから、あ、そうよって。お父さんの役割ってそうなんだなあって思いながら」上手くやってきたそう。

第6節 住みやすさについて

島根暮らしの良いところは、地元にはなかなか分からない。UIターンや転勤族の経験談にはヒントがあった。

自転車か車か

中井奈々子さんは「主人の転勤で大阪にもいきました。大阪って若い時にいった時は遊び感覚でした。子供を連れて2回目に行った時は、子連れの外出に困った。都会は乗りつぎも電車なので連れて行けない。もうみんな自転車ですって感じで、2駅3駅自転車でした」と振り返る。

松田市子さんも相づちを打つ。「特に、ベビーカーでの移動は段差がすごく怖かったり、エルゴ（抱っこ紐）は蒸れて大変。子育てするならやっぱり島根の方が楽。車でビューといけますもんね。遊ぶ

ところが少ないですね、都会は」という評価だ。

速水紗枝さんは「幼稚園とかには転勤族のママさんも多かった。皆さん松江は住みやすいつて言われる。自分はある県外とかしばらく出たことないもんですから、ああ、そんなもんなんだなあと思って聞いてたんですけど」。「子供が小さいうちは島根がよかったっていいながら転勤する人は結構いる」というのが、若いお母さん方のいわば常識だ。

地方の良さって何だろう

阿川絵里さんの家は「市街地から離れた団地の中なので、自治会に入って、いろんな方とみんな顔見知り。入居4年目の新米ですけど、すごいあたたかく見守ってくれる。みんなで子供に声をかけてくれて、非常に住み良い」という。

田舎の住みやすさについては、渡辺麻里さんも同じ。「最近家を建てて、新しい団地に住んでいるんですけど。皆新しい人たちがばかりなのに、旧町内と一緒に自治会で、参加しています。田舎の納会（なおらい、行事の打ち上げ宴会）みたいな付き合いも強制されなくて良いんですが、だからこそいなげなこと（変なこと）はできないけど、何かあったらきっとたぶん皆助けてくれるんだらうなっていう安心感はある」。

佐藤優希さんは「島根で周りの干渉がいっぱいある中で育っているので、それが、こう、若いうちは一時期解放されて、誰にも干渉されずに、自分の好きなときに自分の好きなことをして、仕事してっていうのがすごく楽しかったんですけど、ああいう干渉も良かったな一っていうのが、年を取って思います」との感想だ。

新しい近所づきあい

一方、松田市子さんは「私、上乃木（松江市内ではいわば山手の住宅地）なんですけど、挨拶はするけど、よくわからない。隣は空き家で、年に数回息子さんか娘さんが家の窓を開けに帰ってこられるぐらいでなので、子供が騒いでも平気っていう面はあるけど、地域の方とのお友達はあるしなかった。それが、娘が小さい頃ベビースイミングに行って転勤族の方とかが多いのでお友達ができて、そのまま、スイミングのママ友とか、幼稚園で仲良くなったお友達が増えて、そのうち皆うちに遠征してくるって感じで集まるようになった。たまに春休みとかの時にママさんとかから、いまからいつでもいい？ 子供と喧嘩ばかりで、みたいなことがあるとおいでおいでって、個人ではあるんですけど、個人だから気心がしれているから。家事ほったらかして、気分転換になったわって、また頑張ろうみたいなのができる」。

こういうのを、新しいコミュニティーというのだろう。子育て環境のヒントになる。

別の角度から、佐藤優希さんは島根にも潜在する課題を話す。「福祉のことで、こういう話してはいけないかもしれないけれど。40、50代の子供が引き込みりで、親が70、80代の方がおられる。お母さんやお父さんがヨボヨボしながら来て、うちの息子を何とかお願いしますとか言われても行政も対応できませんから。子供さんにバイトでもと言って、うんって言うてくれる親は良いんですけど、いや、

私が死ぬときには一緒に息子と死にますからみたいな感じも多い」。

子供は学生時代に県外に出て、いつの間に帰って来て、家にいるなんて近所は思わない。「親もずっと隠している。なんかそんな家が、そんじょそこらにある」らしい。

第7節 政策の視点

雇用形態に問題が潜むもの、社会意識に問題があるもの、いろいろ絡み合っている中で、政策立案への視点となるものをヒアリングレコードの中からランダムに拾ってみた。

やっぱり非正規問題

「非正規を、やっぱりなくした方が良い。日本の良いところは、年功序列で終身雇用制。非正規は、定年まで真面目に働けば、ある程度の収入があって、定年までここでお世話になれるっていう風なものがないから、いつ辞めるから分かんのにいろいろ考えられない。非正規でもたぶん60歳まで働けるがそれでも、正職員と同じ仕事をしていて、給料が倍半分違います。うちの場合は嘱託さんも、短時間職員も、職員の労働条件に合わせる取り組みをしていますから育休も取れるし、産休も取れる。だけど、一部やっぱり正規と違う。健康保険とか社会保険で給付されるものがある場合、非正規だと無償の部分もあります。」（鈴木望さん）

都会的働き方のひずみ

「県庁はめっちゃ時間遅くまで点いていて、独身の女性の人も午前2時まで勤務していたって言うていた。少子化対策の予算を取るのにその時間まで。えーっ、それじゃあ結婚相手見付けられないって」（渡辺麻里さん）

「知り合いとかは夫婦で県庁なんで、2人一緒に遅くて、もう帰ってこない。保育園が、短時間で働く人は、その短時間分しか面倒をみませんっていう制度に変わった。ちよっここっちだってね、休みたいんだけどって思う人もいますよ。ずごい都会的な仕組みに変わっちゃったなー、と」（佐藤優希さん）

シングルマザー格差

「保育料が3人目は無料になるんだけど、みんな平等にしても良いんじゃないかな。だって子供は子供だもん。離婚したりとか死別で独身で母子家庭には配慮があるんですけど、シングルマザーだともともと身分が独身なので、一切そういうのがないんです。シングルマザーっていう考えがもともと制度の考えにはなくて、あなたが選んだ道でしょみたいな感じで扱われている」（佐藤優希さん）

職業訓練のてこ入れを

「職業訓練校って、そこで学んで就職すると、ほぼ100%に近い形で斡旋されるので。働きかけは強

いですね。県としては、島根県の優秀な技術者や人材を作りたいということで学校を運営しているから、結構充実してると思います。設備投資とかは」(倉田麻衣さん)

「それって、ドイツみたいに職業教育と学術教育を同時に行うというデュアルシステムみたいな感じ？。でも、就職先が正規か非正規かによって格差がある。県としてそこまで関わっているんだったら、原則、正規社員の仕事を斡旋するところまできっちりとやる。そういう課題がありますね」(助言者、連合総研・伊東雅代氏)

情報過疎があるようで

「地域に全然馴染めなくて、ママ友も全然出来なくて。子育て支援のお母さん方が集まってやるやつ。あれにも何回か参加したんですけど、子育てサークルっていう、県とかとは全く別でやってるところに偶然知り合いができて入ることができて、そこですごく広がりました。積極的に探して行かないと難しいですね。インターネットがあまりにも情報がない。島根は。松江も。東京なんかはパッと調べれば子育ての集まりとか教室とか一杯出てくるんですけど、島根は検索してもどこに行けばいいのか分かりにくくて結局調べるのやめちゃう。出ていてもYahooマップだけ出てくるみたい。もうちょっと内容載せてくださいみたいな。いきなり参加するのは勇気がいるので。」(野崎咲良さん)

1 ターンママの支援が弱い

「市や民間も色んなことやとられるんですけど、集約するサイトを県が作ってはいるんですけど毎日アップしてくれないと機能していない。2011年とかで終わってたり。リンク切れしてたりとか。しょうがないから私が自分のブログでみなさんにお知らせしてるんです。県外から来た人達が車に乗らない人が結構おられて。免許がない、みんなバスで出歩いておられるけど、バスの行き方が書いてないんですよ。島根の事が良く分からない人たちを手厚くするような、ゼロ歳児の会じゃなくて、ようこそ島根のママのための会とか。子供のためではなくて。島根に初めて来た人達のママ友作りとか、移動手段を知りたいとか、そういう取り組みをしてほしい」(尾木芽衣子さん)

産休復帰支援制度がほしい

「仕事をしている人が、妊娠してやめると、やっぱり保育所が決まっていなくて安心して休めないんですよ。で、国がしっかり産休復帰支援制度を打ち出して、確保したところにはきちんと補助金なり予算をつけるというのを真面目にやってもらわないと、子育て支援でぽんとふわっとやられると困ります」(尾木芽衣子さん)

病児保育の支援も必要

「子供は学童に行きたいので、お母さん働いてよっていうんです。子供が少ないとそうなるのかも。週に何回かレジ打ちに出たいと思うお母さんはいると思うけど、いつ風邪をひいて呼び出しされるかわからないから、結局二の足を踏んでいる。病児保育があったら、すごくいいんじゃないかなあって

いうのは前々から思ってます」(松田市子さん)。

求職情報の提供が大切

「Iターンについては、年代にもよるとは思うんですが、うちみたいに子どもがいない状態の夫婦には何かしらの仕事を見つけて、仕事が全くないわけではないので。それが見つけられれば、何とかやってけるようになると思います。お子さんがいらっしゃる方は小学校とか、子供の学ぶ環境が大事だと思うので、そのあたりがもうちょっと分かりやすくなっていると良いのかなと」(外山明日香さん)。

第8節 労組の役割

これまでのところで「島根の女性」を取り巻く社会と、そこから見える政策的な視点が出てきた様に思う。では、そこに、労働組合としてどう関わることができるのか。労組は情報力、人的資源、ネットワークも素晴らしいものを持ち、地域貢献への意欲もあるが、昔ながらの活動内容では発揮できないジレンマを抱えていないだろうか。

県職員の立場としては

「県職労は社会貢献に力を入れているんですけど、県職労以外の人も参加できるようにはしても良いかな。自治労にしても県職労にしても。たとえば、県外から島根によろこそということで、島根の良さを親子で体験して頂く行事みたいなのを。組合って何？って人は多いと思うし。原発反対って言ったり賃上げしたり、労働条件が改善してるけど自分には関係ないわって感じなのでは。そこで、組合はこんなメリットがありますっていうことをアピールしながら、ベビーヨガとか、小学生だったら史跡探検とか。単発ではなくこういう行事は年の最初に年間スケジュールっていうチラシを作っていたら、あちこちに張っていただいて。毎年継続的にやっていくのはどうでしょう」(尾木芽衣子さん)

中間的な組織への期待

「今、組織で動くっていうのが難しい時代になった。行政であっても、労働組合とかそういうのも、個人同士が繋がって受け入れネットワークみたいのができるとういになって。(地方移住では) 中間支援組織をつくろうと自治体も頑張っていて、定住に取り組んでいるけど、行政機関的な感じもあるし。もっと柔軟な組織があれば良いなと」(外山明日香さん)

組合がないんです

「会社には組合はあるけど、嘱託職員は相談することはない。わからないです。組合がどういう活動してるのかも。自分たちで組合をとか言うのもそこまでは考えたことなかったですね。困った時は先輩や上司に相談して解決していくという形です」(倉田麻衣さん)

「Iターンして、自分の事というよりも主人の会社の方が大丈夫なのかなというところがあります。帰ってくるのが遅いし、退職の入れ替わりが激しいようで。主人のところは労働組合がなくて。しまった！、Uターンするときを確認してなかったというのがあって。労働組合は敷居が高いです」（大山瑞樹さん）

第9節 東西格差

島根県内の東西格差、市部と中山間地の地域格差問題は大きい。重要な課題であり、今後の調査研究に期待したい。

子育て格差が広がって

「東部はすごく暮らしやすいって言うか、子育てに関して言うと県西部の浜田市に帰った時に、さあどこで遊ばせようって言うのがすごくあって、支援センターの中にしかないんですよ。みんなそこに集中しているから結局子供が走り回れているかっていうとそうでもない。松江だと支援センターはあそことあそこみたいな。近くの大きい公園もある。結構、浜田はアクアス（海洋館）は年間パスしか使い道がない、さあどこいこう、ああアクアスかあみたいになる」（松田市子さん）

生活格差もあるし

「主人の実家は浜田の（周辺部の）三隅町なんですけど、正直そっちに帰るっていわれたらちょっと考える。買い物いくのも一苦労です。私の実家が平田（出雲市平田町）でもちょっと奥の方なんです。自分の母校の中学校が3月に閉校しまして、そういうのって島根県内どこでもあることで、じゃあそれでどうしたらいいのって言われても、はっきりいってわからないんです。自分は、今、島根県っていても松江に住んでいるから満足してるんだと思うんですよね。だからまた違ったところの人だったら思いも違うのかもしれないですし」（速水紗枝さん）

医療格差は大きい

「松江は良いなって思います。それは、一人目は浜田で産んで、選択肢がなく。産婦人科一つしかなかったし。やっぱり、県内の医療格差がすごいので、こういう会（連合のヒアリング調査）を西部とか隠岐でして、あちらの方の意見を聞いていただきたいなど。ほんとに病院が無くて通院が大変だし、学校も分校で、行ってみたら数人とか。スクールバスが出ますとか言ったって、大人でも毎日乗ればくたびれるような距離を毎日子どもがバスで行かなきゃいけないっていう子たちもたくさんいて。その子たちが都会に出たら、凄い便利だと思って帰って来ないのはすごく分かります。私、松江がほとんどですけど、隠岐にも浜田にもいましたけど、それぞれいいところはいっぱいあって。これからは島根に住み続けていきたいと思うんですけど。県内格差がすごくあるので。西部とか隠岐がよくなると、島根は良くなれないと思います」（尾木芽衣子さん）

「帰ってきても子供を産めないんですもん。前に住んでいた県西部の市にはそのころはまだ産婦人科があったけど、2軒とももう産科をやめて婦人科だけになりました。そういう意味で、女性に子供を産んでほしかったら、医療をきちんとしないと、子供を産めんでしょう、産めるところがないのに、どうやって産むの、みたいなどころがあります」（鈴木望さん）

第10節 終わりに

ヒアリングを通して受ける印象の一つは、福祉政策の「網目の粗さ」だった。子育て情報や必要な支援はなかなか行き届いていない。労働組合組織の情報網をたどった結果、職業的、生活環境的に比較的恵まれた立場の女性が多かったが、それでも多くの改善の必要が見え、かろうじて地域のつながりが残るといふ「島根の特性」を十分生かし切れていないようだ。

また、女性の自己実現という点や、大家族制の再評価、今回、収録できなかったが、若者だけの「わいわいサークルヒアリング」で出てきた、現代版若者宿ともいえる共同生活（シェアハウス）への期待など、さまざまな価値観を形にするための、柔らかな「政策脳」の必要が、浮かび上がったように思える。

その際、実際の行動（女性・若者支援）を通して、政策提案が形にできるのはどのような組織か。それをどう担い、何につなげていくか。労働組合組織に寄せられる期待も大きい。

地方創生の動きでは、子育て支援の分野で自治体間競争が起きている。それが少子化対策として効果を発揮するかは、「施策」の優劣とともに、リーダー掲げる「政策」のインパクトにも左右される。今回、しまねプロジェクトが取り組んだ幅広い課題の掘り起こしや柔軟な議論は、政策のヒントになるとともに、地方自治を評価する重要な視点となるだろう。

第 5 章

第5章 地域社会へのアプローチ

第1節 結び目としての労働組合の可能性

～島根の元気と安心のために連合ができること～

今回の研究事業を進める中で、様々な団体や市民の方から貴重な意見や要望をいただいた。その多くが、これまでの連合運動ではカバーできていない領域や、地域や各団体との連携・協働なくしては解決が難しい課題であった。この節では、研究事業の成果を最大限活かすための今後の取り組みの視点や、運動体として克服すべき課題等について、①政策運動の充実、②地域との協働、③研究活動の基盤づくり、の面から述べていく。

「次代につなぐ『しごと』と『くらし』～政策・制度運動の深化をめざして～

本プロジェクトでは、高齢化と人口減少が続く島根県において、「若者」と「女性」の抱える課題に焦点をあて「わいわいサークル」での意見交換や、若手の独身女性と子育て中の女性に重点をおいたヒアリングを実施してきた。特にU・Iターンをして子育て中の女性からは様々な意見をいただいた。その中で要望のあった保育施設の詳細をはじめとした子育てに関する情報提供体制充実の課題、および「ひとり親」支援（寡婦みなし制度の適用拡大）については、連合島根「政策・制度 要求と提言」（2015年10月28日、県知事あて提出済み）に盛り込むこととした。

その他の分野に関しても、島根県の特徴的な傾向として何点か課題認識を得ることができた。○若者の「起業意識（意欲）」が低調であること。（わいわいサークル、島根大学学生との意見交換より）○男性の家事全般への参画率の低さと余暇時間が多いという不思議な関係。（アンケートより）○良好な子育て環境と女性の就業率の高さ○都市部と比較して賃金は低水準だが生活はそれなりに維持できている関係。（ヒアリング等より）これらは現段階では漠然とした感覚の域を出ないところもあるが、「しごと」と「くらし」を考えていく上では関連性の高いテーマであることから、今後の活動を通じて詳細に分析していくことを課題としていきたい。

また、連合島根の政策・制度に関する取り組みとしては、対行政機関への「要求」「要請」「提言」の取り組みが柱となっているが、その内容については、地域実情の把握や市民の声を反映させる仕組みづくりも現行では不十分な点が多くあり、組合員という枠を超えることは結構難しく、今後検討を進めていく必要がある。

島根において「若者」の離職率の高さも大きな課題のひとつで、地元企業に就職した若者が短期間で離職し、県外へ転出、もしくは非正規雇用となるケースが多い。教育現場では「キャリア教育」の

充実などが課題となっているが、連合島根も従来の「働きはじめる高校生ためのワークルール講座（高校への出前事業）」の拡充を図るとともに、大学における寄附講座の開設も検討し、島根の将来を担う人材の育成に、教育分野でも積極的に活動を拡大していく予定である。

地域に根ざした運動の展開～地域再生に向け各セクターとの連携強化をめざして～

本プロジェクトでは地域再生のため「産・官・学・金・労・言」の枠組みを基本に各団体から委員に就任いただき、島根の地域課題解決に向けた各々の取り組みを共有するとともに連合運動に対しても貴重な示唆をいただいた。

連合島根としても従来から、「他団体との連携による地域活動」を運動方針に掲げてきたが、「労働者自主福祉運動」や「地域貢献活動（環境保全・地域福祉支援）」などが主であり、近年ようやくNPO団体支援活動として、財政支援（ろうきんNPO寄付システムへの活用）、事業支援（障害者の就労促進支援）が軌道に乗ってきた段階である。

本プロジェクトの研究課題のひとつが「地域再生に向けて労働組合が果たすべき役割」であった。これまでの取り組みを振り返ると、前述のような政策・制度実現に向けた取り組みの不十分さに加えて、主体的に他団体と連携あるいは協働する機会が少なかったことなどからも、労働組合として地域における社会的役割を十分に果たしていないと反省せざるを得ない。

もとより「地域再生」という大きなテーマは地域あげでの取り組みが不可欠であり、その際に連合島根のスケールメリットを活かした地域での役割、とりわけ「しごと」「くらし」に関する分野での役割を改めて自覚し「地域に顔を見せる」運動を実践していきたい。

今回のプロジェクトに参画いただいた各団体との連携はもとより、地域課題解決に向けて活動するNPO団体をはじめとする様々な団体・市民との「協働」を積極的に進めていく。

継続した研究活動とネットワークづくり～労働組合が結び目となるために～

今回のプロジェクト自体は報告書の発刊をもって終期を迎えるが、集約した各界からの意見、アンケート分析結果などは今後の活動にとっても貴重な財産であり、引き続き連合島根で活用していく。

また、次代を担う若い世代で構成する「わいわいサークル」も引き続き連合島根が事務局となり、組織内外を問わない若者の交流や意見交換、さらには地域活動の主体として活動できるようサポートしていく。併せて、今回NPO団体を始め各種団体協力の下、さまざまな立場の女性たちとの接点を持つことが出来た。この接点についてもどのように活動に落とし込むのか、連合島根として考えていきたい。

一方で、「地方創生」に向けた国・自治体の動きも加速しており、地域における政策展開の動向も注視していく必要がある。また、今回のプロジェクトの成果・課題を連合島根の政策・制度の取り組みや「地域再生」に向けた運動に連動させていくためには、日常的な情報収集や研究活動が不可欠であるが、限られた連合専従役員での取り組みにも一定の限界もあることから、引き続き他団体等とのネットワークを構築しつつ、中期的には政策研究機関の設立も視野に検討を進めていきたい。

結びにかえて

「労働組合は広義の意味でNPO・NGOである。連合はその役目を果たすべきである。」私が15年前に初めて連合専従役員になった時に、井上定彦先生（現島根県立大学名誉教授）から訓示いただいた言葉である。以来、その教えを実践してきたかを考えると正に汗顔の至りである。

島根県は、「若者の転出による人口減少」「高齢化」「地域経済の疲弊」の先進県である一方、全国で一番無名の都道府県でもあるらしい。近年は県人口が70万人を割り込み、ほとんどの自治体が増田レポートで言うところの「消滅可能都市」である。

「将来のふるさとはどうなるのか？」そうした人並みの危機感が、今回、連合総研との共同研究事業に取り組む動機であった。

2013年11月の地域づくりフォーラム「次代へつなぐ『しごと』と『くらし』～島根の元気と安心のために連合ができること～」の開催を皮切りに、プロジェクト委員会の立ち上げまで暗中模索の状況であった。（実際は今でも暗中模索ですが。）

幸いにも、各団体から快く委員として参画いただいて、どうにか報告書までまとめられることとなった。率直に申し上げれば、データ収集、分析、課題の抽出、対策（提言）の取りまとめ、までの一連の流れが研究の成果とするならば、提言の取りまとめなど不十分な点が多々あると自覚している。不十分な点は今後、連合島根の責務として運動を通じて補完していきたいと考えている。

この研究事業において各団体から多大なるご協力と様々な貴重な示唆をいただいたことは感謝にたえない。連合島根としては、運動方針に掲げる「協働」「連携」を地域に出かけて誠実に実行することを改めて確認していきたい。

第2節 地域の声なきことから見えてきたこと

地域とつながることので得られたもの

島根の女性を対象にしたヒアリング調査を、NPO団体など各種団体にご協力を得て2015年4月から5月にかけて合計8回16名に行った。これまでと全く組織の内側にとどまりがちな労働組合の活動の中で、地域で活動する各種団体や個人との関わりを持てた画期的な取り組みとなった。そして、そこから導き出されたものは、現在島根に暮らしている女性たちの過去、現在、将来にわたる島根感であり、様々な目線での課題を見つけていることだった。今回の調査の特徴的な事例であった2つの事例ととおして見えてきた課題とその課題への労働組合としての関わり方を考えた。

- ① 子育て中の複数の女性にヒアリングを実施した中からは、生活目線でのより多くの課題を抱えている現状を認識した。しかし、その課題の多くは否定的なものではなかった。都会地に比べ子育てしやすい環境のここ島根で、子育てし、暮らし続けるために前向きにとらえられていることに、ある意味驚き感じた。「子育てしやすさ日本一!？」をここ島根に暮らすみんなが共感共有することほど全国への発信力として他に勝るものはない。
- ② Iターン女性からのヒアリングでは、マルチワークを生活の糧としつつ、地域の中でより多くのネ

ネットワークを自らつくるその姿から、行動力の凄さ、たくましさを感じた。また、これまでの自らの経験と他のIターン者と共有した課題からは、より多様なIターン者を受け入れるための地域における環境整備の必要性を聞き取ることが出来た。

以上の2例を含めこの調査で感じたことは、島根の女性は「元気で前向き」であることであった。そして、それぞれが築くネットワークの中で、課題や想いの解決に向けた活発な活動を行っていること。しかし、その行動がそれぞれの暮らす地域・行政に届いておらず、課題解決に至っていない現状を聞き取ることができた。

ヒアリング調査を振り返って

では、そうしたそれぞれが考える課題解決に、労働組合がどのように今後関わって行ける可能性があるのだろうか。それは、これまで労働組合が築き上げてきた地域行政をはじめとしたネットワークと今回、そしてこれから築く可能性があるネットワークとの導線の役割ではないだろうか。

今回のヒアリング調査の大半は、これまでの労働運動でまったく関わりを持ってない各種NPO団体等のご協力を得て実現することが出来たことに感謝すると共に、それぞれと関わりを持つためのハードルが思いのほか低いことに気付くことができた。そして、労働組合に期待をする声が、この間各方面から寄せられたことに、自信とともに大きな責任も感じた。

このヒアリング調査で様々な女性たちの考えに触れた時間はわずかであった。しかし、そのことから今後の労働運動のあり方への課題とヒントを多く得ることができたことは、予想しえなかった収穫でもあった。連合が目指す地域に根ざした運動、その意味を考えさせられた調査であった。

エピソード

子育て研究所（通称：こそ研）にいっしょにお邪魔してヒアリングをさせていただきました。木の香りとぬくもりを感じることでできる素晴らしい施設。これからヒアリングをするため、お母さんから解放された子供たちは、ここぞとばかりに声を響かせながら楽しそうに走りまわっていました。こんな自由な環境で育つ島根の子供たちに将来の希望を感じるとともに、これから始まるお母さんとのヒアリングに手ごたえを感じてヒアリングはスタートしました。

都会地では子供の声が「騒音」だと言われているようですが、子どもの声がこちよく感じられる島根に、ヒアリングの最中もほっとさせられました。

期待以上の成果を得た今回のヒアリング。それも安心して子供を預けられるこの環境があってこそ！

こんな子供たちの声に希望を感じられる環境を、もっと多くの全国の子育て世代に提供したい、そして「もったいない！」気持ちになりました。



Iターン女性へのヒアリング

第3節 若者との対話をとおして見えてきたこと

わいわいサークルの目的

「わいわいサークル」は、しまねプロジェクトの目的達成に向け、アンケートや様々なメンバーへのヒアリングを実施する一方で、地域の将来像や『こんな島根を創りたい』『島根に住みたい・働きたい』といった夢や希望イメージを率直な現状認識に照らして議論できるしまねプロジェクト内に設置するワーキングチームと位置付けた。若年層の男女に集まって頂き、「若者」の意識やアイデア出しなど、まさにわいわいガヤガヤとフリーに論議し、しまねプロジェクトへの気づき・提言を頂きつつ、サークルの自発的な活動となるよう期待した。



「わいわいサークルのフリートーク」

また、サークルメンバーは学生・若手経営者・NPO活動家・非正規労働者・労組組合員・連合島根青年、女性委員会から選出頂き構成した。

わいわいサークルの開催

【第1回】

日 時 2015年3月24日（火）18:00～19:30

参加者 9名

概 要 しまねプロジェクトの活動概要の説明を行い、フリーに意見交換を実施した。各自の自己紹介を通じて、現在島根で暮らしながら（働きながら）日頃感じていることについてフリートークで進行した。

【第2回】

日 時 2015年5月15日（金）18:30～20:30

参加者 11名

概 要 島根の魅力や他の地域に比べ劣っている所などについての論議を巡らせた。また、今後このサークルとしてやってみたいことや出来ることについての可能性などについて話し合った。

【第3回】

日 時 2015年8月4日（火）18:30～20:00

参加者 11名

概要 しまねプロジェクトにて実施された「アンケート結果と概要」に基づき意見交換した。わいわいサークルとして実施できることについて具体的に論議を進め、「孫ターン」や「友ターン」島根県出身者の離職者へ向けたメッセージやCM製作などのアイデアが出された。

サークル論議の成果と反省

様々な異種の環境下の若者がサークルを形成することによる不安要素はあったものの、若者特有の感性が論議を牽引したことにより自由闊達な論議の場が持たれた。島根出身者、県外からのIターン、Uターンのメンバーも居たことから「島根どうなの?」といった課題論議に対して、多角的に意見が出され活発な論議がなされた。また基本的に島根ファンであるベースに立ち、島根での「生き方」「働き方」「暮らし方」の論議進展が、島根での「生き甲斐・人生観」「働き甲斐」「暮らしていく覚悟」といったお互いに高めあう論議が出来たことは参加者にとっても大きな成果になったものとする。参加したメンバー間の交流や視野の広がるものであった。

また、この「わいわいサークル」の論議内容は、アンケート調査およびヒアリングによる意見聴取の内容に付加すべき意見や、仮設の立案などプロジェクト論議においてもおおいに活用できる貴重な内容であった。

若者ニーズの実践案が出される中で、第3回会議以降の場面設定としっかりとしたフォローが出来なかったことは、事務局として反省するところである。

今後の展開

これほど多種の人材が集まったことはなく、参加者はもとより連合活動においても貴重な意見が聞ける機会となった。若者の柔軟な発想には驚かされることや気づかされる事が多々あった。すべての生活者、働く者の幸せづくりのための活動に参考となる要素が「わいわいサークル」にはあり、①地域における参加者同士のネットワーク化+②地域での若者独自活動実践⇒島根の活性化に繋がるものであり、連合島根として今後も継続してこのような活動を継続していく事が大切になる。地域の若者と連携できる「わいわいサークル」を発展的に継続していく。

エピソード

「わいわい」とネーミングしたこのサークルには、わいわいがやがやと自由な発想と発言、また無限の活動領域を感じる可能性を感じた。サークル論議の中で、Iターン・Uターン・また友ターン・孫ターンなどの言葉が飛び交い、人口流出や人口減少による町の衰退が懸念される島根に、人を呼び込むPR作戦が必要ではないかとの話に盛り上がった。都会地で生活する友達や、若者に安心して島根に帰ってきて欲しいとか、地元を離れたけど将来不安などで故郷が恋しくなっている人たちへ、背中を押し受け入れてあげるメッセージを発信するための具体的アクションを起こしていきたいとの一定の結論に達した。

メッセージをそのままCM化してYouTubeやニコニコ動画などの媒体への投稿放映してみようとの

方向性も定まったが、現時点では実現できていない。2016年の秋ごろをめぐりにわいわいサークルの熱いメッセージとして実現したいと考えている。

若者自らが自由な発想で考え行動することへの理解を今まで以上に深めなければ、連合や労働組合の組織課題としての青年層の活性化や、次代の担い手は育成できないと感じた。連合島根は、若い世代の可能性に期待し、寄り添い彼らの成長を応援できる存在であり続けたい。

第4節 「次代につなぐ『しごと』と『くらし』シンポジウム」の報告

2015年12月12日、しまねプロジェクトにて実施した、「しごと・くらし・ちいきに関する基礎調査」もとに、松江市のスティックビル市民活動センターにて「次代につなぐ『しごと』と『くらし』シンポジウム」を開催した。参加者は68人（男性45人、女性23人）であった。

第I部では、しまねプロジェクトの研究概要を江口委員が報告した。続いて、詩人・社会学者の水無田気流氏が、「女性と若者が元気になれる地域づくり」と題した基調講演を行った。水無田氏の講演要旨は以下の通りである。

○講演要旨

女性と若者が元気になれない理由として、男性の「関係貧困」、女性の「時間貧困」であることがあげられる。

日本人男性は女性にくらべて、自殺や孤独死、引きこもり、ホームレスの割合が高い。主流労働者として働く男性は、女性に比べて社会的に失敗が許されない風潮が強く、「就労第一主義」で就労により社会に包摂されている。そのため、地域との結びつきや仕事仲間以外とのつきあいが希薄で、社会的孤独に陥りやすいという特徴があげられる。

一方、女性は周辺労働におかれ、ケアワークや無償労働を一手に担ってきた結果、圧倒的に時間が足りない環境下におかれている。無償労働を含めた労働時間は先進国で最も長く、育児と仕事が重なる40代後半層の女性の睡眠時間は7時間をきっている。男性は企業の、女性は家庭や地域社会の「時間財」となることが前提となった社会設計がなされており、かつての皆婚時代の社会保障制度を引きずっているため、そこからこぼれおちると、社会的排除を招き、困難な状況に陥ってしまう。

あわせて、女性の6割は年収300万以下であり、仕事をしている女性の6割は第一子出産時に退職している。この構造は30年間変わっていない。そのため、女性は結婚相手に対して自分の年収の倍を求めることになる。男性の賃金が急減し、賃金ベースの上昇が鈍化する中で、生涯未婚率の上昇、ひいては超少子化の進行という悪循環が見えてくる。

島根県では、都市郊外型サラリーマン世帯でおこる孤立を反面教師とし、地域住民の生活満足度を向上していくことが重要である。地域において自立型経済を実現することが地域活性化の鍵となるが、多様性に対して寛容である地域が経済成長を果たしており、男女ともに総合的な働き方・暮らし方の見直しを果たすことが重要である。

第Ⅱ部ではワールドカフェ方式でワークショップを行い、4つのテーマ（①「報告」&「講演」について、②「若者」について、③「女性」について、④「労働界」について）について参加者間で意見を交わした。

それぞれのテーマと特徴的な意見については以下のとおりである。

①「報告」&「講演」について

- ・男性についての労働問題、という視点にハッとしました。「女性」「若者」という声は耳にしていたのでなおさら。あまり自分の人生プランについて考えたことがなかったので考えてみようと思いました。
- ・男:関係貧困 女:時間貧困 まさにその通りです。自分はそうならないように頑張りたい。

②「若者」について

- ・色々な人と話をしたが、ほとんどの人が「元気がない」って言われていたのが少しショックだった。自分も若者といわれる世代の人間だと思うので、そんなイメージを変えられるようになりたい。
- ・高齢化が進み、次代を島根の地域に残さなかった高齢者に自らの責任を感じてほしい。もっと若者を社会が寛容にしなければならない。

③「女性」について

- ・女性は強い。男性は弱い。男性が強くなるのには「自分はこのことしかやらない」との考えを変えることから始めなければならない。
- ・本当に女性は頑張りすぎてますよね。水無田气流先生のお話を聞いて都会にはない、おんぼらした女性を活かして地域活性化できる女性が増えていけばいいと思う。

④「労働界」について

- ・人が働くことに満足を覚えるのは賃金だけではない。でも組合は未だに賃上げ要求以外は少し軽く扱う傾向があると思う。もっと働く人の本音が出せる組合になることを願います。
- ・組合は必要ですが、外へのアピールがあまりない？ので組合のない職場に勤めている人にはほとんど活動等が伝わっていないと思います。どうしたら良いかわからない、答えが出ないのですが・・・。

最後に、しまねプロジェクトに参加した委員・事務局からは以下のような感想と決意表明が寄せられた。

○山陰経済経営研究所 永井委員

「しまねプロジェクトを通じて島根で暮らし、働く方たちの価値観を知ることができた。島根の女性の力が地域を支えている姿をあらためて身近に感じる事ができた」

○島根県議会議員 白石委員

「水無田氏の講演を聞いて、今も昔も女性が置かれている環境が変わっていないと感じた。同時に男性の働き方もかわいそうに感じる」

○連合島根 原田事務局長

「島根県は年間労働時間も長く、有給休暇取得率も低い。地域に波及していく働き方・働かせ方の実現にむけて、引き続き重点的に取り組んでいきたい。島根県は女性の就業率が高い一方で、地域にとっても欠かせない存在である。しまねプロジェクトの調査結果からは、男性の存在感が薄い実態が明らかになっており、仕事以外の場面でも男性が積極的に参画していくことが重要だと考えている。従来のメンバーシップ型の労働運動から脱却し、地域に踏み出す運動を展開していきたい」

第5節 このプロジェクトの結びに

— いくつもの縁（えにし）から見えた連合島根の課題—

「袖摺り合うも他生の縁」地域社会の中で、これまでは知らなかった人と袖がふれるような出会いがあります。ちょっとした事であっても、その出来事や出会いは偶然でなく生まれる前からその人に決められためぐり合わせだということがこの言葉の意味するものです。このプロジェクトを通じて連合島根は、あらためて他によって生かされる（活かされる）存在であることを認識しました。植物の種を撒いて芽を出す結果（因果）があったとしましょう。種子は、「因」発芽することは「果」で示されます。種子が発芽する過程において、そのきっかけとなる土や水、温度などの要素が「縁」になるのです。何事においても、「因」の中に含まれる「果」を生じさせるのは、「縁」であるのです。

連合は、これまで各地の地協改革を通じ「地域に顔の見える運動展開」を図ってきました。島根においても連合島根の傘下に3つの地協再編と専従者の配置を施し運動強化してきました。しかしながら、その運動展開については道半ばであり、今回のプロジェクトを通じて、労働運動の地盤である地域に対して如何に「待ち」の姿勢であったのか、地域に暮らす人々と積極的に交わる機会を持って来なかったのかについて考えさせられました。

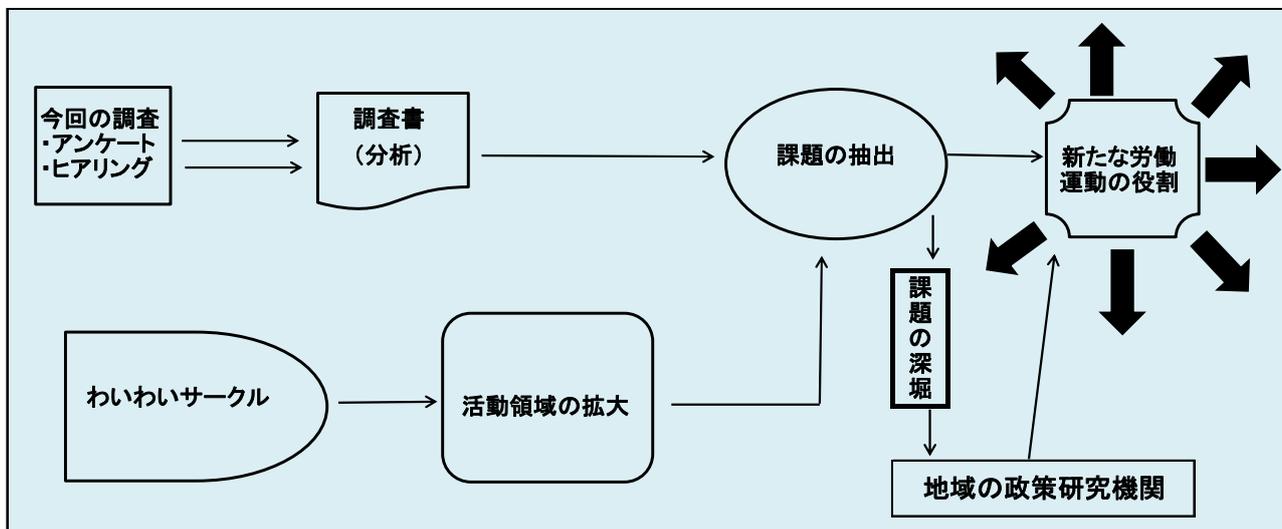
我々と共同研究に参画いただいた各団体の皆さんの後押しにより、島根で暮らす多様な生き方や、とりわけ「若者」「女性」とのご縁を頂く機会を得られたことは、このプロジェクトの大きな成果であったと感じています。そして、地域に一步踏み出すことで、未知の社会とのつながりや人との出会いにつながる当たり前の事に気付かされました。プロジェクトでの取り組みプロセスと成果は、連合島根にとって今後につながる何にも代えがたい財産になったものと考えます。

こうして、研究結果を報告書にまとめることができました。2014年4月からスタートした「次代につなぐ『しごと』と『くらし』プロジェクト」では、島根における「ちいき・しごと・くらし」のテーマについて、特に女性と若者にフォーカスし、課題を抽出してきました。組織の枠組みを超えて若者の交流を図るために結成した「わいわいサークル」では様々な地域の可能性と、若者の多様性に

驚かされ新たな発見をすることが出来ました。残念ながら現在休眠状態となっておりますが、連合島根として、より一層活動領域を拡大し、若者目線でまさしく「わいわい・がやがや」楽しむことを基本にしながら、継続した活動とすべく連合島根で引き継いでいくものといたします。地域社会は様々なステークホルダーで形成をされていますが、今回のプロジェクトを通じて「連合」といった労働団体や労働運動についても、地域に対して発信できる機会を得たものと思います。これまでの活動に留まるのではなく、発展的に新たな活動分野への挑戦をしていかなければなりません。「待ち→動」「内→外(地域)」へと運動の領域を拡大していく事が地域の期待に応えることにつながるものと確信しています。このプロジェクトで得られた地域活性化の「種」を、芽吹かせ、どのような花を咲かせることができるのか？労働運動への期待を裏切ることなく連合として関わり続けることが大切です。また、今回抽出された課題に対する深掘りと継続的な分析が必要であり、「地域の政策研究機関」の創設も検討されるべき課題の一つです。今後、将来的検討は行いつつ、既存の地域シンクタンクとの連携等により継続性と深層性を担保していきたいと思えます。プロジェクトを通じて得ることができた様々な縁(えにし)を大切にしつつ、新たな領域への歩みを進めたいと考えます。

このプロジェクトの活動を通じて浮かび上がった地域課題解決へのアプローチについてはもちろんのこと、連合島根に求められる「地域における労働運動の役割」、社会の一員としての運動展開について継続して取り組んでいく事をお誓いして結びといたします。

フローチャートで見る島根プロジェクトのこれから！



若者は自信を持って巣立ってほしい

*コラム①～⑧は2015年9～10月に執筆したものです。

後藤 幸江（ユースネット島根理事長）

○アンケートを見て感じたこと

特に若者世代（20～34歳）の若者の地域生活①②について「町内会・自治会活動（祭りなど）、ボランティア・NPO・市民活動への参加」が20代前半から後半にかけて少ない。仕事の残業が多くなりつつある傾向もあるのか？この年代が意欲を持って参加できる地域の活動なのか？家族を持ち、子どもが出来るとまた参加は増加していくように感じるが、一番体力もあり、地域の中で大きな役割があると思うので、地域活動を盛り上げていくべきだと感じました。

○今実際に取り組んでいること

当法人が支援をしている若者は10～30代後半が多く、家庭環境に問題があったり、生まれもった病気や障がい、環境により精神的なトラブルを抱えてしまったり、いじめを受けたり、不登校になってしまったり、ニートや引きこもってしまった若者が大半です。義務教育を終え、進学し就職といった社会が作り出したルールから外れてしまい、自己嫌悪に陥り、自信を喪失している状態です。まずは、受け入れられる「居場所」があり、その安心した「居場所」で学校生活では経験の出来なかった同世代や先輩・後輩との関わり、大人との関わりを学ぶ場になり人間関係を構築しています。社会との接点を持てるよう社会貢献活動を通し、地域の方々のぬくもりを感じられる取り組みに力を入れています。

また、自分自身を主張することがともて苦手な若者も多くいます。成育歴の中で家族や学校で否定される経験が多く「発信しても自分の意見が通らない」「自分の考えは間違っている」そういった事が繰り返され、そこでも自信がなくなり、自分を防御する手段として「主張すること」をやめてしまいます。その部分の改善を図る為、「やってみたいこと」「興味があるもの」をテーマに自主性を高めることを目的にプログラムを企画しています。自主性から始まり、次に責任感が湧き、次に成功（達成）させたいと向上心が出来ます。そういった心を育み本来持っている自信を取り戻し、スモールステップで地域に巣立っていつてもらいたいと考えています。

○今後取り組むべきと感じたこと

公民館や地区単位で、若者が主催するような地域の活動が活発になり、他の地域と交流する活動があれば、自分たちの地域活動をより良いものにしていく努力や取り組みが盛んになるのではないかと感じました。どんな若者でも誰かと繋がってみたい、趣味が合う仲間はいないだろうか？とアンテナを張っています。「会社」と「家庭」だけではなく、もうひとつの「繋がる場」があれば、ライフ・ワーク・バランスも良くなり自分の存在価値を見出せるように感じています。

当法人では、いじめや不登校、引きこもってしまった経験や体験を自ら発信して理解をいただき、苦しい辛い思いをしないよう、元気であるべき子どもや若者が弱ってしまわないよう「未然防止運動」にも力を入れて取り組んでいきます。そこから、地域にいかに繋げていくことが出来るが地道な活動ですが、重要な役割を担って活動をしていこうと思います。

コラム：しまねに暮らす⑨

暮らすことの満足度向上を

*コラム①～⑨は2015年9～10月に執筆したものです。

岩田 浩岳（県議会議員）

人口減少、少子高齢化、現在の地方は課題が山積しています。特に我が島根県は人口減少、それに伴う少子化、高齢化、など深刻な課題に直面していきまことに「課題先進県」という状況です。このプロジェクトにはそのような課題解決のヒントが見つかるのではないかと、行政に深く関わる議員という立場で、何かしらお役に立てればという思いで参加させていただきました。プロジェクトを通して、島根という地域を改めて見つめることができ、いろいろな「気づき」の機会を頂きました。さまざまな調査やアンケート、ヒアリングなどから浮かびあがってきた島根は、年収に対する満足度は決して高くないものの、暮らすということに関しての満足度は比較的高いことが分かりました。持続できる地域社会を構築する為には人口減少の流れに歯止めをかけなくてはなりません。やはり、若い世代をどう支援していくかが課題解決の大きなカギを握るということを改めて感じました。若い世代の皆さんが島根で安心して働ける、そして望めば結婚できて、子供をもうけることができる。そのような取り組みがこれまで以上に重要だと感じました。

その一方で今の我が国の政治の流れは非常に深刻だと感じています。9月に成立した労働者派遣法の改正などは、我が国の非正規労働者の比率は4割を超えたなかで、雇用の安定を脅かすものです。そのうえ、裁量労働制の導入の流れなど労働者を守るための法律が次々と悪い方向に変えられようとしています。都市と地方の格差、世代間の格差、様々な格差が広がっている状況の中で、政治はその格差の是正に動いていくべき時と考えます。

島根県は日本全体から見れば小さな県です。ですが冒頭にも述べたように、日本の都市部の20年先の課題が今ここにある「課題先進県」なのです。安心して働ける、安心して暮らせる、地域の「しごと」が島根で働く人にとって夢と希望を与えなくてはなりません。特に若い世代の働き方、結婚、子育ては、行政も積極的に応援していかななくてはなりません。島根県では来年度から第1子、第2子の保育料について3分の1を支援する制度を創設します。これはプロジェクトの各種調査やヒアリングから得た情報をもとに県議会での議論を経て実現するものです。今後も今回のプロジェクトで頂いた皆さんの「声」や「ニーズ」を県政に反映させてまいります。末筆になりますが主催である連合の皆様、そして適切なご助言を下された毎熊主査をはじめとして各委員の皆様に心から御礼申し上げます。

資 料

1. しまね女性へのヒアリングの記録
2. 調査票及び結果
3. 最近の新聞記事から

1. しまね女性へのヒアリングの記録

※プライバシー保護のため、「仮名」を使用しております。

①子育て環境と必要な制度について

<対象者プロフィール>

渡辺麻里：二児（小4・幼児。現在三人目を妊娠中）の母。島根県出身。会社員。学生時代に一度県外へ。シングルマザーの経験あり。

佐藤優希：二児（小6・小4）の母。島根県出身。行政職員で福祉に携わる。東京で就職していたが、一身上の都合でUターン。

<調査員・司会>

每熊、景山、陰山、矢野

<調査日>2015年4月17日（金）

<場所>労働会館

司会 「仕事上の不満はない？」

渡辺：「うちの会社って組合が結構強いと思うんですよ。だけん、その有給休暇を取りきれなかった部分とか、あってはならないので。一緒に働いている所には、小学校と保育園のお子さんがある先輩がいますけど、その方も短時間勤務を取られているので自分も取りやすいですね。別の先輩から、あなたが先輩になった時にいろいろな制度を使っていると後輩もいろいろな制度を取得しやすいから、絶対、育休産休を取りたいんだったら取らないとダメよって言われていて。育休も一年は取りたいなと思っているんですけど、女性の社員は早く出てこいって感じでオーラを出すじゃないですか。だけどその先輩に、ちゃんと子育てする時間はそこしかないからしっかり取った方が良くよって言われると、勇気になりますよね。私取りますって気持ちになります。なので、上司がやってくれと自分が取りやすくて、自分がやると部下も取りやすくて、みたい。そういう所はすごく良いです」

佐藤：「同じです。私はそれこそ公務員なので、世の中の評判通り、制度は本当に整っています。でも、それが使えるかどうかというのは別の話になっていて。有給休暇は、みんな殆ど持ったままとっていない。人事や組合は取れって言ってるけど、組合の役員から率先して残業しているような状況が現実。あのね、地域創生とかいろいろ出してきましたけど、何も結局ばら撒きで職員が忙しいだけなんです。言ってしまうとただか10万・20万円のために、職員何十人もが残業するんですよ」

渡辺：「行政機関はめっちゃ時間遅くまで電気が点いていて、独身の女性の人は、夜中に2時まで勤務していたって言っていた。予算を取るのに話し合い、会議でその時間まで。えーって、結婚相手見付けられないって」

佐藤：「夫婦で行政機関に勤めてる知り合いとかには、時期的には午前様だって。そうすると2人一緒に遅くて帰ってこない。で、子供はおばあちゃんの所。だからもう、おばあちゃんと子供の家族。親はいないみたいな」

渡辺：「友達の子どもなんかね、反応し始めたんだって、遅くなり始めたら。やっぱり、これじゃいけないって思ったから、自分の給料を減らしても働くのを辞めるって決めたみたい。そうですよ、本当。1日5分抱きしめてあげることがどれだけ難しいかってこと」

司会 「ご自身としては自由時間というのは十分と思われますか？」

佐藤：「ないですよ」

渡辺：「やっと夜1人で寝れたわー、みたいな」

司会 「生活自体の満足度はどうですか？」

渡辺：「私は充実していますけどね」

佐藤：「あまり満足している・していないと考える余裕がないです。今はもう日々をこなすのが一生懸命で満足してますかって言われると、そんなこと考えたこともないくらい忙しい」

渡辺：「家のことやれんですよね」

佐藤：「そう。子供はおばあちゃんに夕方旦那が帰るまでは見てもらわないといけないので、義理の両親にスケジュールを伺って」

渡辺：「旦那の実家がこっちなので、どちらも忙しいから頼れないことも多いですけど、協力的なのでなんとかね」

司会 「やっぱり両立って大変ですよ。うちも子供がいるんですけど、3人目が3、4歳くらいになった時に働こうかって言って。それでもパートですけどね」

佐藤：「そういうのが多いんですよ」

渡辺：「でも保育園が、短時間で働く人は短時間しか子供のめんどうを見ませんっていう制度に変わりましたよね？」

佐藤：「今年から全部がそうになったんですよ。すごい都会的な仕組みに変わっちゃったな、と」

渡辺：「そうですね。あと保育料が3人目は無料になるんだけど…上の子が中学校に上がるまでは無料なんですよ。でも、うちはお姉ちゃんが離れているから。たぶん2年間くらいしか利用できんかな、無料で。なんでそれ、みんな平等にしても良いんじゃないかな。だって子供は子供だもん。大きくなればなるほど、お金がかかるのに。」

司会 「旦那さんは家事・子育て含めてどうでしょう」

佐藤：「基本的にはやってくれます」

渡辺：「うちも頑張ってると思います。褒めてあげたいなって思うときもありますよ。家族とパートナーと協力して。だから今子育てって楽だなと思うし楽しい。私はずっと一人だったけん。冬とかね、2歳の子を片手で抱っこして逆の手には灯油缶を持つ

て、1人で階段を3階まで登ってたんですよ。惨めですよ。帰ってもおかえりって言ってくれる人もいないし…」

司会 「今の、お付き合いというか地域のお付き合いとかはある？」

渡辺：「地域はあんまり広がらない。広がらないというか、前に住んでいた地域ではどこの誰かってすぐ分かって、車もあの人はいかに乗ってるわってというのが分かりますよね。あ、ねえこの前、あそこ停まっとったでしょう、とかさ、何やとった？誰と会とった？とかになりますけど、こっちに出るとそんなのないし」

司会 「町内会とかには入っておられます？」

渡辺：「入ってます、入ってます。最近家を建てて、新しい団地に住んでいるんですけど。みんな新しい人たちばかりで。でも、昔のところと一緒の自治会で、主人もちゃんと自治会にも出てたりしますけど。こう田舎みたいに、直会（なおりい）とか、ああいうのが今あるとかそんなんじゃない。あんた、今日参加せんかったらどうなると思とるで、って感じのね。そう言うのもある意味面白いですけどね」

佐藤：「いえ、そうですか？その中にどっぷりいるとキツイですけどね。やめた方が良いでしょう」

渡辺：「でも、全然知らないところにいるよりは、田舎のそういうおばちゃんたちと、あんた大きくなったねえ、とか言われながら生活しているのも、すごい素敵なことだなと実感しますよ。松江に来てからね」

佐藤：「気心が知れているから楽なことはあるんです。まあただその分、気も遣います。後ろ指も指されるでしょ。間違ったことはしないように、っていう」

渡辺：「確かめて、よく聞いて」

佐藤：「そういうところはあるので。まあでも、何かお願いをするっていうのとかは、きつとたぶんみんな助けてくれるんだらうなっていう安心感はある、きつと。そういう意味では、たぶん都会ではありえない」

司会 「特に東京に居られたんですよ？」

佐藤：「そう。で、もうマンションじゃないですか。で、知り合いもぼつぼつという、だけ、普通に休日に街歩いていても、知り合いに会うなんてこと本当になんないじゃないですか。だから、それはそれで心地よかったですよ。基本1人とか好きなので。誰にも干渉されずに、自分の好きなときに自分の好きなことをして、仕事してっていうのがすごい楽だったんですけど。たぶんそれも、島根でそういう、周りの干渉がいっぱいある中で育っているんで、それが当たり前で。で、それが一時期解放されて、若いうちはすごい、一人の干渉がない中で過ごす時間っていうのも楽しかったですけど。たぶんその干渉されまくってるのを知ってる場所で育っている人が、なんでそれが耐えられるかって言うと、いや、個人差はあると思いますけど、難しく思えますし。その意味では、ああいう干渉も良かったなー、みたいなものもあるんじゃないかなっていうのが、年を取って思います」

司会 「特にお1人だった時、こういうことがあれば良かったのに、みたいなのはありますか？」

渡辺：「1人目の子供の時は、未婚で、1人で産んでるんです。というのも家と家でいろいろあって。結婚するんだったら自分の親と縁を切れって。こんな立ち入った話しても？…汚い話ですよ。縁を切れって言われて、でも私19歳の時に親と縁切れなくて。嫌だったし、自信もなかったんです。それで1人で育てて行く決意をして。その後、今の主人と出会って、ご縁をいただいて松江に来ました。で、今、子供がポンポンとできて…何の話でしたっけ？…そうそう、だから未婚で産んだけん、まず保育料は丸々払わないといけなかったってことですね」

佐藤：「離婚や死別の母子家庭だと、いろんな配慮があるけど。身分が独身だと、一切そういうのがない。手当とかは母子家庭っていうのももらえるんですけど。最近やっと、父子家庭の制度ができましたけど。シングルマザーは全然前提にないので、制度がないんですよ」

渡辺：「あなたが選らんだ道でしょ、みたいな感じで取られちゃうんで。いかなる理由においても、免除してもらえないんですよ」

司会 「他に、仕事や生活上で気になることがあればお願いします」

渡辺：「最近ね、手が離せない子供を持つって言うじゃないですか。あれは気になりますね」

佐藤：「それは、絶対親が悪いと思いますよ。あ、でも違う意味で、福祉だから。こういう話、してはいけないかもしれないけれど。もう本当に40、50歳の子供が引き込みりで、70、80歳のお婆さんお爺さんがヨボヨボしながら来て、うちの息子を何とかお願いします、とか言われても、それを何とかしなきゃいけないって言われていて。じゃあ、その息子さんなり娘さんを、何か一緒にバイトでもしましょうや、みたいな話をするじゃないですか。で、うんって言うてくれる親は良いんですけど、いや、私が死ぬときには一緒に息子と死にますから、みたいな感じでね。もうすごい多い。周りも、あそこには娘さん息子さん、こういう年の人がいたよねって思っているけど、学生の時とかで外に1回出たりすると、どっか外で就職したんだって思っているから、家にいるなんて思わない。お母さんやお父さんもずっと隠しているの。隠してるってわけじゃないかもしれないけど、あんまり外に出るので。なんかそんな家が、そんじょそこらにある。でも、本当に身につまされる。自分は子離れ早くしようって思います」

渡辺：「子供を世話することで、自分の生きる力が持てるような子供を育てんといけんかって思いますよね」

②しまねの自然・働く・教育環境

<対象者プロフィール>

野崎咲良：二児（小5・幼児）の母親。島根出身。行政職員。育児休業中。

柳英恵：一児（幼児）の母親。島根出身。自営業としてアロマ事業を展開中。高校卒業後すぐに接客業に就く。その後妊娠し、仕事を辞める。

尾木芽衣子：一児（幼児）の母親。東京出身。ダンス講師とデザインの仕事（後者は自営業）。夫が島根出身のため、島根に移住。

<調査員・司会>

高尾、錦織、伊東、山本

<調査日>2015年4月17日（金）

<場所>子育て研究所

司会 「働く上で女性としての満足度というか、逆に言うと不満と言うか、どういう形でもいいので、感想をお願いします」

野崎：「そうですね。今は私職場に理解を頂いて、二人目の育児休暇をゆっくり取らせて頂いているんですけど、一人目の時は1歳1カ月で復帰しました。私は復帰したらバリバリ仕事も子育てもして、どっちも両立をするんだって思っていたら、まず辞令をもらいに行く初日に子どもがお試し保育でもらった病気にかかって40度の熱が出て、辞令もらいについて帰ってみたい。スタートからそんな調子で。病児保育もお願いするんだけど、今日はいっぱいですって。今思えば、ものすごく職場に良くしていただいたんですけど、当時自分が切羽詰ってたので、仕事が割り当てられているのができないと、土日に出てやるんですけど、土日に出るとでらんでよかったに、って言われて。やっぱり自分の中で余裕がないので…。もっと余裕があれば子供も熱を出さなかったのではないかと思ったりもして。1年間、とにかく病気の合間に自分がしなければいけない仕事をいかにするかとの戦いで、ちっとも楽しくなかった。あの時に辛くて、仕事を辞める人がいるのは分かる気がします。そのこともあって2人目は2歳までお休みを頂くので。仕事自体はすごく好きなんですけど、私が今まで働いて来てほんとに辞めたいと思ったのは育休復帰のその1年間だけです」

柳：「私は全然仕事をしていない時に出産期に入って。で、出産して、1年くらいは子供と一緒にいて。それで、今私はアロマをやっているんで、ママ向けのハンドマッサージとかをしているんですけど。それ、不規則なんですよね。私みたいな不規則な予定を入れている人にとったら、保育園は朝連れて行って夕方まで見てもらえるって言うのはすごい安心感なんです。それが幼稚園になると、あずかってくれる時間はカツカツだし。でも保育園も今年もかなり一杯で漏れた方が多くいたらしくって。聞いた話によると、余裕で入れると思ったら漏れてしまって、一時預かりで全部埋めたって言う。それから保育園は、1カ月に何時間以上働かないとダメという

括りがあるんで、私も働くってなると、パートしながら他の事もやらないといけんのかな、って思うし。でも私としては高校卒業してからずっと働いてきたし、高齢出産だということもあるので、これからはできるだけ子供の傍に居ながら自分の好きな仕事、今やってるハンドマッサージとかの癒し系の仕事をしたいなというのがあります。将来的に起業とか、大分掘めてはいるんですけど、起業がいいよって人もおれば、普通に働いとこなって人もおられるし。旦那としては普通に働いて欲しいと言うのもあるみたいで。私は仕事をしてしまうとのめり込んでしまうんで、例えば子供が熱出ましたと、その時にじゃあ迎えに来てくださいとなった時に、上司に迎えに言って良いですかって言って迎えに行つて良いよってOKしてくれる職場ってどのくらいあるんだろうって思うんですよね。それでもう辞めてしまう話とかもよく聞くので。それなら自営業が良いのかなとか。はてさて自分はどうしたら良いかって迷っています」

尾木：「大学卒業後、親の仕事を手伝いながら途中でダンス講師の仕事も始めたって言う、なのでずっと二足の草鞋で。でも、結婚はこのままじゃできなさそうだと思って一回辞めたんですよ。何がいけないかなとか色々考えて。ずっと家族と一緒にいることがいけないんじゃないかと思って。で、仕事を辞めるか家を出るかどっちかしようと。けど、仕事辞めた途端不安になって。結婚できなかつたら自分で稼いでいかなきゃいけないし、これはまずいぞって思ったんですけど。そしたら結婚できてしまったんで。結婚は良かったんですけど、夫から島根に行くぞって話になって、島根かあって思って。私、島根がどこかも分からなかったし。私は育ちもずっと横浜・東京で、結婚してからも東京に住んでたので。結婚後は仕事辞めてたんですけど、ダンス講師と手伝いを続けてました。でも島根に行くとなったら、基盤が無いじゃないですか。仕事全部辞めるしかないなって思って、ダンスも全部教室を閉じて。で、こっちに来たんですけど。最初のうちは行ったり来たりすればいいかなと思ってたら、ラッキーなことにダンスのスタジオを開いてる人が、たまたま主人の先輩の奥さんだったんですね。なのですぐに仕事が見つかりました。そんなところに子供ができたんで、里帰りして。で、出産後、松江に帰ってきて、ダンス講師をしながら子育てをやるのかなと思ったんですけど、やっぱり熱出したりするじゃないですか。それで保育園から呼び出されたり。そうすると責任を持った仕事ができない。会社だったら代りを埋めてくれる人がいるかもしれないんですけど、自営業ですから、私が行かなかつたら生徒さんたちはどうするのってことになるので、これはまだ自分で立ち上げるのは早いかなって思って、スタジオの講師と言う形で雇ってもらうことにして。私の周りの知っている子育てママはみんな東京にいる方たちなので、子どもを育てながら仕事復帰してる人がほとんどなんですね。東京の事情を聞いていると、大変だなと思っていて。東京は本当に保育園の確保が大変で、何のために働いてんのかわかんないよみたいな。月15万円くらいかかるから、それ以上

稼げない仕事だったらやめるかどうか。どうしてもライフワークとして、働いてる人って少ないと思うんですよ。やはり家庭を持った時には主人を支えると言う仕事も出てくるから、家庭をもった時のタイミングで、働くっていうスタンスとかは変わってくるっていうのは女性の仕事のポイントかな。自営業は一人の役割が重いけど楽しいので、自分の仕事を自営業と言う形で続けていくのが理想ですね」

司会 「お仕事の性質上、逆に言うともう一遍東京に帰ってもですね、生活プランを立てられると思うんですよ。そういう観点から考えた場合島根に住むインセンティブというのは？」

尾木 : 「最初の内は今までの生活環境とのギャップが激しくて…友達もいないし両親もいないし。両親がいないことが一番大変でしたね。ですが、子育てするには良い環境だなんて思います。なぜなら、東京は人が多すぎるんですよ。何かするにも全てお金がかかるし。公園と言う公園もほとんどないし、大きな公園とかはありますけど、そういうところは住んでるところから行こうと思うと大変です。電車乗って…電車に子供を連れて乗る姿を、子供を抱えながらほんとに迷惑そうな顔されながら連れて…街を歩くにもベビーカー邪魔だよみたいな感じなところで子育てしてるって…仕事しながら保育園探しにお金が掛かり…って言うのを見ると、東京じゃちょっとやる自信が無いなって。自然に触れ合せたりしたいし。こっちに来てから子どもたちの顔が子どもって顔をしてるなって思ったんですよ。だから子供が小さいうちの環境としては、島根にいるのは良いことだなんて思って。可能性はいっぱいあると思います。島根の人って奥ゆかしいから、アピールがすごく下手で、そういう感じが印象的で、こんなに良い素材がいっぱい転がってるのにどうしてそれを活かさないんだろうって思ってます」

司会 「養育と、大きくなってからの教育となると色々変わってきますよね。島根の教育についてご意見をお願いします」

尾木 : 「うちの主人はずっと島根なんですよ。大学で東京に出てるんで。主人とか見ると、島根にいたからっていろんな教育が受けられなかったかっていうと、そういうわけでもないし。彼は彼なりにいろんなことを学んで大学に行ったし。教育を受ける間、何処にいたかによって変わるとは思いますけど…」

野崎 : 「大学は外になっちゃいますよね。私も子供にはいつも大学は外に出なさいと言って育てています。本音を言えば、島根に戻って欲しいんですけど、ずっと島根にいると島根の良さも分からないし、大学しか出るチャンスが無いから。就職は戻って欲しいと思ってますけど、彼が何を専攻するか分からないので、島根に帰れないかもしれない。本当は可愛くて仕方ないので手放したくないけど、彼の将来を思うと、それを先に決めてしまうと、専門職に就こうといった時には島根県では選択肢が少ないので、時代を見ながら。島根はいいとこだよって言いながら育ててみて、って言う感じ」

柳：「将来は今住んでる所の小中学校に行って、市内の高校に行って、大学行くかなって感じになると思うんですけど。その場所に自分の子どもが適合するか適合しないかは入って見ないと分からないじゃないですか。もし入ってその場所がその子が嫌だっていうSOSを言ってきたら、その時に考えようかなって。私の考えは、もしも子どもがこの学校に行きたくないというのであれば、県外のフリースクールにだっで行かせてあげようと思う。私たちが子どもの頃は我慢してでも行かせようって。でも今はもう時代が違うから、その子の意志を尊厳してあげたい。確かに学歴としては小学校に行けない、フリースクールかもしれない、高校行けるか分からないこともあるかもですけど、その子の成長と共にバックアップできると思います」

司会 「教育環境への要望というのはどうでしょうか？」

野崎：「都会と島根の違いは、島根は学校の選択の余地が無いですね。都会だとお受験をして、自分の気に入った校風の学校にチャレンジすることができる。けど、島根は強いて言えば島根大学附属中学校にいくかどうかの選択肢があるくらいで、やっと選択ができるのが高校から。それが一概にいけないかという、小学校で人気校とか出てくると、学校の差がすごく出てしまうので、今まで松江が校区を決めてやってきたというのはあながち悪いことではないかなと思うんですけど。でもちょっと気になっているのは、最寄りの学校じゃない校区が割り当てられている家って結構多いんですよね。校区が昔ながらのものなので、こっちの学校だったら歩いて10分くらいでいけるのに、歩いて30分かけて反対側の学校に行く子が結構いて。いい加減松江市も、校区の線引きを修正かけても良い時代に来てる。遠くまで通うのは危ないと思うんですよ。それから保育所は、ほんと言うと、入れなかったんです。うちフルタイム勤務なのにまさか落ちるとは思わなくて。育休復帰予約枠っていうのが150人の枠で200人落ちたんですって。で、エリアによっても人気が集中して、場所によってはほぼ全員落ちたみたいで。親としてはやっぱり小学校区の保育所に入れてやりたい。そういうことが、松江市民っていうのは保育所も選べない、空いてる所に入れって。うちが20分かけて、遠くの保育園が空いてて、そこに入らなかったら、待機児童扱いにはならなくて、自己都合扱いになる。最寄りの保育所に入れずに、松江市の人たちは遠い保育所に朝の大渋滞の中、保育所巡りをしてる。あと児童クラブにも入れないです。1年生は入れるんですけど、2年生の時に切られる子がいて、3年生になるとくじ引きみたいな感じで。松江で子育てをしているお母さんたちは、いつも選択の余地が無い中で無理やり選択をして、利用できるものは必死で利用してる状況だと思います。全ての根本は保育所だと思いますね。その時点で辞めちゃう人がとても多いので。復職するきっかけを掴めずに、段々年齢が高くなって、ある程度の年齢に行くと、雇用する側の30歳代までとかに引っかかってくるので。そうすると今度は働けないじゃない、みたいな。自分が子育てをしている経験からすると、子供が4歳ぐらいになると病気で保育園を急に休むってことは

減ってきますし、小学校に入れば非常に病気の面では楽になる。保育所に行く最初の3年間をすごく丁寧にフォローすることで、例えば病気だったら休めるとか、病児保育とか、当日はほぼ不可能なんですけど、病児保育が当日でも受けてもらえるとか。受診しなきゃ預けられないんですけど、受診に行くのがまた大変だったりするので、その辺が少し、対応が柔らかくなることで、離職する人が減るんじゃないかな」

司会 「ちょっとまたテーマを変えてなんですけど。地域との付き合い、外から来られてですね、ママ友含めてなんですけど、すぐにネットワークが広がりました？」

尾木 : 「地域と全然馴染めなくて、ママ友もできなくて。子育て支援にも何回か参加したんですけど、地元の話とかもついて行けないし馴染めなかったんですけど。こちら（子育て研究所）に預けるようになってお母さん方とお話したりとか。それで知り合いは少し増えたのと。それから子育てサークルっていう、県とかとは全く別でやってるところにたまたま知り合いができて入ることができて、そこですごく広がりましたね」

司会 「自分の方から積極的に探して行かないと難しい？」

尾木 : 「そうですね。あとはインターネットがあまりにも、情報が無い。東京なんかはパッと調べれば子育ての集まりとかお教室とかいっぱい出てくるんですけど。調べても調べてもどこに行けばいいのかわかりにくくて。どっかのお店に小っちゃいチラシが置いてあったりとか、そういうのを一生懸命集めて。調べて行く、と言うような感じです」

柳 : 「子育て支援センターにもらいに行っても、保健師さんに持っててとかって言われて…結局大元に行かないとダメですねみたいな」

尾木 : 「そういうのって紙面とかに載っててもそこからネットで詳しく調べたりするじゃないですか。それが全然機能してなくてYahooのマップだけ出てくる。もうちょっと内容乗せてくださいみたいな。いきなり参加するのは勇気がいるので。インターネットとかに情報が載ってると良いなあって」

司会 「たとえば行政や社会福祉協議会とかが“困ったことはありませんか”とか、接触をして来られたということはあるですか」

尾木 : 「一回だけありましたね。子供が3か月とかの時に来るよね。こんにちは赤ちゃん事業とかいうやつ。それ以外全くコンタクトは無いですね」

司会 「行政はそういう面で力を入れて、子育て支援をやってますって言ってるんですけど、実際そこが、経路として通じているか通じていないかっていうことを気にしているんですけど」

柳 : 「こっちからアクションを起こすと気にかけてもらったりとか。私は妊娠中に不安定な時期があったんで、自分から保健師さんにいろいろなことを聞いて、フォローしてくださいって言ったんですよ。それまでは保健師さんって存在も一人目だし全然

知らないし。で、人からこういうところがあるよって聞いて。今度は何とか体操とか言うのをやるので、行ける日があったら連絡してくださいとかって電話があるくらいです」

野崎：「市の事業は結構できていると思います。でも、市はこっちから情報が欲しいって言えば親切にしてくれますけど、大人しいお母さんには市の方から積極的に言ってくれない。だから市にお願いするとすれば、転入して来たり、島根の事が良く分からない人たちを手厚くするような、ゼロ歳児の会じゃなくて、ようこそ島根のママのための会とか。島根に初めて来た人達のママ友作りとかですね、そういう県外から来た人達は車に乗らない人が結構おられるから、免許がない、みんなバスで出歩いておられるけど、バスの行き方が書いてないんですよね。移動手段を知りたいとか、そういう目的で来てねっていう会をして欲しい。他は、例えば子育て情報を集約するサイトを県が作ってはいるんですけど機能してないんですよね。2011年で事業は終わってたり、リンク切れしてたり。しょうがないから私が自分のブログでみなさんにお知らせしてるんです。やっぱり毎日アップしてくれないと。ちょっとしたイベントに行きにくい」

司会 「少し抽象的なテーマになりますけれど、子育て政策とか、政治として重視してほしいことなど、お聞きしたいんですが」

野崎：「一つあって。松江はあるんですけど、保育園の育休復帰予約枠っていう。で、仕事をしているお母さんは保育所が決まってないと安心して休めないんですよ。で、国がしっかり育休復帰支援枠みたいなかんじで制度を打ち出してもらって、生まれたら何月にこの人の枠を確保して、確保したところにはきちんと補助金なり予算をつけるといってやってもらわないと、子育て支援でぽーんとふわっとやられると困ります。お母さんが子どもを預けて確実に復帰できるっていう枠。仕事への後押しには結びつかないかもしれないので、復帰枠みたいな確実性の高いことをしてほしい。それから仕事辞めてたけど、就職したいから、入りたいからっていう人の支援枠みたいなのを充実してもらいたいです」

柳：「保育園の枠とかもね」

尾木：「あとお金じゃない？経済的支援が。東京から比べると医療費とかが結構長く補助されたりとか、良くなって、こっちきてから思ってます。」

野崎：「今6年生まで無料。年収枠無しで。今、またどんどん伸びてて」

尾木：「そういうのって魅力だと思うんですよ。他県から見るとね。後、フランスとかになると一人生むと幾らって、お金が出るようになってから子ども増えたじゃないですか。ああいう感じに」

司会 「保育料の無料というのはやはり魅力？」

尾木：「魅力ですよ」

柳：「魅力。一時預かりでも1日1,900円ですわ。で、半日で1,100円」

野崎：「松江は安いんですよ。この間松江から神戸に引っ越した人からお手紙が来て、切実だと。神戸はいかに一時保育に入れず、入っても3,000円+αで。そうすると、松江の人は知らないけど、松江は保育料は安いし保育園に入れますよってというのがもっと宣伝されても良いかもしれない。松江はせっかく一時保育だったら入れるし、安いし、子育てサービスはほぼ無料なので、保健師さんも訪問の時にもっと勧められたら良いんじゃないかなって。本当に松江は良いなって思います。特に私、一人目が浜田で産婦人科が一つしかなくって、その時にかなり痛感しましたね。やっぱり、医療の格差がすごいので、こういう今日のような会を西とか隠岐で開催して、あちらの方の意見を聞いていただきたい。ほんとに病院が無くて通院が大変だし、学校も分校で、行ってみたら数人とか。スクールバスが出ますとか言ったって、大人でも毎日乗ればくたびれるような距離を毎日子どもがバスで行かなきゃいけないっていう子たちもたくさんいて。その子たちが都会に出たら、すごい便利だと思って帰って来ないのはすごく分かりますね。私、松江がほとんどですけど、隠岐にも浜田にもいましたけど、それぞれいいところはいっぱいあって。これからも島根に住み続けていきたいと思うんですけど。県内格差がすごくあるので。西とか隠岐が良くなると、島根は良くなれないと思うので」

司会 「一応最後に一点。労働組合がすべきことと言いますか、社会へ向けてやることはあるのかなと、そういうことを伺いたいんですが」

野崎：「県職労以外の人でも参加できるようなこと。たとえば、県外から島根によろこそということで、島根の良さを親子で体験して頂く行事みたいなのを多少でもされると労働組合のアピールになるんじゃないかな。組合って何って人は多いと思うし。原発反対って言ったり賃上げしたり、労働の改善してるけど自分には関係ないわって感じだと思います。だから組合はこんなメリットがありますっていうことをアピールしながら、ベビーヨガとか、小学校の子どもさんだったら、松江の史跡探検とかされたら。単発ではなく、こういう行事は年の最初に年間スケジュールっていうチラシを作っていただいて、あちこちに張っていただいて。毎年継続的にやっていくのはどうでしょう」

③独身女性の暮らし、結婚観

<対象者プロフィール>

藤谷葵：独身。松江出身。会社員。大学進学時に県外へ。その後松江に戻り就職。

長瀬茉央：独身。松江出身。保健師。県外進学後、県内の病院で看護師を数年勤め、退職して保健師に転身。

真島香織：独身。松江出身。会社員。地元から出た経験なし。

<調査員・司会>

江口、原田、伊東、堀江、山本

<調査日>2015年4月17日（金）

<場所>労働会館

司会 「島根ってところが好きなのかっていうことを、まずお聞きしたいのですが」

真島：「好きだと思います。生まれも育ちも学校も就職も全部島根で出たことがない分、今になれば、学生の時に都会出てみたかったなというのはあるんですけど、友達もいますし、島根が良いです」

長瀬：「県外にもいたことあるし、都会に遊びに行ったりもする方なので。ピカイチで一番好きかって言われたらちょっと違うんですけど、でもまあやっぱり宍道湖がきれいだったりとか、やっぱりそういう面は好き。あとは魚が美味しいかな。県外で食べてもやっぱり。それから温泉かな。たぐの湯、玉造、湯の川、ゆらりもあるし。あんまりそんなに深く考えたことがないかもね、好きとか嫌いとか」

藤谷：「私は高校くらいまでは、そんなに好きとか思っていなくて、それもあって全く知り合いのいない大学に行こうと思って、県外に行ったってこともあったんですけど、やっぱり都会に出てみると恋しくなって、結局就職ではこっちに帰ってきたので、なんだかんだここが好きで、落ち着いているんだろうと思います」

司会 「じゃあ今後ですけども、またずっと島根に住み続けたいという感じなんですか」

真島：「結婚する相手による、かな」

長瀬：「そうですね、転勤とかなければ」

司会 「例えば、相手に島根で一緒に住まない、みたいなことはどうなんだろう」

真島：「なんか外に出たい気もありません。きっかけとして。どうしてもこっちに住んでほしいとかいうことはないかな。両親もそこまでね。口には出さないだけかもしれないけど」

藤谷：「友達の3姉妹とかだと、みんな早くお嫁に行きなきゃって、競争。妹が先に結婚してしまったから、次お姉ちゃんと自分で、どっちかが家を継がなきゃいけない、どうしようって。早い者勝ち。もう大変なんだろうなと。私末っ子で、姉と兄がうまくやってくれてるので、その友達みたいなことはないし、もう自由にどこへでも行

ってもいいかなと思ってるんですけど。まあでも相手がこっちであれば、それに越したことはないですし、結局家族が近くにいるのが良いのかなと思ったりしますね」

長瀬：「一人っ子の方は、絶対に婿取ってと言われてる人もいたよ。家系によるかもしれんけどね。私自身はそんな強い思いはないかも。友人の男子も出っぱなしですね。戻ってきた子は家を継いだ子ぐらいかな。女子もそうですね。大学で大体県外に出て、向こうで知り合った人と結婚とか、就職も外でとか。戻った子はあんまりいないし」

真島：「戻ってきた子、少ないよね。不便だし、島根は」

長瀬：「不便。飛行機の本数もないし、新幹線もないし。バスの本数もないし。車じゃないといけれんし」

真島：「特急はあるけど2時間3時間とか。松江から、浜田まで。その時間あれば大阪に行けちゃう」

長瀬：「岡山に行ける。広島にも行ける。買い物だって。島根には、お店ないし」

司会「お友達でやっぱり島根に帰りたいな、なんて子。県外に出た子たちで言ってない？」

長瀬：「いやー、帰りたくないって」

真島：「楽しそうにしてる」

長瀬：「こっちには職がないじゃないですか。基本。だけんじゃないですか？やりたい仕事があつたぶん、島根にはないと。都会でやってる仕事をじゃあ島根でって、会社もまずない、同じように仕事がしたくても」

司会「逆に若手のみなさんが起業するってのはないんですか？」

藤谷：「そういう思いがある人はきっと東京とかに行く。私の知り合いは、公務員か、こういう安定した職業の人ばかりで、なんか起業かクリエイティブな仕事をしようとしてる人は絶対もうどこかへ行ってる。友達もそうですね。みんな公務員ばかりですね」

長瀬：「人数もね。いないし。私、産業保健師なんですけど、県全域回るんです。出産した人は違う部署に、保健師じゃなくて事務とかに回される人もいました。子供がおっきくなってから戻るケースを見たことも無いです。ほんとはみんな保健師に戻りたいと思いますよ。でも、泊まりがけになるので出張とかに出れないんです。だけん家庭があつて子供のいる人は仕事を続けることが難しいですね」

真島：「うちの会社は育休産休とか、制度的にはしっかりしてるとは思いますけど」

藤谷：「周りの男性含めて、女性は取るのが当たり前だと思つられる。そういう人を手助けする感じはありますよね」

真島：「私、人数の多い所にいるので、例えば子供に何かがあつたとしても融通が利くんですけど、少ないとこだと、もうその人が抜けたら残る人がいないんで別の局から一人貸してみたいな感じになります。小さい所だと局長と職員一人っていうパターンです。私が3月までいたところが、局長と私とあともうひとり職員がいたんですけど、私が抜けて補充なしの2人になったんですよ。で、非常勤さんが一応一人いるんで

すけど、基本週2、3日ぐらいなのでいない日だと2人きりとか。会議があったらどうするんだろうっていう、そういう体制になりつつあって。ちょっと田舎の方はこんな感じです」

司会 「極端に言うと、局長1人でやらなきゃいけない感じになったりするということ？」

真島：「そうですね。たぶん無理だと思います。本格的に休むとなれば、対応はしてくれると思うんですけど。休職を取る時も、最近はそれがない場合が多いですね。欠員のまま、他の局の人が応援要請の声をかけられて、誰かがいける状態になる、みたいな感じになってます」

藤谷：「最近、基本給プラスその手当とかの部分の比重が多くなったんですよ。で、頑張ってる色んなことをすればいっぱいもらえるし、頑張らないと普通のラインって感じなので頑張ろうとするんですけど、そうするとまた人も足りなくて色々できなくてことで、なかなか難しいなって思います」

司会 「長瀬さんは一度転職されているとのことですけど、やはり人手不足が原因でしたか？」

長瀬：「比較的、労働条件や勤務条件が良くなかったんでやめたんです。あそこは労働組合もあったんですけど。給料は絶対的に良かったですよ。夜勤も入ってたし。三交代制。だけど、休みがない、土日がなかなか休めない。そういう色んな面が。仕事がハードすぎて、ま、それこそ趣味とかに費やせないの、もうちょっと自分の時間が欲しいと思って。あとは違うスキルも知りたいなと思って。辞めた時はすごい不安でしたけど、ハローワーク行けばなんでもあるし、大丈夫か、みたいな」

司会 「ご自身の結婚はどのようにお考えですか」

真島：「結婚はしたいです」

長瀬：「したいです」

藤谷：「私も」

司会 「そうするとあれですね、仕事は続けますか」

真島：「相手次第、でもできれば辞めたい。今の仕事が大好きって感じでもないの」

長瀬：「同じく辞めたいですね。仕事の内容が、家庭を持ちながらやる量じゃないので。一人でやるんだったらいいんですけど、残業うんぬんとか。結婚するんだったら、もうちょっとウェイト落とした仕事がしたいなっていうのは思ってます。仕事はしたいけど、とか、お金はしいけど、今と同じような馬力では無理だろうなって思うので、続けるかやめるかは相手に相談しないとって思いますね」

司会 「子どもさんとかはどうですか？欲しいとか…」

真島：「ほしい、ほしいです。友達とか見てて、あーいいなって思う。」

長瀬：「私は2人ほしいです、ちゃんと産休取って。なんか、育ててみたい。小児科にもいたので、やっぱそういう子ども見てきたりとか。あとやっぱ経験を積みたい。人と話すときとか、お母さんと話すときにも。こう何も知らないと同じようには喋れ

なかったのが悔しかったし、女であるしとか。まあ、普通に単純に」

藤谷：「私はそんなに子どもが欲しいってわけじゃないんですけど、一般的にいないといけないかなって思っただけ。ある程度の年齢になると、子どもがいなくてちょっと心配されたりするじゃないですか。そう言われるのが面倒くさいから」

長瀬：「でも、子供もとなると、なおさら会社の休職制度とか、助けがないと仕事続けるのは絶対無理だろうね。やっぱその分誰かに迷惑かけるし、保育園も迎え行く時間は他の人が仕事したりしてるので、周りとうまくやってかないと、自分一人じゃ。まあ今の会社は制度が整っている会社だとは思いますが。でも誰かにしわ寄せがくるので、それもまたそれで結局大変だろうな」

司会 「仕事以外の時間は趣味とか、どういう風にお過ごしなんでしょう？」

長瀬：「私はダンスをしているので結構いろいろなお祭りに出たりとかしてます」

真島：「学生のころから楽器をやっています。仕事が終わってから週2回くらい練習に通っています」

藤谷：「え、ないです。なんかこんなに誇れる趣味がないです。つまらない日常を送ってます。仕事と家との往復な感じで、やりたいこともないし」

真島：「その趣味以外だと、ほんと自宅と職場の往復しかないよ。なんかそっちに求めてしまう。出会いを期待してオーケストラに入ったところもあるんですけど、残念ながら全く。もう女子が大半ですし、いいなって思ったら結婚されてたりとか。すごい上か、そんな感じです」

司会 「トータルで今のご自身の生活に対する満足感であったりとか、不満足感を教えて下さい。あとその一番の要因も」

長瀬：「やや満足ぐらいにしようかな。自分は仕事もできてるし、趣味の時間に費やす元気な体もあるしっていう部分はありますが、もうちょっと仕事のウェイトが落ちるといいなと思ってます」

藤谷：「私は、あんまり満足してない。なんか周りが結婚したり、子ども産んだりとかしてるのを見ると…ちょっと欠けてるかなと思う時があります。職場でも子育てしてる方がいらっしやるし、お客さんと話すときも小学校の話題とか子育ての話題とかしとる所に入れないと、寂しいなって思う時があります」

真島：「結婚相手を見つけるのに困ってます。なので、満足じゃないです。こればかりは縁のものだしね。出雲大社近くにあるのにね。行き過ぎて、効果がもうあんまり…。街コンとかも参加したことがありますけど、発展しない。でも、自分で未知の世界に入らんとはいけんとって、ジムに行こうかなって。努力はしてます。まさに今靴を買って、行こうとしてます」

④仕事の見つけ方と選び方について

<対象者プロフィール>

倉田麻衣：独身。大田出身、松江在住。新聞社広告営業の契約社員。短大時代に都会へ出て、Uターン。

<調査員・司会>

每熊、景山、伊東、陰山、矢野、山本

<調査日>2015年4月17日（金）

<場所>労働会館

司会 「現在の仕事に至る経緯についてお話を聞かせて下さい」

倉田：「短大卒業して、大田の会社に一年間通って辞めて。なかなか自分のやりたい事が見つけられなかったのもあって、そのあと職を転々としていて。それでやりたい事がようやく見つかったので、その勉強のために直前一年間、出雲の職業訓練校、今、東部高等技術校ですね。そこで勉強して、この会社に入ってます。高等技術校はグラフィックデザインを勉強する科があって。元々写真撮ったり絵描いたり見たりとかするのが好きで、広告の仕事がすごくしたいなと思っていました。県立で一年間だから自分で支払えるというところ、失業手当ももらいながらいけるので、良いんじゃないって知人から言われてから知りました。県の事業と言うことでほぼ100%に近い形で仕事は斡旋されます。受かるか受からんかは自分の力量になるんですけど、求人に関しては、ここが出してるから受けなさいと紹介はしてもらいました。授業内容は作るだけじゃなくって、実際にそういうパッケージを作ってもらって先生が探してきて、その方たちに一人一人が考えたデザインをプレゼンしてそれを採用してもらってっていうのをやってたので、それはすごく良かったなって。設備投資とかも、県は力を入れてるので結構充実してると思います」

司会 「デュアルシステムみたいな感じ？ドイツみたいに職業教育と学術教育を同時に行う…。でも、正規か非正規かによって格差がね。逆に言えば、県としてそこまで関わっているんだったら、正規で働けるように、企業にきっちりつなぐ。そういう課題がありますね。島根のお生まれで大学時代は外に出られていたようですが、島根はどうですか？」

倉田：「正直、帰りたくって帰ってきた訳ではなく、就職が決まらなかったの。どちらかというと、土地に拘らずにやりたいことがやれることの方が良いと思ってますし。まあ、楽しいこととか買い物ができたりと言うのが、圧倒的に都会の方がたくさんあって魅力的だと言うのはあります。大田の出身なんですけど、松江に比べるとお店が無い、友人もいない、みんなほとんど出てるので。だからやっぱり帰りたくなかったですね。今は楽しみを感じるものが買い物とかではなくなってきたので、選択肢が多い松江で程々に楽しんでます。でも大田に帰るかって言われると、ちょっと…」

司会 「少し先の事にはなると思うのですが、例えばご自身が子ども持たれた時に、だったら大田でも良くなって感じはないですか？大田は住みたいランキング1位でしたよね？」

倉田：「都会の人が憧れる理想像だと思うんです。ほんと田舎に住んでいると何とも思わないかな。たしかに、子育てするには良いと思うんですよ。四季を感じさせながら。家は田んぼもあったりするので、お米育ててみんな刈ってみんなで食べようっていうのは、すごく良いと思うんですけど。やっぱり松江の方が良いです。松江に来て色んなことを知ってしまって。やっぱり田舎にいると色んなことを知らないっていうか、知る機会が無かったなって。職業の選択肢とか学校の選択肢っていうのが、松江に来てすごくそれを知って。たとえば大田であれば、進学するつもりであれば高校は2校しかなくて。松江だと、学力を競い合う性質があるなあと。知らなくって、そういうの」

司会 「結婚はしたいですか」

倉田：「是非したいですね。したいですし、子どもも三人くらい欲しい。三人姉妹なんですけど一人が福岡へ嫁いで、私もどっかに嫁ぐんで。2番目は別の姓で婚家に入るので、自分の姓が終わってしまうのがとても寂しい。親からは結婚しろとか婿養子を取れとか、跡を継げとかはないんですよ。だから余計に申し訳なくて…それがちょっと悩みかな。でもそれ以前に、相手が中々見つからなくって。仕事が楽しすぎて具体的に婚活とか動いてないからかもですけど、本音を言うと、一定の収入がある方が良くなって。じゃないと子供を大学に行かせられないし、今って大学に行かないと就職口が無いから。自分自身が短大卒だったので、すごくそれを感じていて」

司会 「もし結婚されたとして、仕事は続けたいですか？」

倉田：「続けたいです。やっぱり誰かのために何かをしていきたいので。仕事を通じて。家庭に収まるつもりはないなって。とにかく仕事をもっとすごくしたくて、仕事で自分を表現したいと思っているので、かなり時間とか力を費やしているんですけど、一年更新の契約社員なので金銭面では不安はありますよ。ものすごい人間関係が良くて楽しいので、だからなかなか辞めたくないっていうのはありますけど、やっぱり給料面考えるとこのままずっとできるのか不安になります。正社員で、規模は小さくなくてもやりたい事がやれる職場があれば、そっちに移りたいとも思っています」

司会 「会社の中で、仕事上の男女の違いってありますか？」

倉田：「そうですね、割と、男女関係なく仕事任せてもらえたりとかっていうのはあると思いますし、女性だからと言って不利益を被ったこともありません。ただ、私のいる部署で言うと全部で四、五十人いる中の15人から20人くらいは女性なんですけど、みんな、嘱託とか派遣。男性の嘱託っていうのは一人もいません。

司会 「嘱託から社員になりたいと言う気持ちが強いけど、それを誰かに職場で伝えたり、

会社に伝えたりしたことはあるのかということと、そういう制度はありますか？」

倉田：「伝えたことはあったんですけど。それがまあ、叶わなかったですね。嘱託から正社員に登用する制度が無い。組合は、正社員はありますが私たちには無いので。組合がどういう活動してるのか知らないし、自分たちで組合をとか言うのも意識したことはありませんでした。なので、困った時っていうのは先輩や上司に相談して解決していくという形です。」

⑤家族の支え、地域のつながり

<対象者プロフィール>

松田市子：一児（園児）の母。浜田出身、松江在住。専業主婦。結婚を機に辞職。自営を目指して資格をとる。

中井奈々子：三児（高1・小4・小1）の母。松江出身。専業主婦。夫の転勤で他県での生活が複数回ある。義母と同居。結婚を機に辞職、パートなどをしていたが出産時に辞める。

速水紗枝：一児（小1）の母。出雲出身、出雲在住。専業主婦。学生時代に県外へ。出産時に辞職。

阿川絵里：三児（小学生・保育園・乳幼児）の母。松江市在住。教員。育児休業中。

<調査員・司会>

毎熊、錦織、矢野

<調査日>2015年4月24日（金）

<場所>おやこ劇場松江センター

司会 「今後、お仕事をされるつもりはありますか？」

中井：「私が仕事をやめたのは、結婚を機になんです。主人が転勤族だったので、県外にでるのが決まっていたからなんですけど。まだ子供が生まれるまでは私もパートでいろいろして、松江に帰ってきてからも仕事はしてましたけど、子供ができて、そろそろ仕事しないかって知り合いの人からお声がかかった時に、ちょっと働くのはやめてくれて義理の母が。介護とかそういうお世話もあって、子供がもし、なにかあったら運転する者がいないので。働かなくても主人が養ってくれているので、まだやっていけるんじゃないかっていうこともあってですね。子供のことを一番に考えて、次に自分の仕事かなっていうのは私も考えているので。でも肝心の子はお母さん働いてよって言うんです。というのが、働きながら学童に入れられる方が多いので、そこで友達と遊びたいらしいんですけどね」

松田：「働くのをぱっと辞めて家庭に入ったので、主人も育児ノイローゼになるんじゃないかって心配したんですけど、意外にやってみたら子育ても主婦も忙しいし楽しいし、ママ友とかもできてくると、そんな焦らなくて良いかなあと思い始めて。でも手が離れたら、子供はお母さんよりも学校やお友達と過ごすことが多くなると思うので、抜け殻になっちゃうからなんかしないとなって思って、ベビーマッサージの資格を取ったんです。資格を取ったのは、それ以外にも目標があるからなんですけど。元々、高校卒業して銀行に5年勤めてた時に、職場で違う係の上司から女性は結婚と出産があるからな、と言われたことがあって。失言の多い上司でしたから気にはしてませんでした、私もそろそろ転勤しようかなって思ってたし。でも私はガツガツやっていきたい、だけど、だんだん年齢があがるとやっぱり、結婚かなあという空気が

上司から、女同士でもあって。いや、私の人生は私で決めるってその時思いました。だから今後の仕事は自分のやりたいようにしていきたいと思って、退職して、大学へ進学して、『働く女性を応援する』っていう企業セミナーとかに行きました。でも主人も忙しいのに私もってなると、子供や家庭が二の次になるので、子供が落ち着いたら、将来的にベビーマッサージから派生した会社を立ち上げてみたいと考えてるんです」

速水：「子供が1歳くらいになる時に保育所に入れたら働こうかなと思って申し込んだんですけど、その時点で働いてなかったからダメで。それから小学校1年生になっても、住んでる乃木は子供が多くて学童にはなかなか頼れなくて、それに学童申し込みというのは就労証明書が出てないとできないし。小学校の小さいうちは、子供が帰ってくる時間に家に居れたらいいかなくらいの働き方ならしたい気持ちはありますよ」

阿川：「長女で仕事を休んでる間に次男も作ってしまおうという計画で、続けて休みました。一回復帰して4年間働いて、また休みましたけれど、辞めると言う選択肢は無かったです。仕事が好きだから。けど、やはり両立というのはとっても難しく、自分が良い時に出来る仕事ではないじゃないですか。どうしても家のことが後になってしまうんですね。それで、確かにジレンマを感じながら働いてはいましたが、仕事が嫌なんじゃなくて、なにかを犠牲にしている自分、その犠牲が子であり、どんどん家が無法地帯になっていくストレスはあったかもしれません。ですが私の場合、私の親も主人の親も近くにいることもあって、病児保育なんかも頼めるすっごいありがたい環境なんですよ。だからなおさら、辞めたいとは思わなかったんだと思います」

松田：「働き始めたら確かに、病児保育が気になるね。松江はもっとあれば良いのに。資格取りつつもすぐには軌道に乗らないし、子供もいつ風邪をひいて呼び出しされるかわからないから、週に何回かレジ打ちでもできるんじゃないかって考えてみても、結局二の足を踏んでるもん。私は本当に大変な時は実家の浜田から来てもらえるし、主人の実家も協力してくれるけど、主婦でもこうだから、働いているお母さんはもっとそうでしょ？」

阿川：「うん。親の協力がなかったら、たぶん仕事辞めたいと思ってる。本当に感謝してます」

松田：「だよねえ。私、どっちの実家にも助けてもらってる。本当に大変な時は実家の浜田からも来てもらえるし、主人の実家は玉湯町なんだけど、ただ姑さんがすごく遠慮されてて、お願いします！って言った時は快く、これでもかというくらいやって下さるんだけどね。ただ今後、主人の実家の敷地内に家を建てる予定ができたんで、その時に、ここまで良くしてもらったから私は老後のことはもう知らんって言えんから、そこは私頑張るから、子供がやれんとかそういう時には頼らしてもらおうよ、って宣言しておいたので、これからは言いやすいかなあという感じはしてる」

速水：「私は実家も主人の方も離れてるから基本的にあんまり親の助けは期待できないって

いう思いで、生活してる」

中井：「同居しているし市内だけど、母も同居している義母も高齢なので、自分が働くから家のことはして、とはお願いできないかな」

司会 「パートナーのサポートはどうですか？」

松田：「子供を入浴させたり、お皿洗ったりですかね。あんまりごちゃごちゃ言わなくて、こっちが子供で手一杯になってる時に「大丈夫だから、風呂に入れるよ」とか軽く言ってくれる。お父さんの役割ってそのおおらかさなんだなあって感じています」

阿川：「私も、主人は会社勤めですけど、非常によく頑張っていると思います。家にいるときはすごく子煩悩ですし、やっぱり私の話をよく聞いてくれるなっていうのはとてもよくあります。大変だなあ。よくやってくれてるなあ。お疲れさま、で良いんですよ。それで私はまた、頑張れる」

速水：「うちも基本的に協力的だと思います。なんかイライラしたことがあって子供にあたるというか、そういうときに、ぱっとお父さんが帰ってきてくれるとすごく救われたなって言う時もある。うちは子供と1対1になっちゃうんで、お父さんがいるっていうのはすごく、ありがたかった部分があります」

中井：「うちの主人も協力的だと思います。自分が用事があつたら、じゃあ、今週はこの子の用事があるから送り迎えお願いねとかそういう感じです」

阿川：「自分が休んで、今働いていないので自分の気持ちに余裕があるんです。だから、外で働いてくれる主人に感謝をすごくできていると思っています。自分が働いている時は経済的には潤うのかもしれませんが、気持ちには余裕はないので労わったりとかすごく大事な所ですけど、そこまで気持ちが及んでいたかなとちょっと反省するんですよ」

司会 「では、子育てや暮らしについて、島根って率直にどうですか？」

松田：「東部はすごく暮らしやすい。子育てに関して言うと松江はあちこちに子供を遊ばせるところがあるけど浜田へ帰った時に、さあどこで遊ばせようっていうのがすごくあって、遊ばせるところと言えば、支援センターの所しか聞かないものですから、みんなそこに集中しているし、結局子供が走り回れているかっていうとそうでもなくて。出産したばかりの友達に聞いたら、遊べる場所がないからママ友いない、みたいなのを聞きますね。浜田のアクアスは年間パスポートがあって、さあどこ行こう、ああアクアスカ、みたいな感じになりがち。比べて松江だと色々情報も入ってくるし、支援センターはあそこあそこにある、みたいな。晴れてたら近くの大きい公園とかイオンに行くか」

中井：「主人の転勤で県外にも行きましたけど、遊ぶところはたくさんあってそれなりに楽しみましたが、こと子育てに限れば大変苦労をしました。子供を連れて2回目に行った時は、都会は乗り継ぎも電車なので連れて行けないんですよ。もうみんな2駅3駅は自転車で行くって感じで。子育てするのなら、やっぱり島根の方が楽」

松田：「大変ですよ。通勤ラッシュじゃないからベビーカーで良いっていう感じでもなく、段差がすごく怖かったりとか、抱っこひもは蒸れるし。島根なら車であちこちビューと行けますもんね」

速水：「幼稚園とか、転勤族の方がすごく多かったですけど、みなさん松江は住みやすいって言われてた印象がありました。で、自分はある程度県外とか出たこと無いもんですから、ああ、そんなもんなんだなあ、と思って聞いてたんですけど」

松田：「私も聞いたことある。子供が小さいうちは島根がよかった、っていいながら転勤されていく方が結構おられました」

速水：「島根と言うより、松江だから良いんじゃないですかね。さっきの話に戻る部分があるんですけど、主人の実家が浜田の三隅町なんですけど、正直そっちに帰るって言われたらちょっと考えてしまう」

松田：「買い物いくのも一苦勞でしょうねえ」

速水：「かなって思いますし、自分の実家が平田で、もうちょっと奥の方なんです。母校の中学校が3月に閉校しまして、そういうのって島根県内どこでもあること…ちょっと田舎の方にいたら合併とか閉校とか、今すごく多いですよ。じゃあそれでどうしたらいいのって言われても、分からないんですけどね。自分は今、島根県って言っても松江に住んでいるから満足してるんだと思うんです」

司会 「なるほど。地域のつながりという面ではどうでしょう？」

中井：「うちの地域はだいぶ良いと思います。公民館活動も楽しく、よく子ども連れで参加しています。このことも通じて地域の皆さんとのつながりを強く実感しています」

松田：「上乃木なんですけど、挨拶はするけど、よくわからない。隣は空き家で、年に数回息子さんか娘さんが家の窓を開けに帰ってこられるぐらいで。なので子供が騒いでも平気。地域の方とお友達はあんまりいないんですけど、娘が小さい頃ベビースイミングに行っていて、転勤族の方とかが多いので、それでお友達ができてそのまま、スイミングのママ友とか、幼稚園で仲良くなったお友達と遊ぶことが多いです。うちは南だけど北のお友達がなくて、みんな、北からうちに遠征してくるって感じで。たまに春休みとかの時にママさんとかから、今から行ってもいい？子供と喧嘩ばかりで、みたいなことがあるとおいでおいでって言ってうちに集合とか、子供と一緒にみんなでボウリングをしてからうちに来たりとか。そういうのは地域ではなくて、別のほうからみんな、遠征してくる感じですね。個人ではあるんですけど、個人だから気心が知れているから、気分転換になったわって言って、また頑張ろうみたいなのができるんですけど」

阿川：「自治会に入れてもらって、年配の方とかもおられるんですけど、まあ小さいところなんでみんな顔見知り。私たちは入居して4年目なのでまだ新米ですけど、暖かく見守ってくださいますし、みんなで子供にも声をかけてくださいますし。非常に住みやすいですよ」

⑥子育てと仕事の両立について

<対象者プロフィール>

鈴木望：成人となった子供2人の母親。浜田出身、松江在住。会社員。数年前に管理職として松江へ単身赴任。夫の両親が島根出身で夫自身は大阪出身、いわゆる孫ターン。

<調査員・司会>

毎熊、原田、陰山、矢野

<調査日>2015年5月21日（木）

<場所>労働会館

司会 「子育てと仕事の両立についてお話をお聞かせ下さい」

鈴木：「子供が1歳になるかならないかの時に、事務から営業に変わったんです。特に団体を回る担当で、西部の広域を担当していました。大変でしたけどすごく仕事は楽しかったですね。自分のやったことがお客様のためになったり喜んで頂けるとやりがいもありました。反面、1歳にならない子供を置いて営業に出たので、家庭は大変でしたよね。主人の仕事が定時に終わるので、主人が子供の面倒も見て。ただ、家事はしてくれなかったので少し不満でした。主人の両親は県外の方でしたが、私の両親は近くに居たので、一緒にお世話してくれてました。仕事できたのは、両親が居てくれたお陰だと思います。それから、会社の所長がすごく理解のある方で。転勤免除制度もありましたので、子供が大学に行くまでは見合わせてもらってました。それで、2年前松江に転勤になったんです。その時初めて営業ではなくて管理部門。経験がないので仕事に分からなくて。精神的に1年間は大変でした。それに単身赴任って地元の友達もいないからさみしかったです。たった1人分の夕食を作るのも寂しいから外食で済ませてます。仕事のにも、自分が役に立っているかは自信のないところです。」

司会 「精神的に大変だというのはやっぱり、管理部門ということで、やりがいであるお客様の顔があんまり見えないことも関係あるんですかね？」

鈴木：「あ、そうですね。それに、県西部の支所に居たので、職員数が6名ぐらいで、本当にアットホームな感じ。でも、今は20人ぐらいの大人数の職場なので慣れなくて、人間関係を作るところからです。」

司会 「浜田と松江だと、働き方や気持ちの違いとしてありますか？」

鈴木：「規模もそうですけど、東西で風土も違いますしね。西部と違って、言いたいことをなかなか、はっきり言えない面もあります。」

司会 「確かにそうですね。他は何か違うことがありますか」

鈴木：「圧倒的に女性の方が多いですよ。でも職員35人のうち半数程度は嘱託さん」

司会 「女性の非正規が多いんですね？」

鈴木：「そうですね。県に配置される職員数に限りがあるので嘱託さんにお世話になっていきます。又、管理職の女性登用は少ないです。女性新入職員が男性より多く入ってくるっていう時期もありましたけど、中国5県で管理職の女性は少ないと思います。正直、非正規はなくした方が良いと思いますね。やっぱり日本の良いところは、年功序列で終身雇用制だったから良かったんだと思います。非正規だと定年まで真面目に働けばある程度の収入があって定年後も安心できるというのがないから、いつ辞めるから分からんのに生活設計や保障設計がなかなかできない、と思ってるんじゃないかと。派遣さんは特にそうですね。当社では嘱託さんは1年契約だけど、殆ど更新されるので自分から辞めない限り60才まで働けると思います。正社員と同じでハラスメントやコンプライアンスについて内部通報できるような仕組みもあります。それでも、正職員とは、給料がずいぶん違いますから。そうなると何で私たちがこの仕事を、という気持ちにもなると思います」

司会 「それぞれ正職員も非正規も、子育てされている方おられますよね。環境で違っていてあるんですか？」

鈴木：「条件的には一緒ですよ。嘱託さんも短時間職員も、職員の労働条件に合わせる取り組みをしています。だから育休も取れるし産休も取れる。一部正規と違って、非正規の場合には健康保険とか社会保険で給付されるものが、一部無給である場合もあります。」

司会 「失礼ですけど、お体の方のご健康についてはいかがですか？」

鈴木：「見た目は、健康そうって言われるんですけど。ストレスで、40才の時に突発性難聴になってから耳管狭窄症、46才の時は喘息に突然なって。で、つくづく思ったのが島根は、医療過疎なんだなって思いました。浜田の人で重い病気にかかった人はけっこう広島 of 病院に行っています。私もそうでした。」

司会 「浜田は医療センターがありますけど」

鈴木：「医師が不足しています。特に産婦人科が充分でないと思います。昔は2軒ほど産婦人科があったけど、どちらも産科を辞めて、婦人科だけになりました。妊娠した当時、私、切迫流産だったんです。入院させてもらって2人とも何とか無事に出産できました。きちんと診てくれる所がないと、帰ってきて子供は産めないと思います。又、島根は交通の便もすごく悪い。特に松江から浜田に帰るのに、今は高速道路通りましたけど3時間くらい見ておかんと。片や広島へは1時間30分くらい。重い病気になるとついつい広島の病院を選んでしまいがちです。で、後は広島にしょっちゅう遊びに行きますので大きいものや洋服を買ったりとかは、広島に行ってしまう。そういう意味ではあんまりお金を地元で落とさないかもしれません。」

⑦ I ターン女性に定住について聞いた

<対象者プロフィール>

外山明日香：既婚。東京出身。マルチワーカー。大学卒業後、美容健康系の業界に勤めた後、独立。東日本大震災を契機に移住、昨年まで地域おこし協力隊員だった。

<調査員・司会>

高尾、錦織、山本

<調査日>2015年5月21日（木）

<場所>対象者自宅

司会 「島根にきてみようというきっかけは何だったのですか？」

外山：「からだ関係のことをずっと仕事でやって。元々の専門が体育なんですよ。大学の途中から社会人のアメリカンフットボールのチームでアシスタントトレーナーさせてもらって。初めはスポーツトレーナーの方を目指してたんですけど、美容健康系の業界に色んな形で勤めるようになって。その内、体のもとになっている食べ物に興味が行くようになって、農のある暮らしにも関心が向くようになったんですけど、生まれも育ちも東京なので田舎暮らしのハードルが高くて。でも震災がきっかけになりました。移住先を探している内に、協力隊制度を知り、丁度募集していた雲南市に興味を持って。市の隊員募集内容が廃校の利活用っていうのに惹かれて。それから木次乳業ってここなんだって。木次の牛乳飲んでたんですよ、偶然に。それで面白い場所だなって思ったし、あとは、神話に興味があったから。で、協力隊終わってどうしようって思ってる時に、市の空き家対策でこの一軒家をインターネットで見つけて。適度に街と田舎の間の地区ですし、両方のいいとこ取りみたいな。自給自足サイズくらいですが購入しまして、昨年4月からここで暮らしてます。大学時代の私を知っている人は、この暮らしにびっくりしてますね」

司会 「貴方と同じような立場の方に我々はどういうポイントで情報を提供したらいいと思われませんか」

外山：「対象がどういう人で、年代にもよるとは思うんですが、うちみたいに子どもがいない状態の夫婦には何かしらの仕事を見つけられれば、何とかやってけるようになると思います。お子さんがいらっしゃる方は小学校とか、子供の学ぶ環境が大事だと思うので、そのあたりがもうちょっと分かりやすくなると良いのかなと。暮らしている方の中ではここが校区の区切りでっていうのが分かってらっしゃると思うんですけど、そういうのが外から来ると分かり辛くって」

司会 「何かしらの仕事なんですが、どこまで許容範囲がありますか」

外山：「何でも良いつてわけではないですね。こっちでつながりが作れるような…地域の方にごちらのことを知ってもらいやすい仕事。たぶん、受け入れされる地域の方もその方が安心なのかなと思うので」

司会 「具体的に、ご自身はなんの仕事されていますか？」

外山：「週に一回日登交流センターの広報系のお仕事と、雲南市が地域スポーツとトップスポーツの好循環推進プロジェクトっていう事業で小学校にダンスを教えに行きます。それから昨年度から事務局のプロジェクトリーダーも依頼を受けてやってまして。あとは単発で自治会さんが高齢者さんのサロンされているので、体操教えに行ったり」

司会 「マルチワークですね？」

外山：「そうですね。選んではないんだけど、こういう形でやってると、やってもらえると嬉しいなって言ってこられるので。あと私の場合は、移住してくる前に個人でやっていたので。私は逆に安定で囲われると精神的にイライラが強くなるんです。だからそこは向き不向きがあると思う。勤めの仕事の有り難さは、主人の方の仕事があるから、不安定でもやり易かったと言うのはあるんでね」

司会 「向こうから話が来ると言うのは、上手に地域とつながっていらっしゃるからですね。逆に考えるとある程度のものが情報として入ってくるのがあればなあと思うんです。要するに、地域に組み合わせる仕事の情報がたくさんあれば」

外山：「ですね。この4月5月、時間が取りやすかったので桜の塩漬けを作りに出掛けて。仕事のつもりじゃなかったんですけど、手間賃を頂いたりして。人手が欲しかったりする時期がちょびっとあったりする、そういうのに出会えると勤めがメインであっても、そういう副業をしやすくなると良いのかなって。そうすると地域の中の仕事って期間限られてるものが多くて人が少ないがために廃れてっていうのもあると思うから。現代版の百姓というか。お百姓さんは別に米作りだけやってたわけじゃなくて、色んなお仕事…山仕事も畑も何かを作ったりもするして、いろんな仕事を組み合わせて生活しておられたわけで。今後は民泊をしてみたいと思ってるんです。田舎の暮らしの体験をしたいのであれば、おじいさんおばあさんがされてる民泊とかに行かれた方が良いと思うんですけど、こういう世代がこういう風に暮らしてるってことだったりとか、その辺こんな感じでも生きてけるよ、みたいな。結構楽しいけどって。田舎暮らしのハードルを下げたりできたらなって。私の場合東京ですけど、高度経済成長の時は都会に出てなにかの事に就けば、ある程度の収入が保障されて幸せな家庭を持って暮らすってできたと思うんですけど、今、都会の若い人たちってワーキングプアって言われるような感じで。そういう人たちにこういう暮らしもあるよって伝えていければと思うし。最近の地域おこしのこととかもあってか、都会のできる人ばかりを引っ張ってこようとする傾向があるなあって思っていて。普通の人普通で暮らすのでも良いじゃんって。別に大きな地域おこしみたいなことしなくても、この地域で暮らして荒れっぱなしの農地を少しでもやる人がいれば」

司会 「今島根県は、IT技術者をピンポイントで引っ張ってこようとして、普通の人が暮らせるっていうのは、なるほど。つながりが苦手な人が世の中の塊としてあるんじゃないかという仮説を持って居りましてですね、そういう人たちはどうでしょう？」

外山：「つながり方が分からないというのはあるかもしれないですね。それは都会で暮らしているとそうなるかもしれないし。なかなか、組織で動くっていうのが難しい感じがして。個人同士がつながって受け入れネットワークみたいのができるって良くなって。中間支援組織のことは、雲南市も頑張っておられるんですけど大分行政機関的な感じもあるし、実際にその中の子たちがこっちに定住できるのかなって思いながら。実際に移住して定住できた身としては、結構定住できるようになるのは大変だなって。何処からが定住なのかっていう定義も曖昧じゃないですか。もしかすると、協力隊として移住してきましたっていう時点で、定住系のカウントになっていたりするかもしれないけれども、気持ちとしては仕事が終わった後、どうやって暮らして行ったらいいんだろうって、この家に越してくる前はそれで、協力隊の2年目3年目って結構不安だったんです」

司会 「どこから定住っていうのは、外山さんの場合はどうですか」

外山：「家買ったらすすがに定住だなって。ご縁の神様の国なので、神様からここで暮らしていきなさいっていうことを言われたんだなって、そういう気持ちで有り難く」

司会 「最後になると思いますが、島根の暮らしの総評をしていただきたいです」

外山：「難しいですけど、色々面白いです。興味が尽きないという感じですね。東京での暮らしではできなかったことをさせてもらえてるんで。それは、農業だけじゃなくって、元々の専門である体育とかも、東京でやっていたのととは違う形で自分を活かしてもらえてたりとかして。神話とかも好きだったり、そこから今の暮らしとつながってるなーって考えると、息を引き取るまで、色々面白がっていられそうな気がしてしょうがないですね。目に見えないものの存在を、当たり前感じて暮してる、その感じが東京と違うなって。今の時点で神話の舞台だった地に伝わっている何かあってのが、今のこの難しい状況にとって、すごく大事なヒントがいっぱいあると思って。実際暮らしてみても、色んなところで気付かされるので。島根は島根のまま、このポテンシャルで」

⑧Uターン家族の生活感覚は

<対象者プロフィール>

大山瑞樹：一児（幼児）の母。松江在住。団体の非常勤嘱託員。大阪で9年間百貨店に勤務。夫が雲南出身であり、夫の希望で島根へ。島根で妊娠出産、二年間は専業主婦。この春から仕事復帰した。

<調査員・司会>

高尾、原田、山本

<調査日>2015年5月22日（金）

<場所>対象者職場

司会 「まず、こっちへ帰ってくる時の動機を教えてください」

大山：「結婚した時からいずれは帰りたいという話は出てまして。自分の中では仕事も子育ても終えて、50代6代になってからかなって思ってたんですけど、主人が子どもを育てるにあたって自分の育ったところで育てたいと。主人の年齢とかも考えていくと、仕事を探すってなった時に、じゃあ40歳50歳でUターンするってなったら仕事はあるのかって話になってきますので。35歳くらいまでに帰るのであれば帰らないと。主人が定住財団さんを通して企業さんを紹介して頂いたりとか、試験を受けてみられませんかというお便りを頂く中で最終的に決まった会社があって。正直、思っていたお給料となかなかすり合せが難しくって辛いです。私もこちらに来る前は働いていたので、二人の収入があったのが一人になる、じゃあ2分の1かかっていうとそうではなくって。正直、3分の1、4分の1くらいの収入になるってことで、すごく迷いましたし、私自身は出身じゃないので、知り合いも友達も親兄弟もいないということなんで、どうしようかなと思ったんですけど」

司会 「大阪にいらっしゃった時島根に対するイメージは殆ど持って居られなかったですか？」

大山：「正直、あんまり。主人からは何にもないところだよと、言われてました。大阪の百貨店で9年間働いていたので、周り見渡せばなんでもあるというか。なのでブランド物や思っている物は無いよと。一応主人なりに島根の良さを伝えようみたいな感じでツアーを組んでもらって松江とか安来とか回ってこれが全てです、それでも一緒に来てもらえますかと言う形で。確かに何にもないなって感じですけど、今はネットで何でも買えますし、実家があるから年に何回か帰ることもできるし、そこはそんなに気にならなかったんですけど」

司会 「例えば、福祉とか医療など、現在何か直面されてるものはないですか」

大山：「松江市って一歳以上の子どもだったら休日保育をしてくれるところがあるんですけど、一歳未満の子どもだと休日保育をしてくれるところが無認可保育園しかなくて。就職活動するに当たってもそうなんですけど、子供を預けたくても無認可しか

ないと心配って言うか。需要が無いのかなって思ったりするんですけど、一個くらいあっても良いのかなって。そういうのがあると、お仕事探される若いお母さんとかも利用してもらえるのかなと」

司会 「子育ては今、幸せですか」

大山 :「幸せは幸せですけど。正直、産後鬱みたいになりましたし、それもあって、主人は外に出た方が良くないかってことだったんですけど。自分の親もいますけど、年でもあるし、遠方でもあるのですぐ駆けつけることができない中、心配を掛けてしまうから自分の親には言えなくて。かといって、主人の両親にはもっと言えないです。ふとした会話の中で、義両親の家に行って喋った時に、子どもが虐待されて亡くなるみたいな、ニュースとかあって。ほんとに何でこんなことするか分からんみたいな話をしてるんですけど、正直私もそっちの立場だったんです。自分が産後鬱みたいになった時に、二人っきりで何十時間も、泣き止まない我が子と2人で対峙するってなった時に、正直、虐待をする側…本当にもう耐えきれなくて叩いてしまうっていうお母さんがいるっていうのが、ちょっと気持ちが分かるような気がして。そういう時は、危ない時がありますってことを口に出して言える状況までその時は来ていたので、周りもへっ?!みたいな、大丈夫、みたいな。実際その渦中にいるときは、言えないですよ。自分自身も危なかったなって。ママ友とかに助けられた感じで」

司会 「相談できる施設とかサービスとかはないんですかね？」

大山 :「保健師さんや助産師さんがお話を聞いて下さる、それこそ公民館で子育てサロンみたいなものがあるので。自分からアプローチすればいいんですけどそれって勇気がいることで。それよりは何気ないサークルの中で、みんなで共感トークみたいなのができると。一対一でカウンセリングってなると私ってダメかもって、余計に思ってしまうので。そう思わないように誰々ちゃんのお母さんもそうなんだなって、立ち直っていくみたいなね。ママ友の中でも、私みたいにIターンできましたって言う人もいますけど、旦那の転勤で来ている人も多くって。そういう方はなおさら、仲良くなってもさよならしてしまうとか、自分は一時だけしかここにいないからって言う人もいるから。そういう人も巻き込めたら良いのにな」

司会 「子育てに関して、義両親や旦那さんの支援と言うか、そういう点ではどうですか」

大山 :「義両親共に自営業なので、割と時間的融通が利くというか。それこそ、四月に子供が保育園に入ってから、熱出して迎えに来てくださいという時には、何回か大東の方に連れて帰ってもらってってこともお願いをしていますし。主人も料理や子育てをしてくれています」

司会 「第2子以降は設けたいですか」

大山 :「考えていて。会社はすごく子育てへの配慮もして下さって働きやすいので、続けて働けたらなと思ってますけど、非常勤と言うこともあって妊娠してしまうと退職せ

ざるを得ないので。チャンスがあれば産休育休がある環境で自分のキャリアを活かせる仕事が正規職員であれば受験したいです」

司会 「労働組合に限らず、そういうことを外部の団体で相談できれば良いなと思ったことはありますか」

大山 : 「自分の事というよりも、主人の会社の方が大丈夫なのかなというところが。帰ってくるのが遅いというのがありますし、退職で入れ替わりが激しいようで。労働組合がなくて、しまった確認してなかったというのがあって。そういう意味で主人の関係で、聞いてみようかなと言うのはありますけど、そこまでしてというか。こういう場だからぼろっとな。なかなか正式になると…」

司会 「島根に住み続けたい？その際、最終的に雲南の方に定住したいと言うのはありますか？」

大山 : 「ひと的にはすごく住みやすい。割と、子どもがいない時とかでも外へ出かけて行くと結構声を掛けて頂いてまして。コミュニティがしっかりしているというか。そう言う優しさがあるのかなって。後、子どもが学校で教わってると思うんですけど、挨拶してくれるのも良いなって。雲南には主人はゆくゆくは帰りたいたいですけど。一緒に暮らすならどうなるのかなって。勿論助けてもらって助かる部分がありますし、面倒見ないとなって。お墓も向こうにあるし。タイミング的なものがありますね。最終的には帰るかな。両親は直接的には言わないですけど、ご近所さんとかはね、早く帰ってこいよとかね」

2. 調査票及び結果

「島根で働く人の『しごと』と『くらし』意識調査」

アンケートのお願い

設問項目の後ろにアンケート回答結果（％）を記載しております

この度、連合島根と連合総研は、島根在住の方を対象に「しごと」と「くらし」に関するアンケート調査を実施させて頂くことになりました。

近年、島根県はU I ターン者の増加やまちづくりなどで脚光を浴びていますが、島根で暮らす方々が日常の中で「しごと」や「くらし」に対してどのように感じているのか実態は充分に明らかにされていません。

このため、今般、本アンケートを実施することで、その実態を把握し、働く者の労働・生活環境の改善に向けての政策提言ための基礎資料とします。

この調査はすべて統計的に処理されるので、個人情報漏れることはありません。また、調査目的以外の利用はいたしません。

ご多忙のところ恐縮ですが、是非ともアンケート調査にご協力をお願い申し上げます。

次代につなぐ「しごと」と「くらし」プロジェクト

2015年4月

アンケートの記入について

- 個人別の回収用封筒は、支部や単組では開封しません。まとめて集計しますので、個人的なことが外部に知られることはありません。思っていること、考えていることなど、ありのまま記入してください。
- 設問横の（ ）の数値は集計上使用するものですので、無視してください。
- 回答は基本的に該当する番号に○をつけてください。特にことわりのないものは1つだけ選んでください。また、数字を記入してもらおう設問もありますので、ご注意ください。
- 記入済の調査票は、回収用封筒に入れ密封したうえで**4月24日（金）まで**に担当者に渡してください。なお、封止めはホッチキスを使わないでください。

<本調査に関する連絡先>

連合島根（事務局長・原田、副事務局長・景山、錦織）

〒690-0007 松江市御手船場 557-7 労働会館

電話：0852-21-8105

E-mail：info@shimane.jtuc-rengo.jp

Q 1. まず、あなた自身のことについてお聞きします。

問 1 あなたの性別を教えてください。(1)

1. 男性 64.7% 2. 女性 34.2%

問 2 あなたの年齢は何歳ですか。(2015年4月1日現在の満年齢) (2-3)

1. ~19歳 0.5% 2. 20~24歳 6.8% 3. 25~29歳 10.4% 4. 30~34歳 13.0%
5. 35~39歳 15.6% 6. 40~44歳 18.3% 7. 45~49歳 14.3% 8. 50~54歳 11.3%
9. 55~59歳 7.1% 10. 60歳以上 1.8%

問 3 あなたは結婚(事実婚を含む)していますか。(4)

1. 既婚(配偶者あり) 65.3% 2. 既婚(離別・死別) 4.6% 3. 未婚 29.1%

問 4 配偶者のいる方にお聞きします。配偶者は働いていますか。(5)

1. 働いていない 16.5%
2. 正規雇用社員・職員として働いている 54.3%
3. 非正規雇用社員・職員として働いている 23.9%
4. その他 5.1%

問 5 子どもがいらっしゃる方にお聞きします。あなたには同居している子どもが何人いますか。(6)

1. いない 40.3% 2. 1人 18.6% 3. 2人 24.9% 4. 3人以上 10.0%
5. 4人以上 1.6%

問 6 子どもがいらっしゃる方にお聞きします。あなたの同居している子どもの就学・就職状況についてあてはまるものすべてをお答えください。(複数回答可) (7-26)

1. 保育園・幼稚園に通っていない乳幼児 10.0% 2. 保育園児・幼稚園児 26.0%
3. 小学生 37.4% 4. 中学生 25.7%
5. 高校生 21.9% 6. 大学・専門学校等 9.3%
7. パート・アルバイト 2.6% 8. 正規雇用社員・職員 13.9%
9. 非正規雇用社員・職員(派遣・有期など) 3.0% 10. その他 3.1%

問 7 あなたの同居家族は何人ですか。(自分を含む) (27)

1. 1人 12.7% 2. 2人 13.5% 3. 3人 21.4% 4. 4人 23.8%
5. 5人 14.2% 6. 6人以上 12.9%

問 8 あなたは誰と同居していますか。(複数回答可) (28-34)

1. 同居家族はいない 11.1% 2. 配偶者(事実婚を含む) 61.1% 3. 子ども 51.1%
4. 自分の親 31.7% 5. 配偶者の親 9.6%
6. 親族 8.0% 7. その他 2.7%

問 9 あなたの最終学歴をお答えください。(35)

1. 中学校 1.6% 2. 高校 47.7% 3. 専修・各種学校 11.6%
4. 短大・高専 11.4% 5. 四年制大学 24.1% 6. 大学院 2.4%

問 10 あなた個人の年収（税込み・ボーナス込み）をお答えください。(36-37)

1. 0～199 万円	7.2%	2. 200～299 万円	13.5%	3. 300～399 万円	21.0%
4. 400～499 万円	18.4%	5. 500～599 万円	16.3%	6. 600～699 万円	11.1%
7. 700～799 万円	5.9%	8. 800～999 万円	2.8%	9. 1000～1199 万円	0.3%
10. 1200 万円～	0.1%				

問 11 あなたの世帯全体の年収（税込み・ボーナス込み）をお答えください。(38-39)

1. 0～199 万円	2.0%	2. 200～299 万円	5.1%	3. 300～399 万円	9.5%
4. 400～499 万円	10.6%	5. 500～599 万円	13.4%	6. 600～699 万円	13.2%
7. 700～799 万円	11.0%	8. 800～999 万円	16.5%	9. 1000～1199 万円	9.1%
10. 1200 万円～	5.0%				

問 12 あなたの勤務先の業種をお答えください。(40-41)

1. 製造	20.2%	2. 卸売・小売	7.6%	3. 建設・資材	2.2%
4. 運輸・交通	7.8%	5. 金融・保険	5.2%	6. 情報・通信	4.1%
7. 教育	3.9%	8. 飲食・宿泊・観光	0.5%		
9. 公務員	30.1%	10. その他	16.8%		

問 13 あなたの勤務先の規模をお答え下さい。(42)

1. 1～5 人	1.9%	2. 6～9 人	1.5%	3. 10～19 人	4.0%
4. 20～29 人	3.3%	5. 30～49 人	6.0%	6. 50～99 人	11.7%
7. 100～299 人	35.6%	8. 300～999 人	18.3%	9. 1000 人以上	15.3%

問 14 あなたの職種をお答えください。(43)

1. 現場作業（製造・建設など）	14.5%	2. 専門・技術職	29.9%	3. 事務職	33.3%
4. 営業・販売職	10.5%	5. 運輸職	5.2%	6. その他	4.8%

問 15 あなたの雇用形態をお答えください。(44)

1. 正規の社員・職員	87.1%	2. パート・アルバイト	4.3%
3. 嘱託・契約の社員・職員（有期雇用）	6.7%	4. 派遣社員・職員	0.6%
5. その他	0.3%		

問 16 あなたの今の勤務先での勤続年数をお答えください。(45)

1. 1 年未満	3.3%	2. 1～3 年未満	10.8%	3. 3～5 年未満	10.8%
4. 5～10 年未満	16.5%	5. 10～20 年未満	25.4%	6. 20 年以上	32.1%

問 17 あなたの平均的な 1 週間の労働時間（時間外労働を含む）をお答えください。(46-47)

1. 10 時間未満	11.2%	2. 10～19 時間	2.4%	3. 20～29 時間	1.5%
4. 30～34 時間	1.9%	5. 35～39 時間	12.4%	6. 40～44 時間	34.3%
7. 45～49 時間	18.0%	8. 50～54 時間	8.2%	9. 55～59 時間	3.8%
10. 60 時間以上	4.5%				

問 18 あなたの平均的な1週間の労働時間のうち、時間外労働をお答えください。(48-49)

1. ない	19.2%	2. 1～4時間	39.6%	3. 5～9時間	20.3%
4. 10～14時間	10.1%	5. 15～19時間	3.4%	6. 20～24時間	2.4%
7. 25～29時間	1.2%	8. 30～34時間	0.5%	9. 35～39時間	0.7%
10. 40時間以上	1.1%				

問 19 あなたのお住まいは、次のうちどれですか。(50)

1. 持ち家（一戸建て）	66.1%	2. 持ち家（マンション）	1.9%
3. 公営の賃貸住宅	4.3%	4. 民間の借家	4.3%
5. 民間の賃貸マンション・アパート	13.1%	6. 社宅・公務員宿舎など	8.2%
7. その他	1.4%		

問 20 あなたが今お住まいの地域をお答え下さい。(51-52)

1. 松江市	24.8%	2. 浜田市	4.8%	3. 出雲市	18.9%	4. 益田市	9.1%
5. 大田市	1.8%	6. 安来市	3.8%	7. 江津市	2.2%	8. 雲南市	6.6%
9. 奥出雲町	3.0%	10. 飯南町	1.4%	11. 川本町	0.2%	12. 美郷町	1.9%
13. 邑南町	3.8%	14. 津和野町	2.1%	15. 吉賀町	1.7%	16. 隠岐郡	10.5%
17. その他（島根以外）	2.7%						

問 21 あなたのお勤め先の地域をお答え下さい。(53-54)

1. 松江市	30.2%	2. 浜田市	5.2%	3. 出雲市	14.9%	4. 益田市	9.2%
5. 大田市	1.6%	6. 安来市	3.9%	7. 江津市	1.9%	8. 雲南市	6.8%
9. 奥出雲町	3.3%	10. 飯南町	1.5%	11. 川本町	0.4%	12. 美郷町	1.8%
13. 邑南町	3.9%	14. 津和野町	2.2%	15. 吉賀町	1.7%	16. 隠岐郡	10.6%

問 22 あなたの「島根歴」をお答え下さい。(55)

1. 島根県外に出たことがない（他県で生まれた後、すぐ島根に来た場合も含む）	38.3%
2. 島根生まれだが、大学進学時のみ島根県外に住んだことがある	21.0%
3. 島根生まれだが、他県で就職したことがある	19.9%
4. 生まれ育ちは他県だが、就職で島根県に引っ越してきた	9.5%
5. その他	10.2%

問 23 あなたが、現在、島根で暮らすきっかけや理由をお答え下さい。（3つまで回答可）(56-61)

1. 島根県内の学校に進学した	8.4%	2. 島根県内に就職した	53.5%
3. 島根県内に転勤した	10.1%	4. 島根在住者と結婚した	14.2%
5. 親の介護のため	3.6%	6. 家を継ぐため	20.8%
7. 子育てのため	2.2%	8. 生まれ育って愛着がある	21.3%
9. 友人が多い	4.9%	10. 島根の自然環境が好き	6.9%
11. 島根の歴史・文化が好き	1.0%	12. 島根の人情が好き	1.6%
13. その他（ ）	2.9%	14. 特に理由はない	6.9%

問 24 あなたが島根で暮らす中で困ることはありますか。（3つまで回答可）(62-67)

1. 交通の便	54.6%	2. 人間関係	9.1%
3. 買い物などの日常生活	19.7%	4. 娯楽	31.3%
5. 医療機関	18.9%	6. 教育機関	9.0%

7. 住宅環境	3.8%	8. 気候	11.6%
9. 働き口	19.6%	10. その他 ()	1.7%
11. 特にない	15.3%		

Q2 あなたの労働環境についてお聞きします。

問25 あなたの賃金（税込み）は昨年に比べて上昇しましたか。(68)

1. 増えた	8.3%	2. やや増えた	41.6%	3. 変わらない	36.5%
4. やや減った	7.7%	5. 減った	5.0%		

問26 あなたは昨年に比べて残業が増えましたか。(69)

1. 増えた	11.0%	2. やや増えた	20.6%	3. 変わらない	56.2%
4. やや減った	6.4%	5. 減った	4.7%		

問27 現在の仕事全般について、満足していますか。(70)

1. 満足	12.3%	2. やや満足	47.8%	3. やや不満	29.1%	4. 不満	9.2%
-------	-------	---------	-------	---------	-------	-------	------

問28 次のア～ケの各項目について満足度をおたずねします。(71-79)

(ア) 賃金

1. 満足	16.5%	2. やや満足	36.5%	3. やや不満	30.4%	4. 不満	15.6%
-------	-------	---------	-------	---------	-------	-------	-------

(イ) 労働時間

1. 満足	22.5%	2. やや満足	41.6%	3. やや不満	26.2%	4. 不満	8.6%
-------	-------	---------	-------	---------	-------	-------	------

(ウ) 休暇のとりやすさ

1. 満足	31.0%	2. やや満足	35.0%	3. やや不満	20.9%	4. 不満	12.1%
-------	-------	---------	-------	---------	-------	-------	-------

(エ) 福利厚生

1. 満足	29.1%	2. やや満足	43.6%	3. やや不満	18.5%	4. 不満	7.2%
-------	-------	---------	-------	---------	-------	-------	------

(オ) 職場の人間関係

1. 満足	26.2%	2. やや満足	47.4%	3. やや不満	18.9%	4. 不満	6.4%
-------	-------	---------	-------	---------	-------	-------	------

(カ) 職場の雰囲気

1. 満足	24.8%	2. やや満足	47.2%	3. やや不満	20.6%	4. 不満	6.2%
-------	-------	---------	-------	---------	-------	-------	------

(キ) 仕事そのもの

1. 満足	17.7%	2. やや満足	49.7%	3. やや不満	24.4%	4. 不満	6.7%
-------	-------	---------	-------	---------	-------	-------	------

(ク) 自分の仕事ぶりに対する評価

1. 満足	12.5%	2. やや満足	49.8%	3. やや不満	28.5%	4. 不満	6.8%
-------	-------	---------	-------	---------	-------	-------	------

(ケ) 教育・訓練／研修

1. 満足	11.8%	2. やや満足	45.1%	3. やや不満	32.0%	4. 不満	9.0%
-------	-------	---------	-------	---------	-------	-------	------

問 29 あなたは失業に対する将来的な不安はありますか。(80)

1. ある 22.9% 2. ややある 37.2% 3. あまりない 29.7% 4. ない 9.4%

問 30 あなたは今の仕事を続けていきたいですか。(81)

1. そう思う 28.1% 2. まあそう思う 48.9%
3. あまりそう思わない 16.5% 4. そう思わない 5.6%

問 31 ワーク・ライフ・バランスに関するあなたの会社の対応は十分だと思いますか。(82)

1. そう思う 9.7% 2. まあそう思う 46.1%
3. あまりそう思わない 33.5% 4. そう思わない 9.5%

Q 3 あなたの生活についてお聞きします。

問 32 あなたの「自由な時間」(趣味、くつろぎ、交際等)は十分ですか。(83)

1. 十分だ 10.2% 2. まあ十分だ 43.7%
3. やや不十分だ 31.4% 4. 不十分だ 13.8%

問 33 あなたは仕事以外に、生きがいを感じていますか。(84)

1. 感じている 22.8% 2. やや感じている 46.8%
3. あまり感じていない 26.8% 4. 全く感じていない 2.6%

問 34 あなたの健康状態はいかがですか。(85)

1. 良い 19.4% 2. まあまあ良い 58.6%
3. あまり良くない 18.6% 4. 良くない 2.7%

問 35 あなたは日常的にストレスを感じますか。(86)

1. 強く感じる 15.8% 2. やや感じる 63.5%
3. あまり感じない 18.9% 4. 全く感じない 1.2%

問 36 あなたはメンタルヘルス疾患(うつ病など)が自分にも起こりうる、又は起こりえたと感じますか。(87)

1. 強く感じる 15.0% 2. やや感じる 44.0%
3. あまり感じない 31.3% 4. 全く感じない 8.9%

問 37 あなたは現在の生活(収入・支出)が苦しいと感じますか。(88)

1. とてもゆとりがある 2.5% 2. ややゆとりがある 37.1%
3. やや苦しい 47.6% 4. とても苦しい 11.9%

問 38 問 37 で 3 と 4 と答えた方にお聞きします。理由は何ですか。(3 つまで回答可) (89-91)

1. 世帯収入が少ない 38.6% 2. 世帯収入が減少 15.5%
3. 住宅関係費が負担 28.8% 4. 子どもの教育・養育費が負担 34.8%

5. 介護・医療費が負担 9.7% 6. 貯蓄が少ないため 46.2%
7. その他 9.5%

問 39. あなたは一日のうち、介護や子育て、家事にどれくらいの時間を使っていますか。

<平日> (92)

1. 0時間 15.9% 2. 1時間未満 30.8% 3. 1～2時間未満 24.2%
4. 2～3時間未満 13.4% 5. 3～4時間未満 5.9% 6. 4～5時間未満 3.5%
7. 5～6時間未満 2.1% 8. 6時間以上 2.3%

<休日> (93-94)

1. 0時間 12.9% 2. 2時間未満 32.7% 3. 2～4時間未満 20.5%
4. 4～6時間未満 13.7% 5. 6～8時間未満 5.5% 6. 8～10時間未満 3.5%
7. 10～12時間未満 2.6% 8. 12～14時間未満 1.8% 9. 14～16時間未満 1.3%
10. 16時間以上 3.3%

問 40 あなた以外に介護や子育て、家事をする人がいますか。(手伝う時間が多い順に3つまで口内に記入してください。) (95-97)

- | | | | | | |
|----------------|-------|-------------|-------|------------|----------------------|
| 1. 配偶者(事実婚を含む) | 47.9% | 2. 自分の親 | 18.6% | 1番多く手伝う人 | <input type="text"/> |
| 3. 配偶者の親 | 4.2% | 4. 自分の兄弟・姉妹 | 0.7% | | |
| 5. 配偶者の兄弟・姉妹 | 0.1% | 6. 子ども | 2.4% | 2番目に多く手伝う人 | <input type="text"/> |
| 7. 親族 | 1.1% | 8. 友人・知人 | 0.4% | | |
| 9. いない | 4.8% | | | 3番目に多く手伝う人 | <input type="text"/> |

問 41 問 40 の「一番多く手伝う人」についてお聞きします。その人は、一日のうち介護や子育て、家事をどれくらい手伝ってくれていますか。

<平日> (98)

1. 0時間 2.9% 2. 1時間未満 15.7% 3. 1～2時間未満 17.5%
4. 2～3時間未満 18.7% 5. 3～4時間未満 12.8% 6. 4～5時間未満 9.6%
7. 5～6時間未満 6.4% 8. 6時間以上 14.4%

<休日> (99-100)

1. 0時間 3.2% 2. 2時間未満 21.5% 3. 2～4時間未満 24.3%
4. 4～6時間未満 18.8% 5. 6～8時間未満 7.8% 6. 8～10時間未満 6.8%
7. 10～12時間未満 4.6% 8. 12～14時間未満 3.1% 9. 14～16時間未満 1.8%
10. 16時間以上 5.4%

問 42 問 40 でお答えいただいた「一番多く手伝う人」の介護や子育て、家事に対する協力は十分だと思いますか。 (101)

1. そう思う 57.3% 2. ややそう思う 26.2%
3. あまりそう思わない 11.9% 4. そう思わない 2.8%

問 43 あなたは家族と過ごす時間は十分ですか。 (102)

1. 十分だ 12.8% 2. まあ十分だ 45.9%
3. やや不十分だ 26.6% 4. 不十分だ 9.1%

問 44 あなたは島根に住む友人との付き合いについて満足していますか。(103)

1. 満足 18.6% 2. やや満足 51.6% 3. やや不満 21.9% 4. まったく不満 3.6%

問 45 あなたは今の日常生活に満足していますか。(104)

1. 満足 11.5% 2. やや満足 50.7% 3. やや不満 27.9% 4. 不満 5.7%

Q 4 あなたのお住まいの地域についてお聞きします。

問 46 あなたは隣近所とどの程度のつき合いをしていますか。(105)

1. 生活面（買い物や家族の世話など）で協力する 4.7%
2. 日常的に立ち話をする 25.8%
3. 挨拶程度 59.9%
4. 全くしていない 7.8%

問 47 あなたは隣近所のどの程度の人とつき合いをしていますか。(106)

1. 概ね 20 人以上 8.9% 2. 概ね 10～19 人 15.9% 3. 概ね 5～9 人 27.8%
4. 概ね 4 人以下 23.6% 5. 交流はない 22.0%

問 48 あなたは自分が住む地域の人を信頼できますか。(107)

1. 十分信頼できる 13.1% 2. やや信頼できる 39.4%
3. どちらとも言えない 38.1% 4. あまり信頼できない 4.6%
5. 信頼できない 3.7%

問 49 あなたは町内会や自治会の活動に参加していますか。

(ア) 義務的な活動（公園の掃除など）(108)

1. しばしば参加 32.7% 2. ときどき参加 29.6%
3. あまり参加しない 18.3% 4. まったく参加しない 18.5%

(イ) 楽しみ活動（祭りなど）(109)

1. しばしば参加 21.1% 2. ときどき参加 36.0%
3. あまり参加しない 24.1% 4. まったく参加しない 17.9%

問 50 あなたはボランティア活動・NPO・市民活動にどの程度参加していますか。(110)

1. しばしば参加 5.5% 2. ときどき参加 23.3%
3. あまり参加しない 36.5% 4. まったく参加しない 33.5%

問 51 あなたがお住まいの地域は安心して暮らせると思いますか。(111)

1. そう思う 25.7% 2. ややそう思う 48.2%
3. どちらとも言えない 19.7% 4. あまりそう思わない 3.5%
5. そう思わない 1.9%

問 52 あなたが困ったときなどに、お住まいの地域の人から助力を得られると思いますか。(112)

- | | | | |
|--------------|-------|--------------|-------|
| 1. そう思う | 12.3% | 2. ややそう思う | 37.3% |
| 3. どちらとも言えない | 32.8% | 4. あまりそう思わない | 8.2% |
| 5. そう思わない | 8.5% | | |

問 53 あなたが今お住まいの地域は、子育てするのに良い環境だと思いますか。(113)

- | | | | |
|--------------|-------|--------------|-------|
| 1. そう思う | 16.9% | 2. ややそう思う | 40.9% |
| 3. どちらとも言えない | 30.0% | 4. あまりそう思わない | 6.7% |
| 5. そう思わない | 4.5% | | |

問 54 あなたが今お住まいの地域は、親の介護をするのに良い環境だと思いますか。(114)

- | | | | |
|--------------|-------|--------------|-------|
| 1. そう思う | 6.3% | 2. ややそう思う | 26.3% |
| 3. どちらとも言えない | 42.8% | 4. あまりそう思わない | 14.1% |
| 5. そう思わない | 9.4% | | |

問 55 あなたが今お住まいの地域は、総合的に見て、暮らしやすい地域だと思いますか。(115)

- | | | | |
|--------------|-------|--------------|-------|
| 1. そう思う | 13.0% | 2. ややそう思う | 45.0% |
| 3. どちらとも言えない | 27.2% | 4. あまりそう思わない | 9.2% |
| 5. そう思わない | 4.6% | | |

問 56 あなたは、今お住まいの地域が好きですか。(116)

- | | | | |
|--------------|-------|---------|-------|
| 1. とても好き | 15.1% | 2. やや好き | 46.0% |
| 3. どちらとも言えない | 30.6% | 4. やや嫌い | 5.6% |
| 5. とても嫌い | 1.8% | | |

問 57 あなたは今お住まいの地域に必要とされていると思いますか。(117)

- | | | | |
|--------------|-------|--------------|-------|
| 1. そう思う | 5.6% | 2. ややそう思う | 22.8% |
| 3. どちらとも言えない | 45.1% | 4. あまりそう思わない | 11.2% |
| 5. そう思わない | 14.4% | | |

問 58 あなたは今後もずっと島根に住み続けたいですか。(118)

- | | | | |
|--------------|-------|--------------|-------|
| 1. そう思う | 38.8% | 2. ややそう思う | 28.6% |
| 3. どちらとも言えない | 21.4% | 4. あまりそう思わない | 4.3% |
| 5. そう思わない | 5.5% | | |

アンケートへのご記入、有り難うございました。

3. 最近の新聞記事から

山陰中央新報社新聞記事

島根Uターン3倍に

Iターン含め最多873人

14年度

2014年度の島根県内へのU・Iターン者数が13年度比2998人増の873人だったことが、県のまとめで分かった。Uターン者が3倍近くに増えたのが特徴で、統計を取り始めた10年度以降、最多だった。県は、雇用情勢の改善に加え、都会地での相談体制を充実させたのが奏功したとみている。

県は今後、U・Iターン

者の年代構成などを詳しく分析して施策に生かす考え。また、市町村、商工団体と共にU・Iターン者向けの求人を開拓するほか、ハローワークの求人情報を含め、定任財団のホームページでの検索機能を強化し、さらなる増加を目指す。

県は14年度まで、空き家や職業紹介など、市町村や定任財団の支援で県外から移住した人をU・Iターン者と定義。15年度は県外から転入し、5年以上居住する意思のある人に改めた。17年度に年間1千人を呼び込むとしていた目標は、新たに設定する。

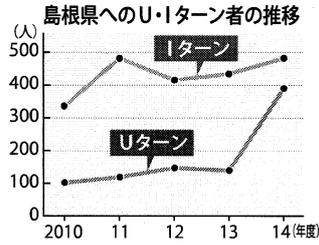
雇用改善や相談充実奏功

内訳は、Uターン者が13年度比250人増の390人で、年間100～150

人程度で推移した10～13年度の水準を大幅に上回った。Iターンは、48人増の483人だった。

市町村別に見ると、出雲市が最多の159人。松江市154人▽益田市151人▽邑南町55人▽大田市53人と続いた。

県は今後、暮らし推進課は、14年度の県内の有効求人数が月平均1万4498人で、13年度比1・0%、12年度比9・0%増と上昇傾向が続く中、定任財団などの職業紹介のマッチングの成功率が高まった結果、職を重視していたUターン者が大幅に増えたとしてい



ふるさと島根定住財団(松江市)が東京、大阪、広島で開いた「しまねU・Iターンフェア」の14年

度

離島に響く園児の声

未来を紡ぐ

さんいん地万創生考



保育園の敷地を元気よく駆け回る園児たち。若い世代の移住者の増加で、町に活気が出てきた＝島根県海士町海士、けいしょう保育園

▶▶ 1

6月下旬、日本海に浮かぶ小さな島の保育園に、子どもたちのにぎやかな声が響いた。島根県海士町海士の「けいしょう保育園」。園庭を駆け回り、砂遊びに夢中な園児は全員で90人。最少だった2007年度と比較、37人も増えた。

少子化の影響で同年度に二つが統合し、町内唯一となった保育園は一転、異例の定員増や園舎増築の道を

たどっている。理由は若い世代を中心とした移住者の増加。財政難に苦しむ町が地域活性化を目的に雇用や交流人口を拡大し、呼び込んだ1ターナー者は05年度以降で462人を数える。生後半年余りの長女を園に預ける町臨時職員の水谷

活気を取り戻したのは保育園だけではない。47世帯

13年ぶり復活 ○ 国は「将来として注目を集め、行政視察が相次ぐ同町。だが、陣頭指揮を執る山内道雄町長(分)は「成功事例はまだ何もなく、今はチャレンジを重ねている途上段階。海士のケースは挑戦事例」と気を引き締める。脳裏には、決して平たん歩みではなかった過去の記憶があった。

第1部 海士からの報告 ①

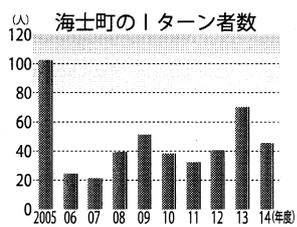
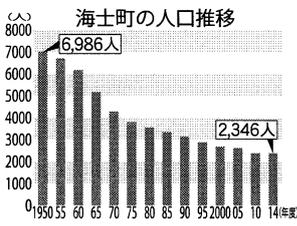
若い世代移住町に活気

118人が暮らす福井区の公民館では、祭りばやしが行き渡った。7月16、17日に開かれる夏の太鼓祭に向け、練習だ。地域に伝わる島前神楽をモチーフに、みこしや舞で行列をつくり集落を練り歩く伝統行事は、13年ぶりに復活する。

「祭りは地区に住む一人一人に役割がある。若い者がいなくなったから、これまできなかつた」と片桐憲一(区長88)。新たな担い手

14年の人口移動は、自然動態は死亡数が出生数を19

人口減少に歯止めがかからない山陰両県。地方創生が叫ばれる中、持続可能な地域づくりを模索する動きや課題を検証し、地域の未来を紡ぐ方策を探る。第1部はプロローグとして海士町をレポートする。



育児しながら働く女性

育児をしながら働く女性の割合は、山陰や北陸など保育所の整備が進んでいる地域で高い傾向にある一方、首都圏や北海道などでは長時間労働が原因で低い。厚生労働省は15日、2015年版労働経済白書を公表、子育て世代の女性で実際に働いている人の割合

島根1位 71.9%
鳥取4位 66.6%

15年版労働経済白書

子育て世代の女性の働く割合

島根	71.9%
福井	69.5%
山形	68.7%
鳥取	66.6%
石川	64.3%

上位5位

兵庫	38.4%
神奈川	39.4%
埼玉	42.1%
大阪	43.2%
千葉	43.3%

下位5位

※2012年就業構造基本調査を基に省が調査

保育所充実が奏功

やその要因を都道府県別に分析し、紹介した。

また男性が育児・家事に意欲的だと働く母親の割合を押し上げる傾向があるとして、積極的な参加を促した。

白書は、人口減少が進む中、地域経済の成長には女性と高齢者の雇用拡大が鍵とした。特に働きたいが、出産や育児で職探しを諦めている女性が多いと指摘。5歳以下の未子を持つ20～49歳の母親のうち、どれだけの人が働いているかを表す有業率に着目し、12年の統計などを使って調べた。

働く母親の割合が最も高

かったのは島根で71.9%。福井69.5%、山形68.7%、鳥取66.6%と続いた。最低は兵庫の38.4%で、次いで神奈川39.4%、埼玉42.1%。全国平均は48.6%だった。

白書は、保育所の整備や労働時間など五つの要因に分けて、都道府県ごとに高低の理由を分析。働く母親の割合が全国平均に比べて高い新潟、富山、石川、福井、鳥取、島根、高知では、保育所の整備が進んでいる影響が最も大きかった。

山形は親との同居や労働時間の短さが、働く母親が多い要因となった。香川、愛媛は男性が家事・育児に積極的に参加しており、これが働く母親の割合を引き上げる最大の要因となった。

一方、首都圏や北海道、京都、福岡は特に労働時間の長さが働く母親の割合を押し下げた。埼玉、神奈川、兵庫、奈良など東京・大阪の周辺では長い通勤時間がマイナスに影響していた。

2015年09月16日

山陰中央新報

島根県版
総合戦略の課題
～最終案を前に

<下>

首長や県議会、県内各界の代表は、人口減少対策の5カ年計画「県版総合戦略」での目玉施策として、子育て支援の強化を求めている。県民のモチベーションを保ち、県を挙げて定住対策に取り組み姿勢を県内外に示すためにも、この分野は統一感があった方がいいとの意見が多い。

自治体間競争に

島根県が掲げた「人口ビジョン」は、2060年時点での県人口を、15年7月1日現在に比べ約32%減の46万8千人に維持したい考えだ。達成するには25年後の40年に、県外への転出者が県内への転入者を上回る社会減を解消し、女性が産む子どもの数を示す合計特殊出生率を14年の1・66から、2・07に回復するのが前提となる。

「子育てをするなら島根というのが必要」。8月28日に松江市内であった県と市長会との意見交換会で、市長らから、県の乳幼児医療費助成と第3子以降の保育料軽減の拡充を求め、県境にある安来市の近藤宏樹市長は、支援の差を理由に米子市に移り住む若者がいると紹介しながら「インパクトのあるメッセージを県民に与えてほしい」と訴えた。

子育て支援強化求める声

問われる県の実行力

同様の声は、町村会や福祉団体からも上がる。島根は戦略の素案に両制度の溝口善兵衛知事は、拡充に

政策の目玉

島根県内19市町村の保育料軽減に伴う利用者負担と医療費助成制度

	保 育 料			医療費
	第3子 (3歳未満)	第2子 (3歳以上)	第1子	
島根県の制度	18歳以下の子どもが3人以上いる場合、第3子(3歳未満)の軽減を補助			就学前までの自己負担原則1割(上限月額1万円、入院費2万円、薬同等無料)
松江市	無料	無料	無料	小学校まで無料
浜田市	3分の1～2分の1	3分の1～2分の1	無料	中学校まで助成
出雲市	無料か2分の1	無料か2分の1	無料	就学前まで無料
益田市	2分の1	5分の4	無料	小学校まで助成
大田市	無料	3分の2	無料	中学校まで無料
安来市	無料	無料(4歳以上)	無料	小学校まで無料
江津市	無料	無料	無料	就学前まで無料
雲南市	無料	無料	無料	中学校まで無料
奥出雲町	無料	無料	4分の1～2分の1	中学校まで無料
飯南町	無料	無料	2分の1	中学校まで無料
川本町	無料	無料	無料	就学前まで無料、小中学校助成
美郷町	無料	無料	一部無料	中学校まで無料
邑南町	無料	無料	無料	中学校まで無料
津和野町	無料	無料	2分の1	中学校まで無料
吉賀町	無料	無料	無料	高校まで無料
海士町	無料	無料	無料	中学校まで助成
西ノ島町	無料	無料	2分の1	中学校まで無料
知夫村	2分の1	無料	2分の1	中学校まで助成
隠岐の島町	無料か2分の1	無料か5千円補助	無料	中学校まで助成

※保育料は5月、医療費は7月現在。対象条件を設けている自治体あり

県負担は、15年度当初予算で、医療費助成が6億1千万円、保育料軽減は1億6500万円に上る。

拡充には多額の自主財源の持ち出しが求められる上に、国の14年度補正予算で1700億円あった地方創生を支援する交付金は、16年度予算で1千億円程度に減る見通しだ。県幹部は「福祉施策は一度始めるとなかなかやめられず、財政負担が続く。国の交付金もいつまで続くか分からない」と、簡単に拡充に踏み切れない理由を語る。

これに対し、溝口知事は16日の県議会代表質問の答弁で、「雇用創出や子育て支援について追加措置を検討している」と説明。10月上旬にまとめる戦略の最終案で、具体策を示す考えを明らかにした。

追加措置を検討

県議会は、県が素案で示した、女性が安心して産み育て、働き続ける労働環境の整備に着目し、柱となる施策を出すよう求めている。

「県民や市町村の力を結集するため、県の意気込みを示すことが必要だ。小手先のやり方は許されない」。今月4日には、最大会派・

自民党議員連盟(21人)の役員が溝口知事に迫り、既存事業の見直しや取捨選択による財源捻出の必要性を訴えた。

同議連の五百川純寿会長は「非常事態で5億や10億円が出せなければ、何のために財政健全化をしてきたのか」と強調。第2会派の民主県民クラブ(8人)の白石恵子幹事長も「島根らしい具体策がはっきり見え、予算配分されなければ県民に響かない」と訴えている。

県民が望み、全国に発信できる目玉施策を打ち出せるのか。県に残された時間は少ない。(政経部・尾添大介)

しまね生活白書 2015
—「しごと・くらし・ちいき」に関する基礎調査—

2016年5月 発行

編集 公益財団法人 連合総合生活開発研究所
所長 中城 吉郎
〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-3-14
靖国九段南ビル5階
TEL 03(5210)0851(代)
FAX 03(5210)0852

制作 株式会社 コンポーズ・ユニ
〒108-8326 東京都港区三田 1-10-3
TEL 03(3456)1541(代)
FAX 03(3798)3303

